表　（実物大）　右上：石積みSA16(D・F地点)出土のアルミ製遊具？
（実物大）　左上：石積みSA09出土の孔郭内が花弁状となる「元符通寶（北宋：1098年初鋳造）」
（実物の2倍）左下：溝SD07-B出土の墨書・鉛筆書きの紙片

裏　左上：溝SD04-B出土の元青花如意頭牡丹唐草文稜花盤（景徳鎮窯。14世紀）
右上：石積みSA26出土の「ミセセル」文字入り大和系瓦（15世紀中頃～16世紀前半頃）
※ミセセル：女神官によって唱えられる呪詞。神の託宣と考えられている。
左下：溝SD07-B出土の「主　神田」銘入り硯
右下：建物SB01出土の「大城」銘入り硯

首里城跡

―京の内跡発掘調査報告書（Ⅶ）―　平成６年度調査の遺物編（４）　平成三十（二〇十八）年　三月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第96集

首　里　城　跡

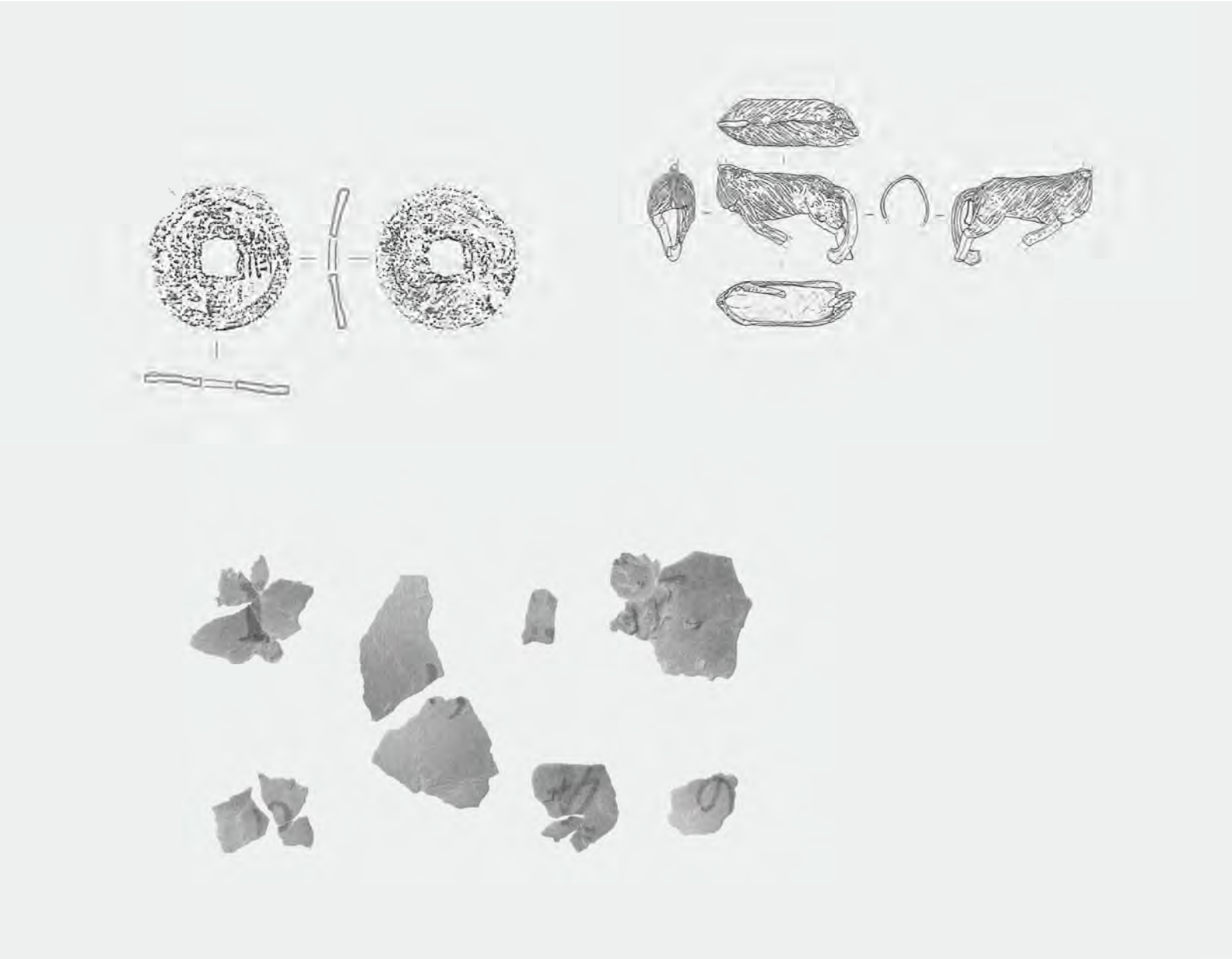
―京の内跡発掘調査報告書（Ⅶ）―
平成６年度調査の遺物編（４）

平成30（2018）年　３月
沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第96集

首　里　城　跡

－京の内跡発掘調査報告書（Ⅶ）－
平成６年度調査の遺物編（4）



平成30（2018）年　３月
沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第96集

首　里　城　跡

－京の内跡発掘調査報告書（Ⅶ）－
平成６年度調査の遺物編（4）

平成30（2018）年　３月
沖縄県立埋蔵文化財センター

序

首里城は 500 有余年に亘って琉球王国の王城として、沖縄の歴史・文化の中心的な核となって、個性豊かな沖縄の歴史と文化の礎を築き上げてきたグスクであったと同時に沖縄独自の建築技術や石積みなどの土木技術の粋を集めて構築された県内最大規模のグスクでありましたが、昭和 20 年のアジア・太平洋戦争末期に起きた沖縄戦による戦禍で首里城正殿（大正 14 年4月 24 日に「沖縄神社拝殿」として国宝指定）を始め、昭和8年1月 23 日に国宝として指定された歓会門、瑞泉門、白銀門、守礼門、園比屋武御嶽石門を含む多くの建造物と城壁の石積みはことごとく破壊され消失しました。戦災で灰燼に帰した首里城には、琉球大学が昭和 25 年に創設されますが、当時の琉球政府文化財保護委員会によって昭和 30 年 11 月 29 日付で首里城跡は、史跡として指定されます。その後、本土復帰の昭和 47 年5月 15 日に国指定の史跡として指定されます。

県民の首里城復元に対する熱い期待と要請により昭和 60 年度から沖縄開発庁（現：内閣府）、建設省（現：国土交通省）、文部省（現：文部科学省）の三機関からの助言や補助を得ながら、沖縄県によって首里城跡の復元整備事業が開始され古都首里の歴史的風土にふさわしい区域として位置付け、平成 26 年度まで継続的に内閣府沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所からの受託による遺構確認調査が進められてきました。

首里城跡の復元整備の中で、平成4年度には首里城正殿の復元と北殿、南殿、奉神門などの施設が再建され、在りし日の姿（1712 年の首里城再建を始めとする 18 世紀前半頃）を現在に写し出す形で首里城公園として一部が公開されています。その後、平成 11 年に白銀門、平成 12 年に系図座・用物座及び二階御殿が復元され、同年 12 月２日には首里城跡を含む9資産がユネスコ世界遺産条約に基づき「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として、「世界遺産」（文化遺産）に登録されました。平成 15 年度には京の内、平成 19 年度が書院・鎖之間、平成 20 年度に書院・鎖之間庭園などが復元されました。特に書院・鎖之間庭園については、平成 21 年7月 23 日付で国の名勝として指定されました。平成 22 年度は叔順門の整備、平成 25 年度が黄金御殿・寄満・近習詰所、奥書院の整備、そして平成 26 年度に奥書院庭園の整備、平成 27 年度は北城郭（西）エリアの整備が実施されています。

本書に収録された首里城の「京の内」と称された区域は、正殿、北殿、南殿、奉神門の存在する政治的建造物群の空間が集中する区域とは離れた内郭の南西地域に位置し、京の内には文献や伝承に拠ると首里城築城以前に古いグスクがあった地域として考えられています。琉球王国時代は、聖域的空間として国王即位の儀式をはじめ琉球王国の重要な儀式や祭祀がおこなわれた場所でもあります。このような中で、「京の内」跡の復元整備事業に必要となる京の内の位置確認と規模、そして、遺構の変遷などを解明する目的で平成6年度から平成9年度まで継続的に発掘調査が沖縄県教育委員会によって実施されました。平成6年度の調査では、1459 年の火災で消失した倉庫跡が発見され、当時の琉球王国の海外交易によって将来された中国をはじめとする東南アジア（タイ、ベトナム）、本土を含めた各地域の陶磁器 1,162 個体と、多くの金属製品やガラス製品が確認されました。これらの陶磁器類は、平成 12 年6月 27 日付で国の重要文化財（考古資料の部）「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点 」として戦前・戦後をとおして、沖縄県ではじめて指定されました。

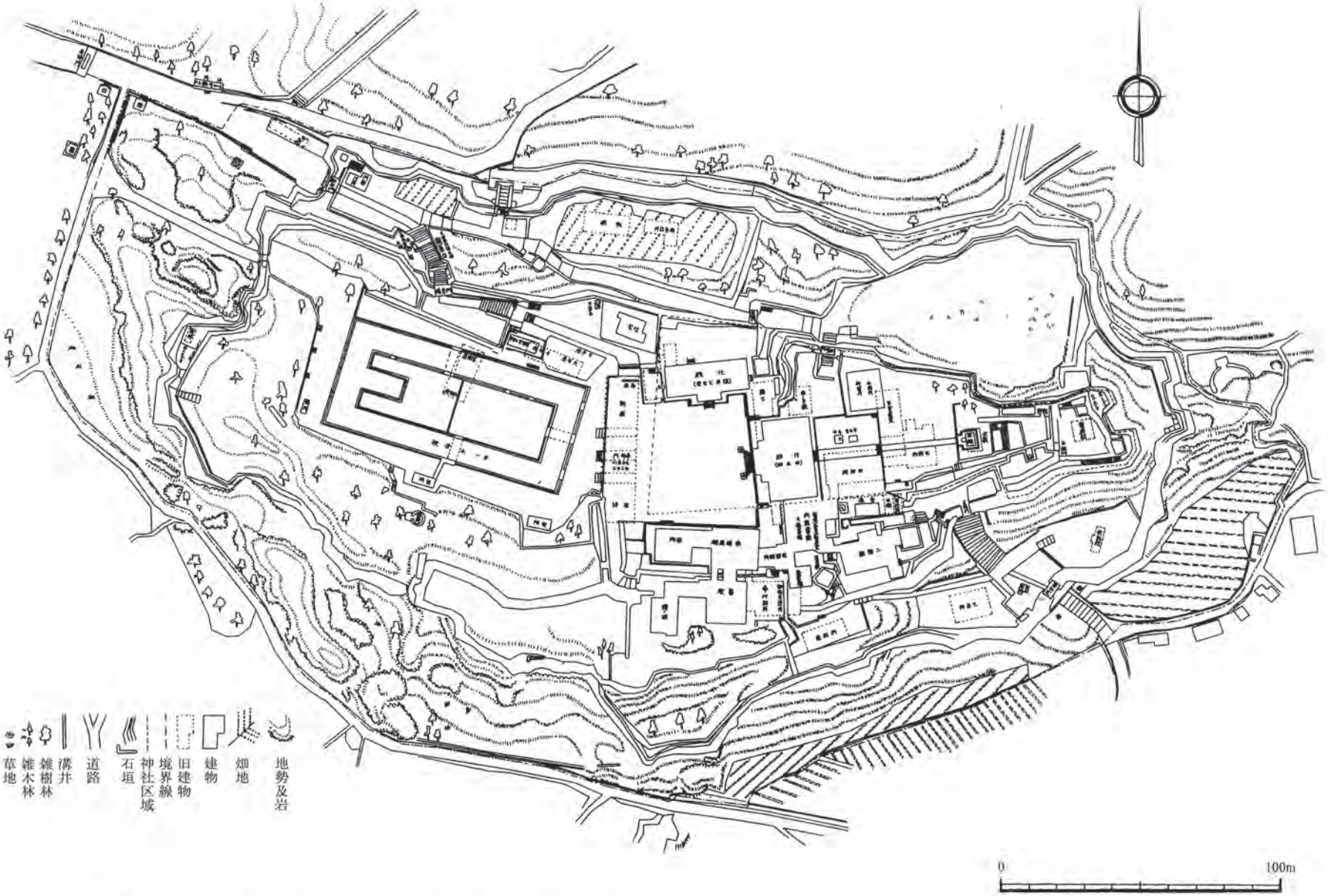
さて、これまでに報告書に掲載した内容は、平成 22 年度に報告した平成6年度調査の遺構編に続くものであります。平成6年度の調査で検出された各種の遺構に伴って出土した陶磁器などから遺構の構築された時期を遺構の切り合いや出土品から時期毎に整理し、第Ⅰ期（14 世紀前半～14 世紀後半）から第Ⅵ期（19 世紀終末～昭和 58 年）までの6時期に時間軸を設定し報告をおこなっています。平成23年度は、第Ⅰ期から第Ⅲ期（14 世紀前半～15 世紀中頃）までの遺構に伴う出土品の報告をおこないました。平成 25 年度が第Ⅳ期（15 世紀後半～16 世紀初頭）を、平成 28 年度に第Ⅴ期（16 世紀前半～19 世紀後半）の出土品について報告をしました。平成 29 年度は第Ⅵ期前半（19 世紀終末～昭和 20 年）の出土品について報告をします。陶磁器などの出土品は、構築された遺構の時代を相対的に決定する事のできる重要な資料であると同時に祭祀空間であった京の内の性格を理解する上で欠くことのできない高級神女が使用した中国明代の華南彩釉陶器やガラス製の小玉も出土しています。

本書が首里城跡の城郭研究や考古学、民俗学、歴史の各研究分野に寄与することができれば幸いに存じます。

平成 30 年　3月

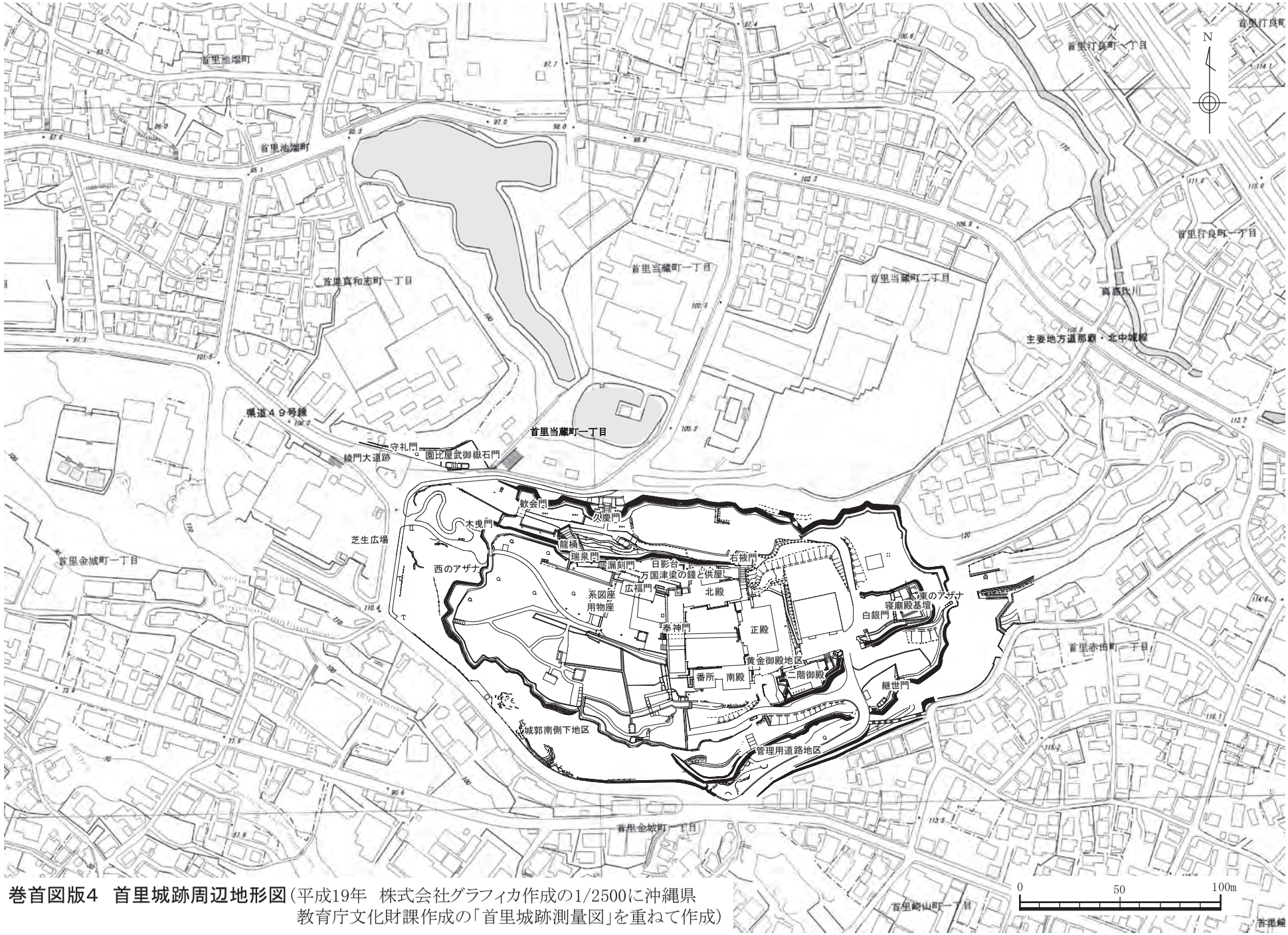
沖縄県立埋蔵文化財センター
所 長　金 城　亀 信

巻首図版1　1945 年4月2日　米軍撮影（CV20-103-63）の首里城周辺
（沖縄県教育委員会　文化財課　史料編集班　所蔵）

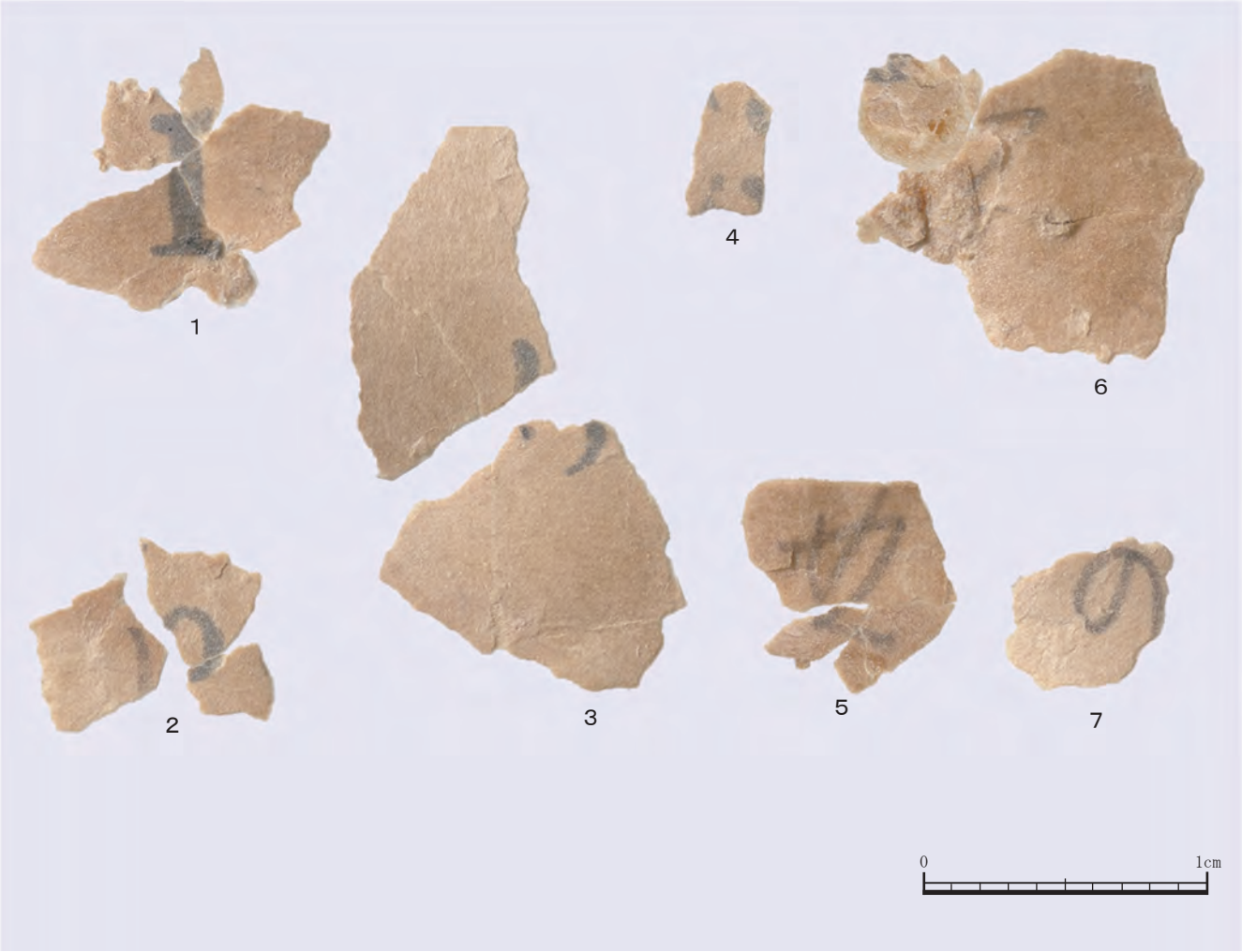


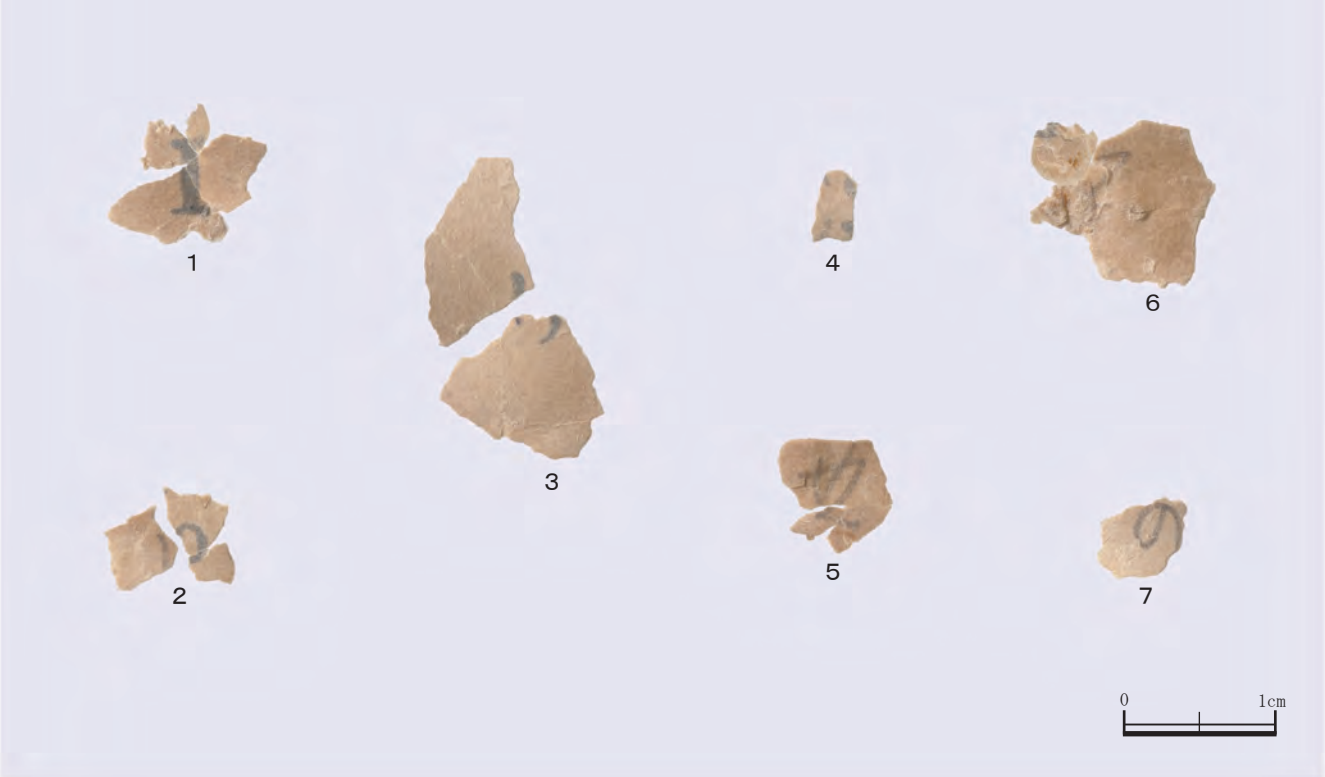
巻首図版2　首里城平面図（昭和６年頃　阪谷良之進　原図、沖縄県立図書館蔵）

巻首図版3　2009年首里城跡の航空写真（株式会社グラフィカ所有）



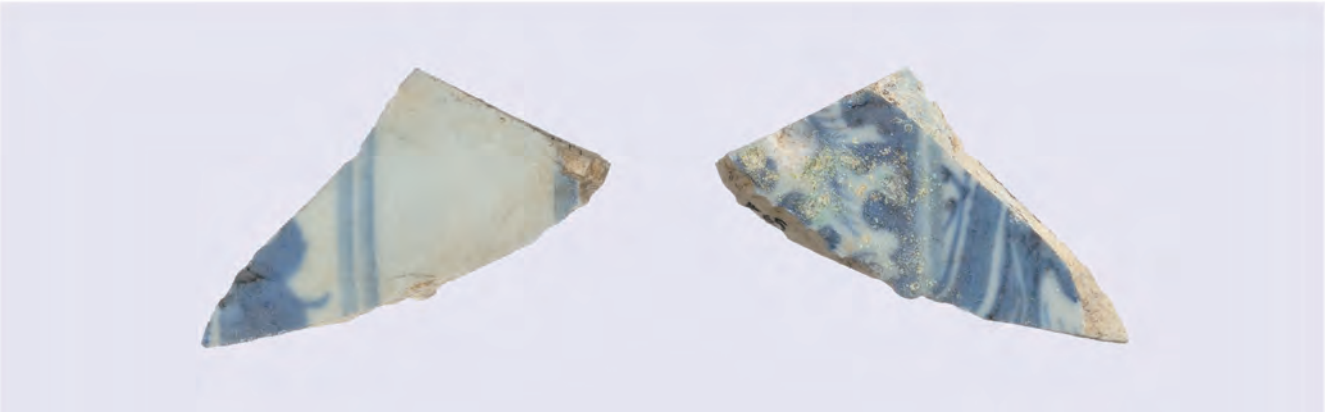
巻首図版4　首里城跡周辺地形図（平成19年　株式会社グラフィカ作成の1/2500に沖縄県教育庁文化財課作成の「首里城跡測量図」を重ねて作成）





巻首図版5　溝 SD07-B 出土の墨書･鉛筆書きの紙片

巻首図版6　上段左：建物 SB01 出土の「大城」銘入り硯
右：溝 SD07-B 出土の「主　神田」銘入り硯
下段左：石積み SA16（D･F 地点）出土のアルミ製遊具？
右：石積み SA09 出土の孔郭内が花弁状となる
「元符通寶（北宋：1098 年初鋳造）」



巻首図版7　上段：溝 SD04-B 出土の元青花如意頭牡丹唐草文稜花盤（景徳鎮窯。 14 世紀）
中段：石積み SA26 出土の「ミセセル」文字入り大和系瓦（15 世紀中頃～ 16 世紀前半頃）※ミセセル：女神官によって唱えられる呪詞。 神の託宣と考えられている。
下段：石積み SA29･排水溝⑤出土の黒釉碗（鴻尾窯系。 14 世紀終末～ 15 世紀）

例　　言

1　本事業は、国営首里城公園整備事業に伴うもので内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所からの委託（受託）を受けて沖縄県教育委員会が実施したものである。なお、発掘調査事業の総括及び業務調整等は所管課の沖縄県教育庁文化財課が行い、発掘調査に係る資料整理等については沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

2　本報告書は、平成６年度に国営首里城公園（約４ha）の京の内北側地区（調査面積約 2,000 ㎡）で発掘された遺構を整理し、平成 22 年度に「首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－ 平成６年度調査の遺構編」を、平成 23 年度には「首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－平成６年度調査の遺物編（１）」（第Ⅰ期～第Ⅲ期までの出土品）を、平成 25 年度に「首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅴ）－平成６年度調査の遺物編（２）」（第Ⅳ期の出土品）を、平成 28 年度は「首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅵ）－平成６年度調査の遺物編（３）」（第Ⅴ期の出土品）を刊行した。今回の報告は、平成 22 年度報告の遺構編で記した第Ⅰ期から第Ⅵ期までの６時期の内、平成 28 年度報告（ 第Ⅴ期の出土品）に続く第Ⅵ期前半の出土品について報告をおこなっている。なお、報告した出土品と遺構との時代幅などについては整合性を諮っていないため、将来に於いて遺構の時代観について見直しと変更もあり得る。

3　本報告書で掲載した 2009 年撮影の航空写真は、株式会社グラフィカの航空写真を複写掲載した。1945 年４月２日米軍撮影（CV20-103-63）の航空写真は、沖縄県教育委員会文化財課史料編集班所蔵を複写掲載した。

4　また、本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/25,000、1/50,000 の地形図を使用した。那覇市都市計画部都市計画課発行の 1/10,000 の地形図、平成 16 年度沖縄県教育庁文化課作成の首里城跡測量図、沖縄県企画部情報政策課委託作成の地形図を使用した。

5　報告書抄録に掲載した座標系は、地形測量及び写真測量業務で委託した成果をインターネットで公開（http：//Vldb.gsi.jp/sokuchi/tky2jgd/）されている Web 版 TKY2JGD を利用した。日本測地系から世界測地系に変換した。入力方法を例示すると、入力値は平面直角座標を選択し、日本測地系「15 系」を選択後に「Ｘ座標：23598.267m、Ｙ座標：21971.191m」を入力後に変換方法を「世界測地系→日本測地系」を選択した。計算結果は「北緯：26° 12′ 32.15599″、東経：127° 43′ 18.24229″」が求められたものを記した。

6　本報告書は、金城亀信を中心に、伊藤恵美利・赤嶺雅子・宮里美也子・大城友理華ほかの協力を得て、編集を行った。なお、発掘調査・資料整理などの調査体制については、第Ⅰ章の第２節に記してある。

7　本報告書の原稿は、全て金城が執筆し、出土遺物の観察には 25 倍のルーペを使用した。

8　本報告書に掲載された出土遺物の撮影は、主に領家範夫・知花香織が担当した。

9　出土品の名称及び計測部位などは、凡例に記したが表現上、やむを得ない場合は別の名称及び表現を使用した。

10　発掘調査で出土した遺物及び実測図、写真等の記録は全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

凡　例

1　屋瓦の名称は、『渡地村跡－臨海道路那覇１号線整備に伴う緊急発掘調査報告書－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 平成19年７月発行）より複写・掲載した。その他、塼瓦の分類に際しては、『湧田村跡－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－』（沖縄県教育委員会 文化財調査報告書 第111集 平成５年３月発行）より分類の基準となった実測図を複写して掲載した。

2　黒釉天目茶碗の分類に際しては、森本朝子の「博多遺跡群出土の天目」『唐物天目－福建省建窯出土天目と日本伝世の天目－』（茶道資料館1994年）より城間 肇が作成した『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』（沖縄県教育委員会 文化財調査報告書 第132集 平成10年３月発行）を複写した。また、分類のⅠ類～Ⅸ類までの年代観は金城亀信が追記した。

3　金属製品の分類、名称、計測箇所については、下記の文献より引用並びに参考にして図面を作成した。

① 金属製品の分類は、小川 望の「工具類１ 大工道具」、「工具類２ 接合具」、「工具類３ その他」『図説 江戸考古学研究事典』（江戸遺跡研究会 柏書房株式会社 2001年４月発行）を参考に、分類基準表を金城亀信が作成し、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集 平成21年３月）に掲載した表を利用した。

② 札の各部の名称は、上原 静が作成した『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査－』（勝連町教育委員会 勝連町の文化財 第11集 1990年３月発行）より複写して掲載した。

③ 銭貨の各部計測点は、永井久美男編『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』（兵庫埋蔵銭調査会 株式会社ぎょうせい関西支店 1994年10月発行）を参考にして、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 平成21年３月）収録の「永樂通寶(中国明朝：初鋳造年1408年)」に計測部位を表示した。

④ 銭貨の各部名称については、上記した③の「永樂通寶」に陸原 保 編集「東洋古銭価格図譜例言（和漢泉彙）」『改訂版 東洋古銭価格図譜』（1975年５月発行）掲載の例言より使用頻度の高い用語のみを掲載し使用した。

⑤ 兜および立物の各部名称と大鎧の各部名称については、金城亀信が作図した『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 平成21年３月）を再度掲載して使用した。

⑥ 簪の名称と計測部位は、西銘 章・片桐千亜紀・青山奈緒ほかの『与那国島 嘉田地区古墓群－嘉田地区ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第21集 平成16年３月発行）を掲載して使用した。

⑦ 煙管の部位名称は、西銘 章の『ヤッチのガマ カンジン原古墓群－県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第６集 平成13年３月発行）掲載の図を加筆修正して使用した。名称については、たばこと塩の博物館『キセル』（1988年発行）を参考にした。

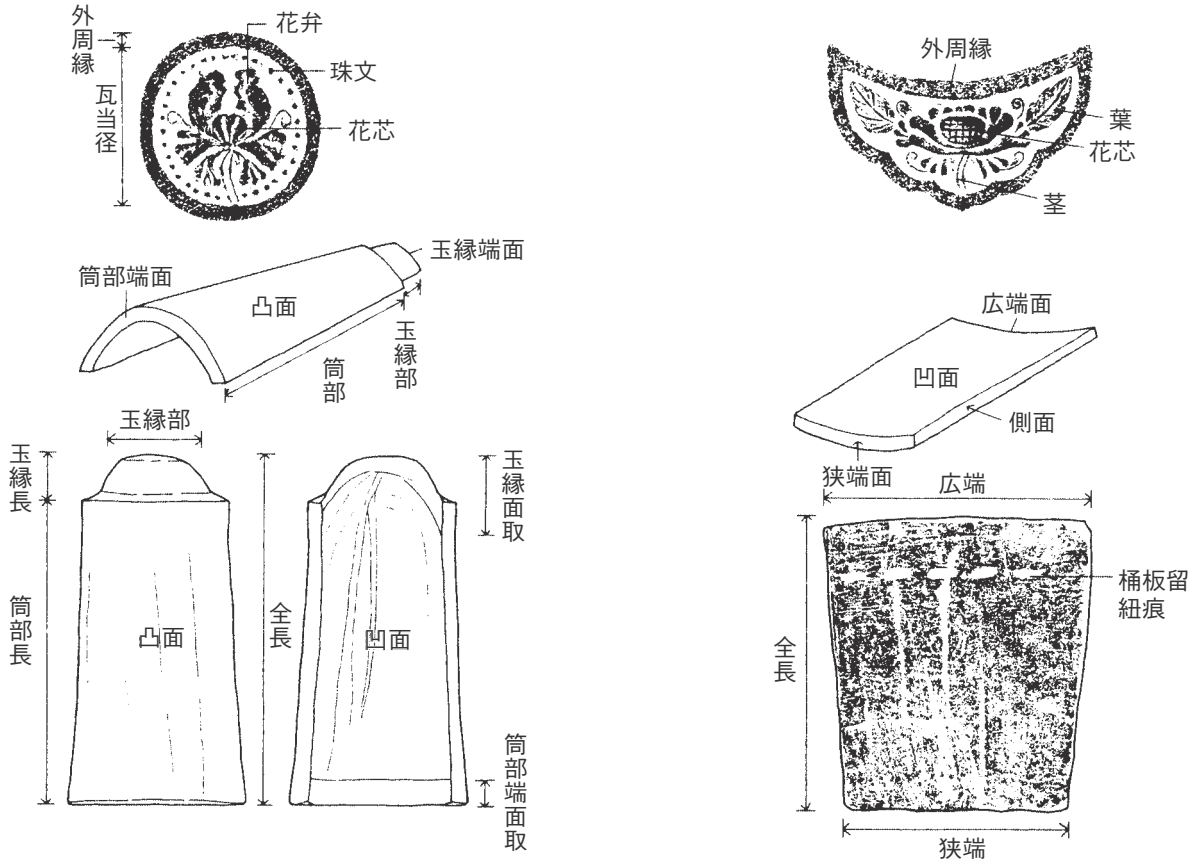
4　ガラス玉の分類概念および計測は、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 平成21年３月）に掲載したものを使用した。

5　陶磁器類の碗の部位名称は、京の内跡出土品の中から「青磁雷文帯碗（14世紀後半～15世紀前半頃）」を図化し、名称を当て嵌めた。

6　図化を省略した青磁碗と盤の高台資料については、これまでに刊行された首里城跡京の内跡発掘調査報告書に掲載した実測図を使用して模式図を作成した。青磁碗は高台の横断面の形状からａ～ｈまでの８種類に分けて集計をおこなった。同様に青磁盤（大皿）についても高台形状からａ・ｂの二種類に大別して集計をおこなった。

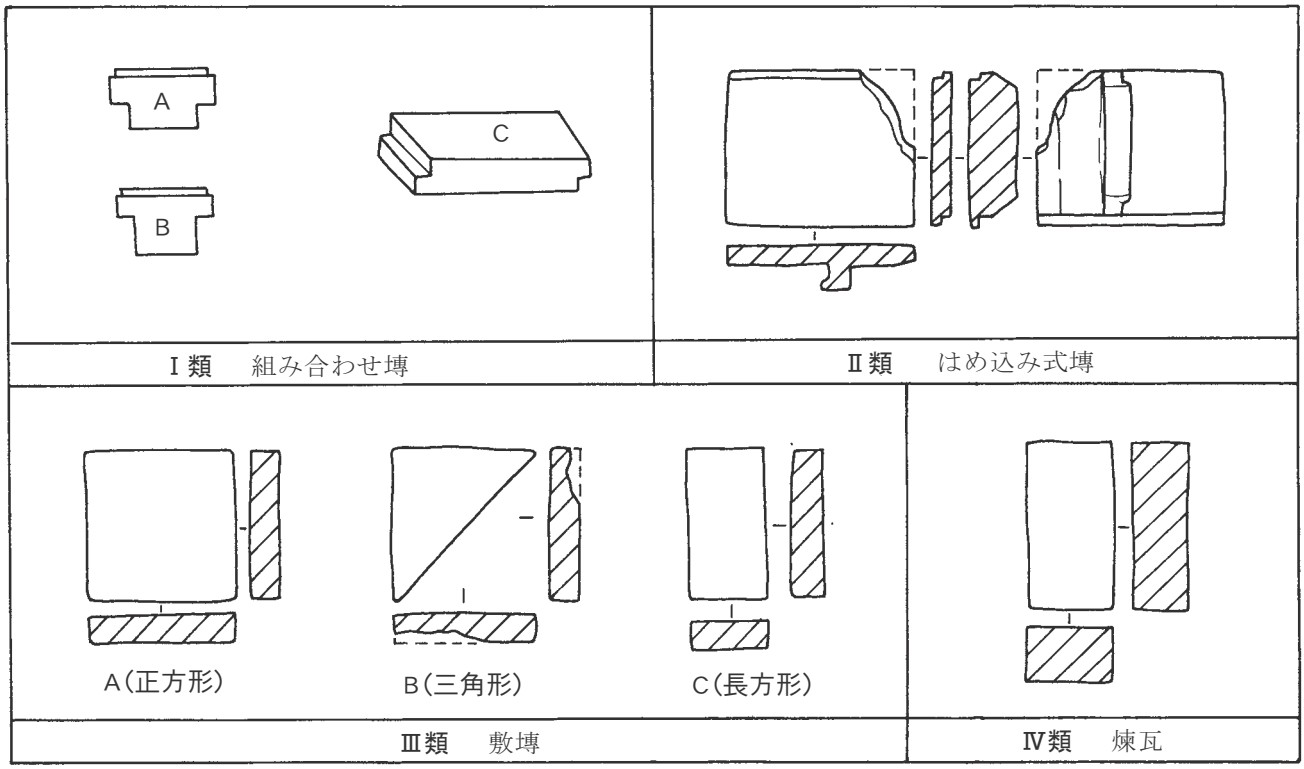
7　タイ産土器（半練）の蓋の分類については、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』（沖縄県教育委員会 文化財調査報告書 第132集 平成10年３月発行）のP64第11表に掲載したⅠ類～Ⅷ類までの８分類に準じて、７種までの模式図を掲載した。

8　明代華南三彩鶴型水注のカラー写真は、平成元年（1989年）に金城亀信撮影のカラープリントを複写した。



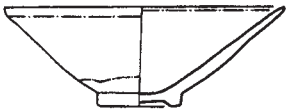
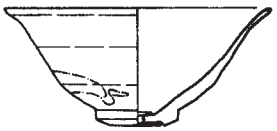
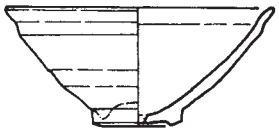
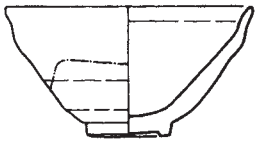
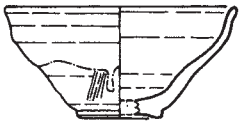
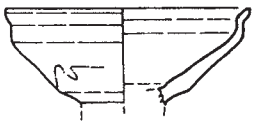
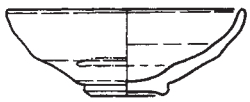
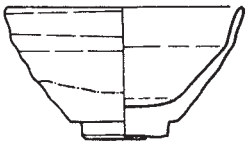
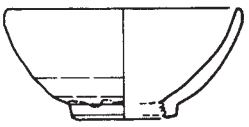
1－a　屋瓦の各部名称

『渡地村跡―臨海道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告書―』(沖縄県立埋蔵文化財センター　平成19年7月)より複写掲載。



1－b　**塼の分類**：塼瓦の厚さは、a (厚さ：2.5～3.9cm) 、b (厚さ：4.0～6.0cm) の2種類に分けて分類した。

『湧田古窯跡(Ⅰ)―県庁舎行政棟建設に係る発掘調査―』(沖縄県教育委員会　平成5年3月)より分類のため、実測図を複写掲載。

分類	器　　型	特　　徴	実測図（縮小１／３）
Ⅰ類	断面逆三角形の平茶碗 （推定時期12c前半）	底から口に向かってほぼ直線的に大きく開く平茶碗である。大きく次の三つに分けられる。Ⅰ－①　胎土は黒灰色に白砂を含み、黒色の厚い釉。Ⅰ－②　胎土は灰白色、釉は黒褐色を呈す。Ⅰ－③　底径は大きく、白覆輪である。	
Ⅱ類	外反口縁の碗 （推定時期12c前半）	Ⅰ類同様、底から口に向かってほぼ直線的に開くが、全体はより深目の器形で、口だけ外反して開く。	
Ⅲ類	断面逆三角形の深碗 （推定時期12c前半）	口縁は外反するが、一度口縁下で押さえ、目立たない程の浅いくぼみを作るいわゆる建盞なりの天目茶碗に特有のひねった口縁の萌芽と言える。口径と器高の比が３：２前後、５：２前後のものとでⅢ－①、②に分けられる。	
Ⅳ類	いわゆる「建盞」なりの茶碗 （推定時期12c後半～13c前半）	高台脇を深く斜めに削り、そこから角度を変えて直線的に開き、口縁下でもう一度角度を変えて立ち上がる。いわゆる「建盞」なりの形と言えよう。タイプ的に建盞に近いものⅣ－①、やや遠いものⅣ－②とに大別した。	
Ⅴ類	誇張的に表現された天目茶碗 （推定時期13c）	身は大きく開き、口縁下で角度を変えて立ち上がる。内底をくぼめ、内面が曲線的に複雑になる。これは典型的な建盞の各部を誇張的に表現した天目茶碗である。小ぶりのものと、大ぶりのものとでⅤ－①、②に分けられる。	
Ⅵ類	口縁のくびれの強い茶碗 （推定時期13c）	Ⅴ類より、口縁のくびれが強く誇張されたタイプの天目茶碗である。浅い碗とやや深めの碗とでⅥ－①、②に分けられる。	
Ⅶ類	口の内湾する平茶碗 （推定時期13c後半～14c初）	体は大きく開き、半ばで曲線的に立ち上がり内湾気味に終わる。比較的浅い碗である。底部は上げ底であるが、輪高台らしく作るものもある。	
Ⅷ類	高台脇を水平に削る深目の碗 （推定時期14c終末～15c）	高台脇を水平に切る茶碗は広い底からほぼ直線的に開き、口縁で軽く角度を変えて立つ。口縁のくびれは弱い。外底は浅く上げ底風に削る。	
Ⅸ類	丸碗 （推定時期14c後半～15c）	底部から口縁に丸みをもって立ち上がり、そのまま直口で終わる。	

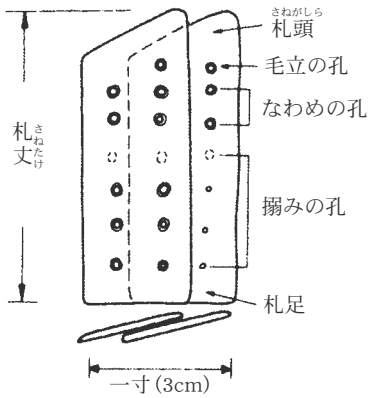
２ 黒釉天目茶碗の分類

『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』（沖縄県教育委員会平成10年3月発行）より複写掲載。

- A．工具類・生産用具
  - 接続・固定金具
    - 釘・鋲など
    - 蝶番・錠（飾金具）
  - 生産用具
    - 刀子・鎌など
- B．装身具
  - 簪・指輪など
- C．祭祀用具
  - 鏡・香炉・鈴・柄杓（銚子）など
- D．生活用具
  - 鍋・鋏
- E．武具
  - 鎧金具（札・八双金物・鎖籠手・骨牌鉄鎖具足など）
  - 兜金具（鉢・立物など）
- F．武器
  - 刀剣（鍔・切羽など）
  - 石火矢（弾・砲身ほか）

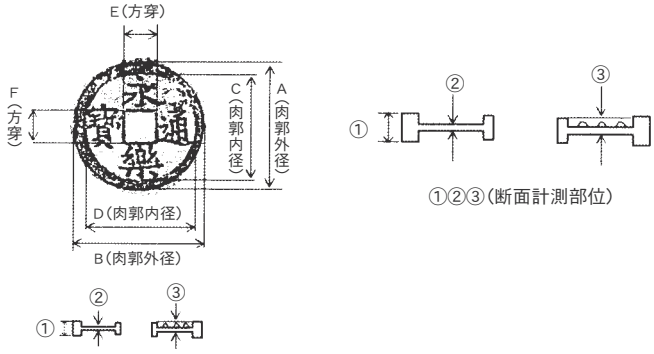
3―①　金属製品の分類基準表

『図説 江戸考古学研究事典』（江戸遺跡研究会 柏書房株式会社 2001年4月発行）を参考にして、分類基準表を作成した。
当該表は『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）―』（沖縄県立埋蔵文化財センター 平成21年3月）に掲載。



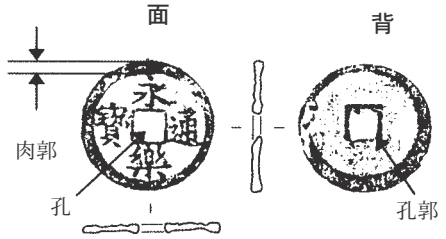
3―② 札の各部の名称

『勝連城跡―北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査―』（勝連町教育委員会 1990年3月発行）上原 静氏作成の原図を複写掲載。



3―③ 銭貨の各部計測点（左：平面、断面 右：断面拡大図）

『中世の出土銭―出土銭の調査と分類―』（兵庫埋蔵銭調査会 株式会社ぎょうせい 1994年10月発行）を参考にして、『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）―』（沖縄県立埋蔵文化財センター 平成21年3月）収録の「永樂通寳（中国明朝：初鋳造年1408年）」の拓影図に計測部位を表示。

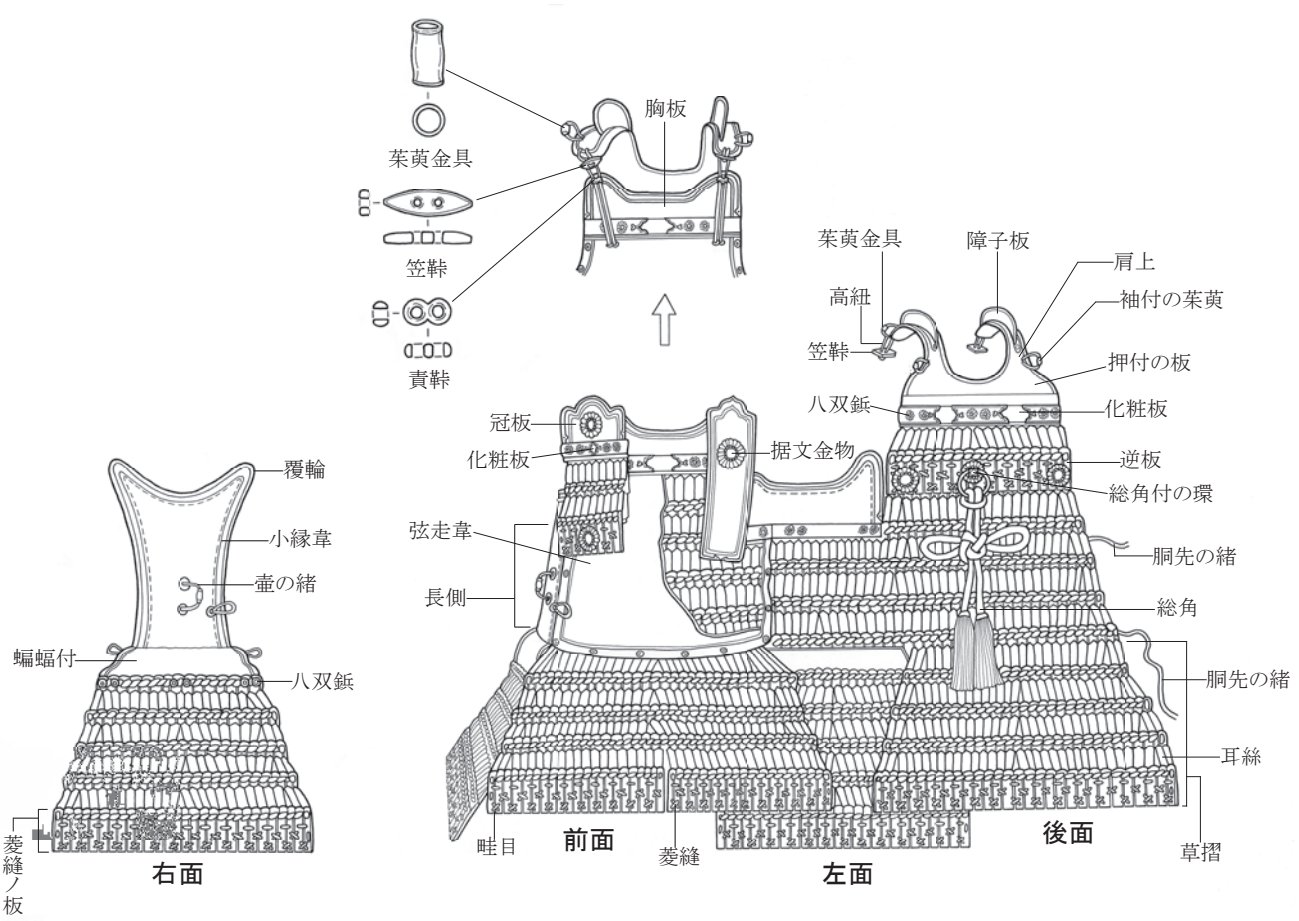


面（メン）：表の意味。**背**（ハイ）：裏の意味。
孔（コウ）：穴のこと。穿（セン）、好（コウ）とも言う。四角い穴は「方穿（ホウセン）」とも言う。
孔郭（コウカク）：穴の縁のこと。内郭（ナイカク）、好郭（コウカク）とも言う。
肉郭（ニクカク）：外の縁。輪郭（リンカク）、周郭（シュウカク）とも言う。外縁の縁幅が細いものを「細縁（サイエン）」と言い、逆に縁の幅のないものを「濶縁（カツエン）」と言う。
郭に肉（四角の穴の縁）がないものを「無輪郭（ムリンカク）」と言う。

3―④ 銭貨の各部名称

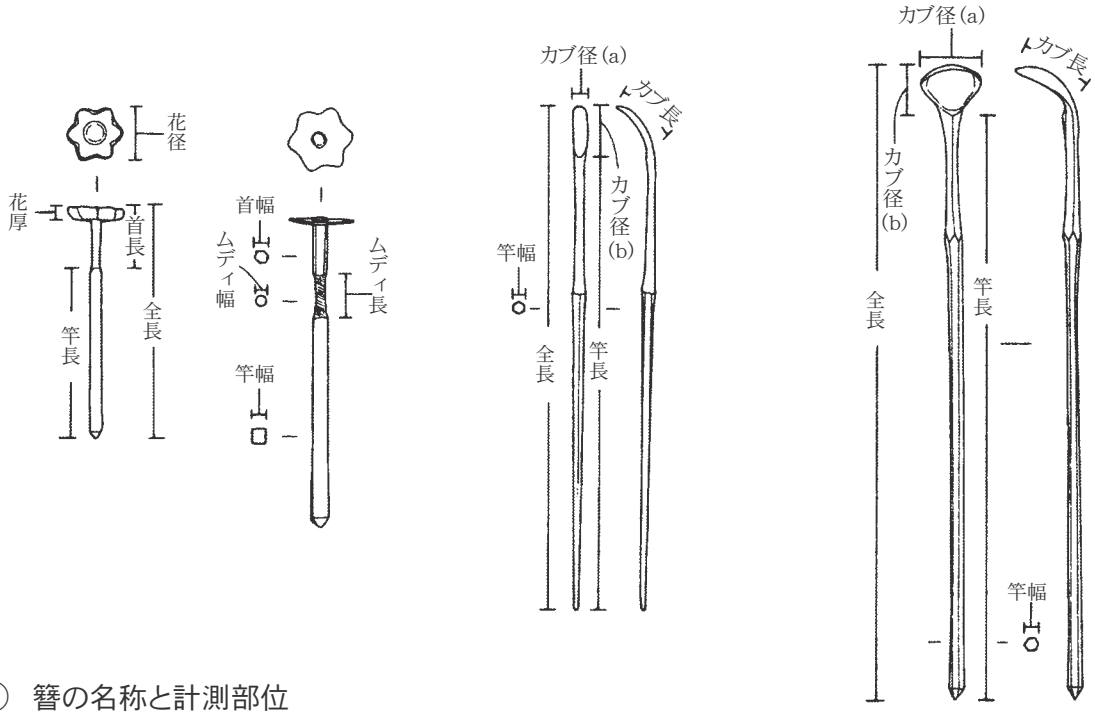
『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）―』（沖縄県立埋蔵文化財センター 平成21年3月）掲載の「永樂通寳（明：初鋳造年1408年）」の拓影図に「東洋古銭価格図譜例言（和漢泉彙）」『改訂版 東洋古銭価格図譜』（1975年5月発行）例言より銭貨の用語を掲載。

3－⑤a　兜および立物の各部名称



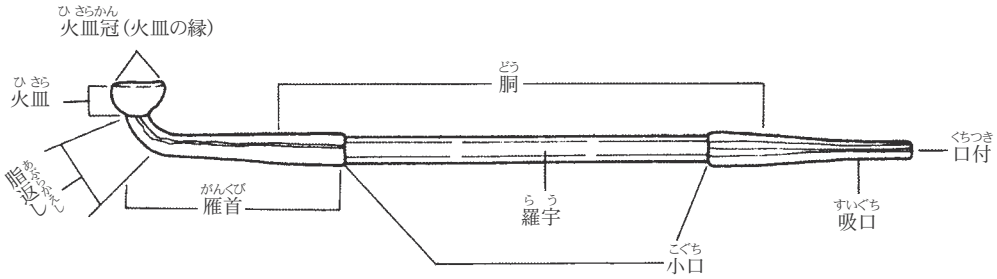
3－⑤b　大鎧の各部名称

3－⑤a 兜および立物の各部名称、3－⑤b 大鎧の各部名称については、『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）―』（沖縄県立埋蔵文化財センター　平成 21 年3月）の掲載図を複写掲載。



3―⑥　簪の名称と計測部位

『与那国島 嘉田地区古墓群―嘉田地区ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書―』
(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成16年3月)の掲載図を複写掲載。



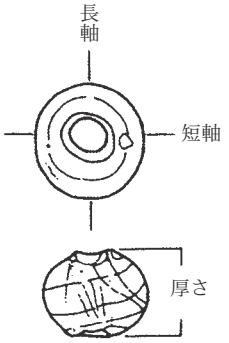
3―⑦　煙管の部位名称

『ヤッチのガマ カンジン原古墓群―県営かんがい排水事業(カンジン地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』
(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成13年3月)の掲載図に加筆修正をおこなって作成した。名称については、たばこと塩の博物館『キセル』
(1988年発行)を参考にした。

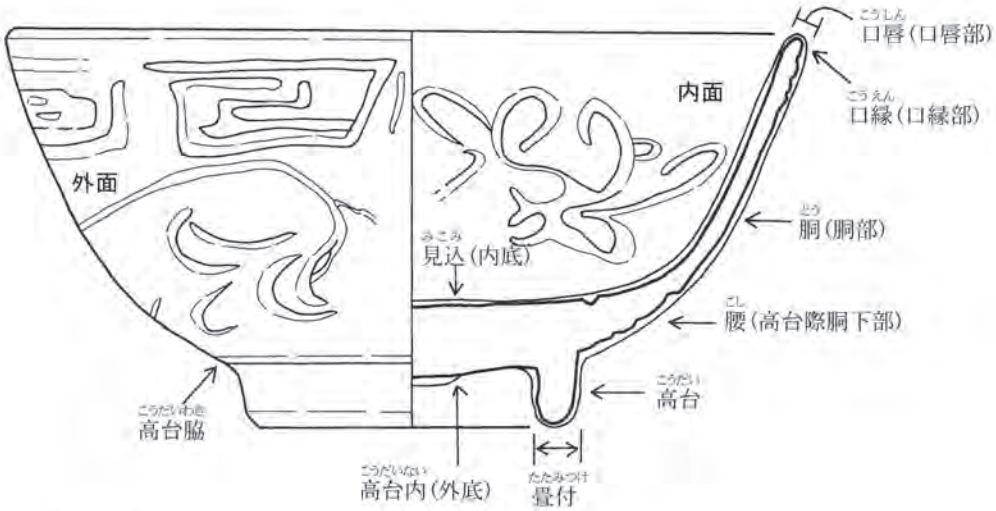
種類	形状	特徴など
Ⅰ類		側面観が正円、若しくは円形となるもの
Ⅱ類		側面観が臼形となるもの若しくは扁楕円形のもの
Ⅲ類		側面観が隅丸三角形、若しくはこれに近似するもの
Ⅳ類		側面観が成形時に崩れて歪な形状となるもの
Ⅴ類	―	火熱を受け癒着・溶解したガラス玉の塊で不定形となるもの

4―a　ガラス玉の分類概念

4―a ガラス玉の分類概念・4―b ガラス玉の計測は、『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)―』(沖縄県立埋蔵文化財センター平成21年3月)に掲載された分類概念表と図を使用。

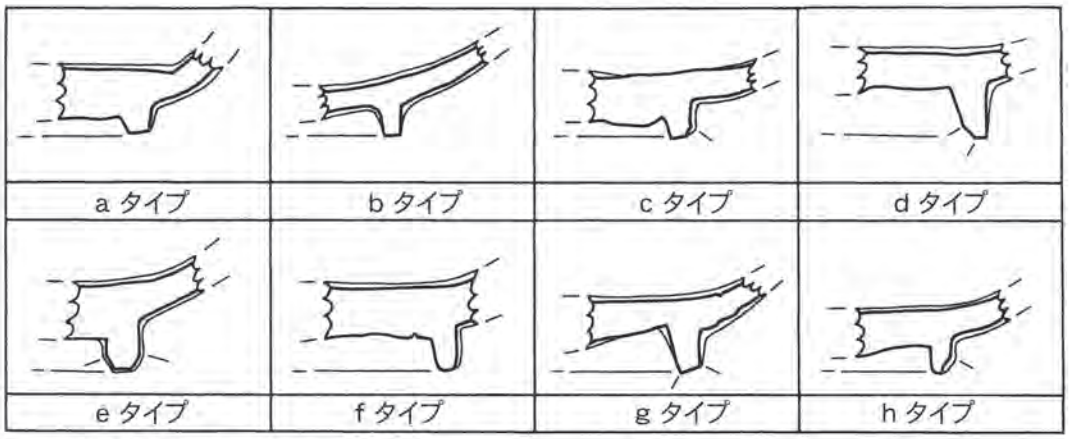


4―b　ガラス玉の計測



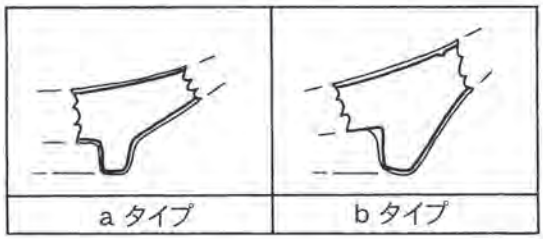
5　碗の部位名称

京の内跡出土品の中から「青磁雷文帯碗(14世紀後半～15世紀前半頃)」を図化して、名称を当て嵌めた。
『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅳ)－』(沖縄県立埋蔵文化財センター　平成24年3月)の掲載図を複写掲載。



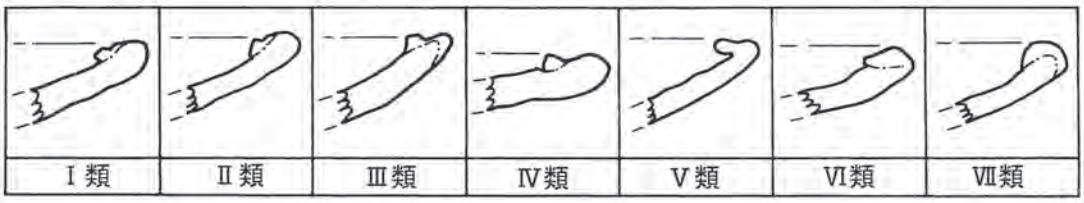
6－a　青磁碗の高台分類

主に京の内跡出土品の中から高台資料を抜き出して模式図を作成した。
『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅳ)－』(沖縄県立埋蔵文化財センター　平成24年3月)の掲載図を複写掲載。



6－b　青磁盤の高台分類

主に京の内跡出土品の中から高台資料を抜き出して模式図を作成した。
『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅳ)－』(沖縄県立埋蔵文化財センター　平成24年3月)の掲載図を複写掲載。

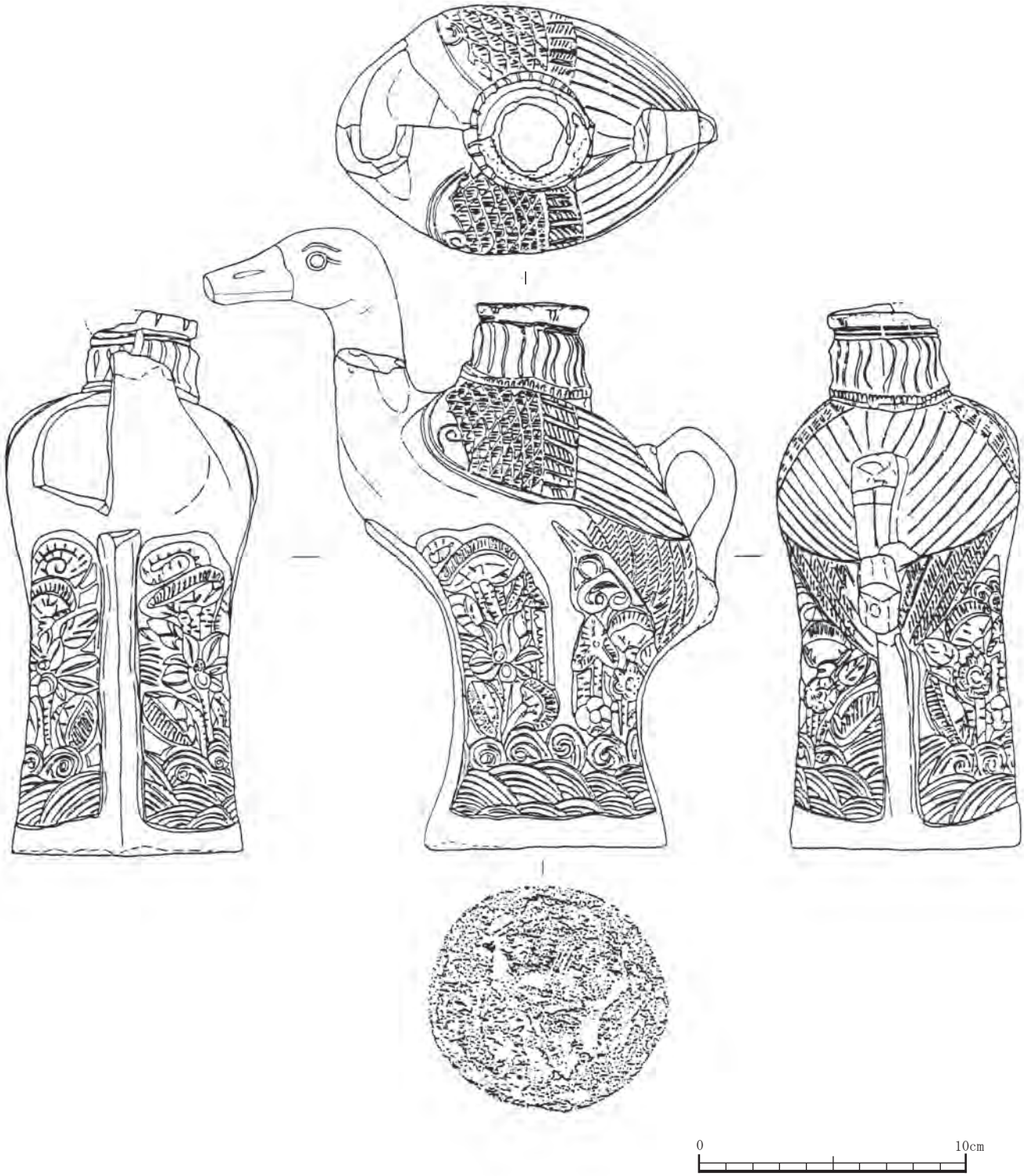


7　タイ産土器(半練)の蓋縁分類

『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－』(沖縄県教育委員会　平成10年3月発行)より複写し、再編集して掲載。

8-a　明代華南三彩鶴形水注（参考資料：金城亀信撮影）

金城亀信「豊見城村内確認の明代三彩鶴形水注」『文化課紀要』第6号 1990 年3月掲載に向けて 1989 年に撮影したカラー写真を複写して編集した。



8-b 明代華南三彩鶴形水注（参考資料）

金城亀信「豊見城村内確認の明代三彩鶴形水注」『文化課紀要』第6号 1990 年3月掲載した実測図に首里城跡木曳門地区出土の鶴形水注の頭部（県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集 2001 年3月発行）を参考にして実測図を修正した。

目　次

序
巻首図版
例言
凡例

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　第1節　調査区の設定 …… 1
　第2節　事業の体制 …… 2
　第3節　調査の経緯 …… 7

第Ⅱ章　遺構 …… 10
　第1節　遺構の概要 …… 10

第Ⅲ章　遺物 …… 27
へ. 第Ⅵ期（19世紀終末～昭和58年）…… 27
　a. 第Ⅵ期前半（19世紀終末～昭和20年）…… 27
　（1）石積みSA26の出土遺物 …… 40
　（2）溝SD07-Bの出土遺物 …… 50
　（3）石積みSA29・排水溝⑤の出土遺物 …… 54
　（4）石積みSA16（D・F地点）の出土遺物 …… 59
　（5）溝SD06-Bの出土遺物 …… 73
　（6）石積みSA22の出土遺物 …… 77
　（7）溝SD07-Aの出土遺物 …… 81
　（8）石敷きSS03-Aの出土遺物 …… 87
　（9）石積みSA02の出土遺物 …… 87
　（10）溝SD03の出土遺物 …… 106
　（11）石積みSA09の出土遺物 …… 122
　（12）溝SD05の出土遺物 …… 126
　（13）建物SB01の出土遺物 …… 127
　（14）溝SD04-Bの出土遺物 …… 137
　（15）石積みSA24（A・B地点）の出土遺物 …… 141
　（16）土壙SK03（C・E地点）の出土遺物 …… 145
　（17）土壙SK02の出土遺物 …… 149

報告書抄録 …… 175

挿図目次

図目次

第 1 図　発掘調査地域 …… 8
第 2 図　「京の内」跡遺構配置図およびグリッド設定 …… 9
第 3 図　『首里古地図』(1700年)…… 11
第 4 図　遺構全体図 …… 15
第 5 図　京の内北地区第Ⅵ期(19世紀終末～昭和58年)
遺構の推定復元 …… 19
第 6 図　京の内北地区第Ⅵ期前半(19世紀終末～昭和20年)
遺構の推定復元 …… 23
第 7 図　首里城平面図(昭和6年頃)と京の内跡検出遺構
との重ね図 …… 31
第 8 図　B-15・16グリッド内に設定した試掘ヶ所(A～F地点) …… 34
第 9 図　土壙SK03　平面と層序 …… 35
第 10 図　石積みSA26出土品①　土器:1、瓦質土器:2、屋瓦:3 …… 41
第 11 図　石積みSA26出土品②　青磁:1～10 …… 43
第 12 図　石積みSA26出土品③　中国産褐釉陶器:1、
タイ産褐釉陶器:2～4、 沖縄産無釉陶器:5、
金属製品:6・7、ガラス製品:8 …… 46
第 13 図　溝SD07-B出土品　青磁:1、白磁:2、
沖縄産施釉陶器:3～5、石製品:6、ガラス玉:7 …… 51
第 14 図　石積みSA29・排水溝⑤出土品　土器:1、陶質土器:2、
青磁:3～5、黒釉陶器:6～8、中国産褐釉陶器:9・10、
石器:11、金属製品:12・13 …… 57
第 15 図　石積みSA16(D・F地点)出土品①　土器:1、
瓦質土器:2 …… 59
第 16 図　石積みSA16(D・F地点)出土品②　青磁:1～10 …… 61
第 17 図　石積みSA16(D・F地点)出土品③　白磁:1・2、
青花:3～5、中国産褐釉陶器:6・7、
タイ産土器(半練):8、タイ産褐釉陶器:9 …… 63
第 18 図　石積みSA16(D・F地点)出土品④　中世陶器:1、
沖縄産施釉陶器:2、沖縄産無釉陶器:3、骨製品:4 …… 65
第 19 図　石積みSA16(D・F地点)出土品⑤　石器:1・2 …… 66
第 20 図　石積みSA16(D・F地点)出土品⑥　金属製品:1～4、
銭貨:5、鍛冶関連:6 …… 68
第 21 図　溝SD06-B出土品　白磁:1、黒釉陶器:2、
タイ産褐釉陶器:3、沖縄産無釉陶器:4、
石器・石製品:5・6、金属製品:7、銭貨:8・9、
ガラス玉:10 …… 75
第 22 図　石積みSA22出土品　陶質土器:1、青磁:2～4、
青花:5、中国産褐釉陶器:6、タイ産土器(半練):7、
金属製品:8、銭貨:9、ガラス玉:10 …… 79
第 23 図　溝SD07-A出土品①　屋瓦:1・2、青磁:3～7 …… 83
第 24 図　溝SD07-A出土品②　青白磁:8、白磁:9、青花:10、
彩釉陶器:11、タイ産炻器:12、沖縄産無釉陶器:13、
金属製品:14、銭貨:15 …… 85
第 25 図　石積みSA02出土品①　土器:1、陶質土器:2～5、
瓦質土器:6、青磁:7～12 …… 89
第 26 図　石積みSA02出土品②　白磁:1、青花:2～6、瑠璃釉:7、
黒釉陶器:8・9、中国産褐釉陶器:10・11、
タイ産土器(半練):12 …… 92
第 27 図　石積みSA02出土品③　本土産磁器:1、本土産陶器:2、
沖縄産施釉陶器:3・4、沖縄産無釉陶器:5・6、
円盤状製品:7～9、金属製品:10・11 …… 95
第 28 図　石積みSA02出土品④　銭貨:1～8 …… 99
第 29 図　石積みSA02出土品⑤　銭貨:9～13 …… 100
第 30 図　溝SD03出土品①　陶質土器:1、瓦質土器:2 …… 107
第 31 図　溝SD03出土品②　塼瓦:3～5、煉瓦:6 …… 108
第 32 図　溝SD03出土品③　青磁:1～4、青花:5 …… 109
第 33 図　溝SD03出土品④　中国産褐釉陶器:1・2、
タイ産褐釉陶器:3～5 …… 111
第 34 図　溝SD03出土品⑤　本土産磁器:1・2、
沖縄産施釉陶器:3・4、沖縄産無釉陶器:5・6 …… 113
第 35 図　溝SD03出土品⑥　骨製品:1、石製品:2、
金属製品:3～5、銭貨:6・7 …… 115
第 36 図　石積みSA09出土品　青磁:1・2、白磁:3、青花:4・5、
タイ産褐釉陶器:6、本土産磁器:7、沖縄産施釉陶器:8、
貝製品:9、骨製品:10、銭貨:11 …… 124
第 37 図　溝SD05出土品　青磁:1、沖縄産施釉陶器:2 …… 126
第 38 図　建物SB01出土品①　屋瓦:1～5、塼瓦:6 …… 130
第 39 図　建物SB01出土品②　青磁:1～3、白磁:4、青花:5、
中国産褐釉陶器:6～8、タイ産褐釉陶器:9、
本土産磁器:10・11 …… 132
第 40 図　建物SB01出土品③　石製品:1、金属製品:2～5 …… 133
第 41 図　溝SD04-B出土品①　屋瓦:1・2 …… 137
第 42 図　溝SD04-B出土品②　青磁:1～3、青花:4、彩釉陶器:5、
タイ産褐釉陶器:6、黒釉陶器:7、金属製品:8・9 …… 139
第 43 図　石積みSA24(A・B地点)出土品　土器:1、青磁:2～4、
カムィヤキ須恵器:5、銭貨:6 …… 142
第 44 図　土壙SK03(C・E地点)出土品　青磁:1、黒釉陶器:2、
円盤状製品:3、金属製品:4、銭貨:5 …… 146
第 45 図　土壙SK02出土品①　陶質土器:1、瓦質土器:2・3、
屋瓦:4、塼瓦？:5 …… 151
第 46 図　土壙SK02出土品②　青磁:1～10 …… 154
第 47 図　土壙SK02出土品③　青磁:11・12 …… 155
第 48 図　土壙SK02出土品④　白磁:1・2、青花:3～5、
黒釉陶器:6 …… 156
第 49 図　土壙SK02出土品⑤　中国産褐釉陶器:1～9 …… 158
第 50 図　土壙SK02出土品⑥　タイ産土器(半練):1、
タイ産炻器:2～6 …… 160
第 51 図　土壙SK02出土品⑦　タイ産褐釉陶器:7・8 …… 161
第 52 図　土壙SK02出土品⑧　ベトナム青花:1、産地不明白磁:2、
本土産陶器:3・4、沖縄産施釉陶器:5、
沖縄産無釉陶器:6・7 …… 163
第 53 図　土壙SK02出土品⑨　貝製品:1～3、骨製品:4、
石製品:5 …… 165
第 54 図　土壙SK02出土品⑩　円盤状製品:1・2、金属製品:3～6、
銭貨:7・8、ガラス玉:9 …… 168

表目次

第 1 表　平成6(1994)年度「京の内」跡検出遺構件数の新旧関係・ 8
第 2 表　切り石積み(区画石積み・御嶽)の外面と内面の関係 …… 13
第 3 表　平成6年度　京の内地区検出遺構と遺構の時期 …… 14
第 4 表　廃藩置県後の首里城及びその周辺における主要文教施設
等略年表 …… 30
第 5 表　第Ⅵ期前半　出土遺物状況 …… 39
第 6 表　石積みSA26　土器・瓦質土器・屋瓦出土状況 …… 40
第 7 表　石積みSA26　土器・瓦質土器・屋瓦観察一覧 …… 40

第 8 表　石積みSA26　青磁出土状況 …… 41
第 9 表　石積みSA26　青磁観察一覧 …… 42
第 10 表　石積みSA26　中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器・沖縄産無釉陶器・金属製品・ガラス製品出土状況 …… 44
第 11 表　石積みSA26　中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器・沖縄産無釉陶器・金属製品・ガラス製品観察一覧 …… 45
第 12 表　石積みSA26　出土遺物状況(図版外) …… 47
第 13 表　石積みSA26　二次的火熱溶解銭貨 …… 47
第 14 表 ① 溝SD07-B　青磁・白磁・沖縄産施釉陶器・石製品観察一覧 …… 50
第 14 表 ② 溝SD07-B　ガラス玉観察一覧 …… 51
第 15 表　溝SD07-B　文字入り紙片観察一覧 …… 52
第 16 表　溝SD07-B　出土遺物状況 …… 53
第 17 表　石積みSA29・排水溝⑤　出土遺物状況 …… 55
第 18 表　石積みSA29・排水溝⑤　二次的火熱溶解銭貨 …… 56
第 19 表　石積みSA29・排水溝⑤　土器・陶質土器・青磁・黒釉陶器・中国産褐釉陶器・石器・金属製品観察一覧 …… 56
第 20 表　石積みSA16(D・F地点)　土器・瓦質土器観察一覧 …… 59
第 21 表　石積みSA16(D・F地点)　土器・瓦質土器出土状況 …… 59
第 22 表　石積みSA16(D・F地点)　青磁出土状況 …… 60
第 23 表　石積みSA16(D・F地点)　青磁観察一覧 …… 60
第 24 表　石積みSA16(D・F地点)　白磁・青花・中国産褐釉陶器・タイ産土器(半練)・タイ産褐釉陶器出土状況 …… 62
第 25 表　石積みSA16(D・F地点)　白磁・青花・中国産褐釉陶器・タイ産土器(半練)・タイ産褐釉陶器観察一覧 …… 62
第 26 表　石積みSA16(D・F地点)　中世陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・骨製品出土状況 …… 64
第 27 表　石積みSA16(D・F地点)　中世陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・骨製品観察一覧 …… 64
第 28 表　石積みSA16(D・F地点)　石器出土状況 …… 65
第 29 表　石積みSA16(D・F地点)　石器観察一覧 …… 65
第 30 表　石積みSA16(D・F地点)　金属製品・鍛冶関連出土状況 …… 67
第 31 表 ① 石積みSA16(D・F地点)　金属製品観察一覧 …… 67
第 31 表 ② 石積みSA16(D・F地点)　銭貨・鍛冶関連観察一覧 …… 68
第 32 表　石積みSA16(D・F地点)　二次的火熱溶解銭貨 …… 68
第 33 表　石積みSA16(D・F地点)　出土遺物状況(図版外) …… 69
第 34 表　溝SD06-B　出土遺物状況 …… 73
第 35 表　溝SD06-B　二次的火熱溶解銭貨 …… 73
第 36 表　溝SD06-B　白磁・黒釉陶器・タイ産褐釉陶器・沖縄産無釉陶器・石器・石製品・金属製品・銭貨・ガラス玉観察一覧 …… 74
第 37 表　石積みSA22　出土遺物状況 …… 77
第 38 表　石積みSA22　二次的火熱溶解銭貨 …… 78
第 39 表　石積みSA22　陶質土器・青磁・青花・中国産褐釉陶器・タイ産土器(半練)・金属製品・銭貨・ガラス玉観察一覧 …… 78
第 40 表　溝SD07-A　出土遺物状況 …… 81
第 41 表　溝SD07-A　二次的火熱溶解銭貨 …… 82
第 42 表　溝SD07-A　屋瓦・青磁観察一覧 …… 82
第 43 表　溝SD07-A　青白磁・白磁・青花・彩釉陶器・タイ産炻器・沖縄産無釉陶器・金属製品・銭貨観察一覧 …… 84
第 44 表　石積みSA02　土器・陶質土器・瓦質土器・青磁出土状況 …… 87
第 45 表　石積みSA02　土器・陶質土器・瓦質土器・青磁観察一覧 …… 88
第 46 表　石積みSA02　白磁・青花・瑠璃釉・黒釉陶器・中国産褐釉陶器・タイ産土器(半練)出土状況 …… 90
第 47 表 ① 石積みSA02　白磁・青花観察一覧 …… 90
第 47 表 ② 石積みSA02　瑠璃釉・黒釉陶器・中国産褐釉陶器・タイ産土器(半練)観察一覧 …… 91
第 48 表　石積みSA02　本土産磁器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・円盤状製品・金属製品出土状況 …… 93
第 49 表　石積みSA02　本土産陶磁器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・円盤状製品・金属製品観察一覧 …… 94
第 50 表　石積みSA02　二次的火熱溶解銭貨 …… 96
第 51 表　石積みSA02　銭貨観察一覧 …… 97
第 52 表　石積みSA02　出土遺物状況(図版外) …… 101
第 53 表　溝SD03　陶質土器・瓦質土器・塼瓦・煉瓦出土状況 …… 106
第 54 表 ① 溝SD03　陶質土器・瓦質土器観察一覧 …… 106
第 54 表 ② 溝SD03　塼瓦・煉瓦観察一覧 …… 107
第 55 表　溝SD03　青磁・青花出土状況 …… 109
第 56 表　溝SD03　青磁・青花観察一覧 …… 109
第 57 表　溝SD03　中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器出土状況 …… 110
第 58 表　溝SD03　中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器観察一覧 …… 110
第 59 表　溝SD03　本土産磁器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器出土状況 …… 112
第 60 表　溝SD03　本土産磁器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器観察一覧 …… 112
第 61 表　溝SD03　骨製品・石製品・金属製品出土状況 …… 114
第 62 表　溝SD03　二次的火熱溶解銭貨 …… 114
第 63 表　溝SD03　骨製品・石製品・金属製品・銭貨観察一覧 …… 114
第 64 表　溝SD03　ガラス製品出土状況 …… 116
第 65 表　溝SD03　ガラス製品(写真のみ)観察一覧 …… 116
第 66 表　溝SD03　出土遺物状況(図版外) …… 117
第 67 表　石積みSA09　出土遺物状況 …… 122
第 68 表　石積みSA09　二次的火熱溶解銭貨 …… 123
第 69 表　石積みSA09　青磁・白磁・青花・タイ産褐釉陶器・本土産磁器・沖縄産施釉陶器・貝製品・骨製品・銭貨観察一覧 …… 123
第 70 表　溝SD05　出土遺物状況 …… 126
第 71 表　溝SD05　青磁・沖縄産施釉陶器観察一覧 …… 126
第 72 表　建物SB01・溝SD04-B　出土遺物状況 …… 127
第 73 表　建物SB01　二次的火熱溶解銭貨 …… 129
第 74 表　建物SB01　屋瓦・塼瓦観察一覧 …… 129
第 75 表　建物SB01　青磁・白磁・青花・中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器・本土産磁器観察一覧 …… 131
第 76 表　建物SB01　石製品・金属製品観察一覧 …… 133
第 77 表　溝SD04-B　屋瓦観察一覧 …… 137
第 78 表　溝SD04-B　青磁・青花・彩釉陶器・タイ産褐釉陶器・黒釉陶器・金属製品観察一覧 …… 138
第 79 表 ① 石積みSA24(A・B地点)　土器・青磁・カムィヤキ須恵器観察一覧 …… 141
第 79 表 ② 石積みSA24(A・B地点)　銭貨観察一覧 …… 142
第 80 表　石積みSA24(A・B地点)　出土遺物状況 …… 143
第 81 表　石積みSA24(A・B地点)　二次的火熱溶解銭貨 …… 144
第 82 表 ① 土壙SK03(C・E地点)　青磁・黒釉陶器・円盤状製品・金属製品観察一覧 …… 145
第 82 表 ② 土壙SK03(C・E地点)　銭貨観察一覧 …… 146
第 83 表　土壙SK03(C・E地点)　出土遺物状況 …… 147
第 84 表　土壙SK03(C・E地点)　二次的火熱溶解銭貨 …… 147
第 85 表　土壙SK02　陶質土器・瓦質土器・屋瓦・塼瓦出土状況 …… 149
第 86 表　土壙SK02　陶質土器・瓦質土器・屋瓦・塼瓦?観察一覧 …… 150
第 87 表　土壙SK02　青磁出土状況 …… 152
第 88 表　土壙SK02　青磁観察一覧 …… 153
第 89 表　土壙SK02　白磁・青花・黒釉陶器出土状況 …… 155
第 90 表　土壙SK02　白磁・青花・黒釉陶器観察一覧 …… 155
第 91 表　土壙SK02　中国産褐釉陶器出土状況 …… 156
第 92 表　土壙SK02　中国産褐釉陶器観察一覧 …… 157
第 93 表　土壙SK02　タイ産土器(半練)・タイ産炻器出土状況 …… 159
第 94 表　土壙SK02　タイ産土器(半練)・タイ産炻器観察一覧 …… 159

第 95 表　土壙SK02　タイ産褐釉陶器観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 161
第 96 表　土壙SK02　タイ産褐釉陶器出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 161
第 97 表　土壙SK02　ベトナム青花・産地不明白磁・
本土産陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器
出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 162
第 98 表 ① 土壙SK02　ベトナム青花・産地不明白磁・
本土産陶器、沖縄産施釉陶器観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・ 162
第 98 表 ② 土壙SK02　沖縄産無釉陶器観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・ 163
第 99 表　土壙SK02　貝製品・骨製品・石器・石製品出土状況 ・ 164
第 100 表　土壙SK02　貝製品・骨製品・石器・石製品観察一覧 ・ 164
第 101 表　土壙SK02　円盤状製品・金属製品・
ガラス玉出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・166
第 102 表　土壙SK02　二次的火熱溶解銭貨 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・166
第 103 表　土壙SK02　円盤状製品・金属製品・銭貨・
ガラス玉観察一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 167
第 104 表　土壙SK02　出土遺物状況（図版外） ・・・・・・・・・・・・・・ 169

図 版 目 次

巻首図版1　1945年4月2日　米軍撮影（CV20-103-63）の首里城周辺
巻首図版2　首里城平面図
巻首図版3　2009年首里城跡の航空写真
巻首図版4　首里城跡周辺地形図
巻首図版5　溝SD07-B出土の墨書・鉛筆書きの紙片
巻首図版6　上段左：建物SB01出土の「大城」銘入り硯
上段右：溝SD07-B出土の「主　神田」銘入り硯
下段左：石積みSA16（D・F地点）出土のアルミ製遊具？
下段右：石積みSA09出土の孔郭内が花弁状となる
「元符通寶（北宋：1098年初鋳造）」
巻首図版7　上段：溝SD04-B出土の元青花如意頭牡丹唐草文稜花盤
（景徳鎮窯。14世紀）
中段：石積みSA26出土の「ミセセル」文字入り大和系瓦
（15世紀中頃～16世紀前半頃）
下段：石積みSA29・排水溝⑤出土の黒釉碗（鴻尾窯系。
14世紀終末～15世紀）
図 版 1　石積みSA26出土品①　土器：1、瓦質土器：2、屋瓦：3 ・・・・ 47
図 版 2　石積みSA26出土品②　青磁：1～10 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
図 版 3　石積みSA26出土品③　中国産褐釉陶器：1、
タイ産褐釉陶器：2～4、 沖縄産無釉陶器：5、
金属製品：6・7、ガラス製品:8 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
図 版 4　溝SD07-B出土品　文字入り紙片:1～7(写真のみ) ・・・・・ 52
図 版 5　溝SD07-B出土品　青磁:1、白磁:2、
沖縄産施釉陶器:3～5、石製品:6、ガラス玉:7 ・・・・・・・・・・ 54
図 版 6　石積みSA29・排水溝⑤出土品　土器：1、陶質土器：2、
青磁：3～5、黒釉陶器：6～8、中国産褐釉陶器：9・10、
石器：11、金属製品：12・13 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
図 版 7　石積みSA16（D・F地点）出土品①　土器：1、
瓦質土器：2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
図 版 8　石積みSA16（D・F地点）出土品②　青磁：1～10 ・・・・・・・ 70
図 版 9　石積みSA16（D・F地点）出土品③　白磁：1・2、
青花：3～5、中国産褐釉陶器：6・7、タイ産土器(半練)：8、
タイ産褐釉陶器：9 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
図 版 10　石積みSA16（D・F地点）出土品④　中世陶器：1、
沖縄産施釉陶器：2、沖縄産無釉陶器：3、骨製品：4 ・・・・ 71
図 版 11　石積みSA16（D・F地点）出土品⑤　石器：1・2 ・・・・・・・・・・ 72
図 版 12　石積みSA16（D・F地点）出土品⑥　金属製品：1～4、
銭貨：5、鍛冶関連：6 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
図 版 13　溝SD06-B出土品　白磁：1、黒釉陶器：2、タイ産褐釉陶器：3、
沖縄産無釉陶器：4、石器・石製品：5・6、金属製品：7、
銭貨：8・9、ガラス玉：10 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
図 版 14　石積みSA22出土品　陶質土器：1、青磁：2～4、青花：5、
中国産褐釉陶器：6、タイ産土器(半練)：7、金属製品：8、
銭貨：9、ガラス玉：10 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80
図 版 15　溝SD07-A出土品①　屋瓦：1・2、青磁：3～7 ・・・・・・・・・・ 86
図 版 16　溝SD07-A出土品②　青白磁：8、白磁：9、青花：10、
彩釉陶器：11、タイ産炻器：12、沖縄産無釉陶器：13、
金属製品：14、銭貨：15 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
図 版 17　石積みSA02出土品①　土器:1、陶質土器:2～5、
瓦質土器:6、青磁:7～12 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 102
図 版 18　石積みSA02出土品②　白磁:1、青花:2～6、瑠璃釉:7、
黒釉陶器:8・9、中国産褐釉陶器:10・11、
タイ産土器(半練):12 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 103
図 版 19　石積みSA02出土品③　本土産磁器:1、本土産陶器:2、
沖縄産施釉陶器:3・4、沖縄産無釉陶器:5・6、
円盤状製品:7～9、金属製品:10・11 ・・・・・・・・・・・・・・・・・104
図 版 20　石積みSA02出土品④⑤　銭貨:1～13 ・・・・・・・・・・・・・105
図 版 21　溝SD03出土品①　陶質土器:1、瓦質土器:2 ・・・・・・・・ 117
図 版 22　溝SD03出土品②　塼瓦:3～5、煉瓦:6 ・・・・・・・・・・・・・118
図 版 23　溝SD03出土品③　青磁:1～4、青花:5 ・・・・・・・・・・・・・119
図 版 24　溝SD03出土品④　中国産褐釉陶器:1・2、
タイ産褐釉陶器:3～5 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
図 版 25　溝SD03出土品⑤　本土産磁器:1・2、
沖縄産施釉陶器:3・4、沖縄産無釉陶器:5・6 ・・・・・・・ 120
図 版 26　溝SD03出土品⑦　ガラス製品：1～10(写真のみ) ・・・・ 120
図 版 27　溝SD03出土品⑥　骨製品:1、石製品:2、金属製品:3～5、
銭貨:6・7 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・121
図 版 28　石積みSA09出土品　青磁:1・2、白磁:3、青花:4・5、
タイ産褐釉陶器:6、本土産磁器:7、沖縄産施釉陶器:8、
貝製品:9、骨製品:10、銭貨:11 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
図 版 29　溝SD05出土品　青磁:1、沖縄産施釉陶器:2 ・・・・・・・・ 126
図 版 30　建物SB01出土品①　屋瓦:1～5、塼瓦:6 ・・・・・・・・・・・134
図 版 31　建物SB01出土品②　青磁:1～3、白磁:4、青花:5、
中国産褐釉陶器:6～8、タイ産褐釉陶器:9、
本土産磁器:10・11 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135
図 版 32　建物SB01出土品③　石製品:1、金属製品:2～5 ・・・・・136
図 版 33　溝SD04-B出土品①　屋瓦:1・2 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140
図 版 34　溝SD04-B出土品②　青磁:1～3、青花:4、彩釉陶器:5、
タイ産褐釉陶器:6、黒釉陶器:7、金属製品:8・9 ・・・・・・140
図 版 35　石積みSA24(A・B地点)出土品　土器:1、青磁:2～4、
カムィヤキ須恵器:5、銭貨:6 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 144
図 版 36　土壙SK03(C・E地点)出土品　青磁:1、黒釉陶器:2、
円盤状製品:3、金属製品:4、銭貨:5、
ビー玉:6(写真のみ) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・148
図 版 37　土壙SK02出土品①　陶質土器:1、瓦質土器:2・3、
屋瓦:4、塼瓦？:5 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 169
図 版 38　土壙SK02出土品②③　青磁:1～12 ・・・・・・・・・・・・・・・170
図 版 39　土壙SK02出土品④　白磁:1・2、青花:3～5、
黒釉陶器:6 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 171
図 版 40　土壙SK02出土品⑤　中国産褐釉陶器:1～9 ・・・・・・・ 171
図 版 41　土壙SK02出土品⑥⑦　タイ産土器(半練):1、
タイ産炻器:2～6、タイ産褐釉陶器:7・8 ・・・・・・・・・・・・・ 172
図 版 42　土壙SK02出土品⑧　ベトナム青花:1、産地不明白磁:2、
本土産陶器:3・4、沖縄産施釉陶器:5、
沖縄産無釉陶器:6・7 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 173
図 版 43　土壙SK02出土品⑨　貝製品:1～3、骨製品:4、
石製品:5 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・173
図 版 44　土壙SK02出土品⑩　円盤状製品:1・2、金属製品:3～6、
銭貨:7・8、ガラス玉:9 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・174

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査区の設定

調査区の設定に関する詳細については『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－平成６年度調査の遺構編』（註１）を参照されたい。併せて調査区の設定の概略については『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－』（註２）及び『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅴ）－』（註３）・『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅵ）－』（註４）を参照されたい。本節では、平成 23 年度報告書に記した調査区の設定を再度掲載した。

平成６年度の京の内跡の発掘調査地区は、第Ⅰ章第３節でも記したように京の内北地区 2,000 ㎡が発掘調査の対象となった。首里城およびその周辺の地下には、昭和 20（1945）年のアジア・太平洋戦争末期に起きた沖縄戦の際に第 32 軍司令部壕が昭和 19（1944）年に構築されたことにより米軍の集中砲火を受けている事から事前に調査区内に不発弾等の有無確認を目的とした磁気探査を実施し、磁気異常箇所の有無を確認後に本格的な発掘調査を平成６（1994）年 11 月 21 日から開始して、平成７（1995）年の３月 28 日までの約５ヶ月間実施した。

発掘調査で検出された遺構のプランを基にして京の内の復元整備の計画が立案されることから遺構保護のため、調査地区内全域に保護砂の白砂を厚さ 10㎝～15㎝を敷きならした後に廃土で埋め戻した。

埋め戻しによって遺構の位置関係が直接的に把握できなくなるので、調査地区及びその周辺に基準点測量の三点（基－１、基－２、基－３）の設置を測量業務として委託した。基準点の成果は下記のとおりである。

	Ｘ＝23622.856		Ｘ＝23594.909		Ｘ＝23606.382
基－１	Ｙ＝21998.541	基－２	Ｙ＝21985.276	基－３	Ｙ＝22047.613
	Ｈ＝125.009m		Ｈ＝126.486m		Ｈ＝125.054m

グリッドの設定（第２図）は、１グリッドの規模が 10m×10mを単位とした。基準となった杭は、下之御庭の南側にあった東西に延びるコンクリート製側溝の南側縁より 50 ㎝の地点に基準杭Ａ－11 を設定した。以下、側溝と平行させながら東西方向に 10m間隔でＡ－12 からＡ－17 までの杭を設置した。南北方向には基準杭Ａ－11 からＡ－17 を視準し、これを軸線としてＡ－17 からW90°０′００″Ｓに振って 10m間隔でＢ－11・Ｃ－11・Ｄ－11 の杭を設置し、グリット番号は東から西へ 10・11・12･･･と数字を冠した。グリッドの記号はアルファベットを採用し、北から南へＡ・Ｂ・Ｃ･･･とした。グリッド名は記号と番号を組み合わせてＡ－10・Ｂ－10･･･と標記した。なお、グリッド名はグリット内の東南隅の杭に冠して、将来の調査に使用できるように設置した。

基準杭Ａ－11 とＡ－17 を結ぶ軸線（南北基準座標軸Ｎ°19′00″Ｗに偏る座標軸）からW180°０′００″Ｅへ振って、Ａ－11 から東側へ 170㎝の箇所にある奉神門基檀と丁度かち合うように基準杭Ａ－11 を設置した。

調査地区のＡ－11（北東）、Ａ－17（北西）、Ｄ－10（南東）、Ｄ－18（南西）の４点のＸ座標とＹ座標については、写真測量図の読み取りから下記の結果が得られた（第２図）。

Ａ－11（Ｘ＝23604.474　Ｙ＝22047.078）　　Ａ－17（Ｘ＝23623.565　Ｙ＝21990.239）

Ｄ－10（Ｘ＝23572.885　Ｙ＝22047.018）　　Ｄ－18（Ｘ＝23598.267　Ｙ＝21971.191）

その他、Ａ－11 から東側にある奉神門基壇とかち合う接点（170㎝）から奉神門南側階段がとり付けられた基壇（階段南側縁と基壇との接点）までの直線距離は６ｍと判読した。

註文献

１．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 56 集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－平成６年度調査の遺構編』沖縄県立埋蔵文化財センター平成 23（2011）年３月。

２．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 62 集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－平成６年度調査の遺物編（１）』沖縄県立埋蔵文化財センター平成 24（2012）年３月。

３．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 73 集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅴ）－平成６年度調査の遺物編（２）』沖縄県立埋蔵文化財センター平成 26（2014）年３月。
４．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 89 集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅵ）－平成６年度調査の遺物編（３）』沖縄県立埋蔵文化財センター平成 29（2017）年３月。

第２節　事業の体制

京の内跡の発掘調査は、平成６（1994）年度～平成８（1996）年度までの三カ年以下に記した体制で実施した。資料整理については今回の報告書刊行に係った平成 29（2017）年度に限定して、下記のような体制で実施した。なお、職名等は当該年度のものを表記した。

◎ 平成６（1994）年度　組織　（遺構調査年度）

○ 事業主体　沖縄県教育委員会　教 育 長　嘉陽 正幸
○ 事業所管　沖縄県教育庁文化課　課　長　西平 守勝
同　上　副 参 事　上原 武次
○ 事業総括　同　上　課長補佐　知念　勇・課長補佐　新垣 末子
○ 事業事務　沖縄県教育庁文化課　管　理　係　係　長　比屋根　正治
同　上　〃　主　査　新垣 和子
同　上　〃　副主査　新崎 文子・副主査　宮城 直子
同　上　〃　主　事　伊波 盛治
○ 事業実施　沖縄県教育庁文化課　埋蔵文化財係　係　長　大城　慧
同　上　〃　主任専門員　岸本 義彦
同　上　〃　主　任　島袋　洋
同　上　〃　専　門　員　長嶺　均・専　門　員　金城　透
同　上　〃　指導主事　西銘　章
同　上　埋蔵文化財係史跡整備班　班　長　上原　靜（発掘総括者）
同　上　〃　〃　指導主事　運天 和夫・指導主事　我那覇　念
同　上　〃　〃　主　任　盛本　勲
同　上　〃　〃　主　任　金城 亀信（発掘担当者）
同　上　〃　〃　調査嘱託員　高宮とり・渡邊尚子
○ 専門調査指導・助言（遺構調査、資料整理　平成６年度～平成８年度）
文化庁記念物課　調査係　整備部門　主任文化財調査官　田中 哲雄　平成６年
同　上　〃　史跡部門　文化財調査官　伊東 正義　平成７年
同　上　〃　史跡部門　文化財調査官　増渕　徹　平成８年
奈良国立文化財研究所　元所長　坪井 清足　（平成６年）
同　上　飛鳥藤原宮跡発掘調査部　元部長　牛川 喜幸　（庭園　平成６年）
中国福建省文化庁文物所　副所長　鄭　國　珍　（陶磁器・城郭　平成７・８年）
福建省博物館　副研究員　楊　琮　（陶磁器・城郭　平成６年）
ベトナム　国立ハノイ考古学研究所　主任研究員　チン・カオン･トゥホンー（Trinh Cao Tuong）
カナダ　トロント大学　教　授　リチャード・ピアソン（R. J. Pearson）
九州大学　文学部　教　授　西谷　正　（城郭　平成７年）
専修大学　文学部　教　授　亀井 明徳　（陶磁器　平成６年）
愛媛大学　法文学部　助教授　村上 恭通　（鉄製品　平成８年）
東京外国語大学　専任講師　小川 英文　（フィリピン・東南アジア考古学　平成６年）

青山学院大学　文学部　教 授　田村 晃一　（考古学　平成６年）
熊本大学　法文学部　元教授　白木原 和美（考古学　平成６年）
鹿児島大学　法文学部　教 授　上村 俊雄　（考古学　平成６年）
名古屋大学　文学部　教 授　渡邊　誠　（考古学　平成７年）
沖縄国際大学　文学部　教 授　高宮 廣衛　（考古学　平成６・８年）
ノルウェー科学アカデミー　博士　トゥール　ハイエルダール（Thor Heyerdahl）（平成８年）
鎌倉考古学研究所　所 長　手塚 直樹　（陶磁器　平成８年）
漆器文化財科学研究所　所 長　四柳 嘉章　（漆器　平成６年）
沖縄県指定無形文化財保持者　前田 孝允　（琉球漆器　平成６年）
沖縄県文化財保護審議会　委員長　嵩元 政秀　（史跡・名勝・考古学　平成６年）
沖縄県文化財保護指導委員　玉津 博克　（史跡・名勝　平成６・７年）
福岡市美術館　学芸員　尾崎 直人　（タイ・ベトナム陶磁　平成７年）
福岡市教育委員会　埋蔵文化財係　主 事　佐藤 一郎　（陶磁器　平成８年）
宇佐市教育委員会　文化課　文化財係　技 師　江藤 和幸　（史跡・考古学　平成８年）
浦添市美術館　学芸員　金城 聡子　（漆器　平成６年～８年）
那覇市教育委員会　文化課　課 長　金武 正紀　（陶磁器・考古学・史跡　平成６年～８年）
同　上　〃　主 査　島　弘　（考古学　平成６～８年）
同　上　〃　主 事　玉城 安明・主 事　仲宗根　啓　（考古学　平成６・７年）
那覇市教育委員会　壷屋焼物博物館準備室　室 長　渡名喜　明　（美術・工芸　平成７・８年）
同　上　非常勤学芸員　我部 太郎　（美術史　平成７・８年）
北谷町教育委員会　文化課　主　事　山城 安生　（考古学　平成６年）
南風原町教育委員会　文化課　学芸員　上地 克哉　（考古学　平成６年～８年）
玉城村教育委員会　社会教育課　主　事　西平　剛　（史跡・考古学　平成６年～８年）
糸満市教育委員会　文化課　主　事　湖城　清　（考古学　平成７年）
同　上　〃　主事補　大城 一成　（考古学　平成７年）
中城村教育委員会　生涯学習課　主 事　渡久地　真　（史跡・考古学　平成６年）
今帰仁城跡整備研究委員会　委 員　名嘉 正八郎　（歴史　平成７年）
同　上　委 員　赤嶺 和男　（建築　平成８年）
財団法人　沖縄県文化振興会　史料編集室　主 幹　安里 嗣淳（考古学　平成６～８年）
沖縄県立博物館　学芸課長　當眞 嗣一　（史跡・考古学　平成６年）
琉球大学　元教授　仲松 弥秀　（民俗・地理学　平成７年）
法政大学　文学部　元教授　外間 守善　（国文学　平成６年）
琉球大学　法文学部　教 授　池宮 正治　（国文学　平成６～８年）
琉球大学　法文学部　教 授　高良 倉吉　（歴史学　平成６～８年）
浦添市教育委員会　文化課　主幹　安里　進　（考古学　平成８年）
琉球大学　法文学部　教 授　池田 榮史　（考古学　平成６・７年）
基山町教育委員会　係 長　山田　正　（史跡・考古学　平成８年）

○ 聞き取り調査および情報提供者（平成６～８年度）

阿波根 直盛・新垣 幸有・石川 逢仁・上江洲 安英・上間 秀政・大城 宜英・我喜屋 宗徳・我喜屋 満・桂　辰哉・小橋川 興永・島　秀範・城間 富吉・高江洲 良吉・田場 典喜・仲本 政治・真栄平 房敬・宮城 盛長・屋嘉比朝勇・屋比久益貞・首里城復元期成会・琉球大学

○ 発掘調査協力者（遺構実測など　平成６～８年度）

県教育庁文化課　埋蔵文化財係　主　任　島袋　洋・主　任　金城　透　（平成６～８年）

県教育庁文化課　埋蔵文化財係　指導主事　西銘　章　（平成６年）
同　上　〃　嘱託調査員　仲座 久宜　（平成６・７年）
同　上　〃　〃　新城 恵・田中 ゆきの　（平成６・７年）
同　上　〃　〃　上原 清乃・仲與根 ゆかり　（平成６～８年）
同　上　〃　〃　仲間 留美・又吉 純子　（平成６～８年）
同　上　〃　〃　長田　剛　（平成７・８年）
県教育庁文化課　史跡整備係　嘱託調査員　矢沢 秀雄　（平成６～８年）
同　上　〃　〃　上原　久　（平成６・７年）
石垣市教育委員会　文化課　主事　島袋 綾野　（平成６年）
下地町教育委員会　文化財係　主事　川満 邦弘　（平成７年）

○ 発掘調査作業員（平成６年度）
新垣 美智子・稲嶺 フミ子・大城 輝子・嘉数 キミエ・嘉手納 太・川鍋 敬子・幸地 ヨシ子・
呉我 フジ子・呉屋 正一・呉屋 光子・小橋川 恵子・小橋川 幸子・小波津 夏子・小波津 ヨシ子・
小湾 清美・島袋 文子・玉城 富子・玉城 信子・仲里ハル子・中田 邦子・仲程 喜美子・
永吉 弘子・堀切 邦子・松本 倫子・諸見里 幸子・山畑 キミ・柚木崎 末子
富山大学 学生 古屋聡洋。琉球大学 学生　米須美津・北谷 香・比嘉宮子・神里 利恵子

○ 発掘調査協力者（平成６年度）
金成 淳一・松本 茂（以上２名　富山大学　学生）。山本 正昭（奈良大学　学生）
松竹　譲・喜屋武 盛世・宮里 富二男（以上３名　松竹重機）。澤岻直彦（与那嶺測量設計）
国営沖縄記念公園事務所 首里出張所・海洋博覧会記念公園 管理財団首里城管理センター

○ 資料整理作業員（平成６年度）
新垣千恵子・安和 千代子・石嶺 眞由美・川満 奈美子・喜舎場 かおり・喜屋武 さおり・
金城 礼子・源河 秀子・座間味 美津子・島 京美・島袋 里美・島袋 春美・平良 貴子・
高良 三千代・立津 春枝・玉城 恵美利・知念 純子・仲村 恒子・西銘パトロシニア・備瀬 枝美子・外間　瞳
別府大学　学生 城間　肇

◎ 平成７（1995）年度　組織　（遺構調査年度）

○ 事業主体　沖縄県教育委員会　教 育 長　仲里 長和
○ 事業所管　沖縄県教育庁文化課　課　長　西平 守勝
同　上　副 参 事　濱比嘉 勝
○ 事業総括　同　上　課長補佐　日越 国昭・課長補佐　新垣 末子
○ 事業事務　沖縄県教育庁文化課　管 理 係　主幹兼係長　比屋根 正治
同　上　〃　主　査　新垣 和子
同　上　〃　副 主 査　宮城 直子・副 主 査　新崎 文子
同　上　〃　主　事　伊波 盛治
○ 事業実施　沖縄県教育庁文化課　史跡整備係　係　長　上原　靜（発掘総括者）
同　上　〃　指導主事　運天 和夫・指導主事　我那覇　念
同　上　〃　主　任　盛本　勲
同　上　〃　主　任　金城 亀信（発掘担当者）
同　上　〃　嘱託調査員　高宮 とり・渡邊 尚子
○ 事業協力　沖縄県教育庁文化課　埋蔵文化財係　係　長　大城　慧
同　上　〃　主　任　島袋　洋
同　上　〃　指導主事　西銘　章

沖縄県教育庁文化課　埋蔵文化財係　専 門 員　　金城　透

○ 発掘調査作業員（平成７年度）

稲福フミ子・大城 輝子・幸地ヨシ子・小橋川 恵子・小橋川幸子・小波津夏子・小波津ヨシ子・呉屋 正一・呉屋 光子・島袋 文子・城間 智子・玉城 富子・玉城 信子・仲里 春子・仲程喜美子・永吉 弘子・山畑 キミ・柚木崎末子

富山大学 学生 金成 淳一・松本 茂。琉球大学 学生 米須 美津。別府大学 学生 城間　肇

沖縄国際大学 学生 上原 久

○ 資料整理作業員（平成７年度）

新垣 千恵子・安和 千代子・石橋 朝子・伊波 和歌子・伊波 小百合・上原 園子・大村 広美・岡村 綾子・折田 衣代・金城 薫・金城 さおり・金城 美折・小嶺 禮子・平良 貴子・高良 三千代 ・玉城 恵美利・知念 純子・津波古 好子・長田 剛・仲間 留美・浜元 春江・比嘉 登美子・外間 瞳・又吉 亜由美・又吉 純子

◎ 平成８（1996）年度　組織　（遺構調査年度）

○ 事業主体	沖縄県教育委員会	教 育 長	仲里 長和	
○ 事業所管	沖縄県教育庁文化課	課　　長	大城 将保	
	同　　上	副 参 事	川満 一成	
○ 事業総括	同　　上	課長補佐	日越 国昭・課長補佐	稲嶺 靖子
○ 事業事務	沖縄県教育庁文化課	管 理 係	主幹兼係長	比屋根 正治
	同　　上	〃	主　　査	村山 佐代
	同　　上	〃	副　主　査	新垣 敏子
	同　　上	〃	主　　任	當間 保智
	同　　上	〃	主　　事	上原 直樹
○ 事業実施	沖縄県教育庁文化課	史跡整備係	係　　長	上原　靜（発掘総括者）
	同　　上	〃	指導主事	運天 和夫・指導主事　我那覇　念
	同　　上	〃	主　　任	盛本　勲
	同　　上	〃	主　　任	金城 亀信（発掘担当者）
	同　　上	〃	嘱託調査員	高宮 とり・嘱託調査員　渡邊 尚子
	同　　上	〃	嘱託調査員	矢沢 秀雄・嘱託調査員　稲垣 千明
○ 事業協力	沖縄県教育庁文化課	埋蔵文化財係	係　　長	大城　慧
	同　　上	〃	主　　任	島袋　洋
	同　　上	〃	指導主事	比嘉　聡
	同　　上	〃	専　門　員	長嶺　均・金城　透・上地　博・仲座 久宜

○ 発掘調査作業員（平成８年度）

安次富 マサ子・安次富 正寿・大城 愛子・大城 かおる・大城 輝子・喜舎場 盛安・金城 和也・小波津 ヨシ子・小松 博幸・呉我 フジ子・瑞慶覧 繁美・瑞慶覧 長祐・桃原 佐恵美・桃原 隆信・中塚 末子・中原 ミツ子・仲程 貴美子・仲村 トヨ子・永吉 弘子・外間 徳男・真栄城 千枝子・宮城 澄子・宮国 恵子・諸見里 幸子・山内 利江子・与那嶺 勢津子

別府大学 学生　城間 肇。奈良大学 学生　山本 正昭

○ 資料整理作業員（平成８年度）

新垣 千恵子・石垣 奈美・石橋 朝子・伊波 小百合・岡村 綾子・嘉数 禮子・我那覇 悠子・金城 薫・金城 美祈・島袋 春美・城間 千鶴子・田場 直樹・玉寄 智恵子・知念 純子・津波 昭史・當山 慶子・仲宗根 三枝子・浜元 春江・比嘉 孝子・備瀬 枝美子・米田 愛子

◎ 平成 29（2017）年度　組織　（「京の内発掘調査報告書（Ⅶ）」報告書刊行年度）

○ 事業主体　沖縄県教育委員会　　教　育　長　　平敷　昭人
　　同　上　　教育管理統括監　　宜野座　葵
　　同　上　　教育指導統括監　　與那嶺 善通（文化財関係担当統括監）
　　同　上　　参　事　　親泊 信一郎（文化財関係担当参事）

○ 事業総括　沖縄県教育庁文化課　課　長　　萩尾 俊章

○ 事業事務　沖縄県教育庁文化課　管 理 班　班　長　　稲嶺 盛之
　　同　上　　〃　主　査　　城間 佳恵
　　同　上　　〃　主　任　　仲宗根 基希
　　同　上　　〃　主　事　　屋嘉部 方咲

○ 事業事務　沖縄県教育庁文化課　記念物班　班　長　　上地　博
　　同　上　　〃　指導主事　　神村 智子・指導主事　金城 篤

○ 事業実施　沖縄県立埋蔵文化財センター　所　長　　金城 亀信（資料整理・報告書作成担当）
　　同　上　　副参事　　濱口 寿夫
　　同　上　　総 務 班　班　長　　比嘉 智博（事業予算総括）
　　同　上　　〃　主　幹　　大城 喜信
　　同　上　　〃　主　任　　糸数 晃子
　　同　上　　〃　主　事　　當山　彬・主　事　上間 優多
　　同　上　　〃　事務補助員　　宇座 友香・照屋 美奈子・平安 緑
　　同　上　　調 査 班　班　長　　仲座 久宜（事業業務総括）
　　同　上　　〃　主任専門員　　新垣　力　（事業担当）
　　同　上　　〃　主　任　　宮城 淳一（事業担当）
　　同　上　　〃　専 門 員　　田村　薫

○ 資料整理指導（平成 29 年度）
　国立大学法人 琉球大学 法文学部 人間科学科 地理歴史人類学 教授 池田 榮史
　沖縄国際大学 総合文化学部 社会文化学科 教授兼任南島文化研究所 所長　上原　靜

○ 資料整理作業及び協力者（平成 29 年度）
　沖縄県教育庁文化財課 記念物班　主任専門員　知念 隆博（金属製品：軟 X 線写真撮影）
　沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班　主任専門員　新垣　力（陶磁器全般）
　沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班　主　任　大堀 皓平（石質同定）
　　同　上　　〃　史跡・埋蔵文化財調査員　久場 大暉・平良 和輝
　　同　上　　〃　史跡・埋蔵文化財調査員　廣岡 凌・我喜屋 優真
　　同　上　　〃　埋蔵文化財資料整理員　　以下に列記。
　赤嶺 雅子・池宮城 聡子・伊藤 恵美利・上原 園子・大城 友理華・小渡 直子・嘉数 渚・慶田 秀美・崎原 美智子・多々良 亜矢子・島仲 美香・下地 勝恵・新城 京美・手嶋 永子・當間 郁子・仲里 由利・比嘉 なおみ・宮城 かの子・宮里 美也子。玉那覇 美野・仲村 綾乃

○ 資料整理作業員　喜瀬 美由紀・古見 晶子

第３節 調査の経緯

平成６（2011）年度の詳細な調査の経緯については、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－』〔沖縄県立埋蔵文化財センター 平成 23（2011）年３月〕（註１）を、調査の経緯の概要については『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－』（註２）及び『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅴ）－』（註３）・『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅵ）－』（註４）を併せて参照されたい。本節では、前記報告書（Ⅳ）～（Ⅵ）より調査の経緯について加筆修正して再度掲載した。

平成６（1994）年度に実施した首里城京の内跡の発掘調査は、同年 11 月 21 日から着手し、翌年の３月 28 日までの約５ヶ月間にわたって実施した（第１図）。

調査地区の発掘前の状況は、平成４（1992）年の首里城正殿（しゅりじょうせいでん）、北殿（ほくでん）、南殿（なんでん）、奉神門（ほうしんもん）、廣福門（こうふくもん）などの復元整備が完了し、首里城公園として一部が開園した。開園に伴って京の内地域は、北側に隣接する整備済の下之御庭（したぬうなー）の南側一帯は斜面地に客土がなされ、全面に芝張りで暫定的な仮整備が行われていた。客土は琉球大学の基礎跡より上になされていて、調査は仮整備の芝の除去から始まり、次に客土の除去をバックホウでおこない琉球大学の旧地表面まで剥ぎ取った後に磁気探査をおこなった。磁気探査の結果、琉球王国時代の遺物や沖縄戦で使用された不発弾等は検出されなかった。

この時点で磁気探査を終了したが、琉大地盤（建物基礎を含む）を東側から西側へバックホウで慎重に取り零した旧表土の残りと客土を削平しながら掘り下げたところ手榴弾４発、砲弾２発が検出された為、関係機関に連絡を入れて処理を依頼した。その後、遺構内の崩れた栗石を手作業による除去をおこなっていた発掘調査担当者が持ち上げた石の下から完形の信管付の不発弾が見つかり、警察署をとおして自衛隊へ不発弾の処理を依頼した。

このような状況で琉球王国当時の地表面と首里第一尋常高等小学校（明治 45 年～昭和 20 年：1912 年～1945 年）当時の地盤までバックホウや手掘りで掘り下げたが、調査地区の南側半分は琉球大学校舎（短大管理棟、理科実験室、教育校舎及び同ビル別館、法文校舎及び同ビル別館Ｂなど）建築の際の造成により琉球石灰岩の掘削や削平がなされ、遺構の残り具合は悪かった。逆に北側は琉大校舎地盤のレベルより低い地域は、道路、中庭、各校舎への通路と利用された事と校舎などの構築物が建設される事がなかった事などが幸いして、旧表土レベル内での軽微な攪乱を受けている程度で、全体的に遺構の保存状態は良好であった。遺構検出に際しては、遺構直上までバックホウで慎重に削平しながら遺構の確認と平行し掘り下げた。この辺はオペレーターの技術と経験が生かされ５㎝前後の誤差で剥ぎ取りが可能となり、調査がスムーズに進行していった。遺構直上より下部の発掘調査は、人力による手作業で遺構を露出させながら掘り下げていった。

遺構の検出に際しては遺構が確認され次第、第２図のように遺構の形状や性格などから記号と番号を検出順に冠していった。また、遺構の性格や時期を具体的に把握する目的で、遺構沿いにトレンチを入れながら発掘調査を進行させた。結果として検出された遺構は 51 基（調査終了時点で、遺構番号に重複が発生）を数えた（註５）。その後、遺構の整理（途切れた石積み遺構同士が繋がり一つの遺構として整理、SA19・SA20・SA28 が土壙 SK01 の倉庫跡となるなど）と検討をすすめたところ平成 12（2000）年度の段階で 39 基（註６）となった（第１表）。

なお、これらの遺構発掘調査には約５ヶ月を要した。

平成６（1994）年に実施した京の内北地区（約 2,000 ㎡）の埋め戻しは、平成８（1996）年２月 29 日に遺構や往時の面を保護するために白砂を 15㎝前後の厚さで岩盤の石灰岩を含む調査区 2,000 ㎡に敷いて、その上に残土を 50～70㎝の厚さで盛って埋め戻した。この埋め戻しに際しては、重機（バックホウ、タイヤショベル、ローラー）を使用するため、埋め戻しの方法について協議・調整を行いながら実施した。遺構面については発掘調査担当者立ち会いのもとで人力による埋め戻しを実施した。

第1表　平成6(1994)年度「京の内」跡検出遺構件数の新旧関係

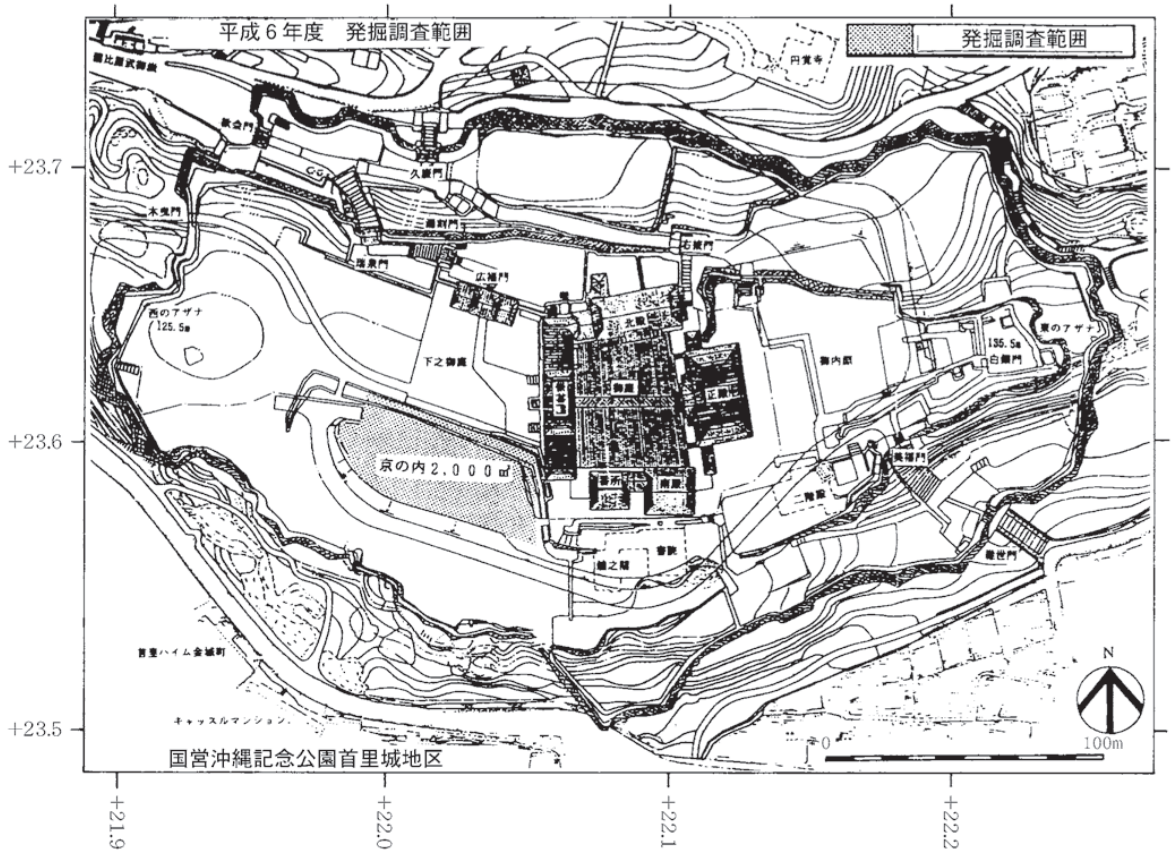
NO.	種　類	遺構の記号と番号	旧件数（1994年時点）	新件数（2000年時点）
1．	石 積 み	SA01～SA27・SA29～SA34	33基	17基
2．	石　　列	SR01・SR02	2基	2基
3．	石敷き・塼敷き	SS01～SS03	3基	6基
4．	溝	SD01～SD07	7基	10基
5．	土　　壙	SK01～SK03	3基	3基
6．	建　　物	SB01・SB02	2基	1基
7．	階　　段	SA28	1基	0基
遺　構　合　計			51基	39基

註文献

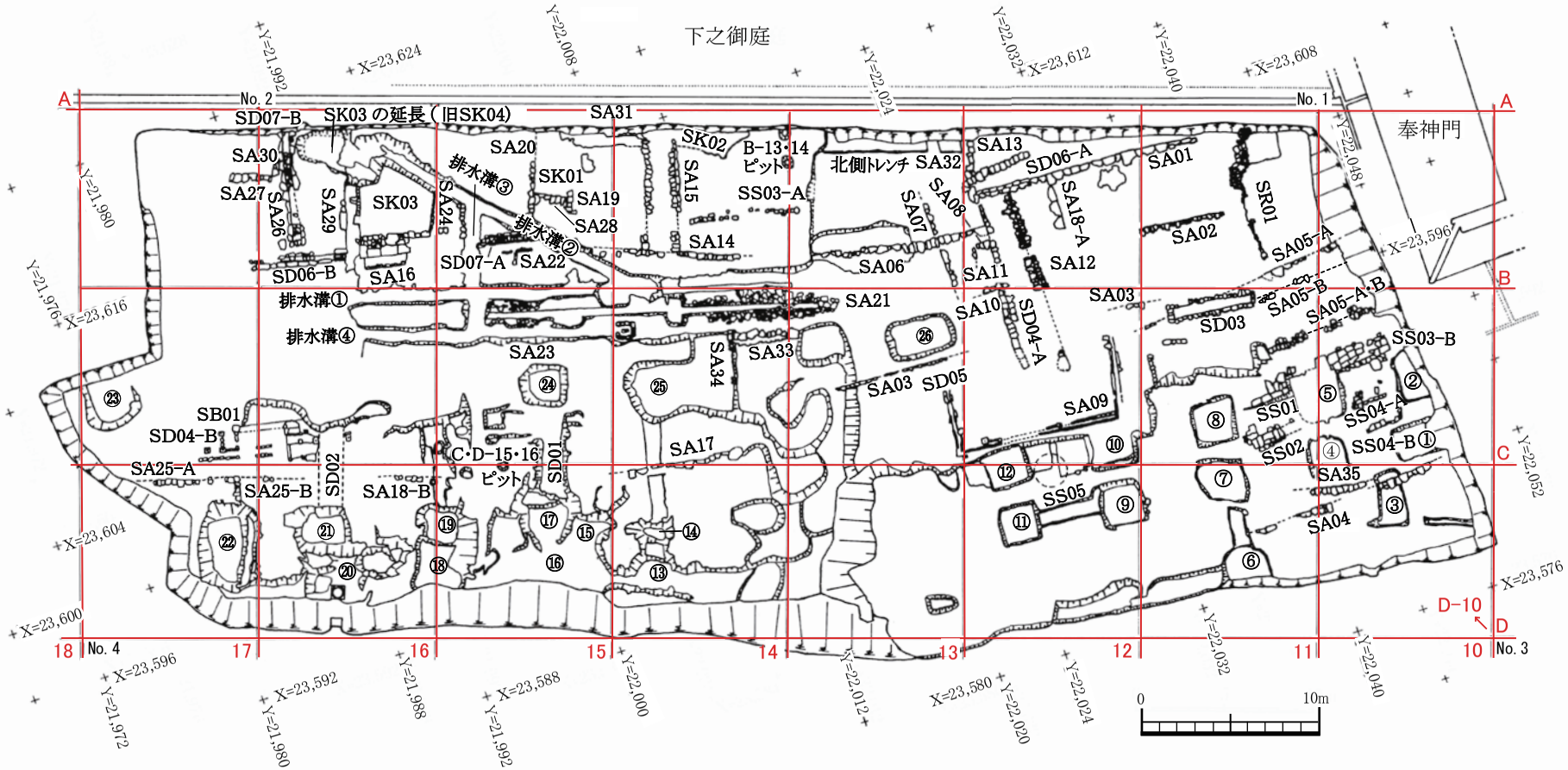
註1．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第56集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－平成6年度調査の遺構編』
沖縄県立埋蔵文化財センター 平成23（2011）年3月。
註2．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第62集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－平成6年度調査の遺物編（1）』
沖縄県立埋蔵文化財センター 平成24（2012）年3月。
註3．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第73集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅴ）－平成6年度調査の遺物編（2）』
沖縄県立埋蔵文化財センター 平成26（2014）年3月。
註4．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第89集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅵ）－平成6年度調査の遺物編（3）』
沖縄県立埋蔵文化財センター 平成29（2017）年3月。
註5．沖縄県文化財調査報告書第132集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会 平成10（1998）年3月。
註6．金城亀信「首里城「京の内」跡の発掘調査概要」重要文化財指定記念 特別企画展 『首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代－』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成13（2001）年3月。

引用及び参考文献

1．財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団 『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』平成7（1995）年3月。
2．金城亀信「首里城跡「京の内」跡出土の輸入陶磁器－紅釉水注を中心に－」『特集 琉球考古学最新情報』考古学ジャーナル NO.437 1998年。
3．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成21（2009）年3月。



第1図　発掘調査地域



平成6年（1994）度の京の内跡から検出された遺構については下記のとおりに記号化した。

石積み（SA）……SA01 ～SA05-A・B、SA06 ～SA18-A・B、SA19 ～SA25-A・B、SA26 ～SA35(38 基)
石敷き・塼敷き（SS）……SS01 ～SS03-A・B、SS04-A・B、SS05(7基)
土壙（SK）……SK01 ～SK03、SK03 の延長（旧SK04）（4 基）
溝（SD）……SD01 ～SD04-A・B、SD05、SD06-A・B、SD07-A・B(10 基)
建物（SB）……SB01(1基)
石列（SR）……SR01(1基)
※検出遺構の合計……(61 基)
※記号は必ずしも遺構そのものの性格を示したものではない。 将来において遺構番号等の追加がある。
※遺構の配置は写真測量図より縁石ライン等をトレースしたものである。
※琉球大学の建設基礎跡は、 検出順に①～㉖迄を冠した。

No.1	A-11	X=23,604.474	Y=22,047.078
No.2	A-17	X=23,623.565	Y=21,990.239
No.3	D-10	X=23,572.885	Y=22,047.018
No.4	D-18	X=23,598.267	Y=21,971.191

第2図 「京の内」跡遺構配置図およびグリッド設定

第Ⅱ章　遺　構

第１節　遺構の概要

Ａ．遺構の種類と概略

平成６年度の京の内地区の発掘調査で遺構の性格や時期を決定することができる出土陶磁器類などは重要な資料である。これを基にした各遺構については『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅲ)－平成６年度調査の遺構編』（註１）の表現等を修正後に『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅳ)－』（註２）及び『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅴ)・(Ⅵ)－』（註３）に記載したものを本節では加筆修正して再度掲載して使用した。

平成６年度の首里城京の内跡発掘調査で検出された遺構には石積み（階段を含む）、石敷き（塼敷きを含む）、土壙、溝、建物、石列などがある。検出された遺構のほとんどは真北に対し、やや西に振れるものと西よりに振れるものが存在した（第２図・第４図）。

各種の遺構は発掘直前に推定された遺構の種類や性格によって記号化して、検出された順に番号を冠した。

具体的には、建物と付属する溝、石敷き、石積みの外面や内面にも個別に記号と番号を付した。また、個別の遺構として取り扱っていたものが完掘後に一連の遺構となり、種類や性格も明らかとなった遺構もある。これについては古い記号と番号を尊重しながら新しい記号と番号を付して、新旧の番号と記号を併用した。基本的に同一遺構であっても調査時点に冠した記号や番号の改正などは実施しなかった。これは記号や番号の改正などによって図面整理や資料整理（ナンバーリングの変更など）で時間を費やし、資料整理の進捗に支障を来すことが予想されたからであった。遺構の記号は以下のとおりであるが必ずしも遺構の種類と性格を示すものではないことを付する。なお、今回の報告で新たに遺構が３基確認されたことは、大きな成果であった。

遺構の種類は石積み（ＳＡ）、石敷き・塼敷き（ＳＳ）、土壙（ＳＫ）、溝（ＳＤ）、建物（ＳＢ）、石列（ＳＲ）の６種類である。以下、遺構別に性格などを略記する。

石積み（ＳＡ）

石積みの大部分はその上部を欠くため上部の構造は判っていない。石積みは外面と内面が並行となり、南北方向や東西方向に配置する区画石積みが主であった。『首里古地図』（第３図）にみられた区画石積みに空けられた通用門は戦後の造成（岩盤の削平と掘り下げ）で破壊され確認されていない。他に基壇状の建物の縁石や倉庫の壁石などのように外面のみが検出されたものもある。これは石積みの位置変更や幾度となく造成による嵩上げ等による内面の解体や石積みの積み直しの際に直接岩盤上に積み上げた事に起因するようである。その他に完掘の結果、階段や階段の脇石積みとして判明した石積みもある。石積みも大半が根石のみが存在する状況にあった。根石は粗加工の切り石や野面石に粗い加工を加えたものを用いて造成土盤（遺物包含層を二次的に使用）の上に配置したり、或いは削平した岩盤上に直接的に配置するなどの工法があった。特に後者の岩盤上から切り石を積み上げているものが主であった。石積みの外面と内面において、外面は切り石で、内面が野面積みを用いたものがある。内面に野面積みを用いた理由として、内面側の土盤の仕上げ高が高い位置にあった為、野面石を基礎石として積み上げ途中から設定された土盤近くから切石に変更がなされたからであろう。この方法を用いた例は二例のみ確認されている。他にも例外的ではあるが野面積みで積み上げ途中から裏込目石の代りに礫混りの土砂を投入する特殊な例があった。発掘調査の結果、明確な石積み（区画石積み・御嶽・倉庫・琉大の石積み）となったものと今回の整理で新たに確認された２基（ＳＡ05-Bの内・外面）を加えると、切り石積みでは東西方向に延びる石積みが15基（ＳＡ03、ＳＡ04、ＳＡ05-Bの内・外面、ＳＡ06、ＳＡ08、ＳＡ10、ＳＡ14、ＳＡ17、ＳＡ18-Ｂ、ＳＡ25-Ａ、ＳＡ27、ＳＡ31、ＳＡ33、ＳＡ35）で、南北方向に延びるものは12基（ＳＡ07、ＳＡ11～ＳＡ13、ＳＡ15、ＳＡ18-Ａ、ＳＡ19、ＳＡ20、ＳＡ25-Ｂ、ＳＡ30、ＳＡ32、ＳＡ34）が確認されている。これらの切り石積みの対比や相関関係については、第２表で整理した。野面積みは１基（ＳＡ24）のみで南北方向に延びていたようである。その他に建物の基壇の縁石や建物の縁石が４基（ＳＡ01、ＳＡ01背面、ＳＡ02、ＳＡ09）、階段およびその脇石積み３基（ＳＡ16、ＳＡ19、ＳＡ28）、側溝の縁石２基（ＳＡ26、ＳＡ29）、石積みの裏込

目石の集石が２基（ＳＡ21、ＳＡ23）あった。以上の 38 基が石積み（ＳＡ）として取り扱ったものである。

なお、資料整理をとおして、平成９（1997）年２月 20 日～３月 21 日迄の期間で実施された下之御庭の首里森御嶽復元整備に係る遺構確認のための発掘調査（註４）で、下之御庭の首里森御嶽下部石積みが京の内の石積み（ＳＤ04-ＡとＳＡ18-Ａ）と繋がっていく事を改めて確認［調査期間中に下之御庭の首里森御嶽下部石積みが京の内を南北に横断して最高位にある首里森御嶽へ繋がっていく事を現地で確認した。下之御庭の首里森御嶽は京の内にある首里森御嶽（本体）への遙拝所であることが石積み遺構からも推定できた］した。

註文献

註１．沖縄県立埋蔵文化財センター 調査報告書 第 56 集 『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－平成６年度調査の遺構編』平成 23（2011）年３月。

註２．沖縄県立埋蔵文化財センター 調査報告書 第 62 集 『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－平成６年度調査の遺物編（１）』平成 24（2012）年３月。

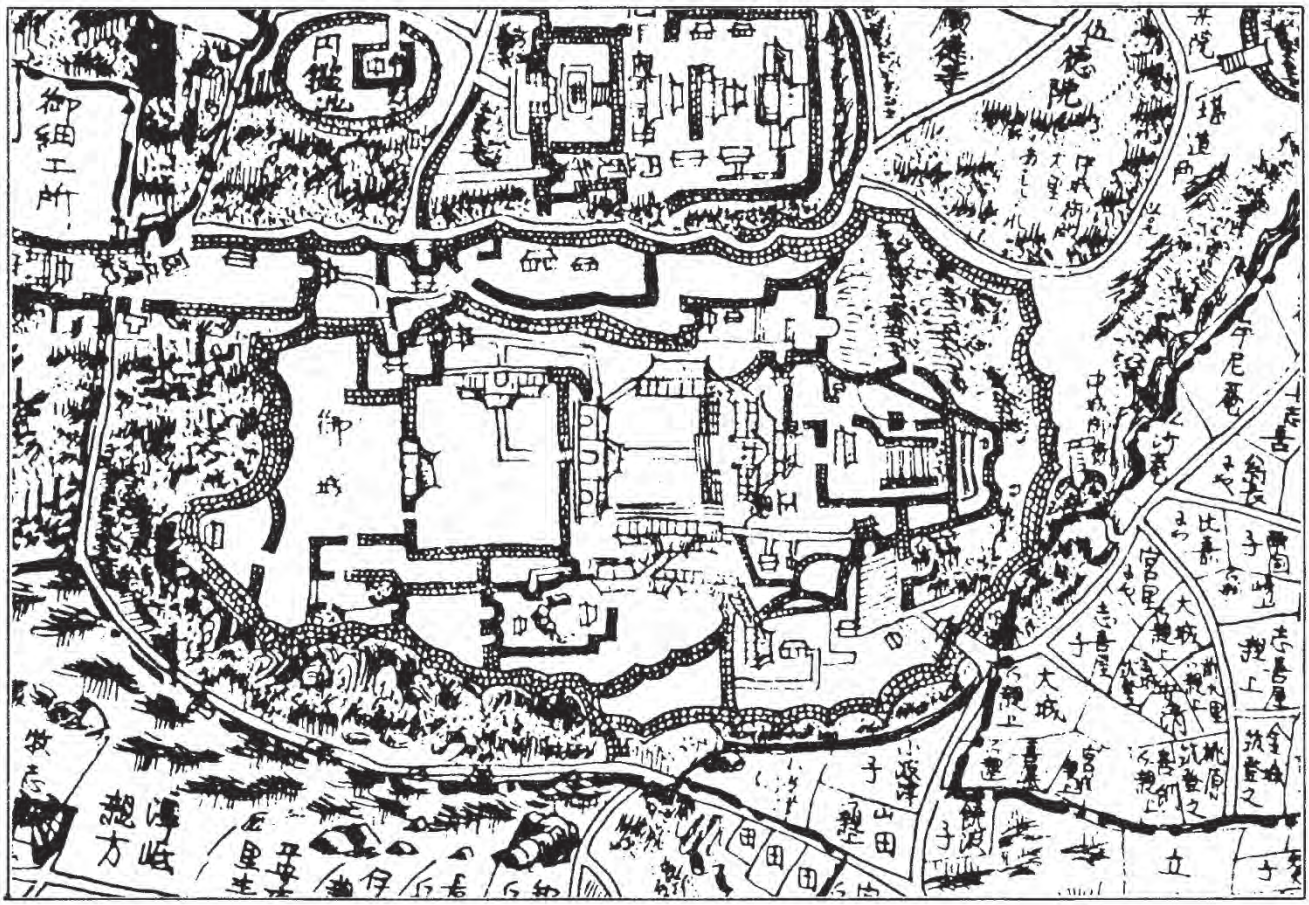
註３．沖縄県立埋蔵文化財センター 調査報告書 第 73 集･第 89 集 『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅴ)･(Ⅵ)－平成６年度調査の遺物編(２)･(３)』平成 26（2014）･平成 29（2017）年３月。

註４．沖縄県立埋蔵文化財センター 調査報告書 第 47 集 『首里城跡－下之御庭首里森御嶽地区発掘調査報告書－』平成 20（2008）年３月。

参考文献

１．金城亀信 首里城「京の内」跡の発掘調査概要 重要文化財指定記念 特別企画展『首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 年３月。

２．金城亀信 「首里城京の内跡検出遺構について－平成６年度の遺構を中心に－」第 50 回文化講座『聖域へのアプローチ～考古学から何が見えてきたのか～』 沖縄県立埋蔵文化財センター 平成 24 年２月 13 日。



第3図 『首里古地図』（1700 年）

「琉球国絵図資料集第三集付録」1994 年より複写：原図は沖縄県立図書館所蔵

石敷き・塼敷き（ＳＳ）

石敷きは細粒砂岩製（俗称・ニービヌフニ）と琉球石灰岩製の二種類が存在し、板状に薄く仕上げたものである。主に細粒砂岩製のものが主流であった。石敷きの方向は東西方向に途切れながら検出されている。これは後代の造成で一連の遺構が破壊されたためである。塼敷きとしたものは塼が敷かれた状態で検出されたのではなく、塼敷きが破壊されたままの状態で検出されたものである。

石敷きの細粒砂岩製のものは建物の縁石や礎石を伴うものであり、建物に付属する取り付けの回廊・踊り場などの施設であったものとして推察されるところである。石灰岩製の石敷きは側溝の底板であった。

石敷きの細粒砂岩製のものは５基（ＳＳ01、ＳＳ02、ＳＳ03-Ｂ、ＳＳ04-Ａ・Ｂ）が存在し、小規模な構築物を囲む回廊様の遺構とみられ、当該遺構は切り合っている事から新旧、二時期が存在するようである。石敷きの石灰岩製のものは１基（ＳＳ03-Ａ）のみであったが、後述する首里第一尋常高等小学校の排水溝と関係し、一連のものとみられる。塼敷きは１基（ＳＳ05）のみで、戦災やその後の造成で破壊された状態で検出されている。以上の６基を石敷き・塼敷き（ＳＳ）とした。

土壙（ＳＫ）

人為的な堀り込みや自然地形の部分的な落ち込み及び石囲いなどを総称して土壙とした。土壙は北西側に集中する傾向が窺え、検出直後に他の遺構と同レベルで確認されたもの、掘り下げの途中から確認されたもの、完掘後に確認されたものの３種類があった。これらの土壙は３基（ＳＫ01～ＳＫ03）が確認されている。石積みＳＡ19・石積みＳＡ28 は完掘後に最終段階で倉庫内部に下る階段と階段の縁石となり、石積みＳＡ20 が倉庫の西側壁石積みであることが判明し、ＳＫ01 と名称を付けたものもある。

ＳＫ02 は岩盤の窪みなどを利用し、造成土（遺物包含層を二次的に使用）で埋め戻されたものである。造成土（ＳＫ02）直上にＳＡ15、ＳＡ31 の石積みがなされている。

ＳＫ03 はＳＡ24 の石積みと同レベルで検出されたものであるが、ＳＡ24 の西側を一帯の窪地を埋めた造成土（遺物包含層を埋土に用いる）である。ＳＫ03 を発掘した結果、ＳＡ24 の外面の石積みが検出された。以上の３基を土壙（ＳＫ）として処理した。その他、ＳＫ03 と同時期の土砂が北西側にもある程度の広がりを持って分布していたことなどから“ＳＫ03 の延長（旧名称：ＳＫ04）”として取り扱った。

溝（ＳＤ）

建物や石積みに付属する溝と最終的に便所跡となったものなどをＳＤと記号で表記した。建物に付属する排水溝で東西方向に延びるものは３基（ＳＤ06-Ａ・Ｂ、ＳＤ07-Ａ）が存在する。南北方向に延びるものも３基（ＳＤ04-Ａ、ＳＤ05、ＳＤ07-Ｂ）が確認された。他に岩盤を溝状に掘り込んだ琉大の建物基礎（布掘り基礎跡）２基（ＳＤ01、ＳＤ02）や近代～現代の便所跡２基（ＳＤ03、ＳＤ04-Ｂ）が存在していた。以上の 10 基を溝とした。

建物（ＳＢ）

首里第一尋常高等小学校の頃の便所跡に伴う施設（基礎石、縁石、踊り場など）がセットで検出されたものを建物とした。１基（ＳＢ01）のみであった。ＳＢ01 の建物の中にはＳＤ04-Ｂの便所跡が伴っている。

石列（ＳＲ）

擁壁跡の裏込目石や建物の縁石が列状に検出されたものを石列とした。擁壁の裏込目石は北東隅から南北方向に弧状に曲がりながら延びていたものであり、１基（ＳＲ01）が確認されている。建物の縁石は石敷き遺構（ＳＳ01、ＳＳ02、ＳＳ03-Ｂ、ＳＳ04-Ａ・Ｂ）の東南隅から検出された。京の内跡発掘調査報告書（Ｉ）で、東西方向に延びたものが１基（ＳＲ02）と報告したが検討の結果、前述した石敷き遺構（ＳＳ01 ほか３基）と関連する一連のものと判断されたことから当該遺構はＳＲ01 の１基となった。

以上の 58 基の遺構は一連のものもあるが個別の機能を尊重した為、重複するものなども含まれている。大雑把に大別すると以下のａ～ｄまでの４種類に分類と整理ができるようである。

a.　石積み（31 基）

イ．切り石積み（ＳＡ03、ＳＡ04、ＳＡ05-Ｂ内・外面、ＳＡ06～ＳＡ08、ＳＡ10～ＳＡ15、ＳＡ17、

ＳＡ18-Ａ・Ｂ、ＳＡ19、ＳＡ20、ＳＡ25-Ａ・Ｂ、ＳＡ27、ＳＡ30～ＳＡ35）･･･27 基。

ロ．野面石積み（ＳＡ24）･･･１基。

ハ．排水施設を伴う切り石積みと関連する遺構（ＳＤ04-Ａ、ＳＤ06-Ａ）･･･２基。

ニ．拝所の一部となる切り石積みと関連する遺構（ＳＡ25-Ａ・Ｂ）･･･２基。

b.　**建物および付属遺構**（９棟）

イ．基壇を有する建物の面石（ＳＡ01・ＳＡ01 背面）･･･１棟。

ロ．排水溝や階段に取り付けられた建物２棟。１棟目（ＳＡ09、ＳＤ05）、２棟目（ＳＡ26、ＳＤ07-Ｂ、ＳＤ06-Ｂ、ＳＡ16、ＳＡ22、ＳＤ07-Ａ、ＳＳ03-Ａ）･･･２棟。

ハ．便所を伴う建物遺構は３棟が存在する。１棟目（ＳＡ02、ＳＤ03）、２棟目（ＳＤ03、ＳＤ03 関連施設）、３棟目（ＳＢ01、ＳＤ04-Ｂ）･･･３棟。

ニ. 石敷き・縁石・礎石を伴う遺構（ＳＳ01、ＳＳ02、ＳＳ03-Ｂ、ＳＳ04-Ａ・Ｂ）･･･２棟。

ホ．倉庫遺構（取り付け階段や階段の縁石を含む）（ＳＡ19・ＳＡ20、ＳＡ28）･･･１棟。

c.　**土壙**（３基）

イ．倉庫遺構と重複するＳＫ01（ＳＡ19、ＳＡ20、ＳＡ28）･･･１基。

ロ．土壙直上に遺構が存在するＳＫ02（ＳＡ15、ＳＡ31）･･･１基。

ハ．石積みを埋めたＳＫ03（ＳＡ24）･･･１基。

d.　**その他**（６基）

イ．塼敷き遺構（ＳＳ05）･･･１基。

ロ．石積みの裏込目石の集石遺構（ＳＡ21、ＳＡ23）･･･２基。

ハ．擁壁の裏込目石の集石遺構（ＳＲ01）･･･１基。

ニ．建物の基礎（布掘り基礎）跡。溝（ＳＤ01、ＳＤ02）･･･２基。

以上のように大別すると 49 基が遺構として整理ができる。

次に切り石積みの外面と内面の対応関係について第２表で整理した場合、上記ａ.イの切り石積み 27 基の内、倉庫跡の石積みＳＡ19･20 の２基、琉大の石積みＳＡ03 の１基の合計３基を除外して、新たに確認されたＳＡ05-Ｂ（内・外面）の２基を追加すると 26 基となるが、切り石積みの対比・相関関係について検討したところ第２表のような結果が得られた。

第2表　切り石積み（区画石積み･御嶽）の外面と内面の関係

南北軸方向			東西軸方向		
NO.	外面（外側）	内面（内側）	NO.	外面（外側）	内面（内側）
①	SD04-AとSA32か	SA18-A	①	SA04	未確認
②	SA07	SA12	②	SA05-A（外面）	SA05-A（内面）
③	既に破壊され消失	SA11	③	SA05-B（外面）	SA05-B（内面）
④	既に破壊され消失	SA13	④	SA06	SA10か
⑤	SA15（西側）	SA15（東側）	⑤	SA08	SA10か
⑥	消失	SA25-B（御嶽）	⑥	SA14	既に破壊か。SA21・23か
⑦	SA30	未確認	⑦	SA21（既に破壊か）	SA33
⑧	未検出	SA31	⑧	SA17・SA18-B・SA25-A（御嶽）	既に破壊
⑨	既に破壊され消失	SA32	⑨	SA27	未確認
⑩	既に消失	SA34	⑩	SA31	未確認
			⑪	SA35	既に破壊
合計　10基			合計　11基		

Ｂ．各時期別の遺構

発掘調査時点で出土した陶磁器を基本に各時期別に遺構に時間軸を設けて整理すると、第Ⅰ期～第Ⅵ期（第４図）までの６時期に大別されるようであるが各遺構のトレンチ内から出土した陶磁器類を主とする遺物の整理が終了しないと正式な時期を絞り込むことができないので暫定なものとして考慮されたい（第４図）。

イ．第Ⅰ期（14 世紀前半～14 世紀後半）‥‥（『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－平成６年度調査の遺物編（１）』平成 24 年３月刊行・収録の第７図参照。）

ロ．第Ⅱ期（14 世紀終末～15 世紀前半）‥‥（『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－平成６年度調査の遺物編（１）』平成 24 年３月刊行・収録の第 38 図参照。）

ハ．第Ⅲ期（15 世紀中頃）‥‥‥‥‥‥‥‥（『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－平成６年度調査の遺物編（１）』平成 24 年３月刊行・収録の第 69 図参照。）

ニ．第Ⅳ期（15 世紀後半～16 世紀初頭）‥‥（『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅴ）－平成６年度調査の遺物編（２）』平成 26 年３月刊行・収録の第４図参照。）

ホ．第Ⅴ期（16 世紀前半～19 世紀後半）‥‥（『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅵ）－平成６年度調査の遺物編（３）』平成 29 年３月刊行・収録の第４図参照。）

ヘ．第Ⅵ期（19 世紀終末～昭和 58 年）　‥‥（第５図）

a．同期前半（19 世紀終末～昭和 20 年）‥（第６図）

b．同期後半（昭和 24 年～昭和 58 年）

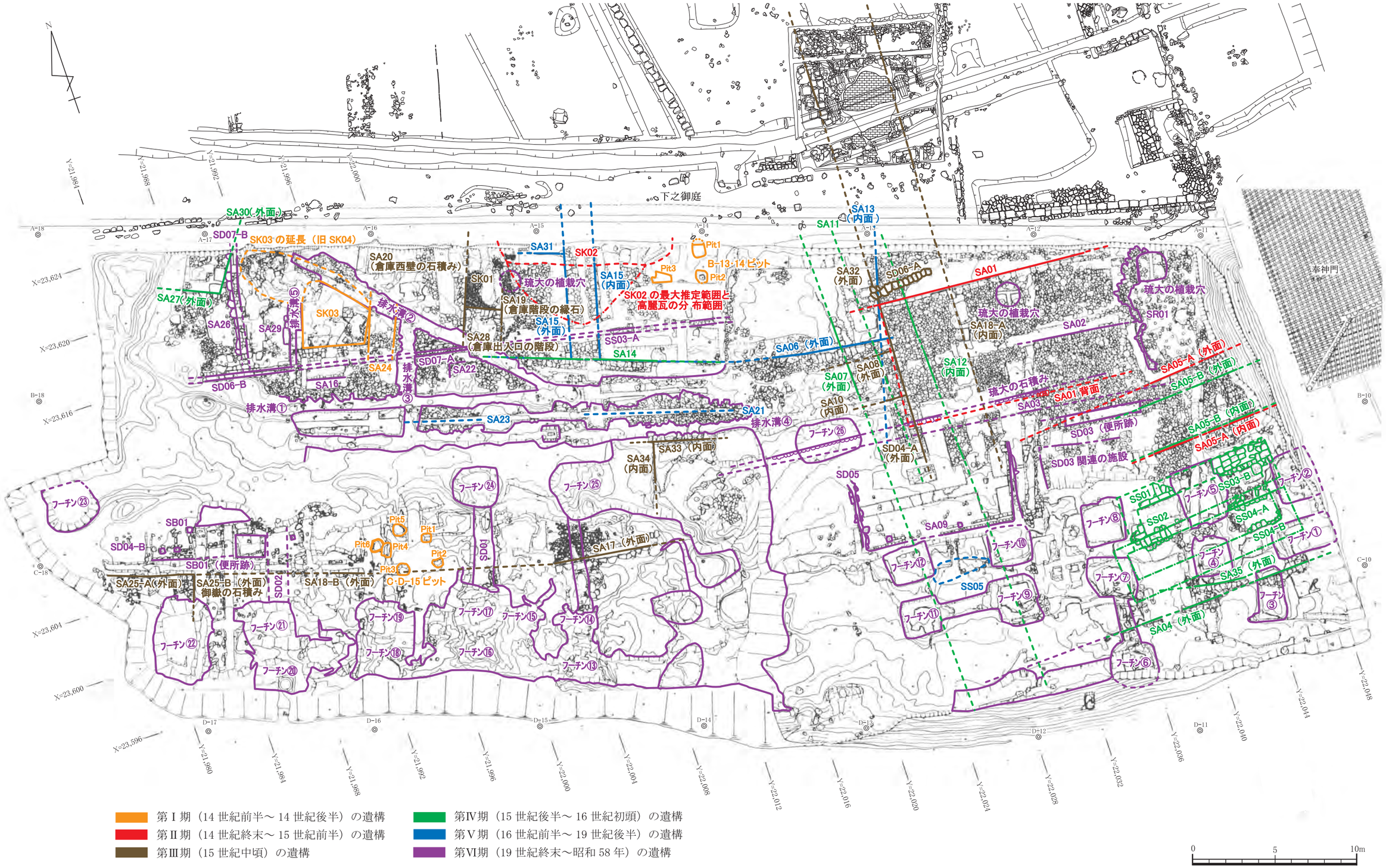
第3表　平成6年度　京の内地区検出遺構と遺構の時期（◎の遺構で撹乱層や客土出土の遺物は第Ⅵ期前半で報告）

第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）	第Ⅱ期（14世紀終末～15世紀前半）	第Ⅲ期（15世紀中頃）	第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）	第Ⅴ期（16世紀前半～19世紀後半）	第Ⅵ期前半（19世紀終末～昭和20年）	第Ⅵ期後半（昭和24年～昭和58年）
◎SA24	SA01	SA08、SA10	SA04、SA35	SA06	SA26、SD07-B	SA03
◎SK03	SA05-A	SA17	SA05-B	SA13	SA29、排水溝⑤	排水溝①～④
SK03の延長（旧SK04）	◎SK02	SA18-B	SA07、SA11、SA12	SA15	SA16、SD06-B	SD01、SD02、SR01
B-13・14ﾋﾟｯﾄ		SA25-A、SA25-B	SA14	SA21、SA23	SA22、SD07-A	フーチン
C・D-15ﾋﾟｯﾄ		SA33、SA34	SA27、SA30	SA31	SS03-A	
		SA18-A、SA32、SD04-A	SS01、SS02、SS03-B SS04-A、SS04-B	SS05	SA02	
		SD06-A		B-12・13 北側ﾄﾚﾝﾁ	SD03	
		SK01			SA09、SD05	
					SB01、SD04-B	

以下、第Ⅵ期前半までの遺構周辺に設定した試掘トレンチ及び試掘坑内と遺構に伴う出土遺物や、遺構と関連する遺物やその他に注目される遺物について報告する。

遺構検出の目的で、遺構周辺に設定した試掘トレンチ及び試掘坑から出土した遺物が直接的に遺構の時代と特定することはできないが、遺構の構築時期や造成時期を出土した陶磁器類などから相対年代として、ある程度は推定する事ができる。

首里城内の他の地区と同様に京の内地区内の遺構についても、遺構周辺に設定した試掘トレンチ及び試掘坑内からも造成層（造成土盤や埋土を含む）や撹乱層（沖縄戦の砲弾着弾及び炸裂による再堆積を含む）などが、複数枚の堆積層となって確認されている。これらの遺物を含む造成層や撹乱層から出土した遺物からも遺構の履歴（構築の時期から遺構の廃棄時期）を知る上で、貴重な遺物である事から当該層より出土した遺物も掲載した。


下之御庭
奉神門
SA30（外面）
SD07-B
SK03の延長（旧SK04）
SA20（倉庫西壁の石積み）
SA31
SK02
SK01
琉大の植栽穴
SA15（内面）
SK02の最大推定範囲と高麗瓦の分布範囲
Pit1
Pit2
Pit3
B-13-14 ピット
SA13（内面）
SA11
SA32（外面）
SD06-A
SA01
琉大の植栽穴
SR01
SA27（外面）
SA26
SA29
排水溝⑤
SK03
排水溝②
SA19（倉庫階段の縁石）
SA15（外面）
SA28（倉庫出入口の階段）
SS03-A
SA14
SA06（外面）
SA18-A（内面）
SA02
SA24
SD07-A
SA22
排水溝③
SA12（内面）
SA05-A（外面）
SA05-B（外面）
SD06-B
SA16
SA07（外面）
SA08（外面）
SA10（内面）
琉大の石積み
SA01 背面
SA03
排水溝①
SA23
SA21
排水溝④
フーチン㉖
SA05-B（内面）
SA05-A（内面）
SD03（便所跡）
SD03 関連の施設
SA33（内面）
SA34（内面）
SD04-A（外面）
SD05
フーチン㉓
フーチン㉔
フーチン㉕
SS01
SS02
SS03-B
SS04-A
SS04-B
フーチン⑤
フーチン②
フーチン①
SB01
SD04-B
Pit5
Pit6
Pit4
Pit1
Pit2
Pit3
SD01
SA17（外面）
SA09
フーチン⑧
フーチン⑩
フーチン⑫
SS05
フーチン⑦
フーチン④
SA35（外面）
フーチン③
SB01（便所跡）
SA25-A（外面）
SA25-B（外面）御厨の石積み
SD02
SA18-B（外面）
C・D-15 ピット
フーチン㉑
フーチン⑲
フーチン⑰
フーチン⑮
フーチン⑭
フーチン⑨
フーチン⑪
SA04（外面）
フーチン㉒
フーチン⑱
フーチン⑯
フーチン⑬
フーチン⑥
第Ⅰ期（14 世紀前半～ 14 世紀後半）の遺構
第Ⅱ期（14 世紀終末～ 15 世紀前半）の遺構
第Ⅲ期（15 世紀中頃）の遺構
第Ⅳ期（15 世紀後半～ 16 世紀初頭）の遺構
第Ⅴ期（16 世紀前半～ 19 世紀後半）の遺構
第Ⅵ期（19 世紀終末～昭和 58 年）の遺構
0
5
10m

第４図　遺構全体図

第Ⅵ期前半（19 世紀終末～昭和 20 年）の遺構（点描部分）
石積み SA02、SA09（建物跡）、SA16（階段）、SA22、SA26（溝の縁石）、SA29
溝 SD03（便所跡）、SD04-B、SD05、SD06-B、SD07-A、SD07-B
建物 SB01（便所跡）
石敷き SS03-A（溝の底板石）
排水溝⑤
※当該期まで存続していたとみられる石積み遺構として、SA04 が考えられる。

第Ⅵ期後半（昭和 24 年～昭和 58 年）
石積み SA03
溝 SD01、SD02(琉大の布掘り基礎跡)
石列 SR01
その他の排水溝①～④、建物基礎（フーチン）①～㉖
※フーチン①・④の南側にある③は第Ⅳ期の SA35 と若干、平行する時期の窪地で石切り場跡か。

第５図　京の内北地区第Ⅵ期（19世紀終末～昭和58年）遺構の推定復元

第Ⅵ期前半（19 世紀終末～昭和 20 年）の遺構
石積み SA02、SA09（建物跡）、SA16（階段）、SA22、SA26（溝の縁石）、SA29
溝 SD03（便所跡）、SD04-B、SD05、SD06-B、SD07-A、SD07-B
建物 SB01（便所跡）
石敷き SS03-A（溝の底板石）
排水溝⑤
※当該期まで存続していたとみられる石積み遺構として、SA04 が考えられる。

第６図　京の内北地区第Ⅵ期前半（19 世紀終末～昭和 20 年）遺構の推定復元

第Ⅲ章　遺　物

へ．第Ⅵ期（19 世紀終末～昭和 58 年）

第Ⅵ期を便宜的に前半（1879 年～1945 年）と後半（1946 年～1982 年）の二時期に分けた（註１）。遺構に伴う出土遺物についても第Ⅵ期前半（1879 年～1945 年）と第Ⅵ期後半（1946 年～1982 年）の順に記載するが、前半と後半の区切りの時期は、昭和 20（1945）年の沖縄戦で首里城が灰燼に帰した時期とした。

第Ⅵ期の遺構に伴う出土遺物を記載する前に当該期について歴史的（第４表）な流れを略記すると、第Ⅵ期前半（1879 年～1945 年）は、琉球王国の王宮としての機能を停止（首里城明け渡し）した直後の明治 12（1879）年から明治 29（1896）年までの 17 年間の時期は、「熊本鎮台沖縄分遣隊」の隊舎などに使用される。明治 26（1893）年に作成された『首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図』（註２）には、京の内北東側の区画石積み内に「器械体操場」の記載がみられる。その後、明治 45・大正元年（1912）年に京の内と下之御庭一帯に「首里尋常高等小学校」が設置され、校名の改称は大正 12（1923）年に「首里第一尋常高等小学校」、そして、昭和 16（1941）年に「首里第一国民学校」と改称し、昭和 20（1945）年の沖縄戦で消失するまでの時期である。

次に第Ⅵ期後半（1946 年～1982 年）は、首里城が灰燼に帰した昭和 20（1945）年以降で、首里城内に琉球大学が創設された昭和 25（1950）年から現在の西原町の新キャンパスへ移転を終えた昭和 57（1982）年までの 32 年間の時期（厳密に表現すると第Ⅵ期後半は、1950 年～1982 年までの時期）である。今回は、第Ⅵ期前半（1879 年～1945 年）と第Ⅵ期後半（1946 年～1982 年）の二時期の内、第Ⅵ期前半（1879 年～1945 年）の遺構出土の遺物や特徴的な遺物などの概要を記すが、当該期の遺構検出の際に設定したグリッドや試掘坑の調査（石積みＳＡ24、土壙ＳＫ02、ＳＫ03）で出土した遺物も第Ⅵ期前半７時期に含めて報告する。なお、各遺構出土の遺物の詳細については遺構毎に報告する。

a. 第Ⅵ期前半（19 世紀終末～昭和 20 年）・（第 10 図～第 54 図）

当該期の遺構である首里（第一）尋常高等小学校については、前述したように京の内と下之御庭一帯に「首里尋常高等小学校」が設置されたのが明治 45・大正元年（1912）年で、校名改称が２回あり、大正 12（1923）年に「首里第一尋常高等小学校」、昭和 16（1941）年に「首里第一国民学校」と改称されて昭和 20（1945）年の沖縄戦で消失した。戦災で消失した時期の校名は「首里第一国民学校」となる。阪谷良之進が昭和６（1931）年に作成した『首里城平面図』（以下、「阪谷図」と表記。）（註３）には「第一小学校」（巻首図版２）とのみ表示されている。昭和６（1931）年の時期であれば正式名称の「首里第一尋常高等小学校」と表示されるところを「第一小学校」と略記している。阪谷図と発掘によって検出された遺構が概ね一致する。

次に首里（第一）尋常高等小学校（以下、「首里第一小学校」と併記。）の校舎跡及び校舎周辺に所在した便所や建物について遺構のセット関係を概述する。校舎跡及び校舎に付属する階段や排水溝については第６・７図のとおり西側から東側に向かって遺構番号順に記すと、排水溝関係〔ＳＡ26（排水溝の縁石）・ＳＤ07-Ｂ（排水溝の床石）、ＳＡ29（排水溝の縁石）・排水溝⑤、ＳＳ03-Ａ（排水溝の床石）〕、校舎入口の階段及び踊り場と排水溝〔ＳＡ16（階段縁石及び踊り場）・ＳＤ06-Ｂ（排水溝の縁石及び床石）、ＳＡ22（排水溝兼階段縁石及び蓋石）・ＳＤ07-Ａ（排水溝の縁石及び床石）〕が検出されている。次に東から西に向かって便所跡〔ＳＡ02・ＳＤ03（糞尿槽）〕、建物跡〔ＳＡ09・ＳＤ05（排水溝）〕、便所跡〔ＳＢ01・ＳＤ04-Ｂ（糞尿槽）〕が確認されている。便所跡の２基については、特に東側の便所跡はＳＤ03（糞尿槽）を中心に二回程度（第７図）の建て替えが確認されている（註１）。

その他に首里第一小学校の遺構検出直後に下位にあった遺構（発掘調査の結果、三つの遺構ＳＡ24・ＳＫ03、ＳＫ02 を検出）を確認するのために便宜的にＢ-15・16 グリット内にＡ地点からＦ地点までの６地点（第８図）を設定した。また、Ｂ-13・14 グリット内から首里第一小学校の排水溝の床石（ＳＳ03-Ａ）が検出された為、

遺構周辺の発掘調査を進めていくなかでＳＫ02を検出し、その範囲はＢ-15グリットまでの広がりを確認（註１）した。これらの三つの遺構から出土した遺物については、既に平成24年３月刊行の『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－』（註４）で報告した。ここでは前述した遺構の中で遺構検出前にＢ-15・16グリット内に設定したＡ地点からＦ地点までの６地点の上位に堆積した客土（覆土を含む）や撹乱層から出土した遺物とＢ-13～15グリッドまで範囲を広げたＳＫ02の上位に堆積した客土（覆土を含む）や撹乱層から出土した遺物で当該期に所属するとみられる遺物について他の遺構出土の遺物と同様に概要を記す。なお、ＳＡ24・ＳＫ03の遺構と層序については、上位相当〔第８・９図は報告済みの遺構編（註１）の第20図を層序の整理や加筆作成した箇所の概要である。Ｂ-16 グリッドＳＫ03（東側）の層序で、客土層ａ～客土層ｅまでの５枚の層を一括して客土層とし、撹乱層１と撹乱層２については変更なしで整理。同グリッドＳＫ03（西側）東壁の撹乱１～撹乱４までの４枚の層を客土層として整理。同グリッドＳＫ03（西側）南壁・東壁・西壁の層序で第１層ａ～第１層ｃまでの３枚の層を撹乱層で整理。同グリッドＳＫ03（西側）北壁・東壁・南壁・西壁の層序で第１層を撹乱層として整理。〕の層序を細分化した。以上のように層序の再確認と整理をおこなった。

以下、当該期の遺構及びトレンチ出土の遺物で当該遺構に近似する時期の遺物及び該当する遺物などの他に特殊なものや特徴的な遺物を抽出して概要を記述する。

ＳＡ26（排水溝の縁石）及び周辺からは、当該期の遺物は出土していない。敢えてこの時期に近い資料をあてはめるとすれば沖縄産無釉陶器（第12図５）のみである。その他にＳＡ26の覆土や栗石内からは、グスク時代の土器や中国産の青磁・白磁、タイ産の褐釉陶器壷、兜鉢に取り付けられる鍬形の前立、ガラス製の小玉などが得られている。その他にＳＡ26出土の資料で注目されたのは第10図３の大和系平瓦（15世紀中頃～16世紀前半頃）の凹面に篦様工具で平仮名と漢字を併用した三文字が確認されている。三文字は「あ」と「ん」若しくは「く」の平仮名とみられる。「紀」とみられる漢字の一部が観察できるが判読はできなかった。恐らく火災の多かった首里城内の建物の屋根を葺く瓦に火災防止を目的とした祝詞を神の託宣を受けた女神官によって唱えられた呪詞（ミセセル。註５）の中から火災除けの祝詞の一文を抜き出して記したものとみられる。ミセセルで記された碑文として真珠湊之碑文（1522年）建立（註６）があり、それよりも古くなる可能性が高いものとみられる。次にＳＡ26（排水溝の縁石）と関係するＳＤ07-Ｂ（排水溝の床石）の当該期の資料、若しくは近似する時期の遺物として考えられたのが、沖縄産施釉陶器の碗や小碗、鉢（第13図３～５）の３点と第13図６の「主 神田」銘入りの硯であった。その他に中国産の青磁と白磁、ガラス製の小玉が得られている。

ＳＡ29（排水溝の縁石）及び排水溝⑤からは、当該期に近い出土品は第14図２に図示した陶質土器のみであった。その他の出土品としてグスク系土器や陶磁器類では、中国の鎬蓮弁文鉢片（第14図５）や黒釉碗（第14図６・７）、そして褐釉陶器で県内でも出土例が少ない擂鉢（第14図10）、沖縄製の刀剣の柄頭（第14図12）や青銅製の香炉片（第14図13）とみられるものなどが出土している。

ＳＡ16（階段縁石及び踊り場）及びＳＤ06-Ｂ（排水溝の縁石及び床石）からは、当該期と思慮される資料としてＳＡ16からは沖縄産の陶器（第18図２・３）と金属（アルミ）製の遊具か飾り金具（第20図４）がある。ＳＤ06-Ｂからは明治期から昭和初期の銭貨（第21図８、同図９）があり、同図８の一銭硬貨は鋳造年が昭和14年の刻銘入りであった。その他に遊具か碁石（第21図６）とみられる石製品も得られている。出土品の中で注目された資料として中国の型押蓮弁文碗（第16図１）やラマ式蓮弁文碗（同図２）（註７）がある。石器では細粒砂岩製と石灰岩製の石弾（第19図１・２）が２点出土している。武具資料として骨製の笠鞐（第18図４）と青銅製（第20図３）の２点があった。その他に小鍛治を行ったことを示す土製の羽口片（第20図６）も出土している。なお、ＳＡ16（階段縁石及び踊り場）は、後述するＢ-15・16グリット内に設定されたＡ地点からＦ地点までの６地点の内、Ｄ・Ｆ地点に該当し、Ｄ・Ｆ地点から出土した遺物は全てＳＡ16に含めて報告する。

ＳＡ22（排水溝兼階段縁石及び蓋石）及びＳＤ07-Ａ（排水溝の縁石及び床石）から当該期に該当する出土品として考えられたのは陶質土器の火炉（第22図１）のみであった。その他に注目される資料として中国華南彩

釉陶器の鸚鵡形水滴（第 24 図 11）があった。ＳＳ03-Ａ（排水溝の床石）に伴う出土品は得られていない。

ＳＡ02 及びＳＤ03（糞尿槽）より当該期に該当、若しくは近似する時期の出土品として考えられたのはＳＡ02 では、陶質土器（第 25 図２）、本土産陶磁器（第 27 図１・２）、沖縄産陶器（第 27 図３～６）、遊具として利用された円盤状製品（第 27 図７～９）であった。ＳＤ03（糞尿槽）では、陶質土器（第 30 図１）、塼瓦（第 31 図３～５）、煉瓦（第 31 図６）、本土産磁器（第 34 図１・２）、沖縄産陶器（第 34 図３～６）、硯（第 35 図２）、鉄製鎹（第 35 図３）、学生服のボタン（第 35 図４）、銭貨として大正 10 年の刻銘入り五銭（第 35 図７）、そして図版 26 の１～10 迄に呈示したガラス製の薬瓶や目薬の容器、お弾き、ビー玉が該当するようである。

ＳＡ09 及びＳＤ05（排水溝）の出土品で、当該期に該当或いは近似する時期の出土品として本土産磁器（第 36 図７）、沖縄産陶器（第 36 図８）、骨製歯ブラシ（第 36 図 10）がある。その他に注目される資料として、第 36 図 11 北宋銭の「元符通寶（1098 年初鋳造）」の方穿内に４箇所「ｖ」字状に抉りを入れて花弁状の孔を造るもので、類似の孔は「大暦元寶（唐：769 年初鋳造）」や「淳熙元寶（南宋：1174 年初鋳造）」、及び「紹熙元寶（南宋：1190 年初鋳造）」（註８）などにみられる。ＳＤ05 から当該期に近似する資料として沖縄産施釉陶器の急須底部片（第 37 図２）のみが得られている。

ＳＢ01 及びＳＤ04-Ｂ（糞尿槽）から当該期に該当若しくは近似する時期の出土品として、屋瓦の本土産近代瓦（第 38 図２～４）、沖縄産の島瓦（第 38 図５）、本土産磁器（第 39 図 10）、小鳥の水入れか餌入れ（第 39 図 11）、硯（第 40 図１）、調度品などの金具（同図４）や柱などの接続金具（同図５）などが確認できた。その中でも第 39 図 10 の本土産磁器の茶碗の外底面には朱色で「菊水硬質陶磁器」・「Kikusui」、「半菊文と波文」の印判がみられることから昭和初期の統制陶器であることが判る。ＳＤ04-Ｂからは当該期の出土品として本土産の近代瓦（第 41 図１）が得られている。その他に注目される資料として中国の元青花如意頭牡丹唐草文稜花盤の胴部片（第 42 図４）がある。類例は首里城二階殿跡（註９）から出土しているが二階殿資料と比較した場合、本品は小振りの盤であった。

次にＢ-15・16 グリット内に設定したＡ地点からＦ地点までの６地点から出土した遺物の中でＤ・Ｆ地点については、前述のＳＡ16 で報告した。ここでは、Ｄ・Ｆ地点を除く、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ地点に係るＳＡ24、ＳＫ03 の上位層（客土・撹乱）から出土した当該期の遺物について記す。記載に際しては遺構名と地点名、そして出土遺物の順に当該期の遺物や特徴的な遺物などを略述する。初めにＳＡ24 のＡ・Ｂ地点からは当該期に所属するとみられるものは、図化を省略した屋瓦の大和系平瓦（第 80 表）や第 80 表に呈示した本土産・沖縄産陶器、丸釘、ガラス瓶・板ガラスが出土している。次にＳＫ03 のＣ・Ｅ地点出土の当該期の資料として、図化を試みた遊具の円盤状製品（第 44 図３）がある。その他は、第 83 表に呈示した沖縄産陶器がある。次に注目される資料として鋳型製法により青銅製の石火矢の弾が得られている。最後にＢ-13・14 グリット内のＳＳ03-Ａ（首里第一小学校の排水溝の床石）周辺で確認されたＳＫ02 からは、沖縄産陶器（第 52 図５）・骨製ハブラシ（第 53 図４）・遊具の円盤状製品（第 54 図１・２）などが当該期の資料とみられる。注目されるその他の資料として、白磁口禿碗（第 48 図１）やベトナム青花の小壷（第 52 図１）などの他に備前焼の擂鉢（第 52 図３・４）が出土している。

註文献

註１．『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）平成６年度調査の遺構編－』沖縄県立埋蔵文化財センター平成 23 年３月。
註２．『首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図』（1703 年～1707 年か）。
註３．阪谷良之進『首里城平面図』昭和６（1931）年。
註４．『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－平成６年度調査の遺物編（１）』沖縄県立埋蔵文化財センター平成 24 年３月。
註５．比嘉 実「ミセセル」『沖縄大百科事典』下巻 沖縄タイムス社　1983 年５月。
註６．糸数兼治「真珠湊碑文」『沖縄大百科事典』下巻 沖縄タイムス社　1983 年５月。
註７．金城亀信「青磁ラマ式蓮弁文碗について」『貿易陶磁研究』№20　2000 年
註８．永井 久美男『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会 1996 年６月。
註９．『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター平成 17 年３月。

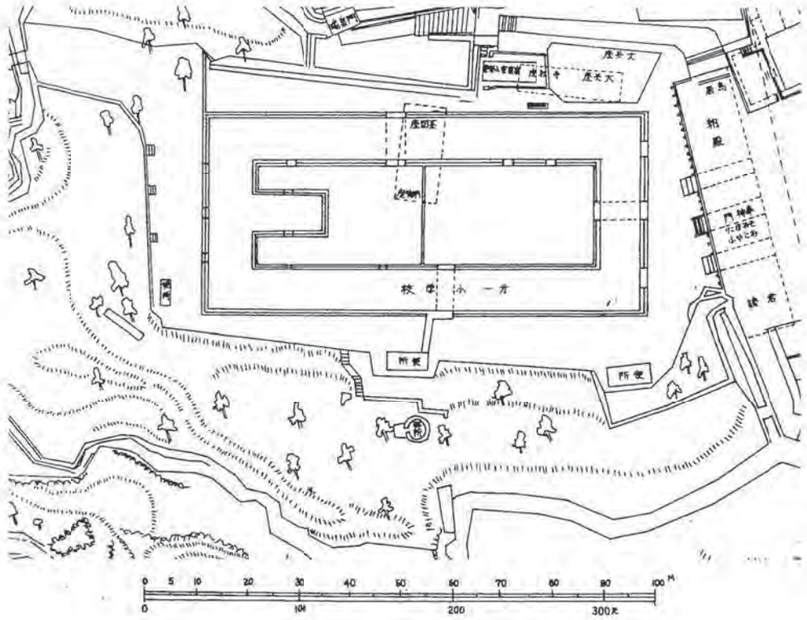
第4表　廃藩置県後の首里城及びその周辺における主要文教施設等略年表

西暦・年号・王統	事　　項
1879年 (明治12・尚泰32)	**3/31:廃藩置県**により、琉球国王尚泰、**首里城明け渡し。正殿**は、**熊本鎮台分遣隊営所**となる。
1880年(明治13)	6/21:沖縄師範学校が那覇天妃宮内に設立。12/9:国学跡(現県立芸術大学内)に首里中学校設立(翌年1月開校)。
1881年(明治14)	6/21:沖縄師範学校、沖縄県立師範学校と改称。
1886年(明治19)	1/16:沖縄県立師範学校、那覇から首里当蔵の龍潭池畔(現県立芸大内)に移転。**7/:首里の東、西、北の三校を統合して首里小学校を現在の寒川町1の3(安国寺の西側)に新設(城南小学校の前身)**。11/:沖縄県立師範学校、沖縄県尋常師範学校と改称。12/:首里中学校、沖縄尋常中学校と改称。
1887年(明治20)	3/:沖縄尋常中学校、沖縄県尋常中学校と改称(修業年限を5年改める)
1888年(明治21)	**2/:首里小学校、首里尋常小学校首里高等小学校と改称。**
1891年(明治24)	○沖縄尋常中学校、旧中城御殿跡(現首里高等学校)に移転。
1893年(明治26)	**9/20:首里尋常小学校首里高等小学校、首里高等尋常小学校と改称**(のちに**首里尋常高等小学校**となる)
1894年(明治27)	○首里高等尋常小学校、城内に分教場を置く。
1896年(明治29)	**○城内より熊本鎮台分遣隊撤退。師範学校校舎改築のため首里城内に仮移転。**
1897年(明治30)	4/:首里区立女子実業補習学校(沖縄県立女子工芸学校の前身)を首里小学校女子部内に設置。**9/13:沖縄県師範学校、再建校舎落成し首里城から移転**(県立高等女学校は師範学校から分離)
1898年(明治31)	4/:沖縄県尋常師範学校、沖縄県師範学校と改称。**首里高等小学校**で女生徒に入墨(ハジチ)を除くよう訓諭する。○師範学校付属小学校校舎改築のため首里城内に仮移転(寝廟殿を一時使用)。
1899年(明治32)	**4/:沖縄県尋常中学校、沖縄県中学校と改称。生徒数著しく増加し首里城の一部を借り受け生徒収容。**
1900年(明治33)	**6/15:首里区立工業徒弟学校、首里城内に設立。**○師範学校付属小学校校舎落成し、首里城より真和志に移転(城内の分教場廃止)。
1903年(明治36)	○陸軍省、城内建造物のみ払下げ。
1904年(明治37)	1/15:師範学校校舎失火。首里城内に校舎と宿舎を仮移転。首里区立工業徒弟学校(後、沖縄県立工業学校)首里城書院に仮移転。
1907年(明治40)	○工業徒弟学校、南殿二階に教室拡大。その後、校舎完成し首里城より移転。
1908年(明治41)	6/2:首里城の中山門、腐朽のため52円余で売却される。**10/28:沖縄県立高等女学校、首里城から真和志村大道の新校舎**に移転。
1909年(明治42)	○陸軍省、有償払下げを決定し、首里区有地となる。○首里女子実業学校(後、沖縄県立女子工芸学校)、当蔵より南殿等に移転。
1910年(明治43)	**4/1:沖縄県立中学校分校、首里城北殿に分校設置。**
1912年 (明治45:大正元)	**3/21:首里尋常高等小学校、城内の京の内、下之御庭に校舎落成移転。4/14:沖縄県立第二中学校、首里城の仮校舎から嘉手納**に移転。
1914年(大正3)	**○首里区工業徒弟学校、県に移管され県立工業徒弟学校となる。**
1918年(大正7)	**○県立工業徒弟学校、首里区立字当蔵(現県立芸術大学東側住宅地一帯)に新校舎を建設移転。**
1921年(大正10)	**1/:実業学校新令発布により県立工業徒弟学校、県立工業学校と改称。**
1923年(大正12)	**4/1:**従来の男女分離制を改めて男女共学にする(但し、本年は尋常科3年以下を実施し、順次1学年ずつ尋常科6年まで実施)そのため校名を**首里尋常高等小学校を首里第一尋常高等小学校**と改称。 首里区会で財政難のため首里城取り壊し決定。しかし、鎌倉芳太郎、伊東忠太らの尽力で保存。
1925年(大正14)	4/24:沖縄神社拝殿(首里城正殿)国宝指定。
1927年(昭和2)	8/:首里城正殿解体復元工事着工。
1931年(昭和6)頃	**○阪谷良之進作成の首里城平面図に北殿(現市公会堂)、第一小学校(首里第一尋常高等小学校の略称)が明記。**
1933年(昭和8)	5/23:首里城の歓会門・瑞泉門・白銀門・守礼門・国宝に指定。9/:首里城正殿修築工事竣工。
1934年(昭和9)	○首里女子実業学校、沖縄県立女子工芸学校と改称し桃原町に校舎移転。
1936年(昭和11)	**7/4:首里城北殿に沖縄県教育会附設郷土博物館開館**。12/:伊東忠太・鎌倉芳太郎、正殿前(北殿西側)・京の内北西側下・西のアザナ東南側下を発掘調査。
1941年(昭和16)	3/1:国民学校令公布(小学校を国民学校と改称。義務教育八年制となる。) 4/1:国民学校発足。首里第一尋常高等小学校を首里第一国民学校と改称。
1945年(昭和20)	3/27～8/2:沖縄戦(1月10日 第32軍司令部、安里から首里に移転。)首里城及び円覚寺などの国宝建造物戦災により焼失。
1946年(昭和21)	**8/14:首里城内にあった首里第一国民学校は、戦災で消失**し、**崎山区旧沖縄放送局送信所跡に城南初等学校開校、城南幼稚園開園。**
1950年(昭和25)	5/22:首里城跡に琉球大学開学。
1952年(昭和27)	2/28:琉球教育法公布。初等学校が小学校に、中等学校が中学校に改められる。城南初等学校、城南小学校に改称。

＜参考資料＞

1. 當真嗣一・上原静・大城聖子『首里城跡　歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』沖縄県文化財調査報告書 第88集 沖縄県教育委員会　1988年3月
2. 沖縄大百科事典刊行事務局「沖縄・奄美総合歴史年表」『沖縄大百科事典 別巻』沖縄タイムス社　1983年3月
3. (財)海洋博覧会記念公園管理財団『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』平成7(1995)年3月。
4. 久手堅憲夫『首里の地名－その由来と縁起－』南島文化叢書22 第一書房 2000年10月。
5. 島本巌「那覇市教育史年表」・「公文学校系統図(小学校・中学校)」終章『那覇市教育史 通史編』那覇市教育委員会 2002年3月。

第７図　首里城平面図（昭和６年頃）と京の内跡検出遺構との重ね図



首里城平面図（昭和６年頃）阪谷良之進 原図

首里第一尋常高等小学校・
首里第一国民学校東側便所の位置変遷①

第Ⅰ期：首里第一尋常高等小学校移転開校期
（明治45･大正元年～昭和16年）、若しくは首里第一国民学校期（昭和16年4月1日～昭和20年3月18日）の便所

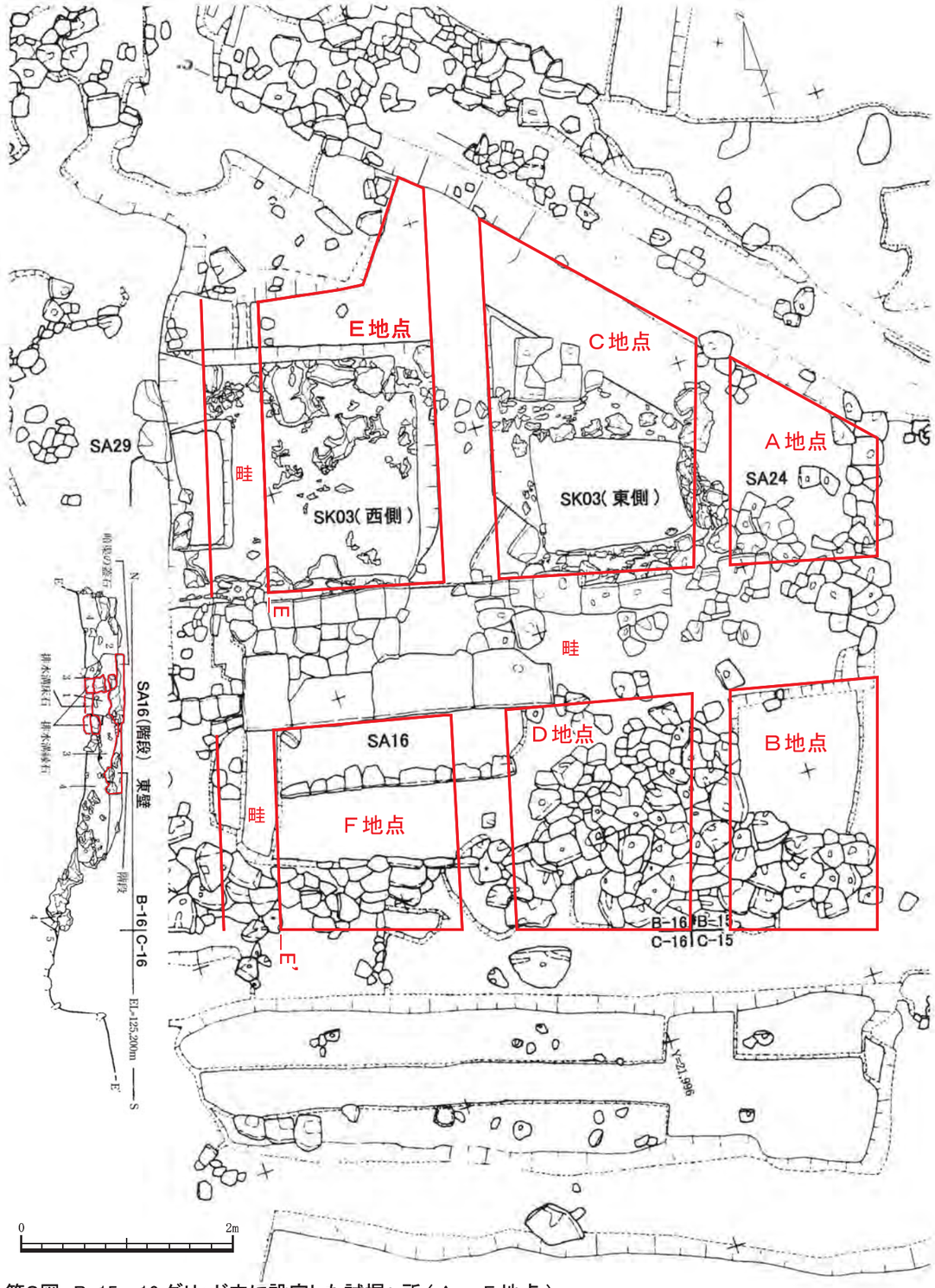
※Ⅰ期：紫枠

首里第一尋常高等小学校・
首里第一国民学校東側便所の位置変遷②

第ⅡA期：首里第一尋常高等小学校
（明治45･大正元年～昭和6年以前）頃の便所

第ⅡB期：首里第一尋常高等小学校（昭和6年頃）
に製作された『首里城平面図』にみえる便所

※ⅡA期：赤枠、ⅡB期：青枠



第8図 B-15・16グリッド内に設定した試掘ヶ所（Ａ～Ｆ地点）

C地点

B-16 SK03(東側) 北壁

C地点

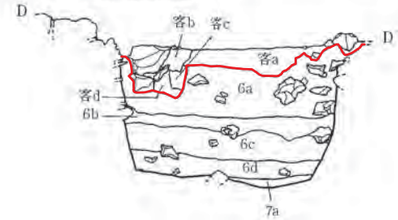
B-16 SK03(東側) 東壁

C地点

B-16 SK03(東側) 南壁

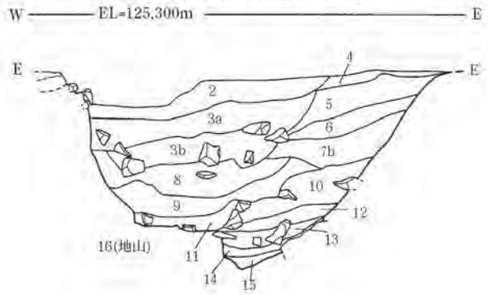
C地点

B-16 SK03(東側) 西壁



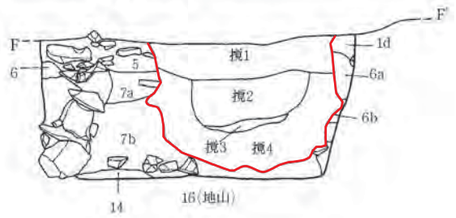
E地点

B-16 SK03(西側) 北壁



E地点

B-16 SK03(西側) 東壁

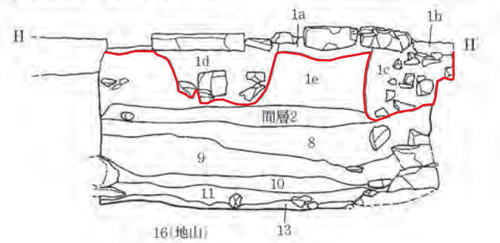


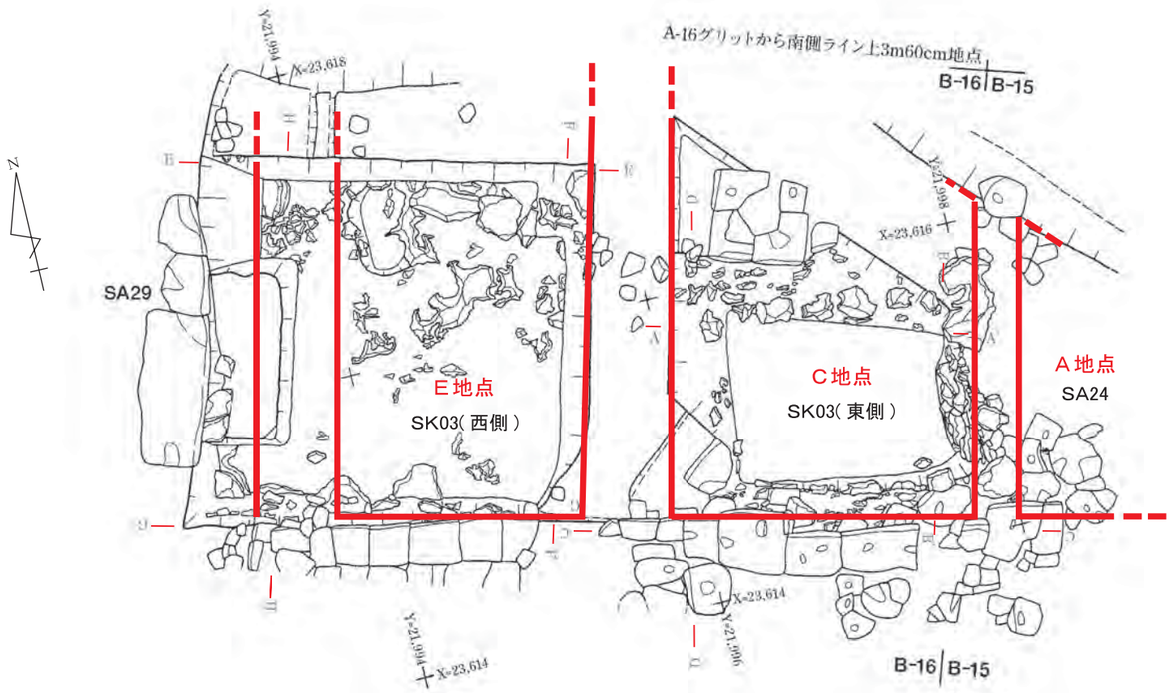
E地点

B-16 SK03(西側) 南壁

E地点

B-16 SK03(西側) 西壁





第９図　土壙 SK03　平面と層序

B-16 SK03(東側)の層序

客土層a…　淡灰色土層。昭和6年頃の首里第一小学校校舎の基礎、若しくは琉球大学の外壁の基礎土盤。「客a」で表記。シルト質泥岩の風化土壌。(俗称：クチャ。以下「クチャ」も併記)。

客土
- 客土層b…　黄褐色土層(地山)。「客b」で表記。
- 客土層c…　灰褐色土層。シルト質泥岩の風化土に若干、地山の黄褐色土が混入。「客c」で表記。
- 客土層d…　淡灰色砂層。シルト質泥岩の風化土に砂が混入。「客d」で表記。
- 客土層e…　暗茶色混土礫層。(昭和6年頃の首里第一小学校校舎造成土)。「客e」で表記。

攪乱 1・2
- 攪乱層1…　淡灰色土層。シルト質泥岩の風化土に赤土が混入。「攪1」で表記。
- 攪乱層2…　黒褐色混土礫層。「攪2」で表記。

第6層a…　暗褐色土層。遺物包含層。
第6層b…　淡褐色土層。　〃　。赤土の混入が少ない。
第6層c…　黒褐色土層。　〃　。
第6層d…　暗褐色土層。　〃　。
第7層a…　黄灰色土層。クチャが混入する。
第7層b…　灰褐色土層。第7層aより土色の色合いが薄くなる。遺物包含層。
第8層a…　黄褐色混礫土層。15～20cm前後の石灰岩が混入する。
第8層b…　灰褐色土層。第7層bよりもさらに色合いが薄くなる。
第8層c…　黄褐色混礫土層。地山の黄褐色土が混入する。遺物が若干混入する。
第9層…　黄褐色土層。地山。

0　2m

B-16 SK03(西側)　東壁

客土
- 撹乱1… 客土。淡灰色土層(シルト質泥岩の風化土。俗称クチャ)。「撹1」で表記。
- 撹乱2… 客土。黄灰色土層(　　〃　　。　〃　　)。「撹2」で表記。
- 撹乱3… 客土。灰褐色土層(炭が混入。シルト質泥岩の風化土。俗称クチャ)。「撹3」で表記。
- 撹乱4… 客土。濃灰色土層(シルト質泥岩の風化土。俗称クチャ)。「撹4」で表記。

琉球大学時代の撹乱(1950～1982年)

B-16 SK03(西側)　南壁・東壁・西壁

撹乱層
- 第1層a… 灰黄色土層(昭和6年頃の首里第一小学校校舎造成土。以下「造成土」)。
- 第1層b… 淡黄色土層(第3層a・第3層b)が混ざった撹乱層。造成土。
- 第1層c… 暗褐色混礫土層(第4層)がブロック状に混ざった撹乱層。造成土。

第1層d… 暗茶色混土礫層(造成土)。
第1層e… 暗褐色土層
間層1… 灰黒色土層(細かい赤土ブロックが微量混入)。
間層2… 黒褐色土層。SK03(西側)の西壁と類似の層。
間層3… 黄灰色土層(赤土の粗いブロックが多量に混入。暗褐色土が混入)。

B-16 SK03(西側)　北壁・東壁・南壁・西壁

撹乱層
- 第1層… 南壁と西壁を参照。

第2層… 灰黒色土層。3～5㎜程度の赤土の塊と炭が僅かに混入。3㎝前後の琉球石灰岩。小礫が少量混入。
第3層a… 黄黒色土層。5㎝前後の赤土とシルト質泥岩の風化土(俗称:クチャ)の塊が少量混入。
第3層b… 黒褐色土層。第3層aよりも土色に黒味を増す。5㎜前後の赤土の塊が僅かに混入するが,8～13㎝程度の琉球石灰岩礫が混入する。石灰岩以外に細片化した細粒砂岩や炭が混入する。
第4層… 黄褐色土層。表層近くにある為、表層の灰褐色土層と混ざる。0.2～10㎝大の赤土のブロックが混入。他に炭が少量混入する。
第5層… 灰褐色土層。炭が多量に混入する。他に5㎜～10㎜大の赤土が少量混入する。
第6層… 黒褐色土層。第3層bと土色が近似する。第5層よりも土色が濃い色合となる。5～10㎜大の赤土が僅かに混入。
第7層a… 暗褐色混礫土層。東壁にのみ部分的に堆積した間層。
第7層b… 暗褐色土層。5～10㎜大の赤土が多くなり、炭も多く含まれる。
第8層… 淡灰黒色土層。3㎝前後の石灰岩の小礫や二枚貝(マルスダレガイ科アラスジケマンガイ)、炭などが混入する。部分的に北壁では10～50㎜大の赤土の塊が入っている。
第9層… 灰黒色土層。第2層と同系色の色合で、5㎜前後の赤土の塊とクチャの塊が僅かに混入。
第10層… 灰褐色土層。人頭大の石灰岩礫が部分的に混入する。
第11層… 淡灰色土層。3～10㎜程度の赤土の塊が多量に混入し、炭が多く含まれている。その他に10㎝前後の石灰岩礫が混入する。
第12層… 暗褐色土層。地山(第15層)が混ざっている。
第13層… 黄褐色土層。粘性の強い土質。2㎜前後の赤土の塊が混入し、炭も含まれる。
第14層… 灰褐色土層。5～8㎝大の赤土の塊が混入する。土質は第13層よりもさらに粒質が高まる。
第15層… 灰黄色土層。(地山の赤褐色土と俗称クチャが混入)。
第16層… 赤褐色土層。地山。

第5表　第Ⅵ期前半　出土遺物状況

遺物名＼出土地		SA26	SD07-B	SA29・排水溝⑤	SA16	SD06-B	SA22	SD07-A	SS03-A	SA02	SD03	SA09	SD05	SB01・SD04-B	B-15・16 SA24	B-16 SK03	B-14・15 SK02	合計	割合
沖縄産	土器	6	12	30	51	4	3			5	3	1		2	3	5	10	135	1.57%
	陶質土器		1	1			1			10	3	1		2		1	2	22	0.26%
	瓦質土器	11	4	1	13		5	1		4	4			1	2		7	53	0.62%
屋瓦		113	109	31	487	97	61	276		68	1082	13	13	1202	90	44	513	4199	48.83%
沖縄産	塼瓦(煉瓦も含む)	3	4	1	10	3		7		11	57	10	1	18		1	10	136	1.58%
	漆喰			1							7	38						46	0.53%
	焼土		1	1							1			4				7	0.08%
中国産	青磁	47	11	20	57	2	7	29		35	22	7	2	35	19	15	83	391	4.55%
	青白磁							1										1	0.01%
	白磁	4	6	4	9	2		2		1	3	1		2	2		7	43	0.50%
	青花	1		3	4		4	3		6	1	4		5	1	3	18	53	0.62%
	彩釉陶器	1						3		3	2	3	8	3	1		1	25	0.29%
	瑠璃釉									1								1	0.01%
	黒釉陶器			4	5	1		1		4		1		1	1	6	3	27	0.31%
	宜興窯系、無釉陶器									1								1	0.01%
	中国産褐釉陶器	189	32	27	185	20	21	51		146	70	24	11	247	33	26	382	1464	17.02%
タイ産・ベトナム産	タイ産土器(半練)			1	2		1			1							7	12	0.14%
	タイ産炻器							1									5	6	0.07%
	タイ産褐釉陶器	56	4	8	52	5	7	6		27	30	6		114	11	4	106	436	5.07%
	タイ産陶器																4	4	0.05%
	ベトナム産青花																1	1	0.01%
産地不明	白磁																1	1	0.01%
本土産	カムィヤキ須恵器							1							1			2	0.02%
	中世陶器				1													1	0.01%
	本土産磁器			1	2	1				9	10	4	3	11		1	3	45	0.52%
	本土産陶器			1	1					1	1	1		2	2	1	7	17	0.20%
沖縄産	沖縄産施釉陶器	2	5		7					11	6	5	3	9	1	1	6	56	0.65%
	沖縄産無釉陶器	4		3	9	5	7	19		15	16	2		8	4	6	30	128	1.49%
貝製品												1					3	4	0.05%
骨製品					1						1	1					1	4	0.05%
石器・石製品			2	1	4	2	2	1		3	1	1	1	2	1	2	4	27	0.31%
石材・自然石		11	3	4	26	6	2	3		9	12			12	17	1	34	140	1.63%
円盤状製品					1					4						1	8	14	0.16%
金属製品(砲弾・銃弾破片も含む)		8	18	10	100	5	12	12		96	26	29	5	65	35	9	91	521	6.06%
銭貨		2		1	2	2	1	2		59	2	3		2	2	1	17	96	1.12%
鍛冶関連				1	1											1	1	4	0.05%
ガラス玉		2	1	1		1	1							1	2		2	11	0.13%
ガラス製品		4	8	20	38	8	9	13		1	26	4		24	16	1	5	177	2.06%
文字入り紙片			17															17	0.20%
紙片			261															261	3.03%
木片				1														1	0.01%
近・現代(プラスチック・銅線等)			1	1	2					1	5							10	0.12%
炭化下敷き			0.8g															0.8g	—
合計		464	500	178	1070	164	144	432	0	532	1391	160	47	1772	244	130	1372	8600	100%
割合		5.40%	5.81%	2.07%	12.44%	1.91%	1.67%	5.02%	0.00%	6.19%	16.17%	1.86%	0.55%	20.60%	2.84%	1.51%	15.95%		

a．第Ⅵ期前半（19 世紀終末～昭和 20 年）・（第 10 図～第 54 図）

（1）石積み SA26 の出土遺物（第６図・第 10～12 図、図版１～３、第６～13 表）

石積み SA26 から出土した遺物の種類は、第５表に呈示したように総計で 464 点（≒100%）が得られている。

出土遺物の内訳で最も多いのが中国産褐釉陶器の 189 点（40.7%）、次いで沖縄産屋瓦（第６表参照。高麗系、大和系古瓦、大和系、明朝系を含む）の 113 点（24.3%）、タイ産褐釉陶器 56 点（12.1%）、中国産青磁 47 点（10.1%）、瓦質土器 11 点（2.37%）など順次減少する。上記した沖縄産屋瓦は、後述する石敷き SS03-A を除く、当該遺構を含めた 17 基の遺構から満遍なく出土し量的にも他の出土品と比較して多い（第５表）。同様の出土傾向を示す遺物として、中国産褐釉陶器、金属製品、タイ産褐釉陶器があり、当該期の遺構から多く出土している。

第6表　石積みSA26　土器･瓦質土器･屋瓦出土状況

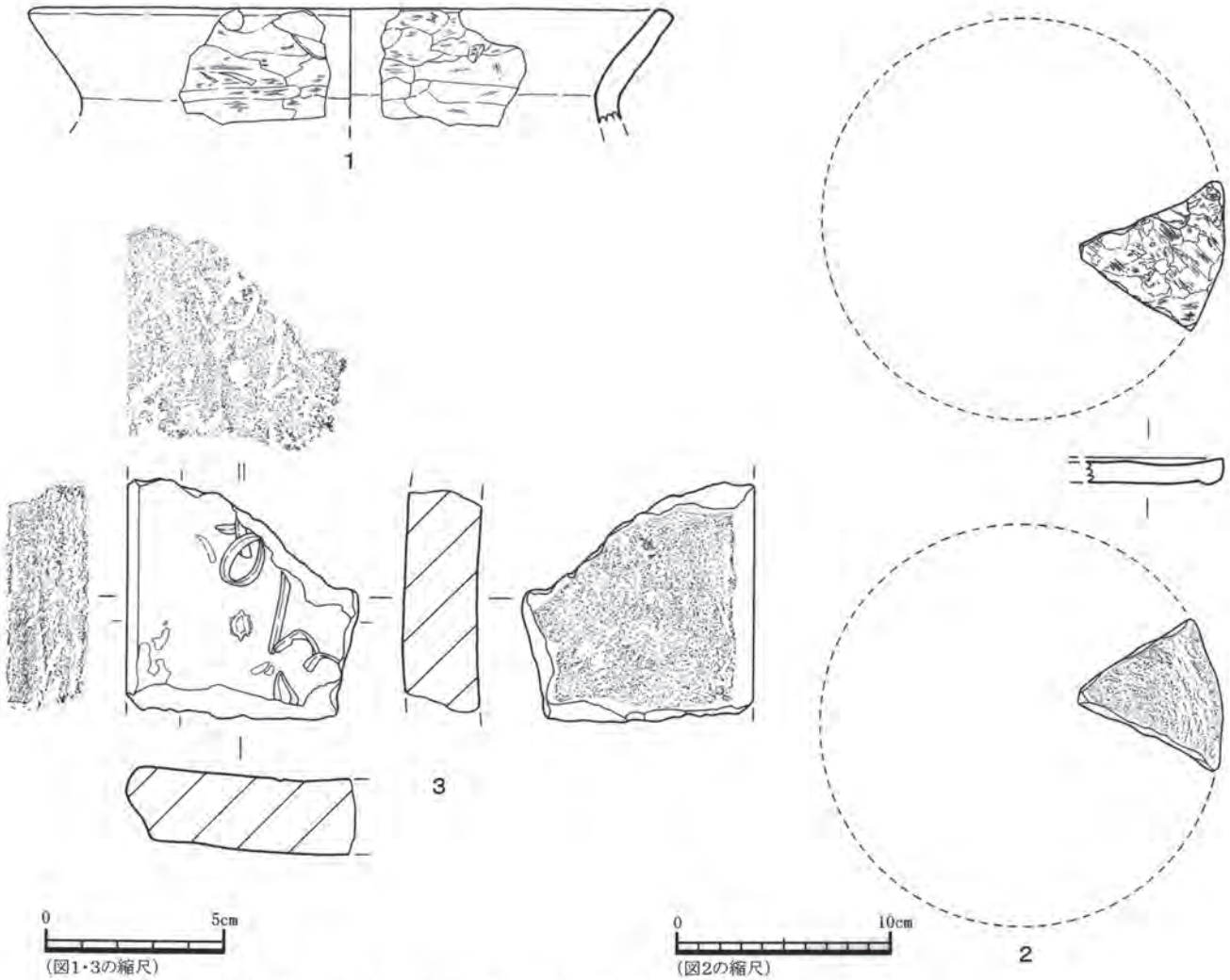
種類･器種･部位 ＼ 層序					B-16 SA26 覆土	西側覆土	栗石直上の覆土	栗石内	北側覆土(植栽穴)	合計
土器	壷			口縁部		2				2
	器種不明			胴部		1		1		2
	グスク系	壺		口縁部				1		1
		器種不明		胴部	1					1
合　計					1	3	0	2	0	6
瓦質土器	鉢			胴部		1				1
	擂鉢			胴部		1				1
	蓋			―	3	4		1		8
	器種不明			胴部		1				1
合　計					3	7	0	1	0	11
屋瓦	高麗系	丸瓦	灰色	漆喰無し				1		1
			褐色			1	1	1		3
		平瓦	灰色	漆喰無し	1	24		2		27
	大和系（古）	丸瓦	灰色	漆喰無し		4		1		5
		平瓦			1	16		4		21
	大和系	軒平	褐色	漆喰無し		1				1
		平瓦	灰色	漆喰無し	1	1				2
	明朝系	丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)					2	2
			赤色	漆喰あり(片面)		8				8
		平瓦	灰色	漆喰無し	2	4		5		11
			赤色	漆喰あり(両面)	1	1				2
				漆喰あり(片面)	12	2				14
				漆喰無し	8	8				16
合　計					26	70	1	14	2	113

第7表　石積みSA26　土器･瓦質土器･屋瓦観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称･仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地･混入物･色調･釉色等)	出土地点 出土層
第10図 図版1 1	グスク系土器	壷	口縁部	18.0 ― ―	器形:口頸部の縦断面が「く」の字状に屈曲する鉢形土器の口縁で、口唇部は平坦で雑なナデを施す。器面調整:外面は篦削りの後で口頸部に4.6㎜幅の篦で雑なナデを施し、口縁部は雑な水撫でで仕上げている。内面も篦削り後に雑なナデを加えて仕上げている。器厚:5.6～6.8㎜を測る。胎土:泥質で細かい。混入物:微細な石英や雲母を多く含み、希に1.2～2.6㎜程度のサンゴ片や粗い茶褐色の物質、そして粗い石灰質の砂粒が含まれている。色調:外面は淡橙色で、内面が橙白色を主体とするが部分的に茶白色を帯びている。焼成:堅緻。	B-16 SA26 栗石内
〃 〃 2	瓦質土器	蓋	蓋縁	直径 18.7	陶土を円盤状の型枠に入れて製作された蓋で主にタイ産大型褐釉四耳壷の蓋として利用されたものである。器面調整:外周縁面は微弱な起伏のある平坦な面となる。上面は雑で起伏の有る指ナデを施している。細かな稲藁とみられる圧痕が僅かにみられる。下面は陶土を型枠に入れた面で細片化した稲藁の圧痕がみられ、微弱な起伏のある平坦面を形成する。外周縁近くには型枠に敷かれた布皺が陶土にも反映されて皺痕(布目の皺が歪に並んだ圧痕となる)がみられる。胎土:泥質で細かい。混入物:粗細な石英を多く含む。希に茶褐色の物質を含む。色調:上面は灰橙色を主体とし、部分的に暗灰色を帯びる。下面は淡灰白色を呈する。推定復元による直径は、18.7㎝、器厚:9.4㎜を測った。焼成:良好で堅い。	B-16 SA26 栗石内
〃 〃 3	屋瓦	大和系・平瓦	―	― ― ―	文字の有る大和系平瓦の破片。凹面に最大幅2.3㎜の片切彫りの篦状工具で平仮名と漢字を併用した三文字が確認できる。三文字は「あ」、「ん」、又は「く」、漢字は「紀」の上部とみられる漢字を描くが判読や意味合いは不詳であった。器面調整:凹面と凸面は器面の保持が悪く大半が剥離する。両面とも部分的にナデがみられる。凸面の右側縁辺部に縁取りをおこなうために実施された雑な篦ナデがみられる。凹面の左側面の半分近くは鉄製の鎌などの工具による切り込み面が形成されている。この面より上半部は篦削りによる面取の実施後にナデ調整が加えられるが篦削りが消えきっていない。器厚:21㎜。胎土:泥質で粗い。混入物:石灰質の細かい砂粒(僅かに細片化したサンゴ片や貝殻片がみられる)を多く含む。希に細かい石英と粗い茶褐色や灰褐色の物質がみられる。色調:両面とも灰褐色。焼成:良好で硬い。15c中頃～16c前半頃。	B-16 SA26 西側覆土

注「―」:計測不可



第 10 図　石積み SA26 出土品①　土器：1、瓦質土器：2、屋瓦：3

第8表　石積みSA26　青磁出土状況

器種・部位 ＼ 層序				B-16 SA26 覆土	栗石内	西側覆土	合計
碗	口縁部	直口	蓮弁		2	1	3
			雷文		1	1	2
		外反	蓮弁			1	1
			無文		2	2	4
	胴部	蓮弁			1	1	2
		有文			1	1	2
		無文			2	5	7
	底部	hタイプ	有文			1	1
大碗or鉢	口縁部	直口	雷文			1	1
皿	口縁部	外反	有文			1	1
			無文		1	2	3
		直口	無文		1		1
	胴部	無文			2	1	3
	底部	印花文		1			1
		無文			1		1
盤	口縁部	鍔縁	蓮弁		1		1
			文様不明		2		2
		口折	文様不明			1	1
	胴部	無文			3		3
	底部	bタイプ	無文			1	1
酒会壷	底部	文様不明			1	1	2
大瓶	口縁部	無文				1	1
大鉢	口縁部	直口	雷文帯			1	1
香炉	口縁部	丸文				1	1
器種不明	底部(真底)	無文			1		1
合　計				1	22	24	47

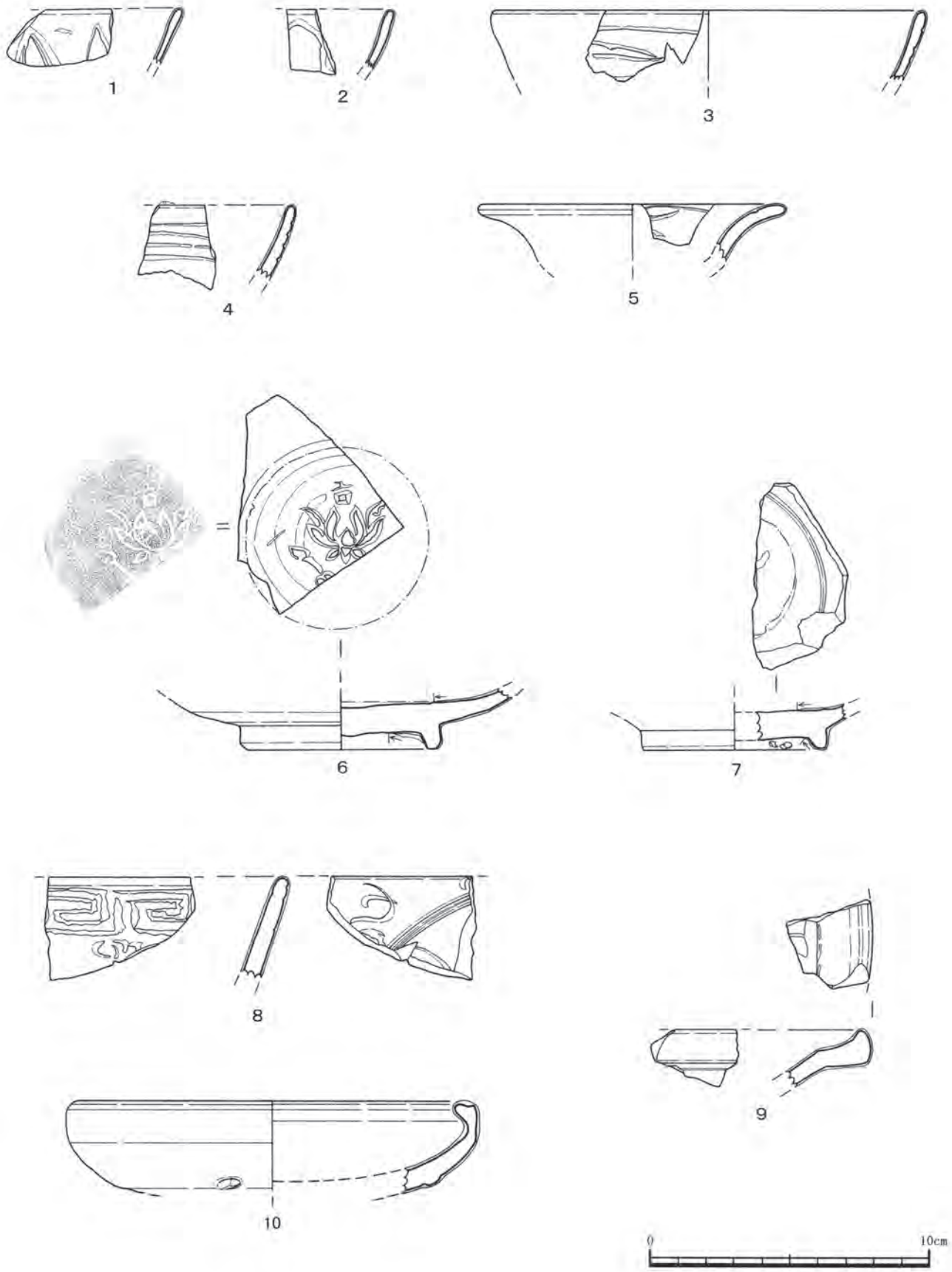
VI 期前半

第9表　石積みSA26　青磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第11図 図版2 1	蓮弁文碗	口縁部	— — —	器形：弁先が尖った蓮弁文碗の破片で、口唇部は丸味を帯びて舌状に成形する。文様：口縁部に叉状工具で弁先の尖った蓮弁を描く。素地：灰色の細粒子で、微細な黒色や白色の鉱物が劈開面から多く観察できる。釉色：灰緑色の釉が両面に施されている。貫入はない。福建系の窯。14c終末～15c前半。	B-16 SA26 西側覆土
〃 〃 2			— — —	器形：直口口縁の蓮弁文碗で、口唇部は丸味を持たせて成形する。文様：口縁部に片切彫りで弁先の尖った蓮弁を描く。素地：光沢のある灰白色の微粒子。釉色：両面に淡青緑色の釉が施されている。貫入はない。二次的な火熱を受けて内面の釉上に微細な気泡が多くみられる。龍泉窯系。14c後半～15c前半。	B-16 SA26 栗石内
〃 〃 3	雷文帯碗		15.6 — —	器形：直口口縁の碗。口唇部は丸味を持たせて成形する。文様：外面口縁に片切彫りで雷文の構図が崩れた横線様の雷文を描く。素地：淡灰白色の細粒子で、微細な黒色の鉱物が劈開面から多く観察できる。釉色：灰緑色の透明釉が両面に施されている。両面に粗い貫入がみられる。福建系の窯。14c終末～15c中頃。	B-14覆土 ＋ B-16 SA26 栗石内
〃 〃 4			— — —	器形：　〃　。　〃　。文様：　〃　。素地：光沢のある淡灰白色の細粒子で、微細な黒色の鉱物が劈開面から多く観察できる。釉色：灰緑色の透明釉が両面に施されている。両面に細かい貫入がみられる。福建系の窯。14c終末～15c中頃。	B-16 SA26 西側覆土
〃 〃 5	外反口縁皿	口縁部	11.0 — —	器形：外反口縁の小振りの浅皿。胴下部で丸味を有する。文様：内面に片切彫りで描かれた花唐草文の一部が残存する。素地：光沢のある灰白色の微粒子。釉色：明緑色の釉が両面にみられる。両面に粗い貫入がみられる。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	B-16 SA26 西側覆土
〃 〃 6	皿	底部	— — 7.2	器形：胴下部で緩やかに丸味を帯びた皿である。外底面に重ね焼きの砂胎土目の目痕が見られる。文様：内底面の釉を円盤状に掻き取って印花文を施す。花文は「牡丹唐草文」で、字款は「吉」の一字が残存する。素地：灰白色の粗粒子で、微細な黒色や白色の鉱物が多くみられる。釉色：淡灰緑色の釉を両面施釉後に外底面と内底面の釉を掻き取って露胎とする。貫入はない。福建系の窯。14c終末～15c中頃。	B-16 SA26 覆土
〃 〃 7			— — 6.6	器形：高台脇から胴下部に直線的に移行する小振りの皿。文様：内底面の釉を円盤状に掻き取って露胎とするが印花文は確認できない。陽圏線のみを施す。素地：灰白色の細粒子で、微細な白色や黒色の鉱物が少量みられる。釉色：淡黄緑色の釉を両面施釉後に外底面と内底面の釉を掻き取って露胎とする。貫入はない。福建系の窯。14c終末～15c中頃。	B-16 SA26 栗石内
〃 〃 8	大鉢	口縁部	— — —	器形：直口口縁の大鉢。口唇部は丸味を持たせて成形する。文様：外面口縁に片切彫りで雷文帯を描き、その直下に刻花文を片切彫りで描く。内面にも花文を片切彫りと櫛掻で表現する。素地：淡灰白色の微粒子。釉色：明青緑色の釉が両面に施されている。貫入はない。龍泉窯系。14c後半～15c前半。	B-16 SA26 西側覆土
〃 〃 9	鍔縁盤	口縁部	— — —	器形：鍔縁盤。口縁部の鍔端部を上方に撮み上げて成形する。文様：内面に篦彫りで蓮弁文を描いている。素地：灰色の細粒子で、微細な白色や黒色の物質が多くみられる。釉色：淡青緑色の釉が両面に施されている。微細な貫入が両面でみられる。福建系の窯。14c終末～15c。	B-16 SA26 栗石内
〃 〃 10	香炉	口縁部	14.8 — —	器形：口唇部が凹む寄口の口縁で、口縁部を内彎させて成形する。器形から類推すると三足香炉が考えられる。文様：外面に陶土を半円形に成形した丸文を貼り付けている。素地：淡灰白色の微粒子で、微細な白色や黒色の物質が少量みられる。釉色：濃緑色の釉が両面に施されている。両面に粗細な貫入がみられる。福建系の窯。14c終末～15c。	B-16 SA26 西側覆土

注　「—」：計測不可、「＋」：接合の意



第 11 図　石積み SA26 出土品②　青磁：1～ 10

第10表　石積みSA26　中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器・沖縄産無釉陶器・金属製品・ガラス製品出土状況

種類・器種・部位 ＼ 層序					B-16 SA26 栗石内	B-16 SA26 西側覆土	合計
中国産褐釉陶器	壷	口縁部	形状不明			1	1
		頸部			1		1
		把手				1	1
		胴部			17	161	178
		底部				1	1
	器種不明	胴部			1	6	7
合　計					19	170	189
タイ産褐釉陶器	壷	口縁部				6	6
		頸部				2	2
		把手				2	2
		胴部			4	32	36
		底部			3	7	10
合　計					7	49	56
沖縄産無釉陶器	壷	胴部				1	1
	壷or甕	胴部				1	1
		底部				1	1
	瓶or壷	底部				1	1
合　計					0	4	4
金属製品	工具類・生産用具	角釘	先端部欠損	中	鉄	1	1
	生活用具	鍋	胴部		不明	1	1
		調度品の縁金具			青銅	1	1
	武具	鏃形の立物			青銅	1	1
	武器	砲弾片			青銅	3	3
		機関銃			青銅	1	1
合　計					1	7	8
ガラス製品	脚or把手					1	1
	板ｶﾞﾗｽ					3	3
合　計					0	4	4

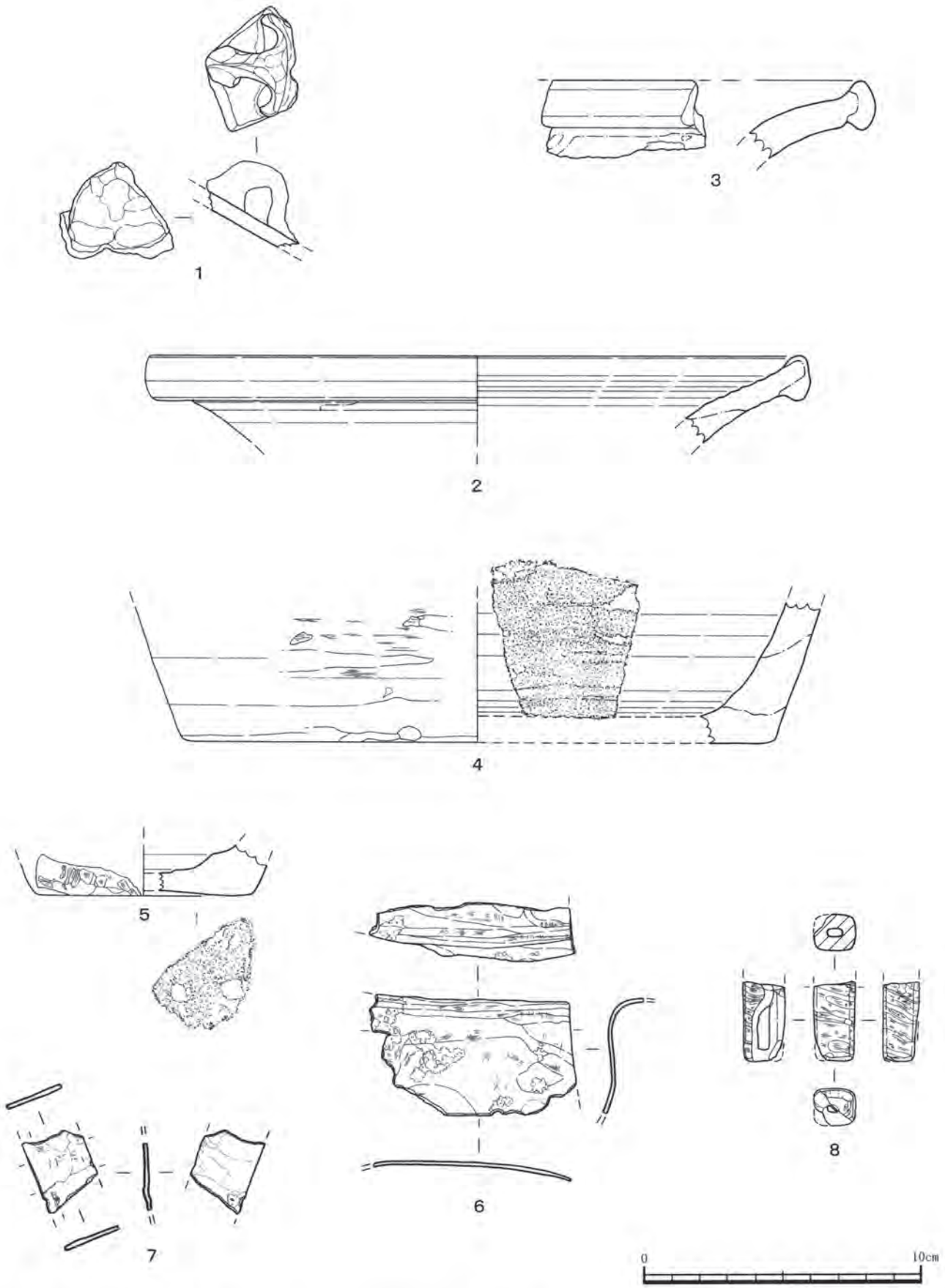
注　釘のサイズは、中:1寸半～5寸まで(3.75㎝～15.75㎝未満)

第11表　石積み SA26　中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器・沖縄産無釉陶器・金属製品・ガラス製品観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第12図 図版3 1	中国産褐釉陶器	壷	耳	― ― ―	器形：怒り肩の壷に貼り付けられた把手。把手下位の最大幅は36.8㎜で、上位が13.3㎜と下位の1/3程度の幅である。但し、把手紐の厚みは上位が10.9㎜と厚く、下位が3.6㎜と薄い造りとなる。文様：なし。器面調整：外面は釉で覆われ観察できないが、把手は指圧とナデで仕上げている。内面も釉と茶褐色の化粧土が塗布されて器面調整は観察できないが、器厚が4.2～6.4㎜と薄造りであることから丁寧な器面調整を施したようである。素地：茶紫色の粗粒子で、粗細な石英を多く含み、希に粗い茶褐色や微細な黒色鉱物がみられる。釉調：二次的な火熱を受けて白濁し、微細な気泡が多くみられる。内面の釉下に茶褐色の化粧釉が薄く塗布されている。焼成：良好で硬い。中国南部の窯。14c～15c。	B-16 SA26 西側覆土
〃 〃 2	タイ産褐釉陶器	壷	口縁部	24.0 ― ―	器形：外反口縁の壷。口縁端部を上方と下方に突出させて成形する。文様：なし。器面調整：外面の口頸部に回転擦痕がみられる。内面は施釉がなされているが、釉上から轆轤痕が観察できる。素地：淡い茶紫色の粗粒子で、粗細な石英を多量に含み、希に粗い茶褐色の鉱物がみられる。釉調：下地に茶褐色の化粧釉を施し、その上から黒色の釉を両面に施すが、外面の施釉は雑で口頸部が露胎する。焼成：良好で硬い。シーサッチャナライ窯。15c～16c。	B-16 SA26 西側覆土
〃 〃 3				― ― ―	器形：　〃　。　〃　。文様：なし。器面調整：外面の口頸部に回転擦痕がみられる。内面は釉上からの観察では丁寧な仕上げであることが窺える程度である。素地：灰褐色の細粒子で、粗細な石英と茶褐色の物質が少量みられる。釉調：両面に茶褐色の釉を施すが、外面の施釉は雑で口頸部が露胎する。焼成：良好で硬い。シーサッチャナライ窯。15c～16c。	B-16 SA26 西側覆土
〃 〃 4			底部	― ― 21.6	器形：外反口縁の壷の底部とみられる。器面調整：外面は丁寧なナデで仕上げる。内面は輪積み痕を回転轆轤痕でナデ消すが雑で消えきっていない。外底面は平坦面であるが、微細なアバタ状となる。素地：明るい茶紫色の細粒子で、粗細な石英と茶褐色の物質が少量みられる。釉調：残存部分は無釉で露胎する。焼成：良好で硬い。シーサッチャナライ窯。15c～16c。	B-16 SA26 西側覆土
〃 〃 5	沖縄産無釉陶器	瓶 or 壷	底部	― ― 7.8	器形：小振りの瓶、若しくは壷の底部。文様：なし。器面調整：外面は成形が雑で、部分的に雑な篦ナデがみられる。内面は指圧が強く加えられた為、粗い轆轤痕となる。外底面の調整も雑で起伏の有る平坦面となる。部分的に緻密な布目痕がみられる。素地：明橙色の細粒子で、微細な石英と粗密な茶褐色の鉱物や石灰質砂粒が僅かに混入する。色調：外面は暗褐色で、内面が灰褐色を帯びる。外底面は暗褐色を主体とするが部分的に明橙色となる。焼成：堅緻。	B-16 SA26 西側覆土
〃 〃 6	金属製品	生活用具	調度品の縁金具	残存長 4.35 残存幅 7.4	調度品などの素文の縁金具とみられる。正面右側面が平坦な加工面で、正面右下の角は斜位方向の隅切りと半円形状に加工されている面が確認できる程度である。正面下部の縁辺部及び左縁辺部は破断面である。正面上部は丸味を持って屈曲し、縁辺部が破断する。表裏面に部分的な緑青による腐食がみられる。材質：青銅。残存最大厚：1.37㎜。残存最小厚：0.97㎜。残存重量：27.6g。	B-16 SA26 栗石内
〃 〃 7		武具	鍬形の立物	残存長 2.7 残存幅 2.1	兜鉢の立物（鍬形）の破片。鍬形の根元が鍬形台に差し込んで固定をする為に正面左下の縁辺部の一部が鏨で外側から内側に向かって打撃を加えて抉れさせている。この抉れ部の右側に小孔が二箇所みられるが一箇所のみ裏面まで孔が空いている。他の一箇所は中途で終了している。正面右側縁辺部の下位近くの正面観は鍬形台に入る部分にあたる為、段状に成形されている。正面上下の側面は破損による破断面となる。正面の左側面から中央に向かって亀裂が入っている。表裏面は緑青による錆汁で薄く剥離した貝殻の細片が付着する。特に裏面が顕著にみられる。材質：青銅。残存最大厚：1.28㎜。残存最小厚：0.84㎜。残存重量：3.2g。	B-16 SA26 覆土
〃 〃 8	ガラス製品		脚 or 把手	― ― ―	薄い青緑色の白濁したガラス製の脚か把手とみられる。破損面や外面からの観察では気泡が多くみられる。また、破損面からは年輪様の縞が緻密にみられる。ガラスの中央部分は空洞（上面観が隅丸長方形状を呈する）であることから隅丸長方形状の鋳型の中に鉄棒状の工具を溶解ガラスに巻き付けて製作されたものとみられる。下端面は僅かに凹む。縦：28.9㎜、横：15㎜、厚さ：5㎜、重量7.2g。	B-16 SA26 西側覆土

注「―」：計測不可



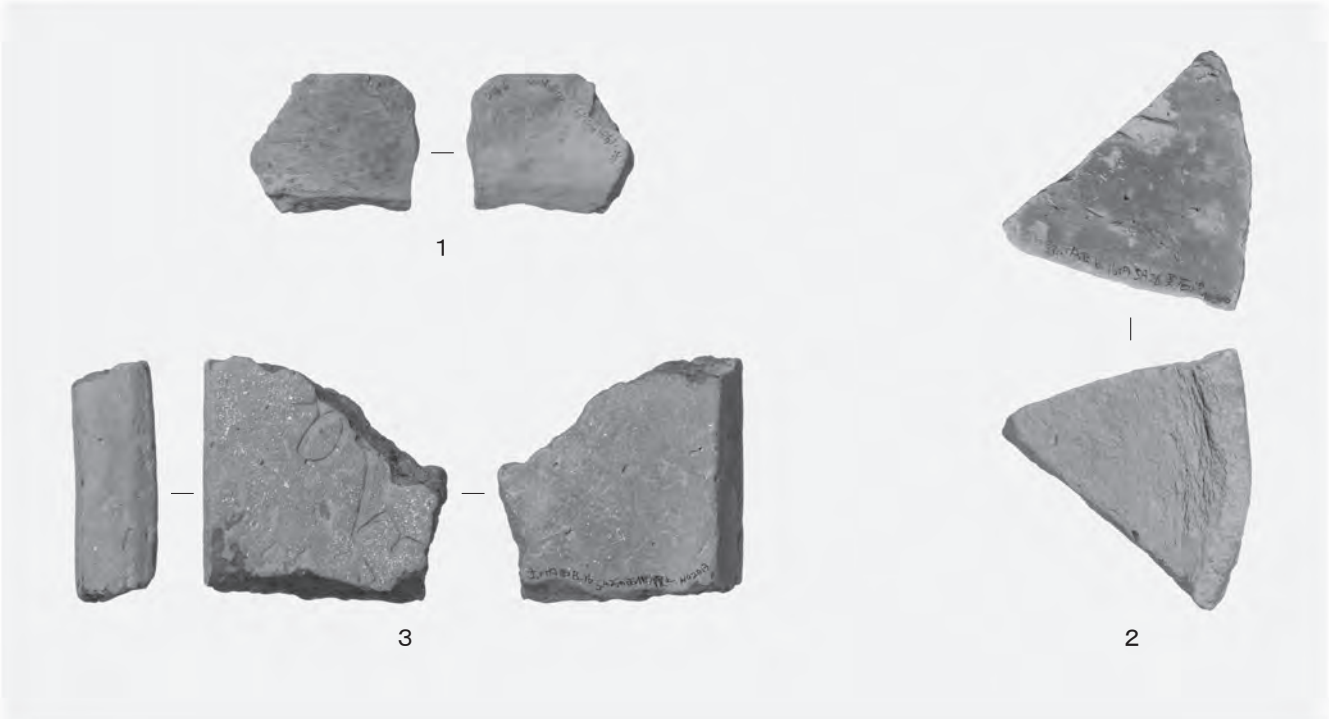
第 12 図　石積み SA26 出土品③　中国産褐釉陶器：1、タイ産褐釉陶器：2～4、沖縄産無釉陶器：5
金属製品：6･7、ガラス製品：8

第12表　石積みSA26　出土遺物状況（図版外）

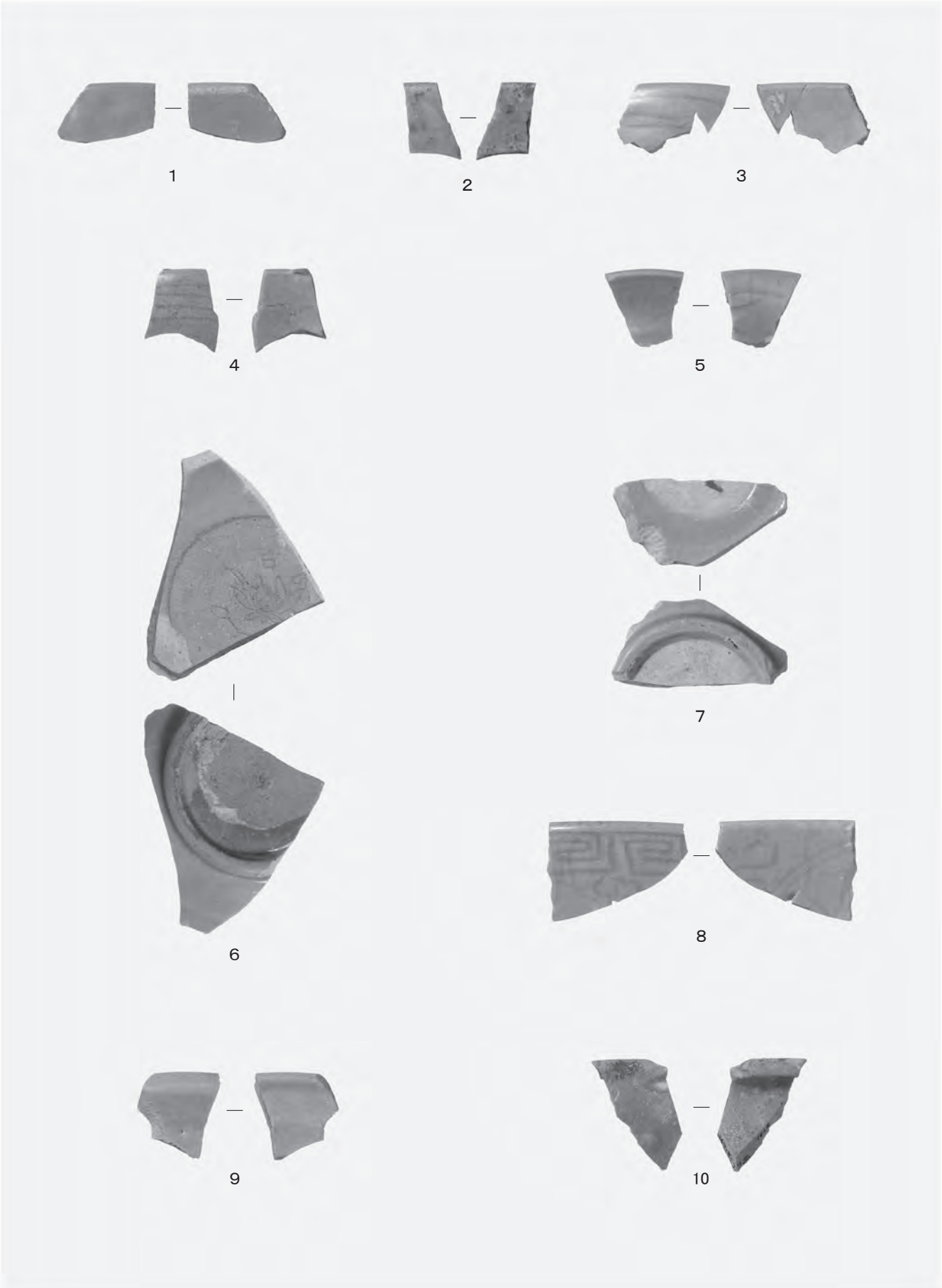
種類・器種・部位 ＼ 層序						B-16 SA26 覆土	B-16 SA26 西側覆土	合計
塼瓦	Ⅱ類	―	灰色	漆喰無し	角無し	1		1
	Ⅲ類	形状不明a	赤色	漆喰有り（片面）	角無し	1		1
		形状不明b	灰色	漆喰無し	角無し		1	1
合　計						2	1	3
白磁	碗	口縁部		端反り			1	1
		胴部					3	3
合　計						0	4	4
青花	碗	胴部					1	1
合　計						0	1	1
彩釉陶器	鶴形水注	胴部					1	1
合　計						0	1	1
沖縄産施釉陶器	急須	胴部					1	1
		蓋					1	1
合　計						0	2	2
石材	石材	細粒砂岩（ニービ）					10	10
自然石	河原石	―					1	1
合　計						0	11	11
ガラス玉	Ⅱ類	淡青色					2	2
合　計						0	2	2

第13表　石積みSA26　二次的火熱溶解銭貨

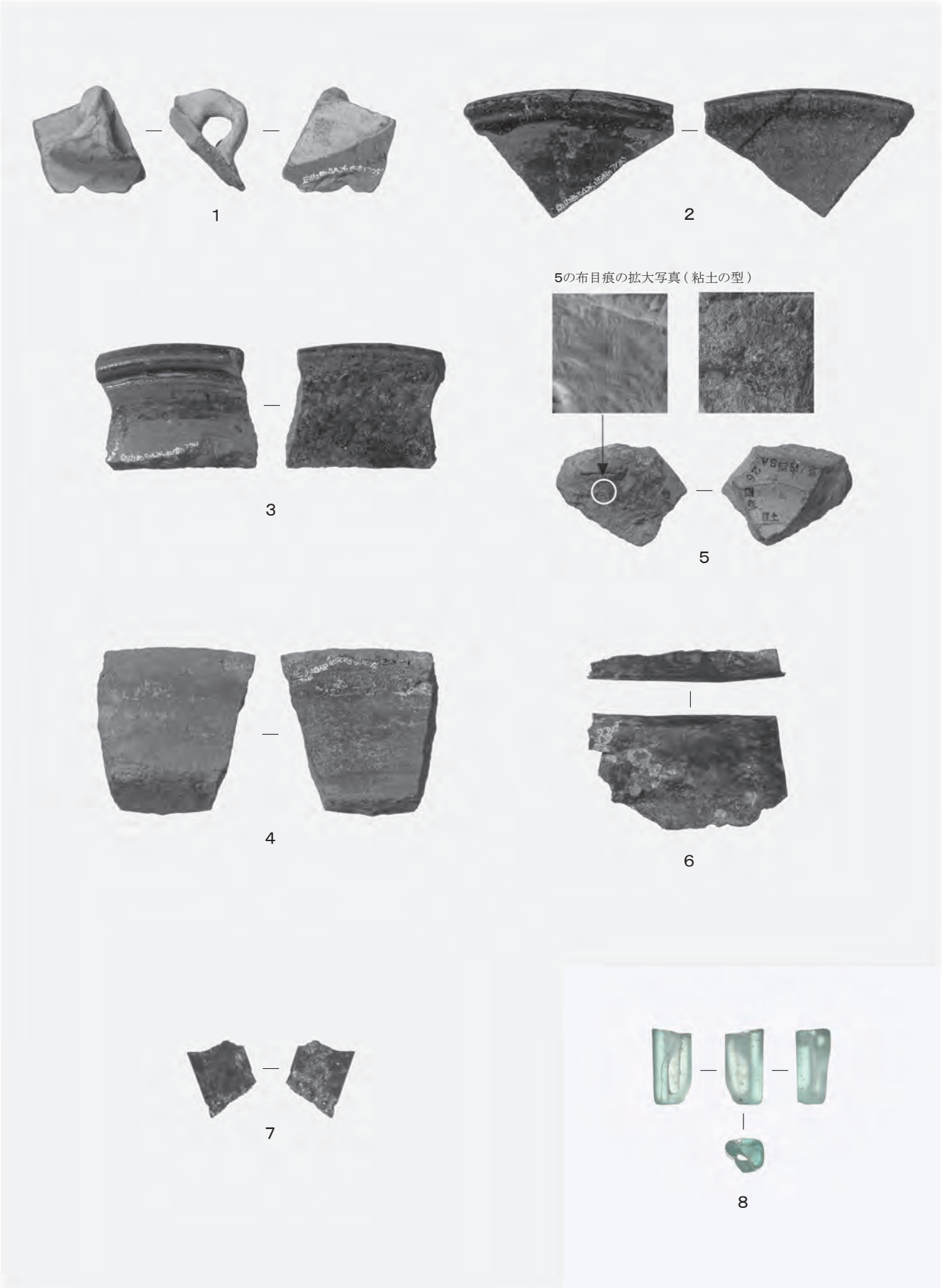
銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
無文銭（初鋳年不明）	1片	0.80	-	B-16 SA26 覆土
	1片	1.38	-	
合　計	2			



図版1　石積み SA26 出土品①　土器：1、瓦質土器：2、屋瓦：3



図版2　石積み SA26 出土品②　青磁：1～ 10



図版3　石積み SA26 出土品③　中国産褐釉陶器：1、タイ産褐釉陶器：2～4、沖縄産無釉陶器：5
金属製品：6･7、ガラス製品：8

（２）溝 SD07-B の出土遺物（第６図・第 13 図、図版４・５、第 14～16 表）

溝 SD07-B より出土した遺物は、第５表に呈示したとおり 500 点（≒100%）が得られているが、その内細片化した紙片（文字入りを含む）が 278 点（55.6%）と全体の 1/2 強を占めている。その他に数量では示すことのできなかった炭化して細片化した下敷きも得られているが数字での表示は困難と判断して重量で0.8gとして表記をした。この２種類（紙片、炭化下敷き）とガラス製品（瓶、お弾き、板ガラス）の８点（1.6%）、硯の２点（0.4%）、沖縄産施釉陶器５点（1%）、プラスチック１点を含む６種類は、当該期の時期を示す数少ない資料である。なお、お弾き２点が出土しているが当該遺構は首里第一国民学校の校舎と平行して設置された溝であることから児童・生徒が持ち込んだお弾きが溝に落ちたものとして考えられるところである。その他の遺物の層位別の出土状況については第 16 表を参照されたい。上記した紙片と下敷き、ガラス製品、硯、沖縄産施釉陶器、プラスチックの６種類を除く、その他の出土遺物の量をみると、当該遺構でも沖縄産屋瓦（第５・16 表参照。高麗系、大和系古瓦、大和系、明朝系を含む）が 109 点（21.8%）と多く出土している。次いで中国産褐釉陶器の 32 点（6.4%）、金属製品 18 点（3.6%）、グスク系土器 12 点（2.4%）などと減少していく。但し、金属製品の中には、第 16 表の層位別出土状況に示したように戦時中の砲弾破片３点と近現代の鉄釘６点が含まれている。なお、前記した石積み SA26 と当該遺構は同一の遺構（第６図）で、排水溝の縁石と底石の関係にある。

第14表①　溝SD07-B　青磁･白磁･沖縄産施釉陶器･石製品観察一覧

単位:㎝

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第13図 図版5 1	青磁	口折皿	口縁部	15.6 — —	器形:口唇部が幅広となる口折皿の口縁破片。文様:外面に篦描きで弁先を剣先状に尖らせた蓮弁文を描く。素地:灰色の細粒子で、微細な石英と黒色の鉱物が劈開面から多く観察できる。釉色:淡灰緑色の釉が両面に施されている。両面に粗密のある貫入がみられる。福建系の窯。14c終末～15c中頃。	B-16 SD07-B 覆土
〃 〃 2	白磁	外反口縁碗	口縁部	17.0 — —	器形:腰下部で丸味を保持しながら胴上部まで移行し、口縁部で外反する碗。胴上部から口頸部に轆轤痕が顕著にみられる。文様:なし。素地:淡灰白色の微粒子で、劈開面から微細な気泡痕が多くみられる。釉色:両面に淡灰白色の透明釉を施すが、外面は腰下部まで施している。両面に細かい貫入がみられる。福建産。14c後半～15c初頭。	B-16 SD07-B 試掘Ⓐ～Ⓒ 第3層
〃 〃 3	沖縄産施釉陶器	碗	底部	— — 5.9	器形:灰釉碗の高台破片。文様:なし。器面調整:外面の高台際から高台脇にカンナによる削り成形するが、高台脇から腰下部は丁寧な轆轤調整で仕上げる。内面も丁寧な轆轤成形で回転擦痕がみられる。素地:淡黄白色の微粒子で、微細な石英と黒色の鉱物が劈開面から僅かに観察できる。釉色:灰緑色の透明釉が両面の腰下部まで施されている。両面に細かい貫入がみられる。フィガキー手法で施釉する。	B-16 SD07-B 試掘Ⓑ 第2層d 茶褐色土層
〃 〃 4		小碗	底部	— — 3.3	器形:腰部で丸味を持った小碗の高台破片。文様:なし。器面調整:両面とも化粧土と透明釉が施釉されるが調整痕は観察ができない。素地:淡灰色の細粒子で、微細な白色や黒色の鉱物が多くみられる。釉色:内面から外面高台、高台内面途中まで白化粧土を施し、その上からガラス質の透明釉を施釉。高台内面途中から高台外面は茶褐色の化粧土が塗布されている。畳付には重ね焼きの際の白色陶土が付着する。	B-16 SD07-B 試掘Ⓑ 第2層d 茶褐色土層
〃 〃 5		鉢	口縁部	— — —	器形:内彎する鉢の口縁破片で、口唇部は丸味を持たせて成形する。文様:なし。器面調整:外面は釉が掛けられ観察ができないが、内面は口縁下端にカンナ目の削り痕と胴部には丁寧な水撫でが観察できる。素地:淡灰白色の微粒子で、劈開面から微細な白色や黒色の鉱物が僅かにみられる。釉色:外面から内面口縁まで茶褐色の釉を施す。	B-16 SD07-B 東側覆土
〃 〃 6	石製品	硯	—	残存長 12.2 残存幅 6.1	完形の硯。陸部(墨岡)の中央部分から海部の肩近くまで楕円形状となり、固形の墨を摺った為、浅く窪んでいる。硯の使用頻度が高かったようである。上下・左右の側面と正面の海部の縁沿いには製作時の削り調整痕が多くみられる。その他、裏面には幅0.3㎜の金属(コンパスの針、若しくは太目の針)の針先で「主 神田」と線彫りがなされていることから当該製品の所有者とみられる。裏面は意図的に加えられた縦長で歪な線状の傷や裏面下端近くに微細な線状痕(使用時に発生した傷とみられる)が観察される。石質:黒色の粘板岩。残存厚:2.05㎝、重量:324.6g。	B-16 SD07-B 試掘Ⓐ 第1層 灰褐色土層

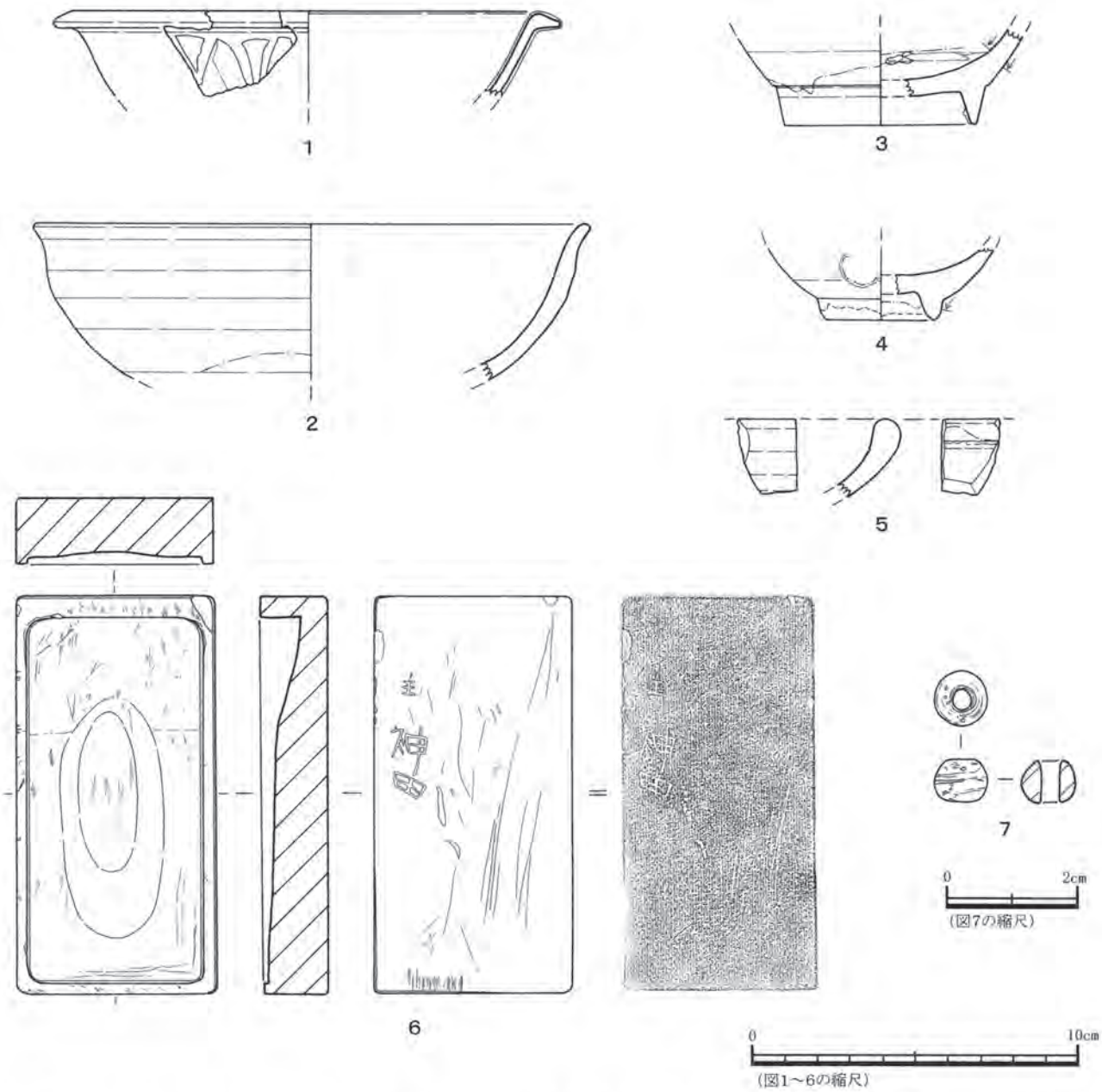
注「—」:計測不可

VI期前半

第14表② 溝SD07-B ガラス玉観察一覧

単位:mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	形状分類	色調	素材	製作技法	長軸 短軸 厚さ	孔径 最大 最小	重量	観察事項	出土地点 出土層
第13図 図版5 7	Ⅱ類	白濁	ガラス	巻き付け	8.69 8.44 6.62	3.88 3.78	0.48	二次的な火熱を受けて白濁した玉で、本来の色調とみられる茶褐色のガラス質部分が僅かにみられる。表面と上下の面に粗細な気泡痕がみられる。上部の端部は切り離しのままの状態で尖り気味の縁となる部分が多くみられ、平坦面となる部分は僅かであった。	B-16 SD07-B 覆土



第 13 図 溝 SD07-B 出土品 青磁：1、白磁：2、沖縄産施釉陶器：3～5、石製品：6、ガラス玉：7

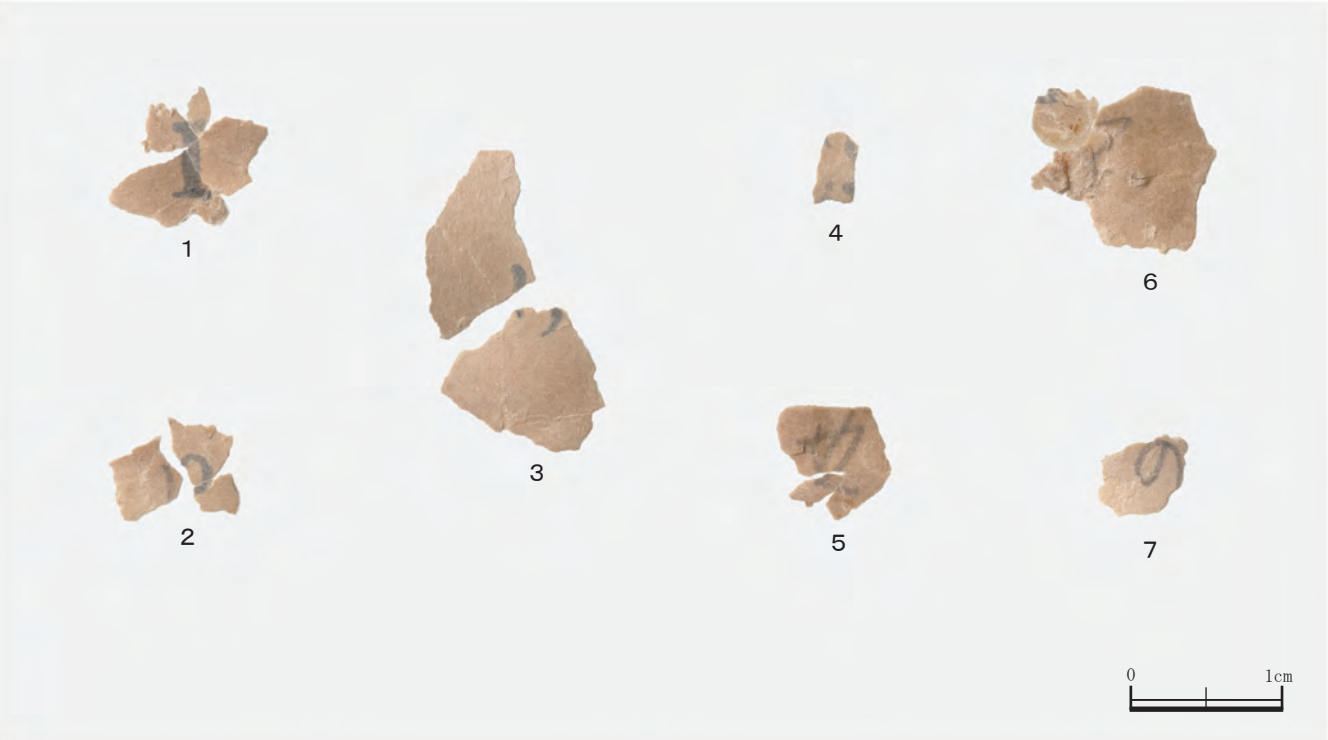
溝 SD07－B の文字入り紙片（図版４：１～７）

首里第一尋常高等小学校（首里第一国民学校）の校舎内にあった溝 SD07-B 内の覆土から（第５表）紙片 278 片が得られた。紙片には墨書と鉛筆書きの二種類が存在する。これらを筆跡などから分類と接合を試みたところ 17 片を７点（図版４：１～７）に整理し掲載した。その他に図示を省略した資料には両面が茶褐色に変色し、片面には炭化物が付着した紙片が１片（最大長 11.7 ㎜、最大幅 7.9 ㎜、厚さ 0.2～0.6 ㎜）得られている。

なお、呈示した紙の素材は未同定であるが、表面観察から推定すると黄白色に変色していることから、中性紙などの可能性が考えられた。紙片の厚みは概ね 0.1 ㎜程度であった。以下、特徴などを第 15 表に記す。

第 15 表　溝 SD07-B　文字入り紙片観察一覧　　単位:㎜、( )は推定のサイズ

図版番号 遺物番号	仮称等	観　察　事　項
図版4－1	墨書紙片	細片化した紙片4片が接合。墨書で「1」の数字が確認できた。最大復元長 11.25 ㎜、最大復元幅 9.2 ㎜。
図版4－2		細片化した紙片3片の内、2片が接合。残り1片は、接合ができなかったが筆跡から同一の文字と判断。文字は「ロ」・「ゆ」の可能性がある。最大復元長 7.5 ㎜、最大復元幅(8.8)㎜。
図版4－3		比較的大振りの紙片2片で、直接は接合ができなかったが、筆跡などから「り」の文字のみ確認できた。最大復元長(20.8)㎜、最大幅 10.5 ㎜。
図版4－4		細片化した紙片1枚に縦書きの墨書が二字存在する。明確に判読はできないが下段の文字は「ハ」の可能性が高い。最大長 5.1 ㎜、最大幅 2.55 ㎜。
図版4－5	鉛筆書紙片	鉛筆書きの紙片3枚が接合。漢字の「切」とみられる。最大復元長 8.1 ㎜、最大復元幅 7.6 ㎜。
図版4－6		細片紙1枚と皺の有る大振りの紙片と接合。大振りの紙片には「乙」の字の一部とみられる字が確認できる。他は判然としない。最大復元長 13.9 ㎜、最大幅 12.4 ㎜。
図版4－7		紙片に鉛筆書きで「の」の文字が確認できる。最大長 6.6 ㎜、最大幅 5.3 ㎜。



図版４　溝 SD07-B 出土品　文字入り紙片：１～７（写真のみ）

第16表　溝SD07-B　出土遺物状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						B-16 SD07-B 覆土	東側覆土	試掘Ⓐ 第1層 灰褐色土層	試掘Ⓑ 第2層d 茶褐色土層	試掘Ⓑ 第2層e 淡黄色土層	試掘Ⓒ 第5層b	試掘Ⓐ～Ⓒ 第3層	合計
土器	壺		頸部					1					1
	器種不明		胴部			1		1	1		7		10
	グスク系	器種不明	胴部			1							1
合計						2	0	2	1	0	7	0	12
陶質土器	火炉	把手				1							1
合計						1	0	0	0	0	0	0	1
瓦質土器	壺	底部									1		1
	蓋	―									2		2
	器種不明	胴部										1	1
合計						0	0	0	0	0	3	1	4
屋瓦	高麗系	軒丸	灰色	漆喰無し		1							1
		丸瓦	褐色								2		2
		平瓦	灰色						2		3		5
	大和系（古）	丸瓦	灰色	漆喰無し							1		1
		平瓦	灰色								2		2
	大和系	丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)		1					1		2
				漆喰無し					1				1
		平瓦	灰色	漆喰無し		2			1				3
	明朝系	丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)					1				1
				漆喰無し		2							2
			赤色	漆喰あり(片面)		13					2	1	16
				漆喰無し		3					1		4
		平瓦	灰色	漆喰無し					1		1	1	3
			赤色	漆喰あり(両面)							1		1
				漆喰あり(片面)		22		1			3	6	32
				漆喰無し		23					5	5	33
合計						67	0	1	6	0	22	13	109
塼瓦	Ⅲ類	Aa	赤色	漆喰無し	角1	1							1
		Ab	灰色	漆喰無し	角無し	1							1
		形状不明a	灰色	漆喰無し	角1						1		1
		形状不明b	灰色	漆喰無し	角無し						1		1
合計						2	0	0	0	0	2	0	4
焼土	―										1		1
合計						0	0	0	0	0	1	0	1
青磁	碗	口縁部	外反	無文		1							1
			直口	無文		1							1
		胴部	有文							1			1
			無文			2					2		4
	皿	口縁部	口折	蓮弁		1							1
			外反	無文					1				1
		胴部	無文									1	1
	盤	口縁部	直口	蓮弁							1		1
合計						5	0	0	1	1	3	1	11
白磁	碗	口縁部	外反			1						1	2
		胴部	―			1					2	1	4
合計						2	0	0	0	0	2	2	6
中国産褐釉陶器	壺	胴部				17		1	4		4	6	32
合計						17	0	1	4	0	4	6	32
タイ産褐釉陶器	壺	肩部				1					1		2
		胴部				1			1				2
合計						2	0	0	1	0	1	0	4
沖縄産施釉陶器	碗	底部				1			1				2
	小碗	底部							1				1
	鉢	口縁部					1						1
	急須	耳				1							1
合計						2	1	0	2	0	0	0	5
石製品	硯	黒色千枚岩				1							1
		粘板岩						1					1
合計						1	0	1	0	0	0	0	2
石材	シルト質泥岩										1		1
	石灰岩										1		1
自然石	河原石					1							1
合計						1	0	0	0	0	2	0	3
金属製品	工具類・生産用具	笠釘	完形	中	鉄	1							1
		丸釘	完形	中	鉄						3		3
				小	鉄						1		1
			先端部欠損	中	鉄						1		1
			頭部欠損	不明	鉄	1							1
		角釘	先端部欠損	中	鉄	1							1
				不明	鉄	2					1		3
	武器	砲弾片			鉄	1							1
					青銅	2							2
	分類不明	用途不明			鉄	2							2
					青銅	1		1					2
合計						11	0	1	0	0	6	0	18
ガラス製品	瓶					2			1				3
	お弾き					2							2
	板ガラス					2					1		3
合計						6	0	0	1	0	1	0	8
ガラス玉	Ⅱ類	白濁				1							1
合計						1	0	0	0	0	0	0	1
文字入り紙片	―					17							17
合計						17	0	0	0	0	0	0	17
紙片	―					261							261
合計						261	0	0	0	0	0	0	261
近・現代	プラスチック					1							1
合計						1	0	0	0	0	0	0	1
炭化下敷	残存総重量					0.8g							0.8g

注　釘のサイズは、中:1寸半～5寸まで(3.75cm～15.75cm未満)、小:1寸まで(3.75cm未満)

図版5　溝 SD07-B 出土品　青磁：1、白磁：2、沖縄産施釉陶器：3～5、石製品：6、ガラス玉：7

（3）石積み SA29・排水溝⑤の出土遺物（第6図・第14図、図版6、第17～19表）

石積み SA29 と排水溝⑤は同一の遺構（第6図）で、石積み SA29 が排水溝の縁石であり、同一の排水溝内から出土した遺物は排水溝⑤と整理ができることから一括して第5・17・18表に呈示した。当該遺構からは総計 178 点（≒100%）が出土している。他の遺構と同様に沖縄産屋瓦（第5・17表参照。高麗系、大和系古瓦、大和系、明朝系を含む）が 31 点（17.4%）と多く出土している。次いでグスク系土器の 30 点（16.8%）、中国産褐釉陶器の 27 点（15.1%）、中国産青磁 20 点（11.2%）、近・現代のガラス製品 20 点（11.2%）、戦時中の弾丸や砲弾片2点を含む金属製品 10 点（5.6%）、タイ産褐釉陶器 8 点（4.5%）などが出土している。その中でもグスク系土器の出土は当該遺構の直下に位置する京の内北地区遺構時期区分（第3表）の第Ⅰ期（14 世紀前半～14 世紀後半）の時期に比定されている土壙 SK03 に由来するものである。その他の遺物については、層位別の出土遺物状況（第 17・18 表）を参照されたい。なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的に大きな破片資料や特徴的な資料を図示（第 14 図、図版6）した。

第17表　石積みSA29・排水溝⑤出土遺物状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						B-16 SA29・排水溝⑤ 第1層a（灰黄色土層）	第1層d	第2層（壁面清掃）	西側覆土	東側排水溝内 第1層（客土）	第1層b	第1層c	第1層c（黒褐色土層）	合計
土器	鍋		口縁部									1		1
			底部							1				1
	壷		口縁部						1					1
			頸部							2		1		3
			胴部									2		2
	小壷		底部						1					1
	器種不明		胴部					1	9			7	1	18
	グスク系	壷	口縁部									1		1
		器種不明	頸部									1		1
			胴部						1					1
合　計						0	0	1	12	3	0	13	1	30
陶質土器	蓋	―				1								1
合　計						1	0	0	0	0	0	0	0	1
瓦質土器	器種不明	胴部										1		1
合　計						0	0	0	0	0	0	1	0	1
屋瓦	高麗系	丸瓦	灰色	漆喰無し						1				1
		平瓦							1					1
	大和系（古）	平瓦	灰色	漆喰無し					2	3				5
	大和系	丸瓦	灰色	漆喰あり（片面）								1		1
		平瓦		漆喰無し						1				1
	明朝系	丸瓦	赤色	漆喰あり（片面）					1					1
				漆喰無し					1					1
		平瓦	灰色	漆喰あり（片面）					1					1
				漆喰無し					2	2				4
			赤色	漆喰あり（片面）					4	3				7
				漆喰無し					8					8
合　計						0	0	0	20	10	0	1	0	31
塼瓦	Ⅲ類	不明	灰色	漆喰無し	角1				1					1
合　計						0	0	0	1	0	0	0	0	1
漆喰	―								1					1
合　計						0	0	0	1	0	0	0	0	1
焼土	―											1		1
合　計						0	0	0	0	0	0	1	0	1
青磁	碗	口縁部	直口	無文								1		1
			外反	蓮弁	型押し							1		1
				無文					1	1		2		4
		胴部	蓮弁・片切彫り						1	1				2
			有文不明									1		1
			無文								1	1		2
		底部	gタイプ	有文							1			1
	皿	口縁部	外反	無文					1	2		2	1	6
			直口	無文								1		1
	鉢	口縁部	直口	蓮弁	鎬				1					1
合　計						0	0	0	4	4	2	9	1	20
白磁	碗	胴部	―					1				1		2
	皿	口縁部	外反						1					1
		底部	―						1					1
合　計						0	0	1	2	0	0	1	0	4
青花	碗	口縁部	外反				1							1
		胴部	―									2		2
合　計						0	1	0	0	0	0	2	0	3
黒釉陶器	碗	口縁部～底部											1	1
		胴部										1		1
		底部										1		1
	茶壷	底部							1					1
合　計						0	0	0	1	0	0	2	1	4
中国産褐釉陶器	壷	口縁部	逆「L」字状									1		1
		把手	―									1		1
		胴部	―						7	13		3		23
	擂鉢	胴部	―							1		1		2
合　計						0	0	0	7	14	0	6	0	27
タイ産土器（半練）	蓋	蓋端部	Ⅰ類									1		1
合　計						0	0	0	0	0	0	1	0	1
タイ産褐釉陶器	壷	肩部							1					1
		胴部				1				3		3		7
合　計						1	0	0	1	3	0	3	0	8
本土産磁器	印判染付	碗	胴部									1		1
合　計						0	0	0	0	0	0	1	0	1
本土産陶器	壷	胴部								1				1
合　計						0	0	0	0	1	0	0	0	1
沖縄産無釉陶器	鉢	脚部							1					1
	壷	胴部								2				2
合　計						0	0	0	1	2	0	0	0	3
石器	砥石	細粒砂岩（ニーピ）										1		1
合　計						0	0	0	0	0	0	1	0	1
石材	石英								2					2
	黒色千枚岩											1		1
	細粒砂岩（ニーピ）								1					1
合　計						0	0	0	3	0	0	1	0	4
金属製品	工具類・生産用具	角釘	完形	中	鉄				1					1
	祭祀用具	香炉（鋳型）			青銅					1				1
	武器	刀剣類金物			青銅								1	1
		弾丸			青銅				1					1
		砲弾片			青銅				1	1				2
	分類不明	用途不明			鉄				2	2				4
合　計						0	0	0	5	4	0	0	1	10
鍛冶関連	湯玉他												1	1
合　計						0	0	0	0	0	0	0	1	1
ガラス玉	Ⅱ類				色不明				1					1
合　計						0	0	0	1	0	0	0	0	1
ガラス製品	瓶								3			1		4
	板ガラス								7	4				11
	器種不明								5					5
合　計						0	0	0	15	4	0	1	0	20
木片	破片								1					1
合　計						0	0	0	1	0	0	0	0	1
近・現代	青銅製ボタン								1					1
合　計						0	0	0	1	0	0	0	0	1

第18表　石積みSA29・排水溝⑤　二次的火熱溶解銭貨

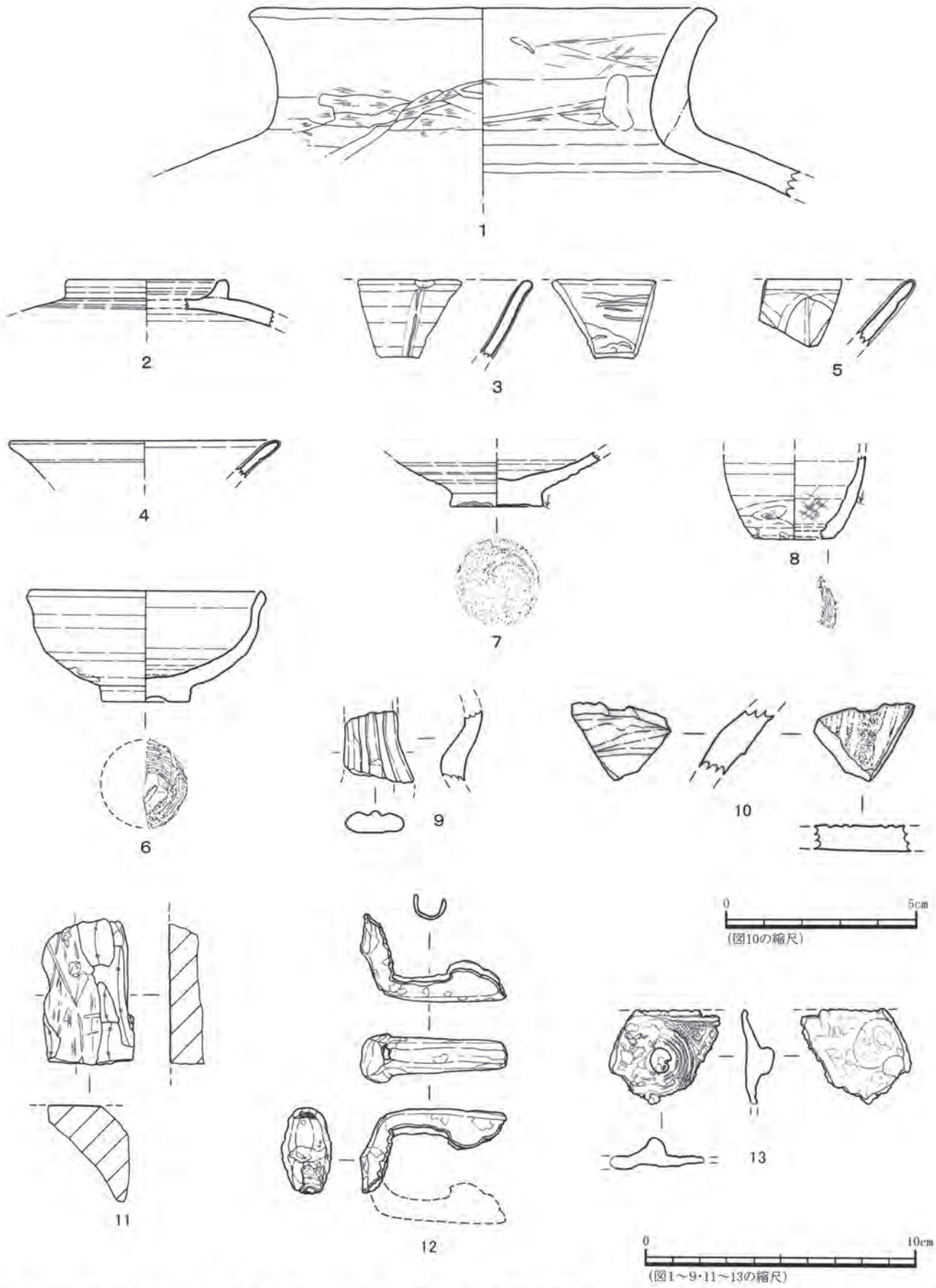
銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
不明銭貨	1片	0.34	―	B-16 SA29 東側排水溝内第1層(客土)
合　計	1			

第19表　石積みSA29・排水溝⑤　土器・陶質土器・青磁・黒釉陶器・中国産褐釉陶器・石器・金属製品観察一覧

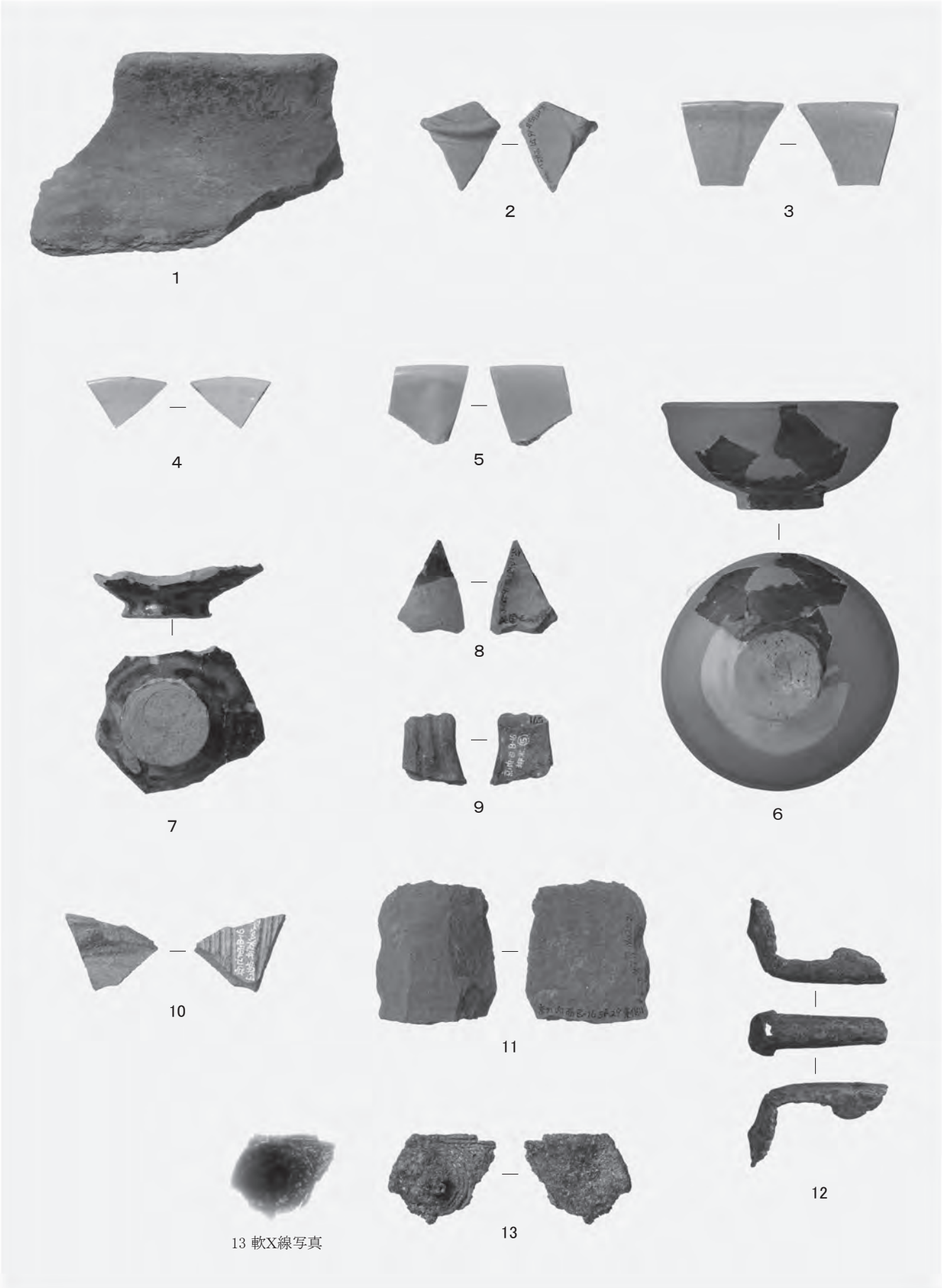
単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第14図 図版6 1	グスク系土器	壷	口縁部	17.3 ― ―	器形:ナデ肩の壷の口縁破片で、緩やかに口縁が外反する。口唇部は大部分が剥離するが残存部の状況から平坦に成形したようである。器面調整:外面は丁寧なナデを主体とするが部分的に雑な篦ナデ様の調整痕がみられる。内面は頸部から頸下部には横位方向の粗目の指ナデを施す。頸部から口縁部は篦削りをナデ消しているがナデが徹底しない。器厚:7.7～14.0㎜を測る。胎土:砂泥質で粗い。混入物:細かい鉱物(石英、雲母、磁鉄鉱)を多く含んでいる。希に粗い砂粒(サンゴ片や貝殻など)や茶褐色の物質を含む。色調:外面は灰白色を主体とし、部分的に灰褐色を帯びる。内面は橙白色を帯びる。焼成:堅緻(金属音を発する)。	B-16 SA29・排水溝⑤ 東側排水溝内 第1層c
〃 〃 2	陶質土器	蓋	蓋甲上部	6.0 ― ―	器形:土鍋の蓋とみられる。蓋甲上に高台様の撮みを貼り付けている。器面調整:外面の蓋甲部分は回転篦削りと丁寧なナデを加えている。貼付られた撮み部分に丸ベラ様の工具で横位方向に調整を加える。撮み上端面は摩滅するが僅かに篦削りに拠って生じた線状痕が観察できる。撮みの内側から蓋甲上部にはカンナ削りと回転擦痕がみられる。内面は器面が摩滅するが残存部からすると丁寧なナデ調整が考えられる。器厚:3.75～6.15㎜を測る。胎土:泥質で細かい。混入物:微細な鉱物(石英、雲母、黒褐色)が少量みられる。希に細かい茶褐色の物質がみられる。色調:両面とも黄茶色を呈する。焼成:良好で硬い。	B-16 SA29・排水溝⑤ 第1層a (灰黄色土層)
〃 〃 3	青磁	碗	口縁部	― ― ―	器形:型押蓮弁文碗の口縁破片で口縁端部近くで軽く外反する。文様:口唇部に刻目を入れて輪花状の蓮弁とする。外面は口唇部の刻目と一致させた線彫りの弁軸を施している。内面は型押しによる雷文、若しくは蓮弁文の歪で崩れた横線文と陽花文を施す。素地:淡灰白色の細粒子で、微細な気泡痕がみられる。釉色:淡黄緑色の釉が両面にみられる。両面に細かい貫入がみられる。福建系の窯。14c終末～15c前半。	B-16 SA29・排水溝⑤ 東側排水溝内 第1層c
〃 〃 4		皿	口縁部	10.0 ― ―	器形:緩やかに外反する皿の口縁破片。口唇部に僅かに鉄錆斑がみられる。文様はないが、口頸部にカンナ削りに拠って生じた傷が横線状となる。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子で、微細な気泡痕がみられる。釉色:緑白色の釉が両面にみられる。貫入はない。龍泉窯系。14cか15c。	B-16 SA29・排水溝⑤ 東側排水溝内 第1層c (黒褐色土層)
〃 〃 5		鉢	口縁部	― ― ―	器形:大振りの鎬蓮弁文鉢とみられる。口唇部を舌状に尖らせている。器厚が5.0～6.5㎜と厚く、施釉も1㎜と厚い。文様:外面に片切彫りと篦などの工具で弁先の尖った鎬蓮弁文を描く。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:淡明緑色の釉が両面にみられる。貫入はない。龍泉窯系。13c後半～14c前半。	B-16 SA29・排水溝⑤ 西側覆土
〃 〃 6	黒釉陶器	碗	口縁部 底部	8.8 4.1 3.2	器形:黒釉碗(「京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)」1998年3月に報告済み)。胴部よりも口縁部で厚みが薄くなる。口縁を軽く外反させている。文様:なし。器面調整:釉上から内外面の胴下部に轆轤痕が観察できる。外底面に反時計回りの糸切り痕が観察できる。素地:灰白色の粗粒子で、微細な黒色や茶褐色の鉱物を多く含み、希に微細な石英がみられる。釉調:暗茶色の釉を内面から外面高台脇まで施す。福建省閩候県 鴻尾窯系 14c終末～15c。	B-16 SA29・排水溝⑤ 東側排水溝内 第1層c (黒褐色土層)
〃 〃 7			底部	― ― 3.4	器形:　〃　　。高台脇からほぼ直線的に立ち上がる碗とみられるが、高台からの開き具合が外側に大きく開いている。文様:なし。器面調整:内面の見込みに強く指圧を加えた為、窪みが生じている。両面は釉上からも轆轤痕が観察できる。特に外面の高台脇は成形が雑で指圧痕もみられる。外底面に反時計回りの糸切り痕が観察できる。素地:光沢のある灰白色の細粒子で、微細な黒色や茶褐色の鉱物が僅かにみられる。釉調:茶褐色の釉が内面から外面高台脇まで施す。福建省寧徳市 飛鸞窯系 14c後半～15c。	B-16 SA29・排水溝⑤ 東側排水溝内 第1層c
〃 〃 8		茶壷	底部	― ― 2.8	器形:底面から丸味を持って内側に閉じ気味に胴上部に移行する。文様:なし。器面調整:外面よりも内面は雑な調整で、外面は底部近くに削り痕が顕著にみられ、胴上部に水撫でが観察できる。内面は粗くて雑な轆轤成形と指ナデがみられる。外底面に反時計回りの糸切り痕が観察できる。素地:光沢のある赤茶色の微粒子で、微細な黒色や茶褐色の鉱物が僅かにみられる。希に粗い赤褐色の鉱物がみられる。劈開面から器面に沿うように歪で大きな気泡痕(長さ9.6㎜、幅2.0㎜)がみられる。釉調:外面の胴下部近くまで茶褐色の釉が施されている。中国南部の窯 14c～15c。	B-16 SA29・排水溝⑤ 西側覆土
〃 〃 9	中国産褐釉陶器	壷	耳	― ― ―	器形:壷の把手。文様:把手の外面に幅3.4㎜の丸篦様の工具で深目に縦位の沈線文を二条施す。器面調整:把手は丁寧なナデ調整で仕上げている。素地:灰色の細粒子で、僅かに細かい茶褐色や黒色の鉱物を含み、希に粗い石英が混入する。釉調:二次的な火熱を受けて細かい気泡痕が発生し、本来の釉色である茶褐色の釉が黒褐色に変色する部分がみられる。焼成:良好で硬い。中国南部の窯。14c～15c。	B-16 SA29・排水溝⑤ 東側排水溝内 第1層c
〃 〃 10		擂鉢	胴部	― ― ―	器形:擂鉢の胴部片。文様:内面に幅1.1～2.2㎜幅の櫛目がみられる。器面調整:両面に粗い轆轤調整痕がみられる。素地:灰黒色の粗粒子で、微細な黒色鉱物を多く含み、僅かに粗細な石英を含んでいる。釉調:外面にのみ僅かに茶褐色の釉がみられる。焼成:堅緻である。中国南部の窯。14cか15c。	B-16 SA29・排水溝⑤ 東側排水溝内 第1層(客土)
〃 〃 11	石器	砥石	砥面	縦5.35 横3.35 厚さ1.7 重量 61.8	砥面を有する砥石とみられる破片資料であるが、欄干など石製品の破片を砥石として転用した可能性がある。正面の右上隅から左下に向かって粗密のある線状の痕跡がみられ、この線状痕を左隅から右下に向かって走る深めの溝状の線が切っている。その他に砥面となる面は中央から下位に集中し、一部は左下の剥離面まで砥面が達している。石質:細粒砂岩製。	B-16 SA29・排水溝⑤ 東側排水溝内 第1層c
〃 〃 12	金属製品	武器	刀剣類金物	残存長 5.35 残存幅 1.78	刀剣類の鞘の石突金物(鐺)か、柄の柄頭金物(冑金)のいずれかの破片。下面を欠いている。上面の右端近くを尾鰭状に加工する。左側面の中央部を突出させて加工する。正面左の内側縁沿い(縁辺部)は凹形と凸形の切込みや抉りによる波状に加工を施して縁飾りとする。材質:青銅。残存最大厚:1.69㎜、残存最小厚:0.63㎜、残存重量:10.4g。	B-16 SA29・排水溝⑤ 東側排水溝内 第1層c (黒褐色土層)
〃 〃 13		祭祀用具	(香炉? 鋳物)	残存長 3.5 残存幅 4.07	鋳物で薄造りである。用途が判然としないが突起のある薄手の香炉片として報告する。口縁部は薄く、口唇が平坦となるが緑青の影響で浸食されている。口唇部と平行する二条の浮文がみられる。中央寄りに歪な隅丸方形状の突起(縦10.0㎜、横8.1㎜、高さ5㎜)が残存する。突起の周辺には同心円状の陽文がみられる。この文様と同種の文様が右側縁沿いに残存し、左右の同心円が重なる部分は逆三角形状(三角形の重複)の文様で飾る。二次的な火熱を受けて突起の左側部分が溶解して爛れる。材質:青銅。残存最大厚:10.37㎜、残存最小厚:1.59㎜、残存重量:15.1g。	B-16 SA29・排水溝⑤ 東側排水溝内 第1層(客土)

注 「―」:計測不可



第 14 図　石積み SA29・排水溝⑤出土品　土器：1、陶質土器：2、青磁：3～5、黒釉陶器：6～8
中国産褐釉陶器：9･10、石器：11、金属製品：12･13



図版6　石積み SA29･排水溝⑤出土品　土器：1、陶質土器：2、青磁：3～5、黒釉陶器：6～8
中国産褐釉陶器：9･10、石器：11、金属製品：12･13

（4）石積み SA16（D・F 地点）の出土遺物（第 6 図・第 15～20 図、図版 7 ～12、第 20～33 表）

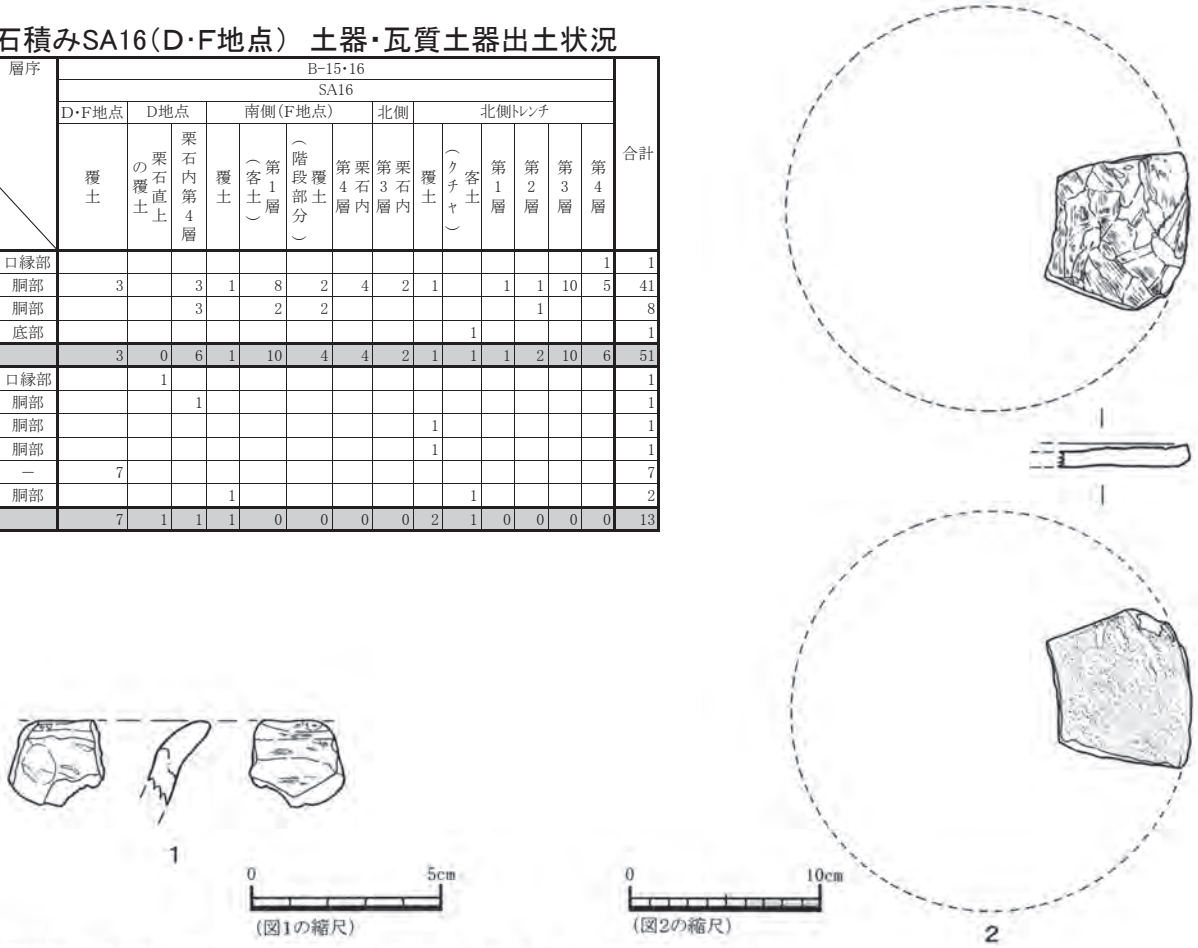
石積み SA16 の出土遺物の総数は 1,070 点（≒100%）を数えた。当該期の他の遺構と同様に沖縄産屋瓦（第 5・33 表参照。高麗系、大和系古瓦、大和系、明朝系を含む）が 487 点（45.5%）と多く得られている。これに次いで中国産褐釉陶器の 185 点（17.3%）、戦時中の砲弾片 10 点と近現代の釘 13 点を含む金属製品 100 点（9.3%）、中国産青磁 57 点（5.3%）、タイ産褐釉陶器 52 点（4.8%）などに順次減少する。当該遺構に隣接する第 I 期（14 世紀前半～14 世紀後半）の時期に比定されている土壙 SK03 に由来するグスク系土器が出土している。

第20表　石積みSA16（D･F地点）　土器･瓦質土器観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第15図 図版7 1	土器	鉢	口縁部	器形：緩やかに外反する鉢形土器の口縁破片。口唇部を舌状に尖らせている。器面調整：外面は器面の保持が悪いが、篦削りをナデ消しているが雑である。内面は外面よりも丁寧で篦削りをナデ消している。器厚：5.4～7.5㎜を測る。胎土：砂質で粗い。混入物：粗密のある鉱物（石英、黒色鉱物、磁鉄鉱）が多量に含んでいる。希に茶褐色の物質を含む。色調：両面とも淡橙白色を帯びる。焼成：悪く脆い。	B-15・16 SA16 （D・F地点） 北側トレンチ 第4層
〃 〃 2	瓦質土器	蓋	蓋縁	陶土を円盤状の型枠に入れて製作された蓋で主にタイ産大型褐釉四耳壷の蓋としての利用が考えられている。器面調整：外周縁面は微弱な起伏のある歪な平坦面となる。上面は雑な指ナデを施している。下面は陶土を型枠に入れた面で、微弱な起伏のある平坦面を形成するが、部分的に摩滅する面が確認できる。また、外周縁辺部に近い箇所には布皺が陶土にも反映されて皺痕（布目の皺が歪に並んだ圧痕となる）がみられる。胎土：泥質で細かい。混入物：微細な石英や茶褐色の物質が僅かにみられる。劈開面から一部の陶土が白色となる部分があり、これが縞状となって観察できる。この白色の縞は下面でも現れている。色調：上面は灰色を主体とし、部分的に橙白色を帯びる。下面は橙白色を呈する。推定復元による直径は、21cm、器厚：9.2㎜を測った。焼成：良好で堅い。	B-15・16 SA16 （D・F地点） 覆土

第21表　石積みSA16（D･F地点）　土器･瓦質土器出土状況

種類・器種・部位			層序	B-15・16 SA16														合計
				D・F地点	D地点		南側（F地点）				北側	北側トレンチ						
				覆土	栗石直上の覆土	栗石内第4層	覆土	第1層（客土）	覆土（階段部分）	栗石内第4層	栗石内第3層	覆土	客土（クチャ）	第1層	第2層	第3層	第4層	
土器	鉢	口縁部															1	1
土器	器種不明	胴部		3		3	1	8	2	4	2	1		1	1	10	5	41
土器	グスク系 器種不明	胴部				3		2	2						1			8
土器	グスク系 器種不明	底部											1					1
合計				3	0	6	1	10	4	4	2	1	1	1	2	10	6	51
瓦質土器	鉢	口縁部			1													1
瓦質土器	鉢	胴部				1												1
瓦質土器	播鉢	胴部										1						1
瓦質土器	壷	胴部										1						1
瓦質土器	蓋	―		7														7
瓦質土器	器種不明	胴部					1						1					2
合計				7	1	1	1	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	13



第 15 図　石積み SA16（D･F 地点）出土品①　土器：1、瓦質土器：2

第22表　石積みSA16（D･F地点）　青磁出土状況

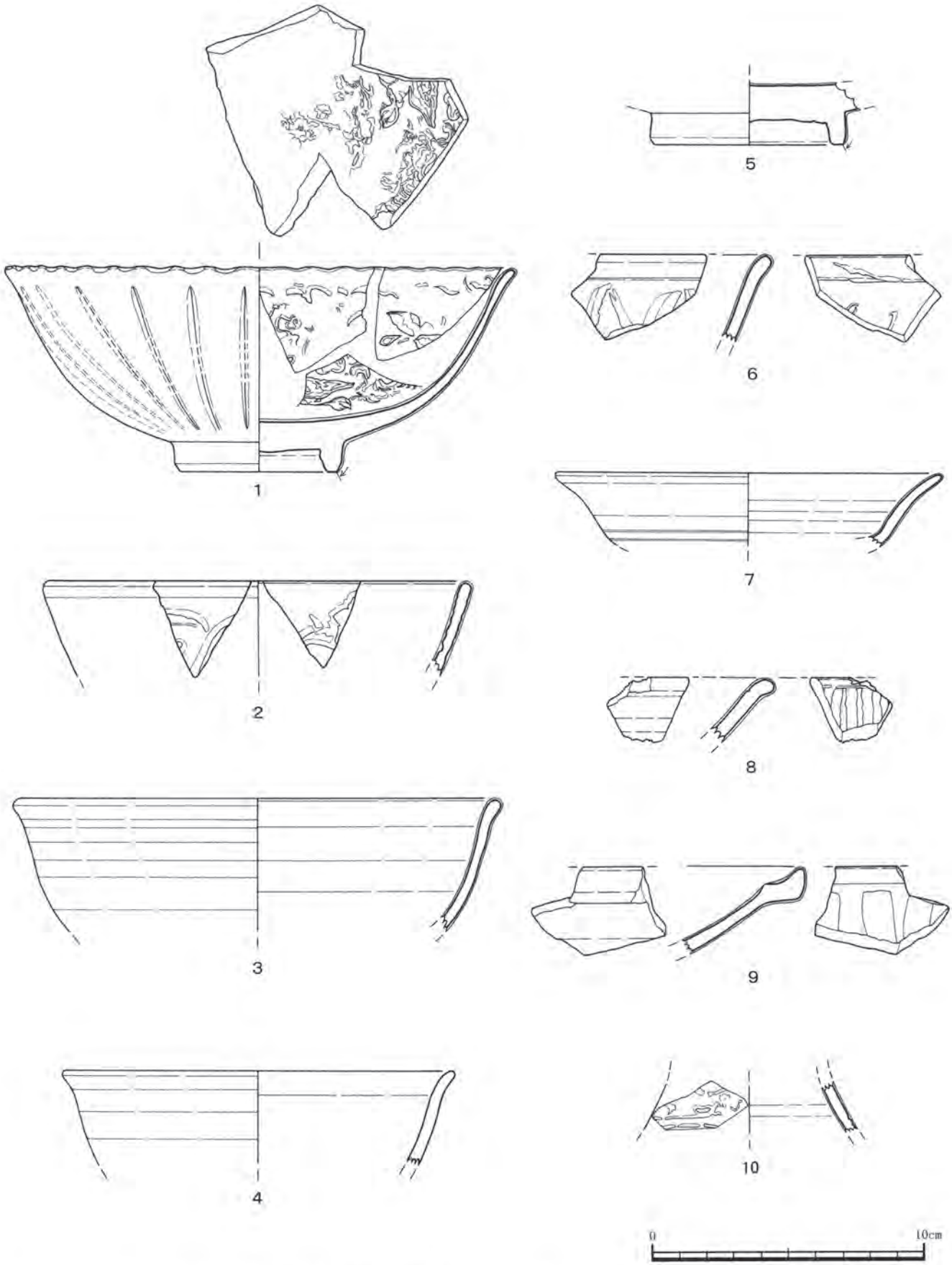
器種・部位				層序	B-15･16 SA16 D･F地点 覆土	D地点 栗石直上の覆土	D地点 栗石内第4層	南側（F地点） 覆土（階段部分）	南側（F地点） 栗石内第4層	北側 栗石内第3層	北側トレンチ 覆土	北側トレンチ 客土（クチャ）	北側トレンチ 第1層	北側トレンチ 第2層	北側トレンチ 第3層	北側トレンチ 第4層	合計
碗	口縁部～底部	外反	蓮弁	型押								1					1
	口縁部	直口	蓮弁	片切り彫り												1	1
				線彫り			1		1								2
			ラマ式蓮弁	片切り彫り		1											1
		無文					1										1
		外反	無文			1	1	1	3	3			1		1	1	12
	胴部	蓮弁		線彫り			1		1								2
		無文			1		1	2	2	1	1		1		1		10
		文様不明					1										1
	底部	cタイプ	有文不明						1								1
		文様不明		高台片						1							1
皿	口縁部	外反	蓮弁	片切彫り		1											1
			無文					1		1		1					3
		直口	無文					1									1
	胴部	蓮弁		片切彫り		1											1
		有文不明				1											1
		無文				1	1										2
	底部	無文			1												1
盤	口縁部	タガ状鍔縁	文様不明			1		1		1							3
		鍔縁	蓮弁	篦彫り		1											1
		口折	蓮弁	丸篦				1									1
		直口	蓮弁	櫛描					1								1
			蓮弁	丸篦						1							1
	胴部	蓮弁	丸篦						1								1
	底部	印花文		高台なし								1					1
		aタイプ	文様不明			1											1
酒会壷	胴部	有文不明					1										1
	底部(真底)	－				1											1
大鉢	口縁部	外反	蓮弁	片切彫り			1										1
瓶	胴部	牡丹唐草文		片切彫り										1			1
合　計					2	10	9	7	10	8	1	3	2	1	2	2	57

第23表　石積みSA16（D･F地点）　青磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第16図 図版8 1	蓮弁文碗（型押）	口縁部～底部	18.8 (7.5) 6.2	器形：型押蓮弁文碗で口縁部が軽く外反する。文様：口唇部を波状に抉って輪花の弁先とする。外面の高台脇から口縁部まで線彫りで弁軸のみを描いているが、口唇部の輪花とは一致しない。内面の口縁には型押しによる弁軸のない歪な弁先を施し、その直下から胴下部まで陽花文が施されている。素地：光沢のある淡茶色の細粒子で、粗細な石英、黒色鉱物が少量みられる。劈開面からは粗細な気泡痕が観察できる。釉色：淡黄緑色の釉を内面から外面の高台まで施釉されている。両面に粗細な貫入がみられる。福建系の窯。14c後半～15c中頃。	B-15･16 SA16 北側トレンチ 客土(クチャ)
〃 〃 2	蓮弁文碗（ラマ式）	口縁部	15.8 － －	器形：直口口縁のラマ式蓮弁文碗。口唇部は丸味を持って成形する。文様：外面に片切彫りで弁先や弁軸が崩れたラマ式蓮弁文を描く。内面にも片切彫りで描かれた刻花文の一部がみられる。素地：光沢のある淡灰白色の微粒子で、僅かに粗細な気泡痕がみられる。釉色：淡青緑色の釉が両面にみられる。貫入はない。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	B-15･16 SA16(D地点) 栗石直上 の覆土
〃 〃 3	碗	口縁部	17.9 － －	器形：無文の外反口縁碗。口縁部が軽く外反する。文様：なし。素地：灰白色の細粒子で、微細な石英や黒色鉱物が少量ながらみられる。釉色：淡黄緑色の釉が両面にみられる。貫入はない。福建系の窯。14c終末～15c前半。	B-15･16 SA16(F地点) 南側栗石内第4層
〃 〃 4			14.4 － －	器形：　〃　。　〃　。文様：なし。素地：淡い灰色の細粒子で、微細な石英や黒色鉱物が少量ながらみられる。釉色：淡灰緑色の釉が両面にみられる。貫入はない。福建系の窯。14c終末～15c前半。	B-15･16　SA16 北側栗石内 第3層
〃 〃 5		底部	－ － 7.0	器形：高台分類のcタイプの範疇にある資料。外面の高台下端を斜位に削っている。畳付は平坦に仕上げる。高台内刳りは深く丁寧に削り出して、高台外底面を平坦に仕上げてるが、中央部が僅かに盛り上がっている。文様：見込みに構図不詳の文様（小さな花弁か）とみられるものを施すが失透釉で判然としない。素地：灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物や石英が少量みられる。釉色：淡緑色の釉が内面から外面高台まで施釉。一部は畳付まで釉が達している。貫入：粗細な貫入がみられる。福建系の窯。14c終末～15c前半。	B-15･16 SA16(F地点) 南側栗石内 第4層
〃 〃 6	大鉢	口縁部	(21.4) － －	器形：大振りの蓮弁文のある大鉢で、口縁部が軽く外反する。文様：外面は弁先の尖った蓮弁文を片切彫りで描いている。裏面にも片切彫りで刻花文を描く。素地：光沢のある淡灰白色の微粒子で、粗細な気泡痕がみられる。釉色：淡緑色の釉が両面にみられる。貫入はない。龍泉窯系。14c後半～15c前半。	B-15･16 SA16(D地点) 栗石内第4層
〃 〃 7	皿	口縁部	14.2 － －	器形：無文の外反口縁皿。口縁部が緩やかに大きく外側に外反する。文様：なし。素地：灰色の細粒子で、微細な黒色鉱物が少量ながらみられる。釉色：淡灰緑色の釉が両面にみられる。貫入はない。福建系の窯。14c終末～15c前半。	B-15･16　SA16 北側トレンチ 客土(クチャ)
〃 〃 8	盤	口縁部	－ － －	器形：直口口縁盤。口縁に玉縁状の肥厚を造る。文様：内面に最大幅4㎜の丸篦で蓮弁文を施す。素地：灰白色の微粒子。釉色：明緑色の釉が両面にみられる。両面に細かい貫入がみられる。福建系の窯。14c終末～15c前半。	B-15･16　SA16 北側栗石内 第3層
〃 〃 9			－ － －	器形：鍔縁盤。文様：内面の頸部から下に幅広の篦（最大幅10㎜）で蓮弁文を施す。素地：光沢のある灰白色の微粒子。釉色：明緑色の釉が両面にみられる。両面に粗い貫入がみられる。龍泉窯系。14c後半～15c前半。	B-15･16 SA16(D地点) 栗石直上の覆土
〃 〃 10	瓶	胴部	－ － －	器形：瓶の頸部破片。文様：外面に片切彫りの牡丹唐草文と界線（二条一組）を施す。素地：光沢のある灰白色。釉色：淡青緑色の釉が両面に施されている。貫入はない。龍泉窯系。14c後半～15c前半。	B-15･16　SA16 北側トレンチ 第2層

注　( )：推定、「－」：計測不可



第 16 図　石積み SA16（D･F 地点）出土品②　青磁：1～10

第24表　石積みSA16（D･F地点）　白磁･青花･中国産褐釉陶器･タイ産土器(半練)･タイ産褐釉陶器 出土状況

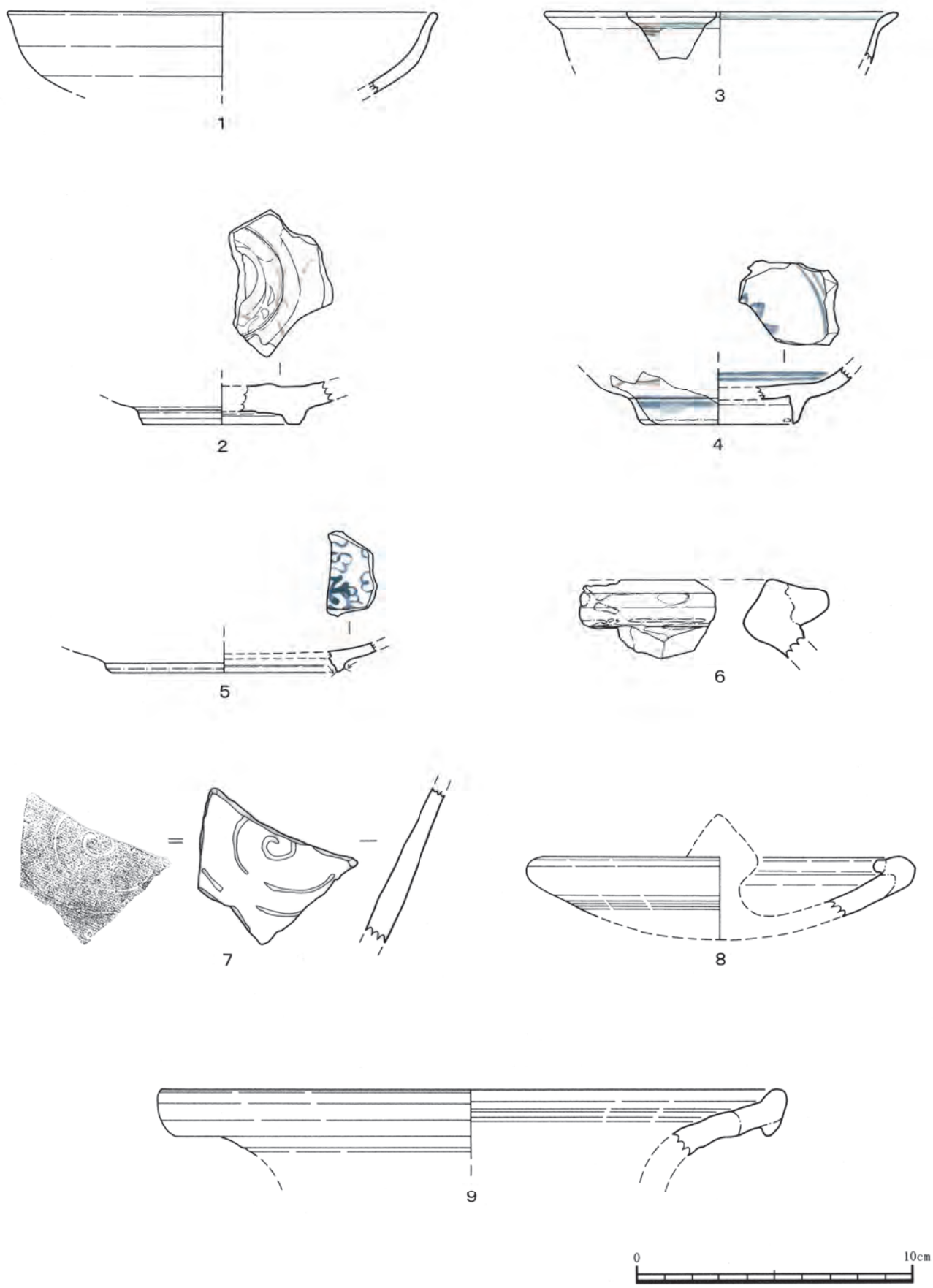
種類･器種･部位 ＼ 層序				B-15･16 SA16 D･F地点 覆土	D地点 栗石直上の覆土	D地点 栗石内第4層	南側(F地点) 覆土	南側(F地点) 覆土(階段部分)	南側(F地点) 第1層(客土)	南側(F地点) 栗石内第4層	西側 覆土	北側 栗石内第3層	北側トレンチ 客土(クチャ)	北側トレンチ 第1層	北側トレンチ 第3層	石敷内	栗石直下第4層	合計
白磁	碗	口縁部	外反							1								1
			直口						1									1
		胴部		1						1		1						3
		胴部	印花牡丹文											1				1
	皿	口縁部	外反						1									1
		底部		1									1					2
合計				2	0	0	0	0	2	2	0	1	1	1	0	0	0	9
青花	碗	口縁部	外反													1		1
		胴部			1													1
		底部						1										1
	皿	底部							1									1
合計				0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	4
中国産褐釉陶器	壷	口縁部	隅丸方形状							1								1
		肩部										1						1
		胴部		7	2	6	1	24		26	1	62		1	1	1	47	179
		底部										1						1
	器種不明	胴部					1			1		1						3
合計				7	2	6	2	24	0	28	1	65	0	1	1	1	47	185
タイ産土器（半練）	蓋	端部	Ⅰ類									1						1
		胴部										1						1
合計				0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
タイ産褐釉陶器	壷	口縁部										2						2
		頸部										1					1	2
		胴部			5			5		3		20		1			10	44
		底部										4						4
合計				0	5	0	0	5	0	3	0	27	0	1	0	0	11	52

第25表　石積みSA16（D･F地点）　白磁･青花･中国産褐釉陶器･タイ産土器（半練）･タイ産褐釉陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称･仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地･混入物･色調･釉色等）	出土地点 出土層
第17図 図版9 1	白磁	薄手外反口縁皿	口縁部	15.6 ― ―	器形：器壁の厚みが2.7～4.0㎜と比較的均一に成形された薄手の外反口縁皿。文様：なし。素地：白色の微粒子。釉色：淡黄白色の釉が両面に残存する。両面に細かい貫入がみられる。福建産（邵武四都窯）。14c後半～15c前半。	B-15･16 SA16 南側客土（第1層）
〃 〃 2		皿	底部	― ― 5.6	器形：畳付が幅広となる高台の破片。見込みは擦痕が雑に入り起伏のある轆轤痕が顕著にみられる。高台内の内刳りの削りは雑である。高台脇から高台外面までの削り成形も雑で段差が生じている。文様：なし。素地：淡黄白色の細粒子で、劈開面から縞状の気泡痕がみられる。釉色：残存する範囲には釉がない。福建産。15c後半～16c前半。	B-15･16 SA16 （D･F地点）覆土
〃 〃 3	青花	碗	口縁部	12.8 ― ―	器形：口縁部がきつく折れる外反口縁碗。文様：外面の口縁に二条一組の界線を施し、その直下に瑞雲の一部とみられる文様を描いている。内面口縁にも二条一組の界線を施す。素地：淡灰白色の微粒子。釉色：淡灰白色の釉が両面に残存する。景徳鎮窯。15c前半～中葉。	B-15･16 SA16 石敷内
〃 〃 4			底部	― ― 5.3	器形：高台脇から丸味を保持して立ち上がる碗の高台破片。高台畳付を尖り気味に成形する。文様：高台脇から高台外面途中に二条一組の界線を描く。胴下部に花唐草文の一部を描く。内面の見込みに花文（牡丹花）を描き、腰下部に二条一組の圏線で囲繞する。素地：白色の微粒子。景徳鎮窯。15c後半～16c前半。	B-15･16 SA16(F地点) 南側覆土（階段部分）
〃 〃 5		皿	底部	― ― 8.6	器形：高台内面を段状に削りとって成形する皿。文様：見込みに花文とみられる文様を描く。素地：白色の微粒子。景徳鎮窯。17c代？。	B-15･16 SA16(F地点) 南側客土（第1層）
〃 〃 6	中国産褐釉陶器	壷	口縁部	― ― ―	器形：口縁部の縦断面が歪な隅丸方形状となる怒り肩の壷の口縁破片。文様：なし。素地：淡茶紫色の粗粒子で、粗細な石英を多く含んでいる。希に粗い茶褐色の鉱物がみられる。劈開面から白色陶土が縞状に入る部分が確認できる。釉色：茶褐色の釉を両面に施したようであるが、釉の大半が剥落し露胎となる。貫入：両面に微細な貫入がみられる。中国南部の窯。16c。	B-15･16 SA16(F地点) 南側栗石内 第4層
〃 〃 7			胴部	― ― ―	器形：ナデ肩壷の胴部片。文様：胴部の釉を反時計回りに篦状（最大幅1.5㎜）の工具で掻き取って時計廻りの渦巻き文を表現する。素地：灰白色の細粒子で、粗細な石英と細かい黒色鉱物を少量含んでいる。釉色：外面は黄茶色の釉を施し、内面に茶褐色の化粧土を薄く施す。貫入：外面の釉のみ微細な貫入がみられる。中国南部の窯。14c～15c。	B-15･16 SA16 北側栗石内 第3層
〃 〃 8	タイ産土器（半練）	蓋	端部	― ― ―	器形：蓋分類のⅠ類に相当するが内面の肥厚突出部分は成形が雑である。落とし蓋の推定復元直径14.0㎝。推定復元高4.5㎝。器面調整：上面の蓋甲内側は丁寧な水撫でで調整する。肥厚突出部は陶土を折り返して製作するが器面の仕上げが雑であり、指ナデを主体的に施し指圧や刷毛目様の擦痕がみられる。下面は轆轤痕が微弱に起伏し、その上から篦削りとナデを加えている。下面の縁辺部の指ナデ成形も雑である。素地：灰褐色の粗粒子で、粗細な石英を多く含んでいる。色調：上面は橙白色で、下面が暗橙白色を帯びる。焼成：堅緻。15c～16c。	B-15･16 SA16 北側栗石内 第3層
〃 〃 9	タイ産褐釉陶器	壷	口縁部	22.7 ― ―	器形：外反する壷の口縁破片で、口縁端部は上方と下方に陶土を突出させて肥厚を造る。器面調整：外面の口縁部は化粧土が薄い為、顕著な轆轤痕が観察できる。裏面は釉上から観察すると丁寧な轆轤成形が推定される。素地：茶紫色の細粒子で、粗細な石英を多く含んでいる。色調：外面は薄く茶紫色の化粧土が口縁部に施釉され、肥厚する部分から内面にかけて茶褐色の釉を主体とするが、部分的に黒褐色の釉が斑文や帯状に掛かっている。シーサッチャナライ窯。15c。	B-15･16 SA16 北側栗石内 第3層

注　「―」：計測不可



第 17 図　石積み SA16（D･F 地点）出土品③　白磁：1･2、青花：3～5、中国産褐釉陶器：6･7
タイ産土器（半練）：8、タイ産褐釉陶器：9

第26表　石積みSA16（D･F地点）　中世陶器･沖縄産施釉陶器･沖縄産無釉陶器･骨製品出土状況

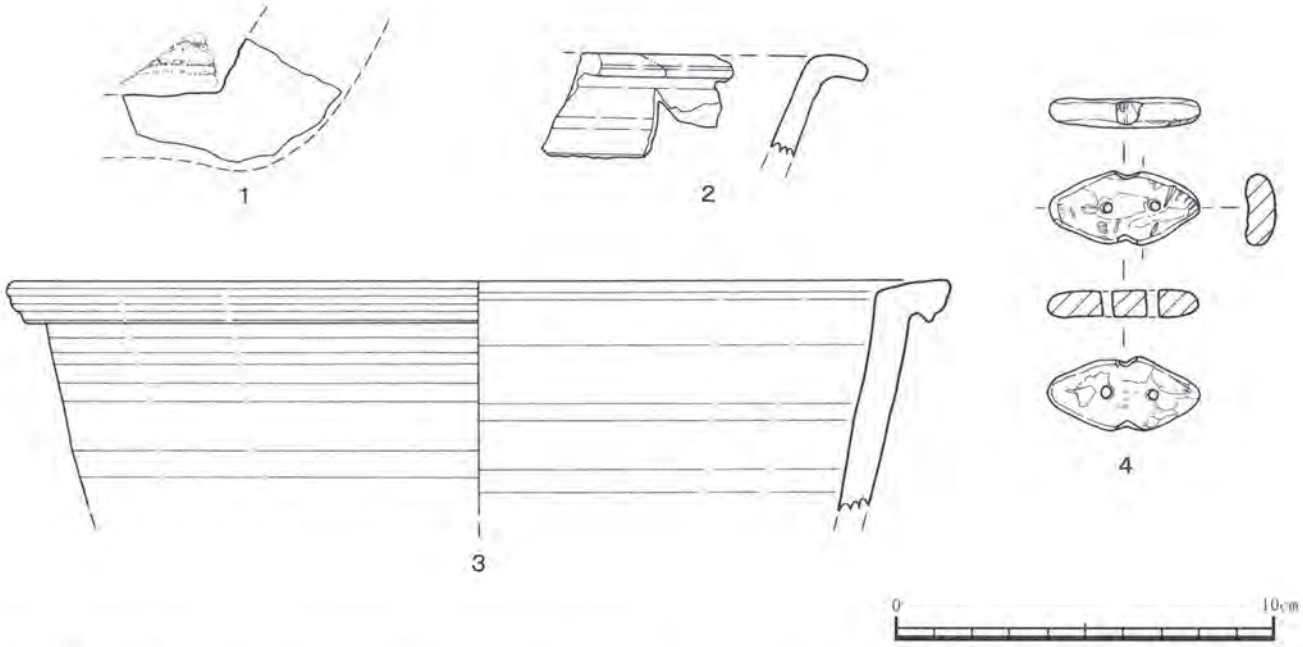
種類･器種･部位 ＼ 層序			B-15･16 SA16											合計
			D･F地点	D地点		南側（F地点）			北側	北側トレンチ		石敷内	栗石直下第4層	
			覆土	栗石直上の覆土	栗石内第4層	覆土（階段部分）	第1層（客土）	栗石内第4層	栗石内第3層	第1層	第3層			
中世陶器	壷	底部											1	1
合　計			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
沖縄産施釉陶器	皿	胴部										1		1
	鉢	胴部	1											1
	大鉢	口縁部	1											1
	急須	胴部			1			1						2
	器種不明	胴部	1							1				2
合　計			3	0	1	0	0	1	0	1	0	1	0	7
沖縄産無釉陶器	鉢	口縁部				1								1
	擂鉢	胴部			1									1
	水鉢	口縁部	1											1
	壷	胴部				1								1
	酒器or甕	胴部							1					1
	器種不明	胴部		1			1	1				1		4
合　計			1	1	1	2	1	1	1	0	0	1	0	9
骨製品	笠鞍										1			1
合　計			0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1

第27表　石積みSA16（D･F地点）　中世陶器･沖縄産施釉陶器･沖縄産無釉陶器･骨製品観察一覧

単位：cm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称･仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地･混入物･色調･釉色等）	出土地点 出土層
第18図 図版10 1	中世陶器	壷	底部	― ― ―	器形：外面と底面の器面が欠落した壷の破片。器面調整：内面の胴下部に緻密な轆轤と刷毛様の調整痕が観察できる。内底面は起伏のある轆轤痕と僅かに刷毛目痕がみられる。素地：灰白色の細粒子で、粗い石英と細かい黒色鉱物が多くみられる。釉色：内底面に茶紫色の釉が垂れて付着している。貫入：なし。	B-15･16 SA16 栗石直下 第4層
〃 〃 2	沖縄産施釉陶器	大鉢	口縁部	― ― ―	器形：口頸部の縦断面が逆「L」状に屈曲する大鉢の口縁破片。器面調整：釉上からの観察では外面に轆轤痕がみられる。内面は丁寧なナデ？が推定される。素地：茶紫色の微粒子で、僅かに微細な石英がみられる。釉色：外面が口縁下端から胴部に茶褐色の釉がみられる。内面は外面口縁下端から口唇部、胴部まで白化粧土の上から透明釉を施している。貫入：内面に細かい貫入がみられる。	B-15･16 SA16 （D･F地点） 覆土
〃 〃 3	沖縄産無釉陶器	水鉢	口縁部	25.0 ― ―	器形：口頸部を「く」状に屈曲させた水鉢の口縁破片とみられる。口縁部の肥厚部に丸篦状の工具で界線を二条施している。上位の界線の丸篦の幅は2.2㎜、下位の界線の幅が3.4㎜を測る。器面調整：外面には粗密な回転擦痕がみられ、口頸部は雑で、頸下部から胴部に丁寧な調整痕がみられる。内面の擦痕は粗目で、起伏が微弱な轆轤痕も観察できる。素地：明茶色の細粒子で、微細な石英と粗細な茶褐色の物質、粗い石灰質砂粒が少量含んでいる。	B-15･16 SA16 （D･F地点） 覆土
〃 〃 4	骨製品	武具	笠鞍	縦1.95 横4.0 厚さ0.7 重量6.2	ウシやウマの大腿骨などの骨質が厚い部位を鎧の笠鞍として加工する。骨質部を刃物で菱形に加工するが、全体的に器面の保持が悪く、剥離や摩滅痕が確認できる。中央部の上下端部には刃物で「V」の字状に削り出して抉りを作る。更に、中央付近に孔を二孔（孔のサイズ：左側の孔径3㎜、右側の孔径2.7㎜）両面から穿孔する。加工の際の削り痕は裏面右端近くに集中する。表裏面と側面の一部にまばらに黒色のしみが存在することから黒漆が塗布されていた可能性が考えられる。	B-15･16 SA16 北側トレンチ 第3層

注　「―」：計測不可



第 18 図　石積み SA16（D･F 地点）出土品④　中世陶器：1、沖縄産施釉陶器：2
沖縄産無釉陶器：3、骨製品：4

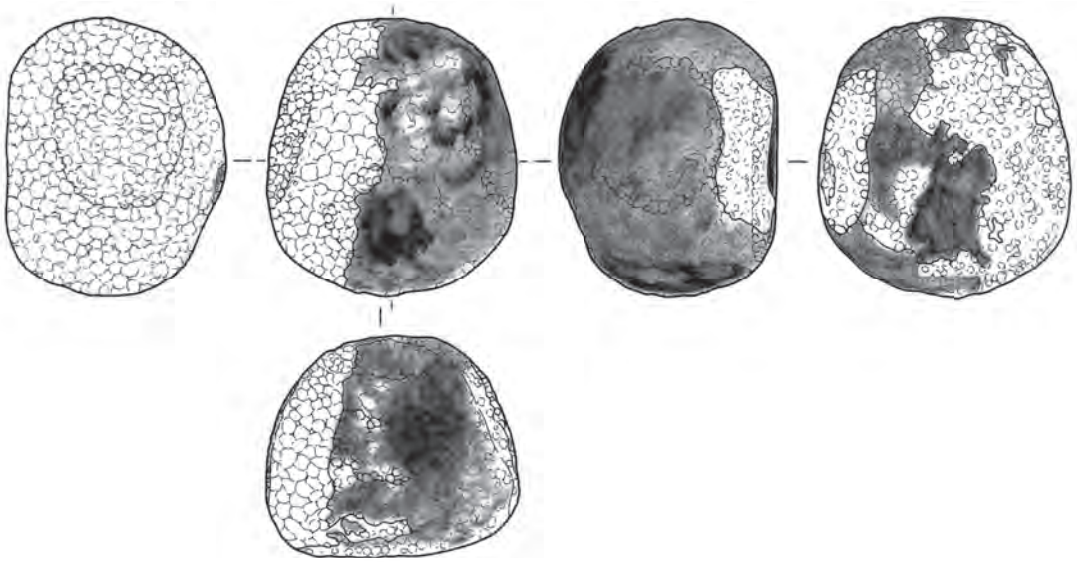
第28表　石積みSA16（D･F地点）　石器出土状況

種類 ＼ 層序			B-15･16 SA16 D･F地点 覆土	B-15･16 SA16 北側 栗石内第3層	合計
石器	石器片	緑色岩	1		1
	石弾	琉球石灰岩		1	1
		細粒砂岩(ニービ)		1	1
	石弾片	細粒砂岩(ニービ)		1	1
合　計			1	3	4

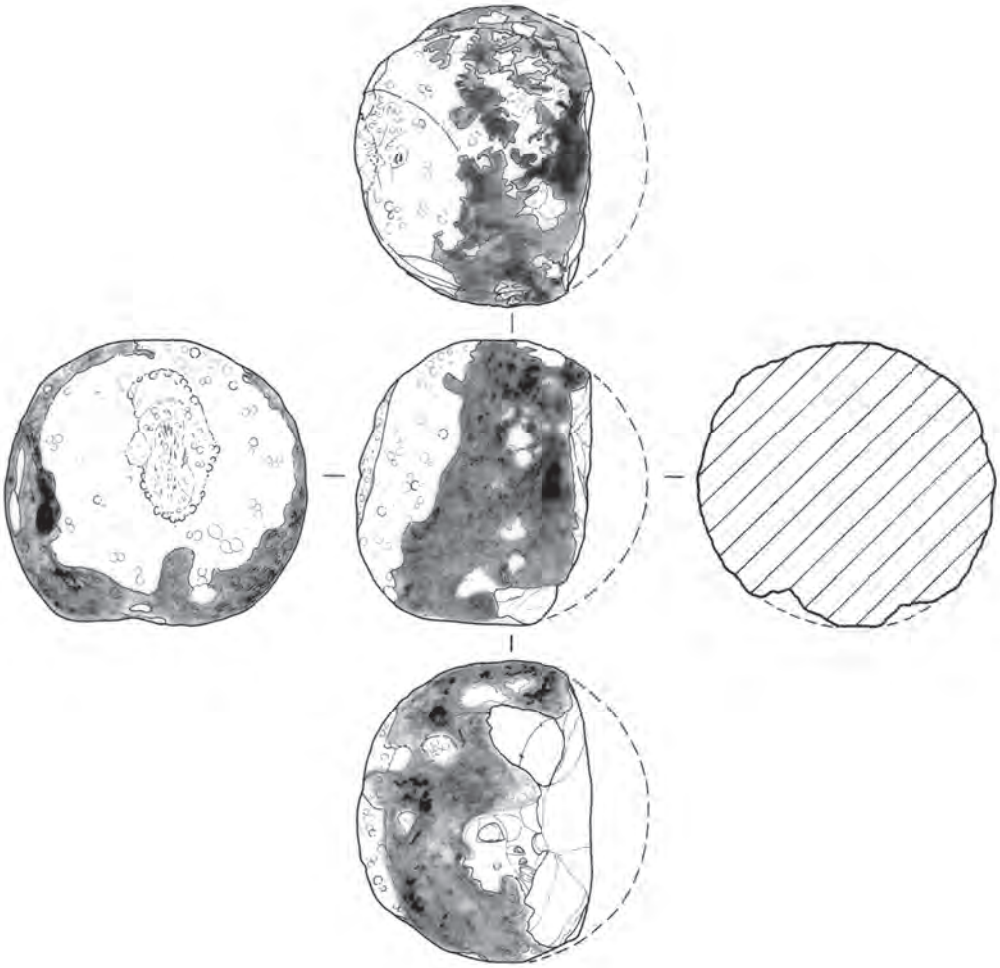
第29表　石積みSA16（D･F地点）　石器観察一覧

単位：cm/kg

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	観察事項	出土地点 出土層
第19図 図版11 1	石弾	細粒砂岩（俗称：ニービヌフニ）製の歪な球体状の石弾で、横断面が隅丸台形状を呈し、縦断面は歪な半円形状となる。投石機や大型の石火矢（大砲）などから打ち込まれた石弾とみられる。表面から裏面までを囲繞する帯状（幅4.5～6.9㎜）の煤が付着することなどから石弾に布などを巻き付けて引火性の高い油などを浸して火を付けて使用したか、或いは筒から発射する際の火薬による煤などが想定される。各面に敲打を加えて球体状に成形するが、敲打調整は裏面と側面の敲打が徹底せず一部の面は平坦な面となる。その他に表面中央寄りと右側面は、着弾した際に器面の一部が剥離した浅い窪みがみられる。右側面には石灰分が付着している事から右側面が下位の状態で埋没したようである。残存長軸：12.2㎝、残存短軸11.0㎝、残存厚：9.6㎝、残存重量1.83kg。	B-15･16 SA16 北側 栗石内 第3層
〃 〃 2		手頃な琉球石灰岩を球体状に敲打調整で製作した石弾で、裏面が着弾等で破損した面となる。正面の下位は歪な平坦面となる。投石機や大型の石火矢（大砲）などから打ち込まれたとみられる。表面から裏面の外周縁まで煤で帯状（残存幅5.5～7.0㎜）となる。帯状の煤は部分的に油のタール様（アスファルトの様な物質？）に黒く煤が固着する。石弾に布などを巻き付けて引火性の高い油などを浸して火を付けて使用したか、或いは火薬による煤などが想定される。各面に敲打を加えて球体状に成形するが、敲打調整で正面及び左側面、上位と下位の面を調整するが敲打は徹底せず一部の面は歪な平坦な面となる。その他に左側面や外周面の一部にある窪みは自然に発生した割れ様の節理や空洞がある。右側面の破損の色調は、本来乳白色となるが火熱によって破損面が赤く変色している。火熱による変色の範囲は帯状の煤とほぼ一致する。残存長軸：13.3㎝、残存短軸12.7㎝、残存厚：10.4㎝、残存重量2.295kg。	B-15･16 SA16 北側 栗石内 第3層



1



2

第 19 図　石積み SA16（D･F 地点）出土品⑤　石器：1･2

第30表　石積みSA16（D･F地点）　金属製品・鍛冶関連出土状況

種類 ＼ 層序						B-15･16											合計
						SA16											
						D･F地点	D地点			南側（F地点）				北側	北側トレンチ		
						覆土	栗石直上の覆土	栗石内第4層	遺構内栗石第4層	覆土	覆土（階段部分）	第1層（客土）	栗石内第4層	栗石内第3層	客土（クチャ）	第4層	
金属製品	工具類・生産用具	丸釘	完形	中	鉄			1		2	2		1				6
				小	鉄	2											2
			先端部欠損	小	鉄								1				1
			頭部欠損	不明	鉄					2							2
			先端+頭部欠損	中	鉄						2						2
		角釘	完形	中	鉄		1		1								2
				小	鉄		3										3
			先端部欠損	不明	鉄		3			1							4
			頭部欠損	中	鉄								2			1	3
				不明	鉄		4							5			9
			先端＋頭部欠損	中	鉄						1	1					2
				不明	鉄		4							7			11
		釘（形状不明）	頭部欠損	小	青銅									1			1
			先端＋頭部欠損	不明	鉄									1			1
			不明	不明	鉄					6							6
	装身具	簪			青銅							1			1		2
	生活用具	鍋？			鉄								1				1
	武具	八双金物			青銅		1										1
		笠鞐			青銅		1										1
		覆輪			青銅		1				1		1				3
	武器	砲弾片			鉄						8						8
					青銅		1				1						2
	―	動物の遊具か飾り金具			アルミ製						1						1
	分類不明	把手			鉄	1											1
		用途不明			鉄	14					1	3			7		25
合　計						17	19	1	1	11	17	5	6	14	8	1	100
鍛冶関連	羽口							1									1
合　計						0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1

注　釘のサイズは、中:1寸半～5寸まで(3.75㎝～15.75㎝未満)、小:1寸まで(3.75㎝未満)

第31表①　石積みSA16（D･F地点）　金属製品観察一覧

単位:㎜/g

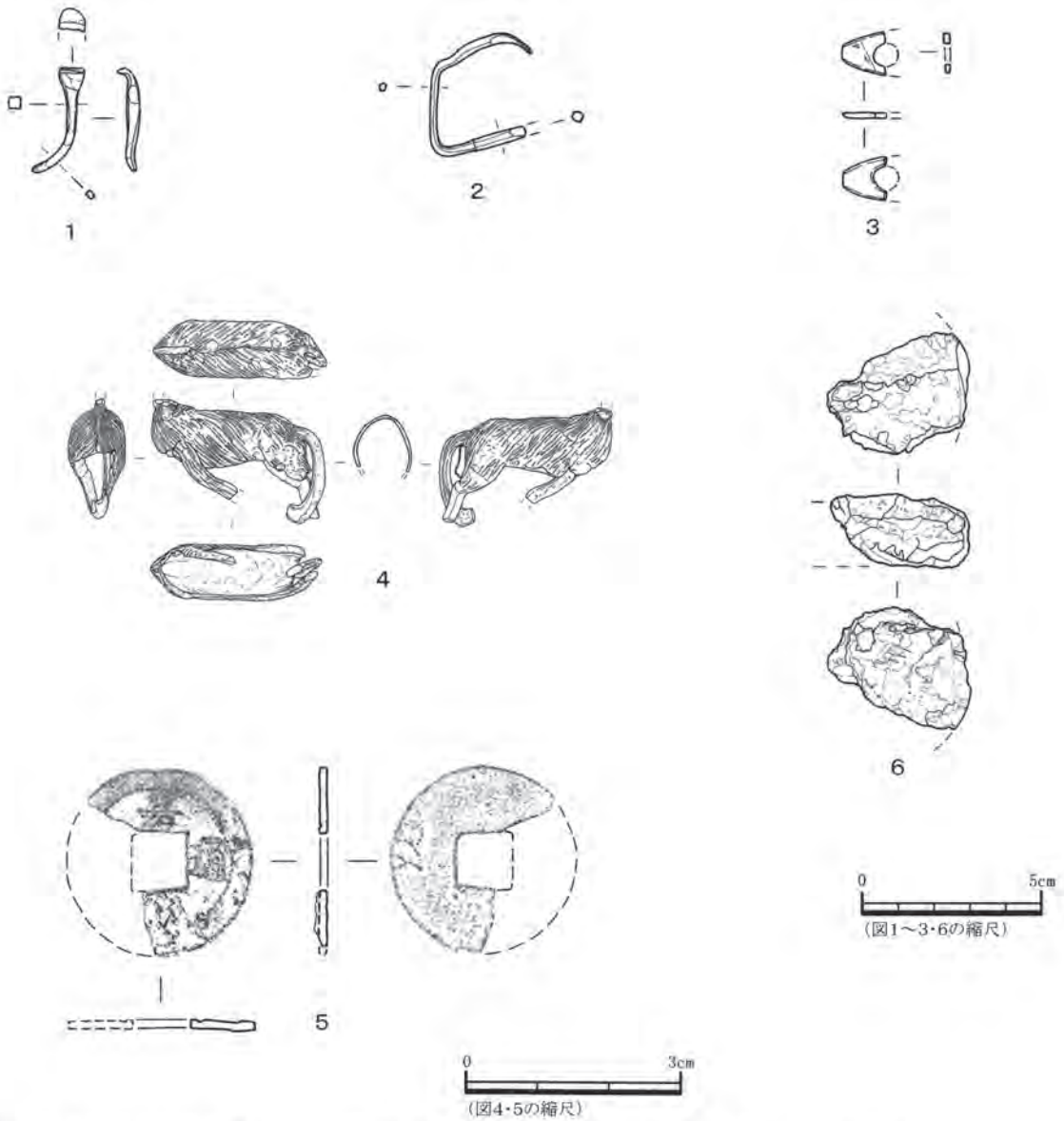
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類・名称		材質	残存長（縦） 残存幅（横）	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観察事項	出土地点 出土層
第20図 図版12 1	工具類・生産用具	釘	青銅製品	29.0 3.75 頭部 横7.71	3.50 1.15 1.7	頭部の大半が欠落した青銅製の皆折釘。身部の下半分から左寄りに湾曲する。釘の先端部の横断面は扁平（縦:1㎜、横:1.6㎜）である。身の先端を尖らせて製作されたようであるが、使用によって先端部が斜位に変形している。右側面の下半部は緑青によって生じた錆で剥離したようである。釘の先端部は緑青によって発生した微細な気泡が多くみられる。	B-15･16 SA16 北側栗石内 第3層
〃 〃 2	装身具	簪		匙状部分 カブ径(a) 3.9 カブ長9.0 竿幅　2.6 残存竿長 84.0	2.92 0.58 2.4	女性用の簪で竿の大半が欠落する。頭部は耳掻き様の匙状で、匙の凸面はヤスリなどの工具によって生じた微細な削り調整痕（線状痕）が縦位方向に緻密に入っている。竿の首の部分から歪な「コ」の字状に折れ曲がっている。竿の横断面は六面構成で、竿の途中から折れている。製作時の緻密な調整痕（線状痕）は竿の所々で観察できる。緑青の影響で部分的に腐食や剥離がみられる。	B-15･16 SA16(F地点) 南側客土 第1層
〃 〃 3	武具	笠鞐		12.0 12.2	2.00 1.12 1.1	鎧の笠鞐の破片で、厚みが1㎜程度と薄造りである。破損の大きな要因となったのは厚みとアンバランスな孔（復元孔径6.5㎜）の大きさであったことが可能性として考えられた。型物成形の笠鞐とみられ表面の縁沿いに鋳型からはみ出した微細に突出したバリが見られる。両面とも部分的に緑青によって発生した錆でケロイド状に爛れる。鍍金は緑青による錆で剥落した可能性が高い。	B-15･16 SA16(D地点) 栗石直上 の覆土
〃 〃 4	遊具	動物の遊具か飾り金具	アルミ製	16.4 25.0	1.27 0.45 2.7	アルミ製の型物で遊具か飾り金具とみられる。尻尾の長いトラなどの動物を型で起こして製作されている。頭部と前足と後ろ足の大半は欠落する。欠落部分は鋳型そのものが薄かったため、鋳造後に当該部分が脆弱となり破損の要因となった可能性が高い。アルミ独特の白色を帯びた腐食が破断面でみられる。	B-15･16 SA16(F地点) 南側覆土 (階段部分)

第31表② 石積みSA16（D･F地点） 銭貨・鍛冶関連観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		観察事項	出土地点 出土層
第20図 図版12 5	銭貨	嘉祐通寶	「嘉」・「通」の字款が確認できる。「祐」の字款がある位置には二次的な火熱を受けて溶解し、ケロイド状となる。背の肉郭の幅は7.5㎜を測り、面の肉郭幅（3㎜）より2倍以上幅広となっているが、肉郭と背の段差は微弱である。鋳造種類：不明。初鋳年：北宋1056年。素材：銅銭。読み方：対読。状態：破損。書体：楷書。肉郭外径：A－、B－。肉郭内径：A－、B－。方穿：E－、F7.62㎜。断面計測部位：①1.23㎜、②0.73㎜、③0.93㎜。重量：2.31g。	B-15・16 SA16 北側トレンチ 第4層
〃 〃 6	鍛冶関連	羽口	土製の羽口破片とみられる。表面に赤紫色のガラス質鉄滓が付着し、鉄滓の厚みは8～9.6㎜を測る。羽口本体の土は火熱を受けて灰褐色に変色し、残存する面は全て微細な多孔質となり、軽石と見紛う程である。残存長：33.0㎜、残存幅：39.0㎜、残存厚：19.0㎜、残存重量：17.4g。	B-15・16 SA16(D地点) 栗石内第4層

第32表 石積みSA16（D･F地点） 二次的火熱溶解銭貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
嘉祐通寶（北宋1056年）	1片	2.31	「嘉」・「通」の二字が残存	B-15・16 SA16 北側トレンチ第4層
至大通寶（元1310年初鋳）	1片	2.00	「大」・「寶」の二字が残存	B-15・16 SA16 北側栗石内第3層
合 計	2			



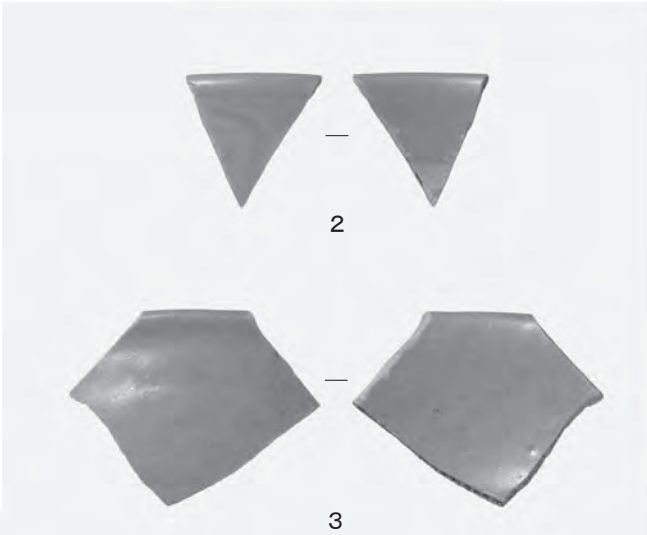
第 20 図 石積み SA16（D･F 地点）出土品⑥ 金属製品：1～4、銭貨：5、鍛冶関連：6

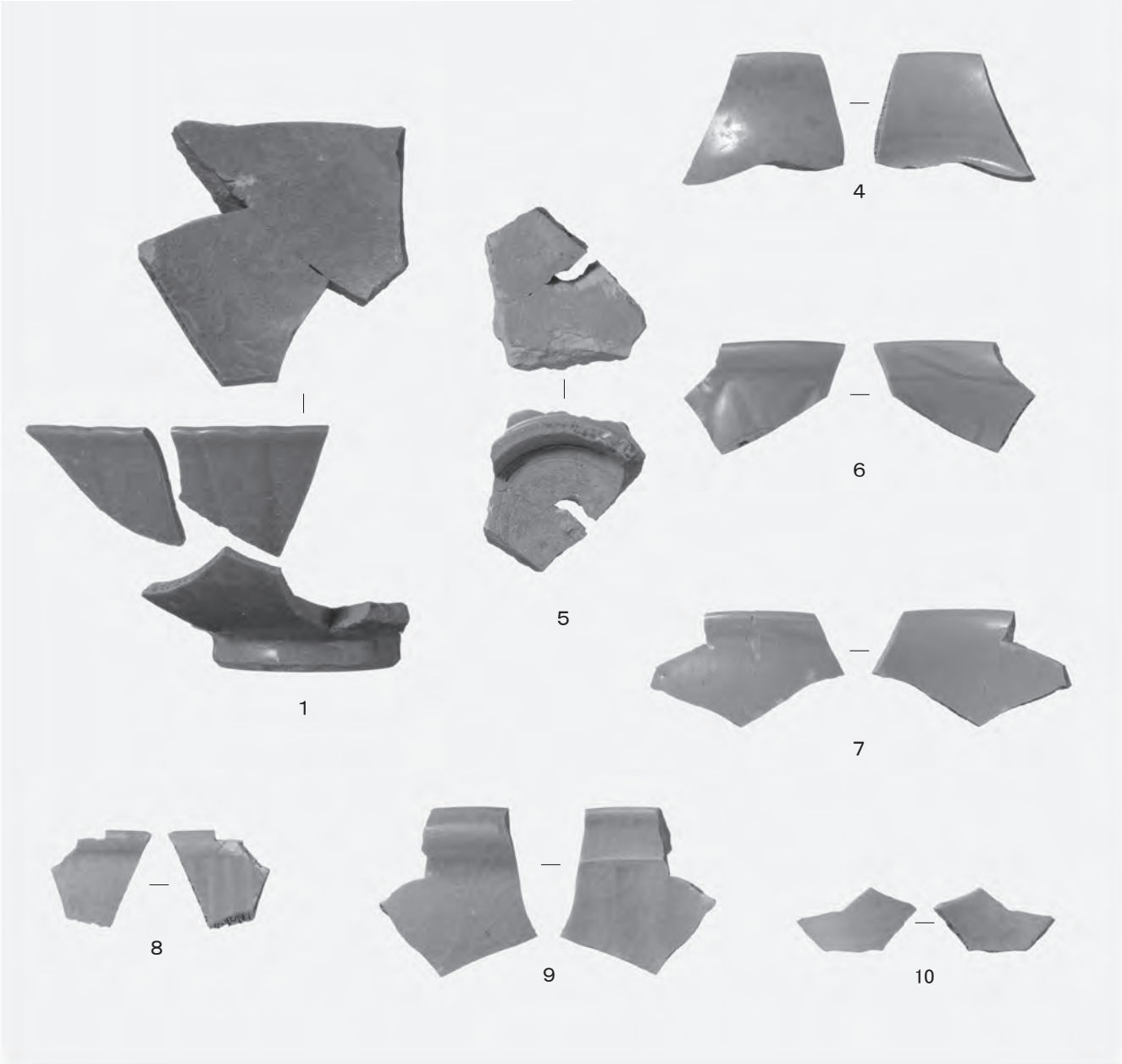
VI期前半

第33表　石積みSA16（D･F地点）　出土遺物状況（図版外）

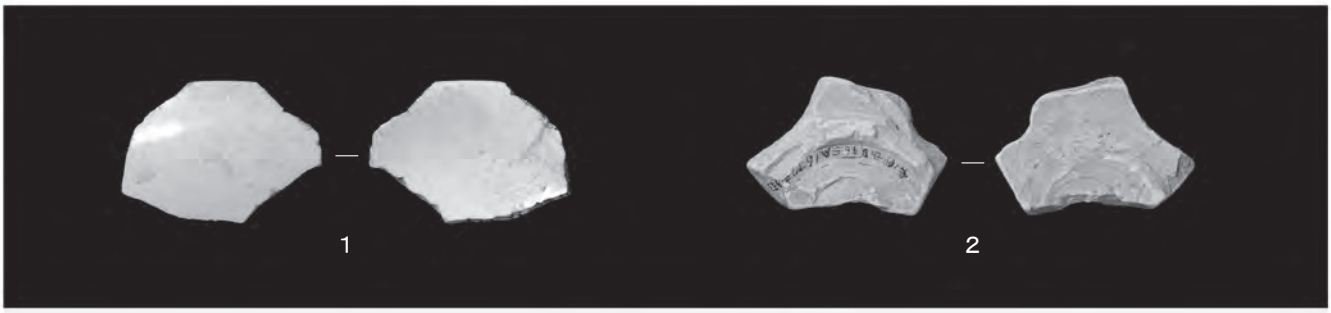
種類・器種・部位 ＼ 層序						B-15･16													合計
						SA16													
						D･F地点	D地点			南側（F地点）				北側	北側トレンチ			石敷内	
						覆土	栗石直上の覆土	栗石内第4層	遺構内栗石第4層	覆土	覆土（階段部分）	第1層d	栗石内第4層	栗石内第3層	客土（クチャ）	第1層	第3層		
屋瓦	高麗系	丸瓦	灰色	漆喰無し							2		2					1	5
			褐色											3					3
		平瓦	灰色	漆喰無し		1	5				2		5	12	1				26
	大和系（古）	丸瓦	灰色	漆喰無し			1						2	2					5
		平瓦	灰色	漆喰無し			3				2		6	2	3	1		1	18
			褐色										1						1
	大和系	雁振瓦	褐色	漆喰無し				1											1
		丸瓦	灰色	漆喰無し							1								1
		平瓦	灰色	漆喰あり（片面）		1			14		5								20
				漆喰無し					4		5		1					1	11
	明朝系	軒丸	灰色	漆喰無し									1						1
			褐色	漆喰無し				1											1
		丸瓦	灰色	漆喰あり（片面）		1					2								3
				漆喰無し		3		2			2		5						12
			赤色	漆喰あり（両面）							1								1
				漆喰あり（片面）		8			1	16	39		2						66
				漆喰無し		1		1		1	10		2						15
		平瓦	灰色	漆喰無し		5		6			4		3						18
			褐色	漆喰無し									4						4
			赤色	漆喰あり（両面）							2							1	3
				漆喰あり（片面）		24		2		11	69		3						109
				漆喰無し		24		5		7	118		7					2	163
合　計						68	9	18	19	35	264	0	44	19	4	1	0	6	487
塼瓦	Ⅱ類	―	灰色	漆喰無し	角1						1								1
	Ⅲ類	Cb	赤色	漆喰無し	角2	1													1
		形状不明a	灰色	漆喰無し	角1						2								2
				漆喰無し	角無し						2								2
			赤色	漆喰無し	角1								1						1
		形状不明b	灰色	漆喰無し	角1								2						2
			赤色	漆喰無し	角無し		1												1
合　計						1	1	0	0	0	5	0	3	0	0	0	0	0	10
黒釉陶器	碗	口縁部	Ⅳ類														1		1
		胴部	―			1	1												2
	小壷	胴部	―									1							1
	茶入れ壷	胴部	―											1					1
合　計						1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	5
本土産磁器	近現	蓋				1													1
		器種不明	胴部										1						1
合　計						1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
本土産陶器	壷	胴部												1					1
合　計						0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
石材	粗加工の石（野面石積みの一部）				琉球石灰岩									1					1
	緑色岩						1												1
	黒色千枚岩										1								1
	細粒砂岩（ニービ）						5			1	1		2	8					17
	石灰岩						1				3								4
自然石	河原石					1					1								2
合　計						1	7	0	0	1	6	0	2	9	0	0	0	0	26
円盤状製品	瓦										1								1
合　計						0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
ガラス製品	瓶	破片						1					3					1	5
	板ガラス	破片				3		4		1	3		5					17	33
合　計						3	0	5	0	1	3	0	8	0	0	0	0	18	38
近・現代	ボタン	青銅											1						1
	ベルトのバックル	真鍮											1						1
合　計						0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2

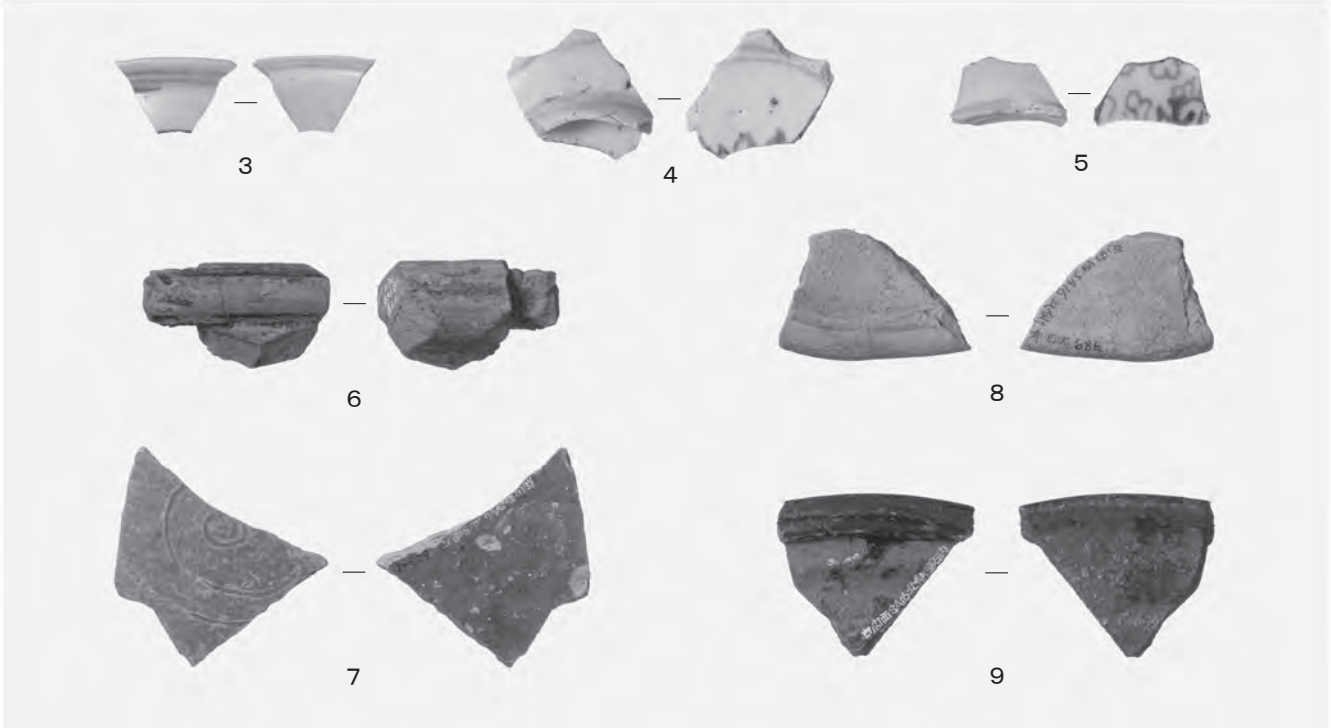
図版7　石積み SA16（D･F 地点）出土品①
土器：1、瓦質土器：2



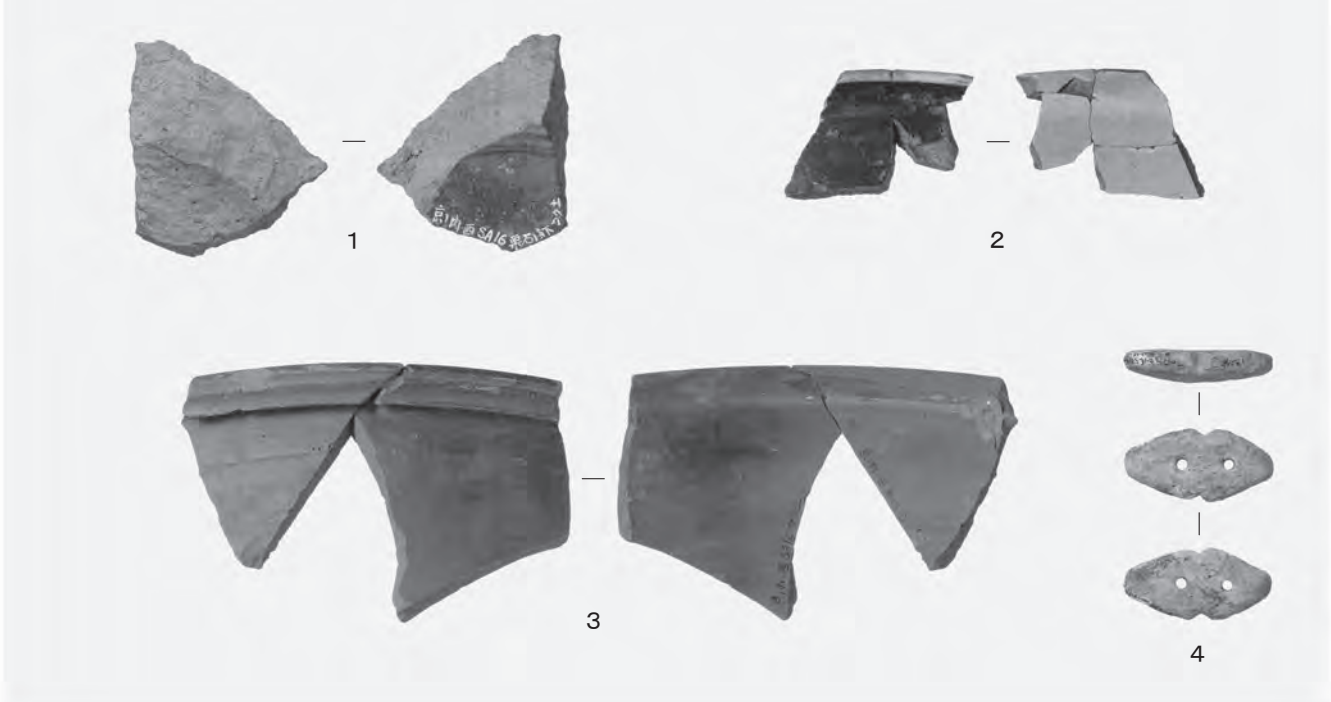


図版8　石積み SA16（D･F 地点）出土品②　青磁：1～10





図版9　石積み SA16（D･F 地点）出土品③　白磁：1･2、青花：3～5、中国産褐釉陶器：6･7
タイ産土器（半練）：8、タイ産褐釉陶器：9



図版 10　石積み SA16（D･F 地点）出土品④　中世陶器：1、沖縄産施釉陶器：2
沖縄産無釉陶器：3、骨製品：4

図版 11　石積み SA16（D･F 地点）出土品⑤
石器：1･2

図版 12　石積み SA16（D･F 地点）出土品⑥
金属製品：1～4、銭貨：5
鍛冶関連：6

（5）溝 SD06-B の出土遺物（第 6 図・第 21 図、図版 13、第 34～36 表）

溝 SD06-B（第 6 図）より出土した遺物の総点数は 164 点（≒100%）を数えた。当該期の他の遺構と同様に沖縄産屋瓦（第 5・34 表参照。高麗系、大和系古瓦、大和系、明朝系を含む）が優位にあり、その点数は 97 点（59.1%）が得られている。これに次いで中国産褐釉陶器の 20 点（12.2%）が出土している。沖縄産屋瓦、中国産褐釉陶器の量的な出土傾向も当該遺構も他の遺構と同様の傾向を示している。これらの沖縄産屋瓦と中国産褐釉陶器の 2 種類以外の遺物の出土量は、当該期に所属するガラス製品（瓶、ビー玉、板ガラスなど）8 点（4.9%）と石器・石製品（石材などを含む）の 8 点（4.9%）及びタイ産褐釉陶器 5 点（3.05%）などの順に減少する。

第34表　溝SD06-B　出土遺物状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						B-16 SD06-B 覆土	排水溝内 第2層a	排水溝内 第2層b	排水溝内 南側栗石内第4層	排水溝内 敷石直下第4層	合計
土器	器種不明	胴部						4			4
合　計						0	0	4	0	0	4
屋瓦	高麗系	丸瓦	灰色	漆喰無し				1	2		3
		平瓦	灰色					2	3		5
			褐色				1				1
	大和系(古)	丸瓦	灰色	漆喰無し				1	2		3
	大和系	平瓦	灰色	漆喰あり(片面)			10				10
				漆喰無し			5			1	6
	大和系(近代のもの)	平瓦	灰色	漆喰無し			1				1
	明朝系	軒丸	赤色	漆喰無し					1		1
		丸瓦	灰色	漆喰あり(片面)			1				1
			赤色	漆喰あり(片面)			10				10
				漆喰無し			2				2
		平瓦	灰色	漆喰無し		1		3	1		5
			赤色	漆喰あり(片面)			12	8	1	4	25
				漆喰無し			17	5	1	1	24
合　計						1	59	20	11	6	97
塼瓦	Ⅲ類	形状不明a	灰色	漆喰無し	角無し		1				1
			赤色	漆喰無し	角無し		1				1
		形状不明b	灰色	漆喰無し	角1			1			1
合　計						0	2	1	0	0	3
青磁	碗	口縁部	外反	無文				1			1
		胴部	無文					1			1
合　計						0	0	2	0	0	2
白磁	碗	口縁部			外反			1			1
		胴部			―			1			1
合　計						0	0	2	0	0	2
黒釉陶器	天目茶碗	口縁部			Ⅷ類			1			1
合　計						0	0	1	0	0	1
中国産褐釉陶器	壺	胴部					6	1	13		20
合　計						0	6	1	13	0	20
タイ産褐釉陶器	壺	肩部					1				1
		胴部					1		1	1	3
		底部							1		1
合　計						0	2	0	2	1	5
本土産磁器	近現	円筒形容器	口縁部						1		1
合　計						0	0	0	1	0	1
沖縄産無釉陶器	擂鉢	口縁部						1			1
	器種不明	胴部					2	2			4
合　計						0	2	3	0	0	5
石製品	砥石兼叩き石						1				1
	遊具or碁石							1			1
合　計						0	1	1	0	0	2
石材	細粒砂岩(ニービ)						1				1
自然石	河原石						4		1		5
合　計						0	5	0	1	0	6
金属製品	工具類・生産用具	丸釘	完形	中	鉄			1			1
	武具	蛭巻or帯取金具			青銅			1			1
	武器	弾丸			青銅			1			1
	分類不明	用途不明			青銅			2			2
合　計						0	0	5	0	0	5
ガラス玉	Ⅱ類				濃青色			1			1
合　計						0	0	1	0	0	1
ガラス製品	瓶							1			1
	ビー玉							1			1
	板ガラス						3	1			4
	不明							2			2
合　計						0	3	5	0	0	8

注　釘のサイズは、中:1寸半～5寸まで(3.75㎝～15.75㎝未満)

第35表　溝SD06-B　二次的火熱溶解銭貨

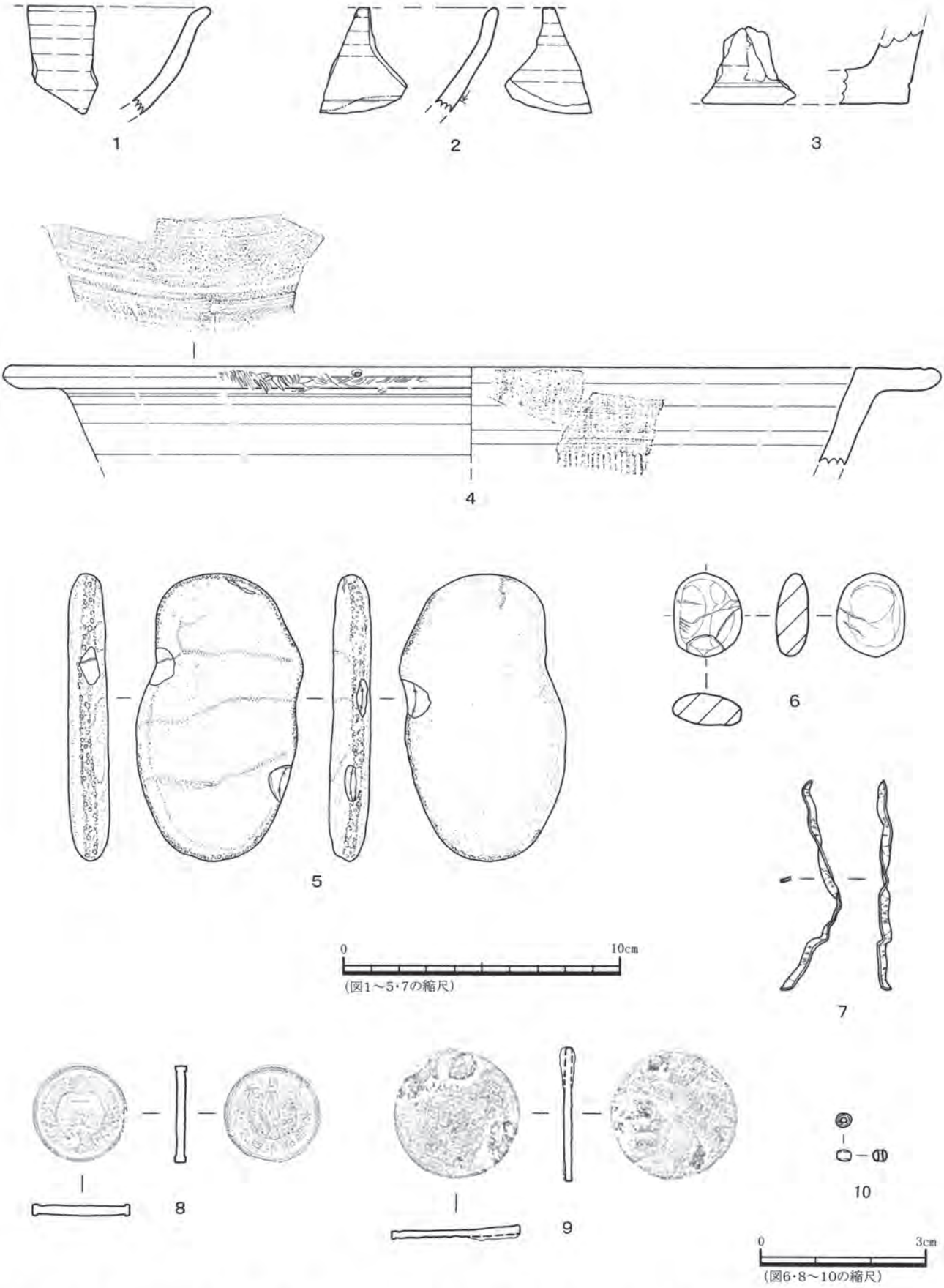
銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
一銭	1枚	0.90	完形	B-16　SD06-B　排水溝内第2層b
十銭	1枚	0.03	完形	B-16　SD06-B　排水溝内第2層b
合　計	2			

第36表　溝SD06-B　白磁・黒釉陶器・タイ産褐釉陶器・沖縄産無釉陶器・石器・石製品・金属製品・銭貨・ガラス玉観察一覧

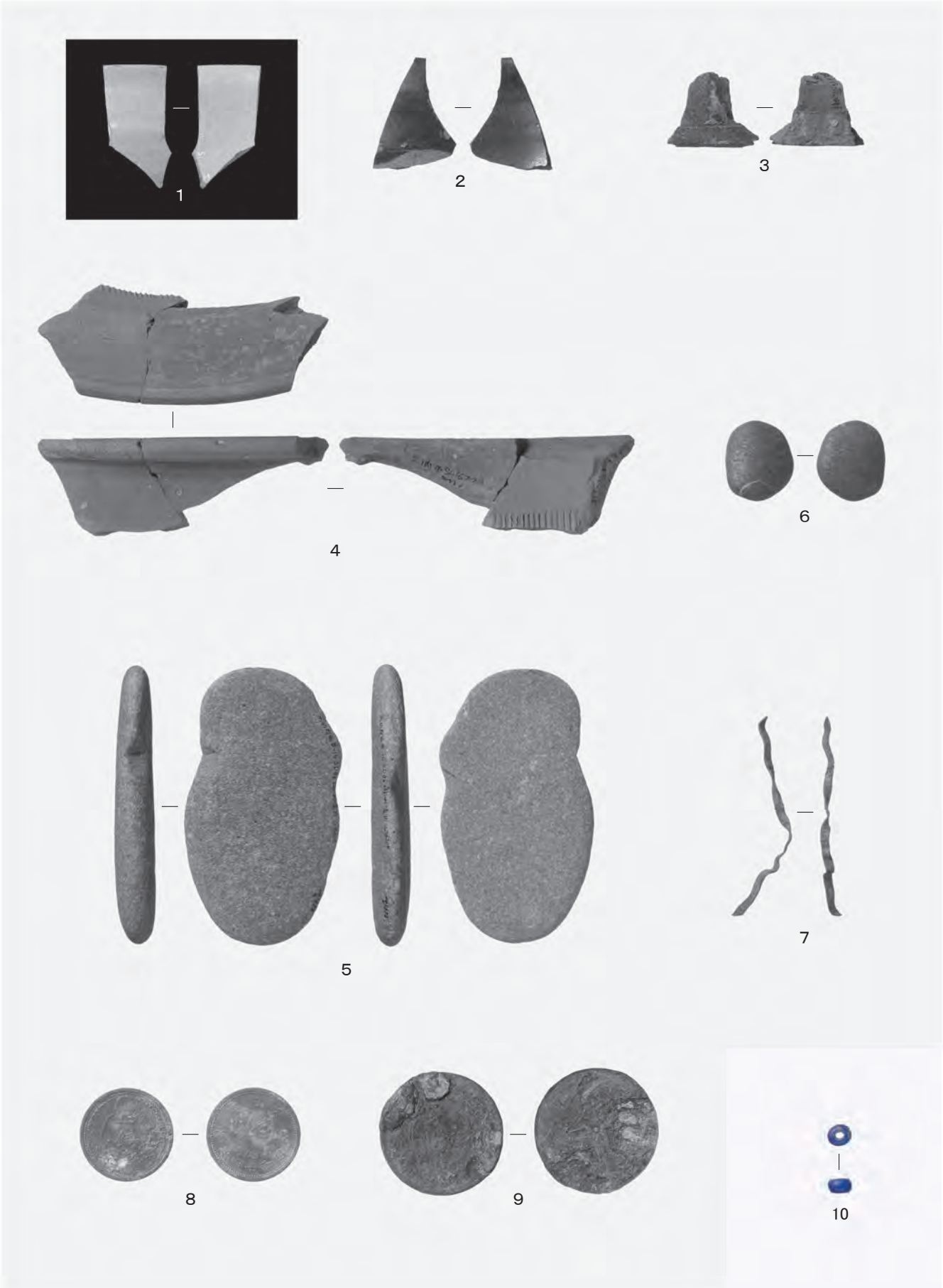
単位：cm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第21図 図版13 1	白磁	外反口縁碗	口縁部	― ― ―	器形：腰上部で丸味を保持したまま口縁近くまで移行し口縁部で厚みを減じながら外反する碗。文様：なし。器面調整：外面は釉上からも轆轤痕が顕著にみられる。素地：半磁胎で脆弱。黄白色の細粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。釉色：黄白色の釉が両面に施されている。福建産。14c後半～15c初頭。	B-16 SD06-B 排水溝南側 栗石内第4層
〃 〃 2	黒釉陶器	天目茶碗	口縁部	― ― ―	器形：口縁分類のⅧ類。腰上部で口縁を内側に軽く折り曲げた後に口縁を直線的に微弱に開かせている。口唇部は丸味を持たせて成形する。文様：なし。器面調整：外面の腰下部は露胎する部分があり、この部分に回転による削り調整がみられる。両面とも釉上からの観察では轆轤痕は顕著である。素地：光沢のある灰白色の細粒子で、微細な黒色や茶褐色の鉱物、石英を多く含む。希に白色の陶土がみられる。釉調：暗茶色の釉が内面から外面の胴下部まで施す。福建省寧徳市飛鸞窯。14c終末～15c。	B-16 SD06-B 排水溝南側 栗石内第4層
〃 〃 3	タイ産褐釉陶器	壷	底部	― ― ―	器形：底面からの立ち上がりは直線的に内側に強く閉じ気味に立ち上がる底部破片。文様：外面の立ち上がりの部分に幅1㎜の棒状の工具で沈線様の傷、若しくは文様とみられるものが確認できる。器面調整：外面は篦削りや篦ナデをナデ消したようであるが徹底しない。内面は微弱に起伏する轆轤痕や回転擦痕がみられる。素地：茶紫色の細粒子で粗細な石英を多く含み、希に細かい茶褐色や黒色の鉱物がみられる。釉色：外面の底部近くに細かい貫入のある黒褐色の釉が垂れている。シーサッチャナライ窯かコーノイ窯。15c。	B-16 SD06-B 排水溝南側 栗石内第4層
〃 〃 4	沖縄産無釉陶器	擂鉢	口縁部	34.0 ― ―	器形：擂鉢の口縁破片。口縁の縦断面は逆「L」字状に屈曲させている。文様：口唇部の外側近くに丸篦（幅2.2㎜）で圏線を浅く施している。内面には6～7本一組の単位の櫛で摺り目を施している。器面調整：外面及び内面の口唇部は回転擦痕で調整されている。内面の胴部（口縁部）まで摺り目を施した後に回転擦痕で消しているが徹底（飛びカンナの目の状態となっている）していない。素地：両面とも明茶色の細粒子で、粗細な石英を主体に石灰質の砂粒が少量みられる。	B-16 SD06-B 排水溝内 床面第2層b
〃 〃 5	石器・石製品	砥石兼叩き石	―	縦10.3 横6.1 厚さ1.46	扁平で手頃な川原石を砥石や叩き石として使用した石器。表裏面とも自然面を砥面として利用したようである。両面とも滑らかな面であるが、裏面は縦方向に微弱に窪んでいることや裏面の縁沿いの一部が摩滅する為、使用頻度は表面よりも高かったようである。外周側面の敲打は表面の上半部（手慣れ様の磨面が両側でみられる）を除いて満遍なくみられる。ホルンフェルス製？。石質：砂岩。重量133.2g。	B-16 SD06-B 排水溝内 第2層a
〃 〃 6		遊具or碁石	―	縦1.5 横1.25 厚さ0.6	歪で小粒な小石を遊具（糸満市字糸満での俗称：シリキッチアカバンチキ。マメ科の硬い種子や小石を石などに擦りつけて加熱させた状態で、皮膚に圧着し紅斑にして遊ぶ事を意味する行為を指す用語。）、若しくは碁石に使用したとみられる。表裏面及び外周側面を研磨で磨き、光沢を帯びている。特に正面の左側面に研磨が集中する磨面で、平面観が直線的な形状となっている。石質：火成岩系の閃緑岩。重量1.892g。	B-16 SD06-B 排水溝内 床面第2層b
〃 〃 7	金属製品	武具	蛭巻or帯取金具	残存長 7.57 残存幅 0.36	薙刀などの刀剣類の柄や鞘などを緊縛して締めた蛭巻金具や帯取金具とみられる。薄板を帯状に切り落として両端が噛み合うように斜位に加工し、リング状に仕上げられたものが外れて蛇行状に延びきった状態となっている。表裏面とも緑青がみられる。材質：青銅。残存最大厚：1.15㎜、残存最小厚：0.90㎜、重量：2.1g。	B-16 SD06-B 排水溝内 床面第2層b
〃 〃 8	銭貨	一銭	―	重量 0.90	昭和14年の字款がある「一銭」硬貨。面の一部は地金が浸食（白色を帯びる）して欠損する。背や外周縁面も白く変色する部分がみられる。	B-16 SD06-B 排水溝内 床面第2層b
〃 〃 9		二十銭？	―	重量 3.71	表裏面とも緑青による錆瘤及び錆膨れの破裂や浸食などにより鋳造年や文様などが判然としない。サイズなどから類似する銭貨は、明治3年と同4年に発行された旭日竜20銭が考えられた。	B-16 SD06-B 排水溝内 床面第2層b
〃 〃 10	ガラス玉	Ⅱ類	―	重量 0.025	上面観が楕円形となる小玉。巻き付け技法で製作されている。上面も丁寧に仕上げ巻き付けの痕跡を示す部分は僅かに観察できる程度である。また、上位と下位の孔周辺の切り離しの際の痕跡であるバリは除去され僅かに剥離痕が観察できる程度である。色調：濃青色を帯びる。素材：ガラス。製作技法：巻き付け。長軸：2.99㎜、短軸：2.70㎜、厚さ：1.85㎜、孔径：最大0.31㎜、最小0.25㎜。	B-16 SD06-B 排水溝内 床面第2層b

注「―」：計測不可



第 21 図　溝 SD06-B 出土品　白磁：1、黒釉陶器：2、タイ産褐釉陶器：3、沖縄産無釉陶器：4
石器・石製品：5･6、金属製品：7、銭貨：8･9、ガラス玉：10



図版 13　溝 SD06-B 出土品　白磁：1、黒釉陶器：2、タイ産褐釉陶器：3、沖縄産無釉陶器：4
石器･石製品：5･6、金属製品：7、銭貨：8･9、ガラス玉：10

（6）石積み SA22 の出土遺物（第 6 図・第 22 図、図版 14、第 37～39 表）

石積み SA22（第 6 図）から出土した遺物の総数は、144 点（≒100%）を数えている。当該期の他の遺構と同様に沖縄産屋瓦（第 5・37 表参照。高麗系、大和系、明朝系を含む）の出土が目立っている。その数は 61 点（42.3%）を数える。これに次いで多いのが中国産褐釉陶器の 21 点（14.6%）の出土がある。以下、近現代の釘 3 点を含む金属製品が 12 点（8.3%）、近現代の板ガラスであるガラス製品 9 点（6.2%）、中国産青磁 7 点（4.8%）・タイ産褐釉陶器 7 点（4.8%）・沖縄産無釉陶器 7 点（4.8%）、沖縄産瓦質土器 5 点（3.4%）などの順に減少する。

第37表　石積みSA22　出土遺物状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						B-15 SA22 覆土	栗石内	畦覆土	第1層a	第3層b	東側 第1層a	東側 栗石内第1層a	西側 第3層b	西側 第7層	合計
土器	器種不明	胴部									3				3
合　計						0	0	0	0		3	0	0	0	3
陶質土器	火炉	口縁部										1			1
合　計						0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
瓦質土器	蓋	―				4							1		5
合　計						4	0	0	0		0	0	1	0	5
屋瓦	高麗系	軒平	灰色	漆喰無し			1								1
		丸瓦	灰色	漆喰無し					1						1
	大和系	雁振瓦	褐色	漆喰無し					1						1
	明朝系	丸瓦	褐色	漆喰無し			1								1
			赤色	漆喰あり(片面)								4			4
				漆喰無し								1			1
		平瓦	灰色	漆喰無し					4			2			6
			褐色	漆喰無し			1								1
			赤色	漆喰あり(片面)					10			3			13
				漆喰無し			2		23			7			32
合　計						0	5	0	39		0	17	0	0	61
青磁	碗	口縁部	直口	蓮弁	線彫り							1			1
			外反	無文			1					1			2
		胴部		線彫り								1			1
				無文					2						2
	皿	口縁部	口折	蓮弁	線彫り			1							1
合　計						0	1	1	2		0	3	0	0	7
青花	碗	口縁部	外反								1				1
		胴部	―				2								2
		底部	―									1			1
合　計						0	2	0	0	0	1	1	0	0	4
中国産褐釉陶器	壷	口縁部	方形状						1						1
		胴部	―			1	3		9			6			19
		底部	―									1			1
合　計						1	3	0	10	0	0	7	0	0	21
タイ産土器（半練）	蓋	端部	Ⅳ類							1					1
合　計						0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
タイ産褐釉陶器	壷	胴部										7			7
合　計						0	0	0	0	0	0	7	0	0	7
沖縄産無釉陶器	壷	把手					1								1
		頸部							1						1
		胴部					5								5
合　計						0	6	0	1	0	0	0	0	0	7
石製品	砥石	細粒砂岩(ﾆｰﾋﾞ)							1						1
	用途不明	細粒砂岩(ﾆｰﾋﾞ)							1						1
合　計						0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
石材	細粒砂岩(ﾆｰﾋﾞ)								2						2
合　計						0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
金属製品	工具類・生産用具	丸釘	完形	中	鉄				1						1
			頭部欠損	中	鉄				2						2
		角釘	先端部欠損	中	鉄		3								3
			頭部欠損	不明	鉄				3						3
			先端＋頭部欠損	不明	鉄				2						2
	武具	八双鋲			青銅		1								1
合　計						0	4	0	8	0	0	0	0	0	12
ガラス玉	Ⅳ類	青色												1	1
合　計						0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
ガラス製品	板ガラス								9						9
合　計						0	0	0	9	0	0	0	0	0	9

注　釘のサイズは、中:1寸半～5寸まで(3.75㎝～15.75㎝未満)

第38表　石積みSA22　二次的火熱溶解銭貨

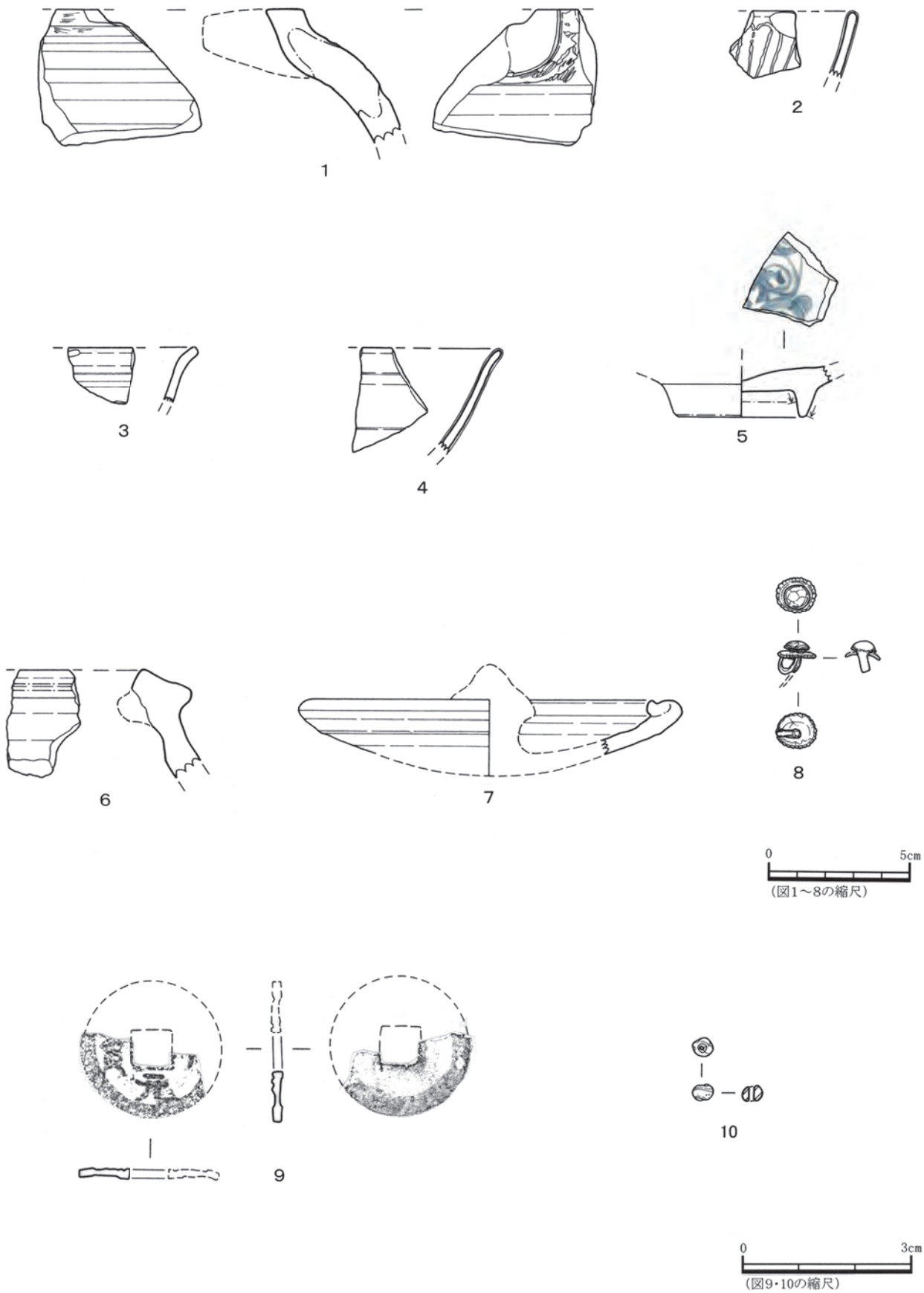
銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
至和元寶or紹熙元寶or大宗元寶	1枚	1.74	「元」・「寶」の二字が残存	B-15　SA22覆土
合　計	1			

第39表　石積みSA22　陶質土器・青磁・青花・中国産褐釉陶器・タイ産土器（半練）・金属製品・銭貨・ガラス玉観察一覧

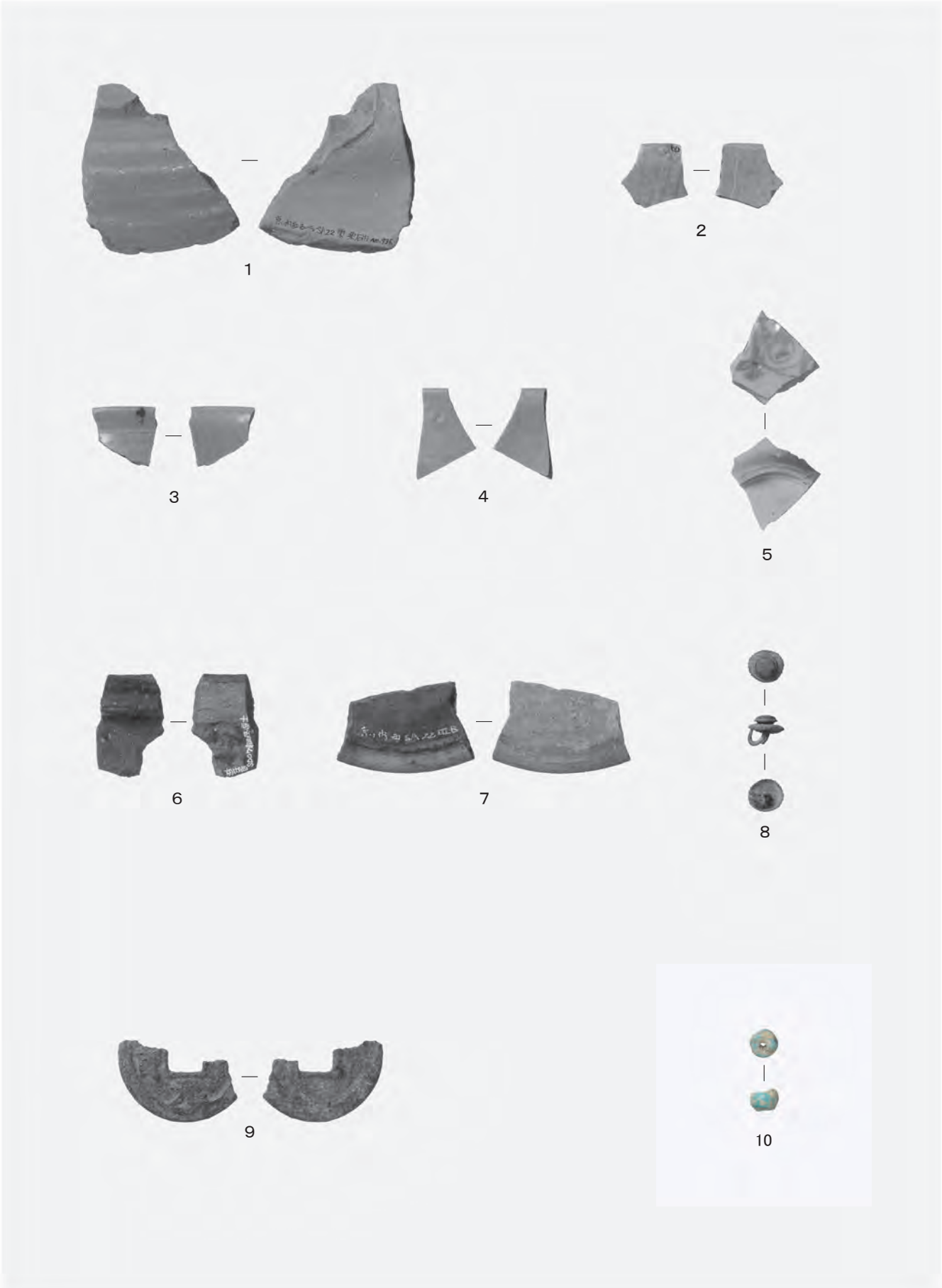
単位：cm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第22図 図版14 1	陶質土器	火炉	口縁部	― ― ―	器形：側面観がボール状に丸味を帯びた火炉で、口縁内面に急須などを受け止める為の突起が貼り付けられていたものが、根元から折れている。外面口縁部の縦断面は直線的で内側に内傾気味に成形されている。口唇部は幅広（幅10.9㎜）に平坦に仕上げている。器面調整：外面は回転篦削りを主体とし、口頸部にナデが観察できる。口唇部は篦削りをナデ消すが消えきっていない。内面は丁寧な回転擦痕がみられる。把手を取り付けた部分は雑な指ナデが弧状に施されている。素地：明橙色（明るい煉瓦色）の粗粒子で、粗細な石英を主体に微細な黒色鉱物や粗い茶褐色の鉱物、細かい雲母片がみられる。色調：外面は明茶色を主体とし、僅かながら白化粧土の付着がみられる。内面が明橙色を帯びる。焼成は良好で硬い。	B-15 SA22 東側栗石内 第1層a
〃 〃 2	青磁	碗	口縁部	― ― ―	器形：細蓮弁文碗。直口口縁で口唇部を丸味を持たせて成形する。文様：外面に線彫りで間隔の狭い弁軸を描き、弁軸に合わせて半円形の弁先を描いている。素地：光沢のある灰白色の微粒子。釉色：両面に淡青緑色の釉を施す。貫入：両面に細かい貫入がみられる。龍泉窯系。15c後半～16c。	B-15 SA22 東側栗石内 第1層a
〃 〃 3				― ― ―	器形：薄造りの無文外反口縁碗。文様：なし。素地：淡灰色の粗粒子で、微細な黒色鉱物と粗い石英を少量含む。釉色：両面に透明な灰緑色の釉を施す。貫入：両面に細かい貫入がみられる。泉州窯系。14c後半～15c前半。	B-15 SA22 栗石内
〃 〃 4				― ― ―	器形：薄手の無文外反口縁碗。文様：なし。素地：淡灰白色の粗粒子で、微細な黒色や白色の鉱物を多く含んでいる。釉色：両面に黄緑色の釉がみられる。細かい貫入が両面でみられる。中国南部の窯。14c終末～15c前半。	B-15 SA22 東側栗石内 第1層a
〃 〃 5	青花	碗	底部	― ― 4.6	器形：見込みの中央部を深く窪ませて成形した碗の高台破片。文様：見込みに渦花文を濃青色の呉須で描いている。素地：淡灰白色の微粒子。釉色：淡青白色の釉を両面に施すが、畳付から高台内面途中までは露胎となる。景徳鎮窯。15c前半～中葉。	B-15 SA22 東側栗石内 第1層a
〃 〃 6	中国産褐釉陶器	壷	口縁部	― ― ―	器形：口縁部の縦断面が歪な隅丸方形状となる怒り肩タイプの壷であるが、内面口縁の肥厚部を欠損する。轆轤調整が顕著である。文様：なし。素地：灰色の粗粒子で、粗細な石英を多く含み、希に細かい茶褐色や黒色の鉱物がみられる。石英の粗いものは直径2㎜を測るものがある。釉色：黒味の強い茶褐色の釉が両面でみられるが、口唇部外端近くは施釉が薄く露胎となる部分がみられる。中国南部の窯。15c～16c。	B-15 SA22 第1層a
〃 〃 7	タイ産土器（半練）	蓋	端部	端部径13.6 高さ(3.9)	蓋縁分類のⅣ類。残存する破片の形状（器壁の厚さや端部形態など）から宝珠形で推定復元を試みたところ器高が3.9㎝を求めた。器形：蓋縁近くの陶土を折り返して内面口縁に肥厚を造り、肥厚部の上端を尖らせている。器面調整：外面は轆轤目様の微弱な起伏とナデや指圧がみられる。内面は丁寧なナデ調整で仕上げている。素地：灰黒色の粗粒子で、粗細な石英と細かい茶褐色や黒色の鉱物がみられる。色調：外面は明橙色で内面が灰黒色を主体に部分的に灰白色を帯びる。焼成は脆く悪い。15c～16c。	B-15 SA22 第3層b
〃 〃 8	金属製品	武具	八双鋲	鋲頭 1.22 鋲身 0.28 座高 0.25 座幅 1.38 重量 2.0	鎧の化粧板に金具を固定する際に使用した八双鋲。鋲は半円形の丸頭で、身は二股となるが一部は欠落する。鋲下には素文で薄造りの鐶（直径9.2㎜、厚さ0.3㎜）が密着している。その素文の鐶の下には菊座金具が組み合わされている。菊座金具の縁は弁先と弁軸を鏨で打ち付けて菊花を表現するが緑青の影響を受けて不鮮明な状況にある。菊座金具の裏面には、3㎜四方の方形状の孔が穿たれ、孔の中に鋲の身部が入った状態にある。緑青によって鍍金が剥離した可能性が高い。材質：青銅。頭部・座金具：（縦）鋲0.81㎝、座1.38㎝、（横）鋲0.78㎝、座1.25㎝。	B-15 SA22 栗石内
〃 〃 9	銭貨	至和元寶or紹熙元寶or大宗元寶	―	重量1.74	「元」・「寶」の字款が残存する。字款の形やバランスなどから北宋銭の至和元寶（初鋳造年1054年）などが考えられたが、最も近似したのが南宋銭の紹熙元寶（初鋳造年1190年）や大宗元寶（初鋳造年1225年）であったが判然としない。面の肉郭（2.7㎜）よりも背の肉郭（4.0㎜）の幅が広い。面・背とも緑青の発生が確認できる。部分的に緑青によって器面の剥落や浸食がみられる。鋳造種類：不明。素材：銅銭。読み方：回読。状態：破損。書体：真書。肉郭外径・内径：―。方穿：E7.23㎜、F―。断面計測：①1.52㎜、②1.07㎜、③1.20㎜。	B-15 SA22 覆土
〃 〃 10	ガラス玉	―	―	重量0.05	ガラス玉分類のⅣ類。側面観は歪な隅丸方形状で、平面観が歪な隅丸五角形となる。巻き付け成形後の切り離した際に生じた微弱な平坦面が残り、この面の側面観や上面観が段差となって現れている。球体面には、器面の剥離が4・5箇所確認でき、一部は茶褐色や灰白色となっている。色調：青色。素材：ガラス。製作技法：巻き付け。長軸：3.42㎜、短軸：3.41㎜、厚さ：1.95㎜、孔径：最大0.58㎜、最小0.25㎜。	B-15 SA22 西側第7層

注　（ ）：推定、「―」：計測不可



第 22 図　石積み SA22 出土品　陶質土器：1、青磁：2～4、青花：5、中国産褐釉陶器：6
タイ産土器（半練）：7、金属製品：8、銭貨：9、ガラス玉：10



図版 14　石積み SA22 出土品　陶質土器：1、 青磁：2～4、 青花：5、 中国産褐釉陶器：6
タイ産土器（半練）：7、 金属製品：8、 銭貨：9、 ガラス玉：10

（7）溝 SD07-A の出土遺物（第 6 図・第 23・24 図、図版 15・16、第 40～43 表）

溝 SD07-A から出土した遺物の総数は、432 点（≒100%）を数えた。当該期の遺構と同じように沖縄産屋瓦（第 5・40 表参照。高麗系、大和系古瓦、大和系、明朝系を含む）の出土量において優勢である。その点数は 276 点（63.8%）である。その次に出土量の多いのが中国産褐釉陶器の 51 点（11.8%）と中国産青磁の 29 点（6.7%）である。これに次いで沖縄産無釉陶器の 19 点（4.4%）、近現代の板ガラスやビー玉などのガラス製品 13 点（3.0%）、金属製品（近現代の釘 5 点を含む）12 点（2.7%）などと順次減少している。なお、ビー玉が 1 点溝 SD07-A から出土しているが当該遺構は首里第一国民学校々舎と平行して設置された溝であることから児童・生徒が持ち込んだビー玉が溝に落ちたものとして考えられるところである。

第40表① 溝SD07-A 出土遺物状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						B-15													合計
						SD07-A													
											東側		東南側				北側		
						覆土	栗石直上第1層	栗石内第2層b	第3層a（灰褐色土層）	排水溝内	覆土	第1層e	第1層（覆土）	栗石内第1層（覆土）	栗石内第2層	栗石内第3層a（灰褐色土層）	第1層（覆土）	第3層a	
瓦質土器	蓋													1					1
合計						0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
屋瓦	高麗系	軒平	褐色	漆喰無し						1									1
		丸瓦	灰色	漆喰無し						6		2							8
		平瓦	灰色	漆喰無し						12		2							14
	大和系（古）	丸瓦	灰色	漆喰無し						2		7							9
			褐色	漆喰無し						1									1
		平瓦	灰色	漆喰無し						10		2		1		1			14
			褐色	漆喰無し								1							1
	大和系	丸瓦	灰色	漆喰あり（片面）								1							1
			褐色	漆喰無し						1		1							2
			赤色	漆喰無し								1							1
		平瓦	灰色	漆喰あり（片面）										1					1
				漆喰無し				1											1
		役瓦	赤色	漆喰無し						1									1
	明朝系	軒丸	褐色	漆喰無し								1							1
		丸瓦	灰色	漆喰無し		2													2
			赤色	漆喰あり（片面）		4				4	2	13		7					30
				漆喰無し								1		2					3
		平瓦	灰色	漆喰あり（片面）		1						1							2
				漆喰無し				3				2							5
			褐色	漆喰無し								2							2
			赤色	漆喰あり（両面）		1													1
				漆喰あり（片面）		24				22		16		5					67
				漆喰無し		36				15	2	40		12		3			108
合計						68	0	4	0	75	4	93	0	28	0	4	0	0	276
塼瓦	Ⅲ類	Ba	赤色	漆喰無し	角無し			1											1
		Bb	灰色	漆喰無し	角1							1							1
		形状不明a	赤色	漆喰無し	角1					1									1
		形状不明b	灰色	漆喰無し	角1							1							1
				漆喰無し	角無し									1					1
			赤色	漆喰無し	角無し					2									2
合計						0	0	1	0	3	0	2	0	1	0	0	0	0	7
青磁	碗	口縁部	直口	蓮弁	線彫り									1			1		2
					片切彫り									1					1
				雷文	片切彫り												1		1
				波頭文										1					1
				無文										1					1
			外反	無文					2			1							3
		胴部	蓮弁	片切彫り		1													1
				線彫り									1						1
			無文					1	1			1		4		1	1		9
		底部	cタイプ	印花文													1		1
	大碗	底部	cタイプ	無文								1							1
	皿	口縁部	外反	無文										1			1		2
		胴部	無文					1											1
		底部	印花文			1													1
			無文						1										1
	盤	胴部	文様不明														1		1
		胴部	無文															1	1
合計						2	0	2	4	0	0	3	1	9	0	1	6	1	29
青白磁	小杯	口縁部										1							1
合計						0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
白磁	小碗	胴部										1							1
	皿	底部												1					1
合計						0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2
青花	碗	底部												1					1
	皿	口縁部												1					1
	器種不明	底部															1		1
合計						0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	3
彩釉陶器	盤	胴部				1													1
	鶴形水注	胴部				1													1
	鸚鵡形水滴	注入排出口				1													1
合計						3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
黒釉陶器	碗	胴部												1					1
合計						0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1

第40表② 溝SD07-A 出土遺物状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						B-15 SD07-A													合計
											東側		東南側				北側		
						覆土	栗石直上第1層	栗石内第2層b	第3層a(灰褐色土層)	排水溝内	覆土	第1層e	第1層(覆土)	栗石内第1層(覆土)	栗石内第2層	栗石内第3層a(灰褐色土層)	第1層(覆土)	第3層a	
中国産褐釉陶器	壺	胴部						2				15		23	1		5		46
	器種不明	胴部										3		2					5
合計						0	0	2	0	0	0	18	0	25	1	0	5	0	51
タイ産炻器	壺	口縁部										1							1
合計						0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
タイ産褐釉陶器	壺	胴部						2				2		2					6
合計						0	0	2	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	6
カムィヤキ須恵器	壺	胴部										1							1
合計						0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
沖縄産無釉陶器	鉢	底部													1				1
	壺	口縁部										1							1
		胴部										1		1					2
	壺or甕	胴部												1					1
	瓶	底部					1												1
	器種不明	胴部					10							1	2				13
合計						0	11	0	0	0	0	2	0	3	3	0	0	0	19
石製品	砥石片	中粒砂岩										1							1
合計						0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
石材	細粒砂岩(ニーピ)							1				1		1					3
合計						0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	3
金属製品	工具類・生産用具	丸釘	完形	中	鉄	1											1		2
			先端部欠損	中	鉄							1							1
			頭部欠損	中	鉄	1						1							2
		角釘	完形	小	鉄												1		1
			先端部欠損	不明	鉄	1													1
			頭部欠損	不明	鉄												1		1
	武具	八双金具			青銅									1					1
	武器	砲弾片			鉄							2		1					3
合計						3	0	0	0	0	0	4	0	2	0	0	3	0	12
ガラス製品	ビー玉															1			1
	板ガラス											6				1	1		8
	器種不明					1						2					1		4
合計						1	0	0	0	0	0	8	0	0	0	2	2	0	13

注 釘のサイズは、中:1寸半～5寸まで(3.75cm～15.75cm未満)、小:1寸まで(3.75cm未満)

第41表 溝SD07-A 二次的火熱溶解銭貨

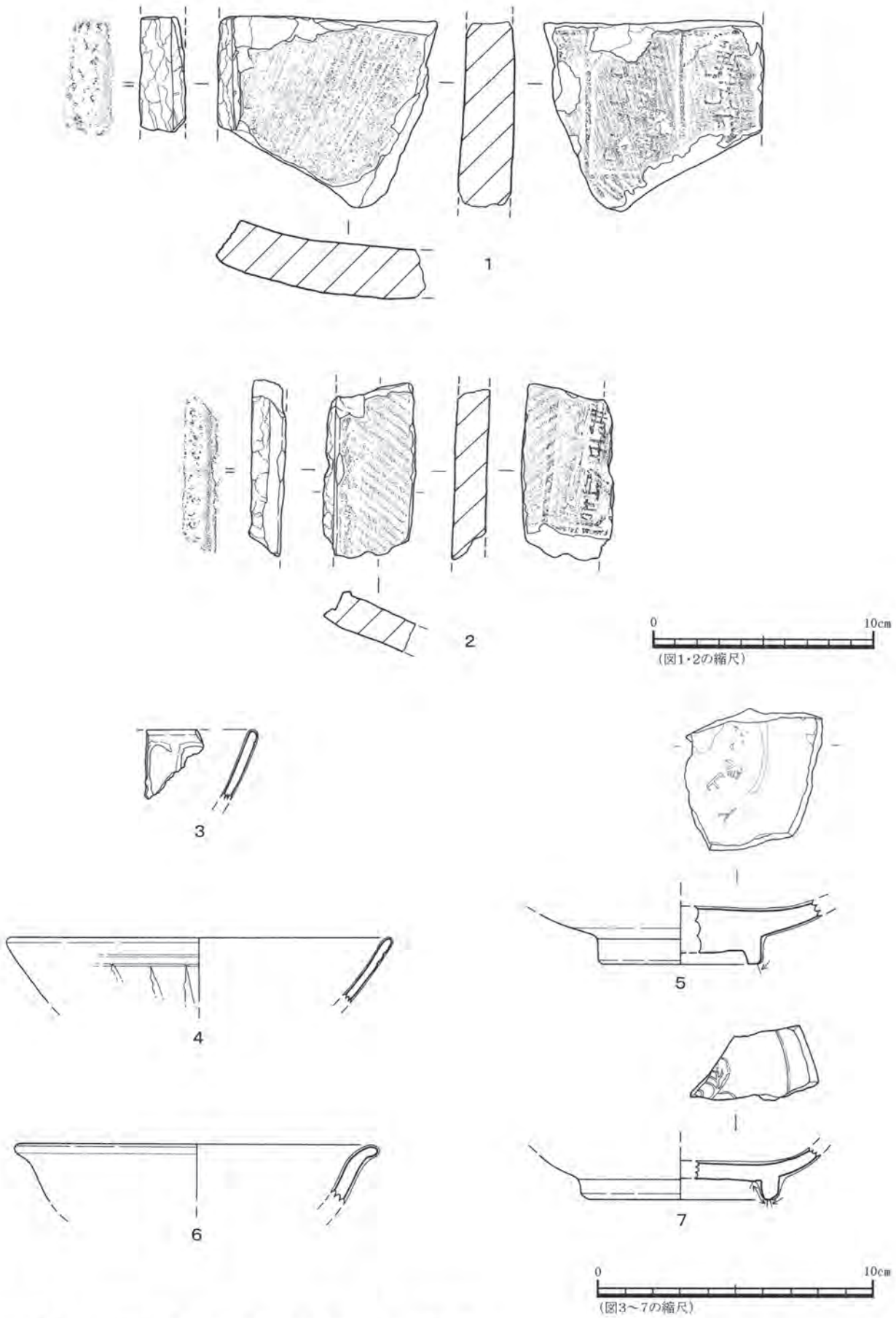
銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
元豊通寶	1片	0.93	「元」・「豊」の二字が残存	B-15 SD07-A覆土
不明銭貨	1片	0.67	「寶」の一字が残存	B-15 SD07-A覆土
合 計	2			

第42表 溝SD07-A 屋瓦・青磁観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第23図 図版15 1	屋瓦	高麗系・平瓦	―	― ― ―	「癸酉年高麗瓦匠造」の在銘瓦片。凸面には、羽状文の打捺と「麗瓦匠」の三文字が明瞭に見られ、文字は重なるが僅かに「高」の文字の一部がみられる。凹面には布目圧痕と右上から左下に走る糸切り痕がみられ、左側面には割面と鎌による切り離しの面が鮮明に残っている。素地:灰白色の細粒子で、粗細な石英や粗い鉱物(茶褐色、灰褐色、黒色)が少量含まれ、僅かに雲母の細片もみられる。色調:凹面は灰白色を主体とし部分的に黒褐色を帯びる。凸面は灰黒色を呈する。焼成は堅緻。	B-15 SD07-A 排水溝内
〃 〃 2			―	― ― ―	「癸酉年高麗瓦匠造」の在銘瓦片。凸面には「麗瓦匠造」の四文字が縦方向に文字が切れた状態で見られる。凹面には布目圧痕と左下から右上に弧状に走る糸切り痕がみられる。左側面には割面と鎌による切り離しの面が鮮明に残っている。素地:灰色の細粒子で、微細な石英を主体に粗い茶褐色の鉱物が少量含まれ、希に雲母の細片もみられる。色調:凹面は灰白色を帯びる。凸面は灰褐色を呈する。焼成は堅緻。	B-15 SD07-A 排水溝内
〃 〃 3	青磁	碗	口縁部	― ― ―	器形:直口口縁碗。口唇部は丸味を持たせて成形。文様:外面に線彫りで蓮弁文の弁軸を描いた後に間隔の開いた半円状の弁先を描いている。素地:灰色の細粒子で、粗細な石英と黒色鉱物を多く含む。劈開面から陶土内の空気が膨張して発生した縦位方向に走る気泡痕が二・三箇所でみられる。釉色:ガラス質の透明釉で黄緑色の釉が両面でみられる。貫入:両面に粗い貫入がみられる。中国南部の窯。15c後半～16c。	B-15 SD07-A 東南側栗石内 第1層(覆土)
〃 〃 4				14.0 ― ―	器形:逆「ハ」の字状に外側に開いた直口口縁碗。口唇部は丸味を持たせて成形。文様:外面に線彫りで蓮弁文の弁軸と弁先を沈線二条で表現して描いている。素地:光沢のある灰白色の微粒子。釉色:淡灰緑色の釉が両面でみられる。貫入:なし。龍泉窯系の窯。15c後半～16c。	B-15 SD07-A 北側第1層 (覆土)
〃 〃 5			底部	― ― 6.0	高台分類Cタイプに近似する。文様:見込みに印花花文と陽圏線が不鮮明ながら施されている。素地:灰色の粗粒子で、粗細な石英を多く含み希に細かい黒色や茶褐色の鉱物がみられる。劈開面から気泡痕と白色の陶土がみられる。釉色:淡黄緑色の釉が内面から外面の高台端まで施釉。畳付から外底面は露胎する。貫入はない。中国南部の窯。14c終末～15c前半。	B-15 SD07-A 北側第1層 (覆土)
〃 〃 6		皿	口縁部	13.2 ― ―	器形:外反口縁皿。文様:なし。素地:灰白色の微粒子。釉色:両面に濃緑色の釉がみられる。貫入:なし。龍泉窯系の窯。14c後半～15c前半。	B-15 SD07-A 東南側栗石内 第1層(覆土)
〃 〃 7			底部	― ― 7.2	皿の高台破片。文様:見込みに陽圏線と印花文(菊か牡丹)。素地:灰白色の微粒子。釉色:内面から外底面まで明緑色の釉を施した後に外底面の釉を掻き取って露胎とする。貫入:なし。龍泉系の窯。14c後半～15c前半。	B-15 SD07-A 覆土

注 「―」:計測不可



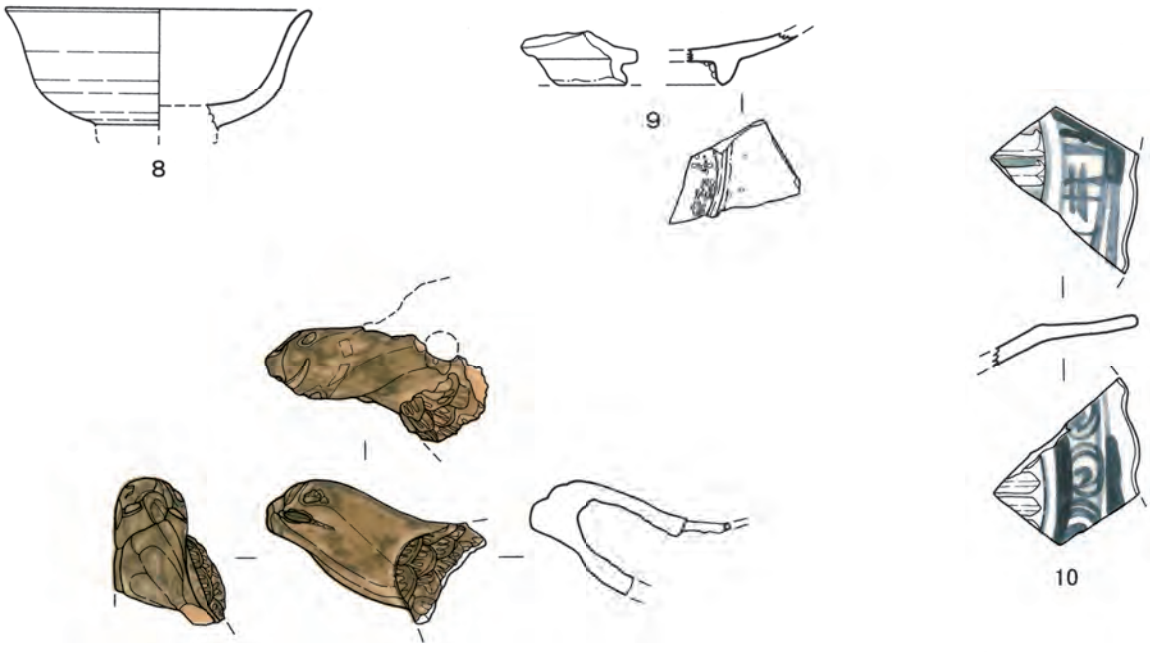
第 23 図　溝 SD07-A 出土品①　屋瓦：1･2、青磁：3～7

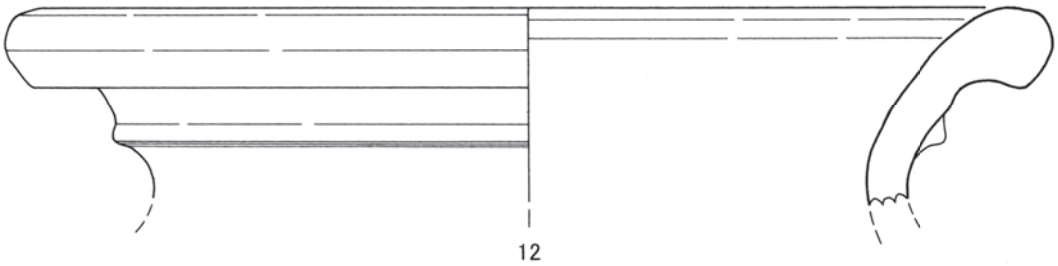
第43表　溝SD07-A　青白磁・白磁・青花・彩釉陶器・タイ産炻器・沖縄産無釉陶器・金属製品・銭貨観察一覧

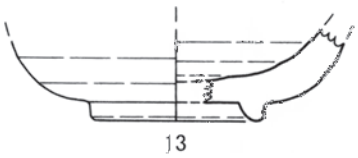
単位：cm/g

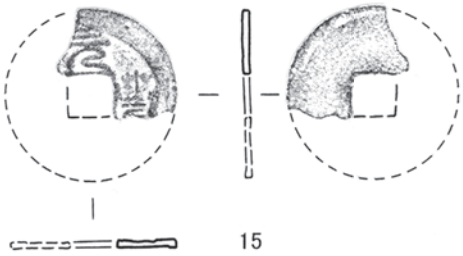
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第24図 図版16 8	青白磁	小杯	口縁部	8.1 － －	器形：轆轤成形で厚手の外反口縁の小杯。文様：なし。素地：光沢のある灰白色の微粒子。釉色：両面に乳白色の釉がみられる。福建産（邵武四都窯）。14c後半～15c前半。	B-15 SD07-A 東側 第1層e
〃 〃 9	白磁	皿	底部	－ － －	畳付を露胎とする皿の高台破片で、高台内面に粗い胎土目の陶土が粟粒状に付着する。文様：なし。素地：光沢のある灰白色の微粒子。釉色：両面に灰白色の釉がみられる。景徳鎮窯。15c後半～16c前半。	B-15 SD07-A 東南側栗石内 第1層（覆土）
〃 〃 10	青花	皿	口縁部	－ － －	器形：口折れの稜花皿。文様：胴部に型押しによる蓮弁文を外面（蓮弁は陰文で弁先が尖る）と内面（蓮弁は陰文で幅広の蓮弁で弁先は無い。）に施し、口縁外面に主文となる「渦巻文」を描き、その上下を雑な二条一組の界線を描いて区画帯とする。内面口縁にも雑な二条一組界線で区画し、区画内に「波濤文」と格子目を省略した「井」の字状の文様が施されている。素地：光沢のある淡灰白色の微粒子で、劈開面からは微細な気泡痕が少量みられる。釉色：淡青白色の釉を両面に施す。貫入は無い。景徳鎮窯。16c前半？。	B-15 SD07-A 東南側栗石内 第1層（覆土）
〃 〃 11	彩釉陶器	鸚鵡形水滴	注入排出口	－ － －	器形：鸚鵡（オウム）形の型物水滴。オウムの型は背と腹の二つ型を合わせて完成させている。内面は雑な指ナデや指圧の他に篦状の工具による雑な成形痕（篦のサイズ：縦1.5㎜、横6.5㎜）がみられる。オウムの首の付け根に液体注入口があり、孔は歪な円形状で外側から穿孔されている。嘴の両側には排出口が2箇所あり、隅丸長方形状の孔（正面より向かって左側の孔は縦2.2㎜、横5.6㎜であった。右側が縦2.3㎜、横5.5㎜を測った。）が外側から穿たれている。文様：基本的に型で起こされている。外面の羽根の部分は陽文であるが、目と口は型抜き後に線彫りで描いたようである。素地：黄白色の細粒子で、粗細な石英と細かい黒色の鉱物を少量含む。釉色：褐色の釉を外面にのみ施し、貫入はない。中国南部（福建・広東）の窯。15c後半～16c。	B-15 SD07-A 覆土
〃 〃 12	タイ産炻器	バンプーン壺	口縁部	27.8 － －	器形：口縁部が外側に大きくラッパ状に開く玉縁口縁の壺。文様：外面の頸上部に断面三角形状の凸帯を貼り付けている。器面調整：外面は剥離して不明。内面も器面の保持が悪いが残存する部分からナデ調整で仕上げたものとみられる。素地：淡灰白色の細粒子で、粗細な鉱物（石英、黒色鉱物、茶褐色の鉱物）を多量に含み、希に雲母の細片がみられる。色調：両面とも灰白色を呈する。焼成：悪く脆い。バンプーン村窯産。15c後半～16c。	B-15 SD07-A 東側 第1層e
〃 〃 13	沖縄産無釉陶器	瓶	底部	－ － 4.6	器形：厚手で腰丸の瓶の高台片とみられる。高台内刳りは丁寧な回転擦痕で仕上げる。高台からの立ち上がりの部分から丸味を持たせながら途中で内側に閉じ気味となる。器面調整：外面は雑な篦削りを主体に部分的にナデ調整がみられる。内面は丁寧な回転擦痕が施されている。素地：茶紫色の細粒子で、粗細な石英を主体に茶褐色の物質が含まれている。その他に細片化した雲母片が目立つ。劈開面から白色や茶褐色の陶土が縞状に観察できる。色調：外面は暗褐色で、内面が暗茶紫色を帯びる。焼成は良好で堅い。	B-15 SD07-A 栗石直上 第1層
〃 〃 14	金属製品	武具	八双金具	重量 0.4	八双金具の座、若しくは調度品の飾り金具。無文で外面に鍍金を施す。側面観が扁平な凸レンズ状で、正面の中央に孔（縦2.3㎜、横2.1㎜）を外側から穿孔する。裏面には緑青の付着がみられる。材質：青銅。残存長：10.5㎜、残存幅：11.0㎜、残存最大厚：0.74㎜、残存最小厚：0.43㎜。	B-15 SD07-A 東南側栗石 第1層（覆土）
〃 〃 15	銭貨	元豊通寶	－	重量 0.93	「元」・「豊」の字款が残存する。背は鋳型の肉郭がズレて二重となる為、孔郭がない。両面とも緑青がみられる。鋳造種類：不明。初鋳年：北宋1078年。素材：銅銭。読み方：回読。状態：破損。書体：篆書。肉郭外径・内径：－。方穿：－。断面計測部位：①0.97㎜、②0.70㎜、③0.91㎜。	B-15 SD07-A 覆土

注　「－」：計測不可

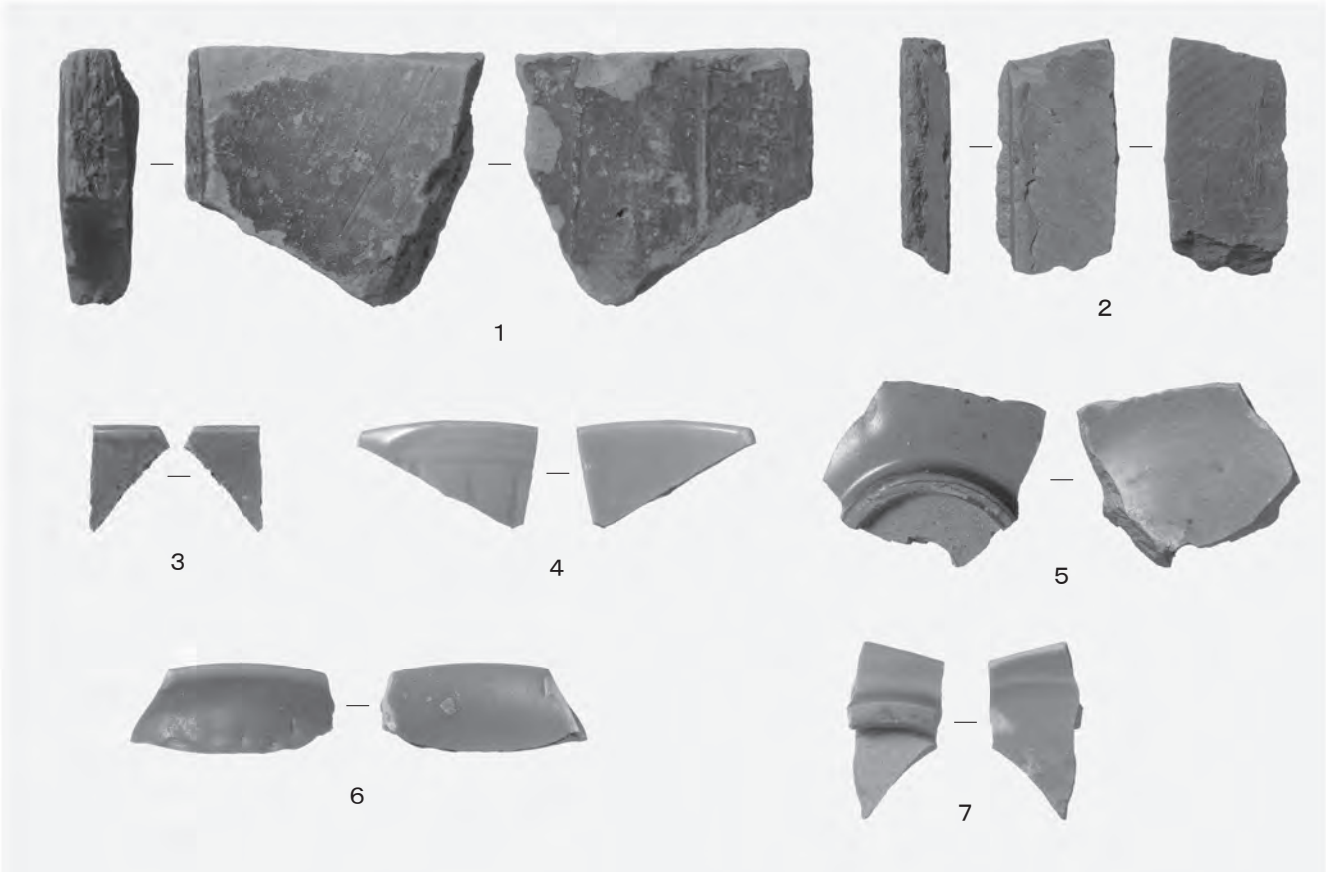




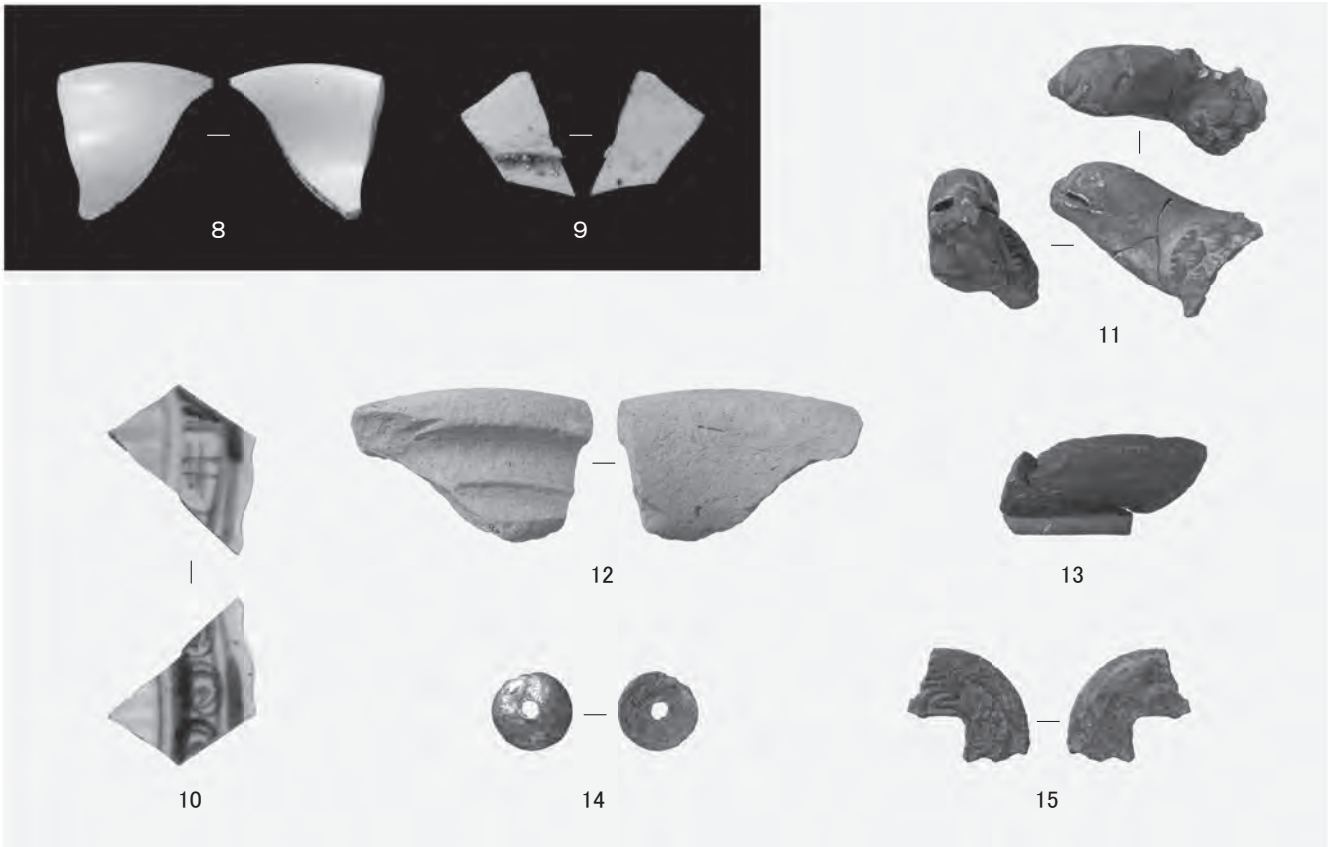




第 24 図　溝 SD07-A 出土品②　青白磁：8、白磁：9、青花：10、彩釉陶器：11、タイ産炻器：12
沖縄産無釉陶器：13、金属製品：14、銭貨：15



図版 15　溝 SD07-A 出土品①　屋瓦：1･2、青磁：3～7



図版 16　溝 SD07-A 出土品②　青白磁：8、白磁：9、青花：10、彩釉陶器：11、タイ産炻器：12
沖縄産無釉陶器：13、金属製品：14、銭貨：15

（８）石敷き SS03-A の出土遺物（第６図）

当該遺構も首里第一国民学校々舎と平行する溝で、溝の底石しか残っていなかった為、遺物の出土はない。

（９）石積み SA02 の出土遺物（第６図・第 25～29 図、図版 17～20、第 44～52 表）

石積み SA02 は首里第一国民学校の便所に伴う石積み遺構である。当該遺構からは第５表のとおり 532 点（≒100%）の遺物が得られている。最も多く出土したのが中国産褐釉陶器の 146 点（27.5%）と全出土量の 1/4 強が得られている。これに次いで金属製品（近現代の釘 1 点と戦前の砲弾破片や薬莢８点を含む）の 96 点（18.0%）と沖縄産屋瓦（第 52 表参照。高麗系、大和系古瓦、大和系、明朝系を含む）の 68 点（12.7%）が続く。そして銭貨 59 点（11.1%）の出土をみるが、当該時期とかけ離れた時期の遺物として金属製品の中には第 48 表にみられる兜鉢の立物飾りや薙刀の逆輪（第 27 図 11）が各 1 点ずつ出土している。残り 54 点が角釘であった。また、銭貨の中には第一尚氏王統の最後の国王であった尚徳が即位した 1461 年鋳造された「世高通寳」（第 29 図 11）が出土していて他の中国銭貨は二次的な火熱を受けて銭貨数枚が溶解固着していることなどからすると第一尚氏（尚徳在位期間の 1461 年～1469 年）から第二尚氏（尚円在位期間の 1470 年～1476 年）への政権抗争の時期に火災で焼失した何らかの建物（今のところ中国産褐釉陶器の出土量からすると倉庫跡などの建物が想定される。）に使用された角釘や建物に保管されていた兜鉢の立物飾り、薙刀の逆輪や銭貨などが廃棄されたと考えられるところである。その他に中国産青磁 35 点（6.5%）、タイ産褐釉陶器 27 点（5.0%）などが出土している。

第44表　石積みSA02　土器・陶質土器・瓦質土器・青磁出土状況

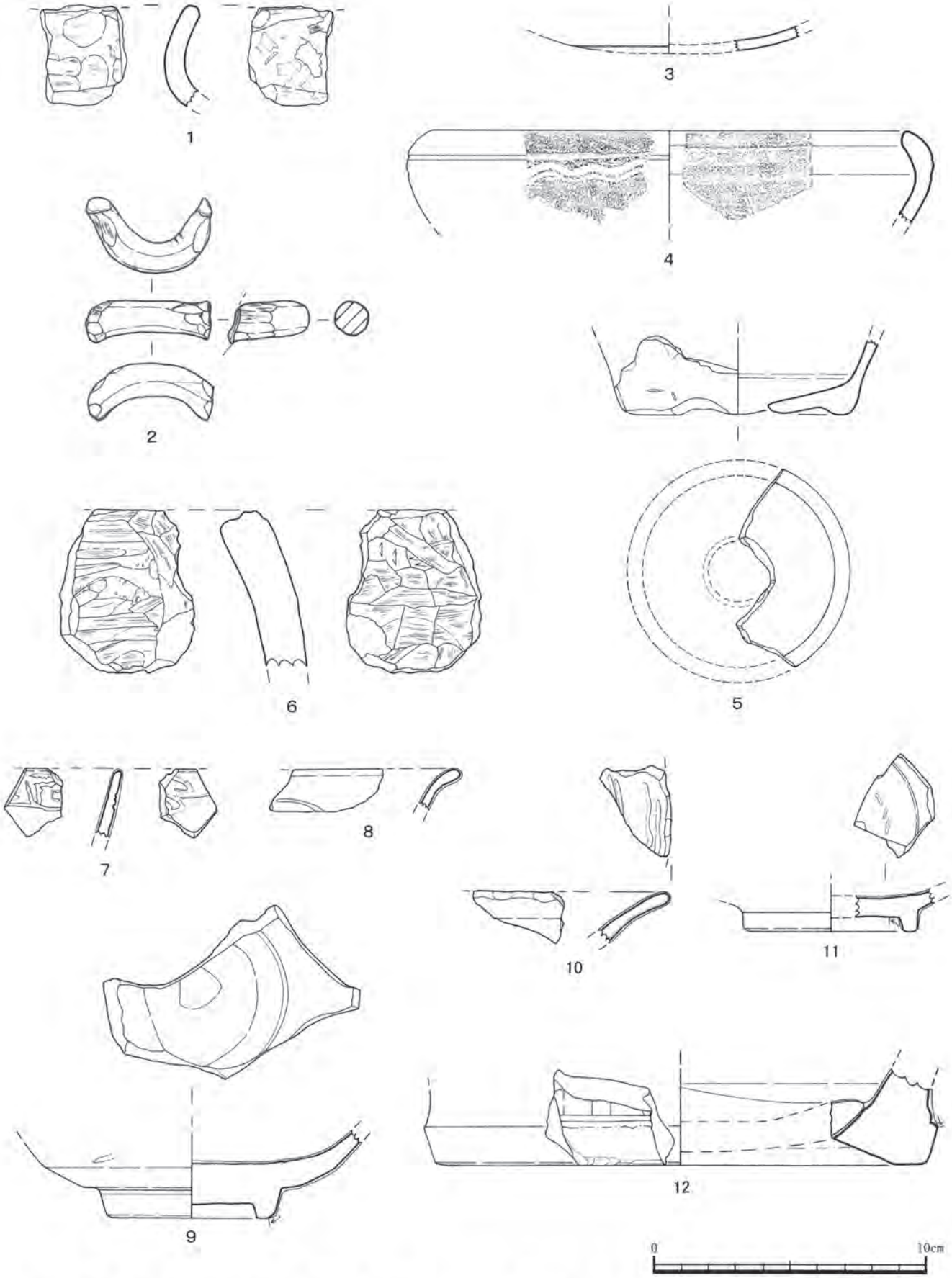
種類・器種・部位 ＼ 層序						B-11 SA02 覆土	B-11 SA02 裏栗内下層(黄褐色土層)第5層	合計
土器	器種不明		胴部			4		4
土器	グスク系	壷	口縁部			1		1
合　計						5	0	5
陶質土器	鍋	口縁部				1		1
陶質土器	鍋	把手				1		1
陶質土器	鍋	胴部				2		2
陶質土器	鍋	底部				1		1
陶質土器	鉢	口縁部				1		1
陶質土器	鉢	胴部				1		1
陶質土器	鉢	底部				1		1
陶質土器	火炉	胴部				1		1
陶質土器	器種不明	胴部				1		1
合　計						10	0	10
瓦質土器	鉢？	口縁部				1		1
瓦質土器	蓋	―				2		2
瓦質土器	器種不明	胴部				1		1
合　計						4	0	4
青磁	碗	口縁部	直口	雷文	片切り彫り	2		2
青磁	碗	口縁部	直口	無文		2		2
青磁	碗	口縁部	外反	ラマ式蓮弁	片切り彫り	1		1
青磁	碗	口縁部	外反	無文		4		4
青磁	碗	胴部	蓮弁		片切り彫り	1		1
青磁	碗	胴部	有文			2		2
青磁	碗	胴部	無文			8	1	9
青磁	碗	底部	cタイプ	無文		1		1
青磁	皿	口縁部	口折	蓮弁	片切彫り	1		1
青磁	皿	口縁部	外反	刻花文		1		1
青磁	皿	口縁部	外反	無文		1		1
青磁	皿	口縁部	稜花	ラマ式蓮弁	線彫り	1		1
青磁	皿	胴部	有文不明			2		2
青磁	皿	底部	印花文			1		1
青磁	盤	口縁部	タガ状鍔縁	文様不明		1		1
青磁	盤	口縁部	口折	文様不明		1		1
青磁	盤	胴部	蓮弁		丸箆	2		2
青磁	盤	底部	文様不明	高台なし		1		1
青磁	酒会壷	底部	蓮弁文		片切り彫り	1		1
合　計						34	1	35

第45表　石積みSA02　土器・陶質土器・瓦質土器・青磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第25図 図版17 1	グスク系土器	壷	口縁部	― ― ―	器形：壷形土器の口縁破片。口唇部に微弱な起伏があり、雑なナデで平坦に仕上げている。器面調整：両面とも指圧調整後にナデで仕上げているが、内面よりも外面は丁寧なナデ調整を加えている。器厚：6.0～7.4㎜を測る。胎土：泥質で細かく、手触りは滑らかである。混入物：微細な鉱物（石英、黒色鉱物）を多く含み、細かい茶褐色の鉱物と雲母片やサンゴ片が僅かに含まれている。色調：外面は淡橙色で、内面が橙白色を帯びる。焼成：良好で堅い。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 2	陶質土器	鍋	把手	― ― ―	器形：土鍋の口頸部に貼り付けられた丸紐状の把手。器面調整：外面は中央部分に丁寧なナデを加え、両端には篦削り後に面を取るようにナデを加えるが削りが消えきっていない。内面には陶土を曲げた際に発生した縦位の皺が全体的にみられる。把手中央部の厚みは、11.7～12.6㎜を測った。胎土：泥質で細かい。混入物：微細な石英を多く含み、細かい黒色鉱物や茶褐色の物質を少量含んでいる。希に微細な雲母片がみられる。色調：橙白色を主体とし、部分的に黄白色を帯びる。焼成：良好で堅い。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 3			底部	― ― ―	器形：土鍋の底部破片で、外底面が煤けている。器面調整：外底面は回転篦削りで仕上げているが、使用によって摩滅し、滑面となっている。内面：雑な刷毛様の擦痕が施されている。器厚：3.5～4.3㎜を測った。胎土：泥質で細かい。混入物：微細な石英を主体に微細な黒色鉱物を少量含んでいる。色調：外底面は暗褐色で、内面が茶白色を帯びる。焼成：良好で堅い。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 4		鉢	口縁部	17.3 ― ―	器形：内彎口縁の鉢で、口唇部を舌状に尖せて成形する。口縁部に篦で界線を描き、その直下に二条一組の櫛で波状文を施している。器面調整：外面は口縁部が水撫でで胴部は篦削り後に擦痕やナデを加えている。内面は丁寧な水撫でを施す。器厚：4.9～8㎜を測る。胎土：泥質で細かい。混入物：粗細な石英と黒色鉱物を多く含み、希に粗い茶褐色の物質（1.5～2.7㎜）がみられる。色調：両面とも淡橙白色を帯びる。焼成は堅緻である。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 5			底部	― ― 8.2	器形：植木鉢の底部破片で底面に25㎜程度の粗孔が外側から穿孔されている。底部の一部分に抉りを入れている。器面調整：外底面は摩滅し、不規則で粗細な線状痕（傷）が多くみられる。外面は滑面である。表面には不規則で粗細な線状痕（傷）がみられる。内底面は雑なナデを施す。内面の胴部には回転擦痕がみられる。器厚：胴部は3.9㎜で、底面が5.6㎜を測った。胎土：泥質で精選された非常に細かい陶土である。混入物：微細な石英や雲母片がみられ、希に細かい茶褐色の物質がみられる。色調：両面とも明橙色を帯びる。外面に赤茶色の化粧土が塗布されていたようであるが、大半は剥落する。焼成は良好で堅い。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 6	瓦質土器	鉢	口縁部	― ― ―	器形：瓦質土器の鉢とみられる。器面調整：表裏面とも粗雑な篦ナデや指ナデが施されている。口唇部も成形が悪く、器面が剥落する部分が多く、残存部分には雑な篦ナデがみられる。器厚：13.5～16㎜を測る。素地：泥質で細かい。混入物：粗細な鉱物（石英、黒色）や細かい灰白色の物質を多く含み、希に粗い白色の陶土(11.3～12.6㎜）がみられる。色調：外面は暗褐色で、内面が茶褐色を帯びる。焼成は悪く脆い。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 7	青磁	雷文帯碗	口縁部	― ― ―	器形：直口口縁の碗。口唇部は丸味を持たせて成形する。文様：外面口縁に片切彫りで反時計廻りの雷文を描く。内面口縁には片切彫りで刻花文を描いている。素地：淡灰白色の微細粒子で、劈開面から微細な気泡痕が少量ながら観察できる。釉色：明緑色の釉が両面に施されている。貫入：なし。龍泉窯系の窯。14c中頃～15c中頃。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 8		ラマ式蓮弁文碗		― ― ―	器形：外反口縁のラマ式蓮弁文碗。口唇部は丸味を持たせて成形する。文様：外面には片切彫りによるラマ式蓮弁の弁先の一部が確認できる。素地：灰白色の細粒子で、僅かに細かい黒色の鉱物がみられる。釉色：青緑色の釉が両面にみられる。貫入はない。中国南部の窯。14c後半～15c中頃。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 9		碗	底部	― ― 6.2	高台分類cタイプ。畳付を幅広く成形した後に畳付の外端を斜位に削り出して畳付（5㎜）を仕上げている。文様：内底面の中央に指圧を加えて浅く窪ませている。見込みには陰圏線で囲繞する。素地：光沢のある灰白色の微粒子で、微細な黒色鉱物を少量含んでいる。釉色：淡黄緑色の釉を内面から外面の畳付外端まで施釉。粗い貫入がみられる。中国南部の窯。14c終末～15c前半。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 10		稜花皿	口縁部	― ― ―	器形：口唇部をラマ式蓮弁の弁先となるように抉り取って稜花とする。文様：内面には口唇部の稜花に沿うように線彫りでラマ式蓮弁の弁先を描いている。素地：灰色の細粒子で、細かい黒色鉱物を多量に含んでいる。釉色：灰緑色の釉を両面に施す。貫入：なし。中国南部の窯。14c終末～15c前半。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 11		皿	底部	― ― 6.4	器形：畳付は5.5㎜と幅広く、畳付の外端は丸味を持たせて軽く成形する。文様：見込みに浅い陰圏線と印花による葉文が二・三箇所でみられる。素地：光沢ある灰白色の細粒子で、劈開面からは細かい黒色鉱物と微細な気泡痕が多くみられる。釉色：濃灰緑色の釉を総釉後に外底面の釉を円盤状に掻き取って露胎とする。外底面には砂胎土目の目痕がみられる。中国南部の窯。14c終末～15c前半。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 12		酒会壷	底部	― ― 18.0	器形：大振りの酒会壷の底部。胴部から底部までを中空の状態で仕上げた後の円盤状の底を造り底部近くに落して底部（落とし底）を製作している。文様：底面から立ち上がる部分はくびれていて、くびれ部に片切彫りで界線を一条施し、界線から胴上部に向かって片切彫りで蓮弁文の弁尻を描いている。一部に鎬が確認できることから鎬蓮弁のある壷とみられる。素地：光沢のある淡灰白色の微細粒子。釉色：明緑色の釉が内面から外面の底部を除いて施されている。貫入：なし。龍泉窯系の窯。14c中頃～15c中頃。	B-11 SA02 覆土

注「―」：計測不可



第 25 図　石積み SA02 出土品①　土器：1、陶質土器：2～5、瓦質土器：6、青磁：7～ 12

第46表　石積みSA02　白磁・青花・瑠璃釉・黒釉陶器・中国産褐釉陶器・タイ産土器（半練）出土状況

種類・器種・部位 ＼ 層序				B-11 SA02 覆土	第1層	栗石内上層(淡黄色土層) 第3層	裏栗内下層(黄褐色土層) 第5層	合計
白磁	碁笥皿	底部		1				1
合　計				1	0	0	0	1
青花	碗	口縁部	直口	1				1
			外反			1		1
		胴部				1		1
		底部		2				2
	大鉢	胴部		1				1
合　計				4	0	2	0	6
瑠璃釉	碗	口縁部			1			1
合　計				0	1	0	0	1
黒釉陶器	碗	口縁部	Ⅳ類	1				1
			Ⅴ類	1				1
			Ⅸ類	1				1
		胴部		1				1
合　計				4	0	0	0	4
中国産褐釉陶器	壺	口縁部	方形状			1		1
		頸部		4				4
		胴部		137			1	138
		底部		2				2
	器種不明	胴部		1				1
合　計				144	0	1	1	146
タイ産土器(半練)	蓋		Ⅴ類	1				1
合　計				1	0	0	0	1

第47表①　石積みSA02　白磁・青花観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第26図 図版18 1	白磁	碁笥皿	底部	― ― 4.3	器形：轆轤成形の碁笥皿。内面見込みに胎土目の目痕がみられる。文様：なし。素地：灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物が僅かに混入する。釉色：淡黄白色の釉を両面に施した後に畳付と底面から立ち上がる部分の釉を掻き取って露胎とする。貫入：細かい貫入が両面でみられる。景徳鎮窯。15c後半～16c前半。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 2	青花	碗	口縁部	― ― ―	器形：直口口縁碗。文様：外面口縁に界線を上位に一条と下位に二条を施して区画帯とし、区画内に波濤文を描き、区画帯直下にアラベスク文描く。内面口縁端部にも一条の界線を施している。素地：光沢のある灰白色の微粒子。釉色：両面に淡灰白色の釉を施す。貫入はない。漳州窯系？。16c末～17c前半。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 3			胴部	― ― ―	器形：端反口縁碗の胴部破片。文様：外面に蓮弁文と草花文とみられる文様を描く。素地：光沢のある灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物が少量含まれている。釉色：両面に淡青白色の釉を施す。貫入はない。景徳鎮窯。15c前半～中葉。	B-11 SA02 栗石内上層 (淡黄色土層) 第3層
〃 〃 4			底部	― ― ―	器形：畳付は破損するが残存部から尖り気味に成形された碗とみられる。文様：外面の高台脇に界線を一条施し、胴下部の釉垂れが著しく、その釉下には唐草文とみられる文様を描く。内底面には二条の圏線と花文とみられる文様を描く。素地：光沢のある灰白色の細粒子で、粗細な気泡痕が多くみられる。釉色：両面に淡青白色の釉を施す。貫入はない。景徳鎮窯。15c後半～16c前半。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 5				― ― 4.0	器形：小碗の高台破片。文様：外面の高台には三条の界線を施し、胴部に魚の腹びれとみられる文様を描く。内面には二条一組の圏線を施している。素地：光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色：畳付のみ露胎し、両面に淡青白色の釉を施す。貫入はない。景徳鎮窯。17c後半。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 6		大鉢	胴部	― ― ―	器形：大鉢の胴部片。文様：外面胴部に「丸文」の中に「壽」の文字を呉須で描く。内面胴下部に圏線を一条描いている。素地：光沢のある淡灰白色の微粒子で、劈開面からは粗細な気泡痕や細かい黒色の鉱物が少量みられる。釉色：淡灰白色の釉が内外面の胴下部まで施釉。貫入はない。福建・広東系。17c後半～18c前半。	B-11 SA02 覆土

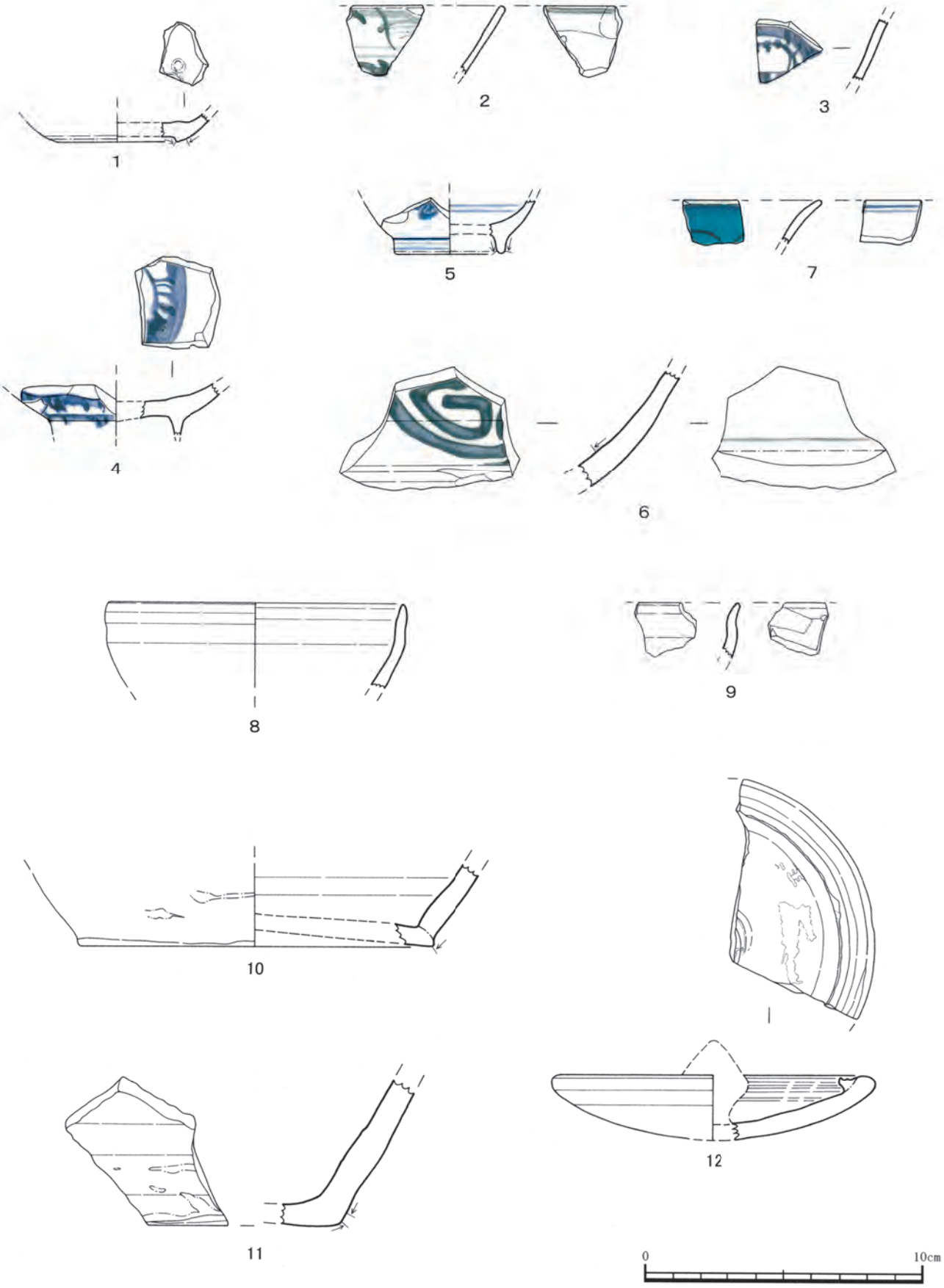
注「―」：計測不可

第47表② 石積みSA02 瑠璃釉・黒釉陶器・中国産褐釉陶器・タイ産土器(半練)観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第26図 図版18 7	瑠璃釉	碗	口縁部	― ― ―	器形:外反口縁の瑠璃釉染付碗。文様:外面は瑠璃釉で、金箔や金彩による蔓唐草文が施されていたようであるが二次的な火熱を受けて消失している。内面は呉須で界線を二条施している。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。景徳鎮窯。15c後半～16c。	B-11 SA02 第1層
〃 〃 8	黒釉陶器	碗	口縁部	10.6 ― ―	器形:口縁分類のⅣ類。口頸部は微弱に軽く「く」の字状に折れ、口縁を垂直気味に成形して、口唇部を尖らせている。素地:灰白色の細粒子で、粗細な黒色鉱物を多量に含んでいる。釉色:両面に黒色の釉を施して、その上から茶褐色の釉(褐錆斑)が浮遊している。福建省寧徳市飛鸞窯。14c末～15c。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 9				― ― ―	器形:口縁分類のⅤ類。口縁部近くで捻り返して外反させている。口唇部は若干丸味を持っている。素地:灰褐色の細粒子で、微細な黒色や茶褐色の鉱物を少量含み、希に粗い石英を含んでいる。釉色:両面に黒色の釉を施して、その上から茶褐色の釉(褐錆斑)が浮遊している。福建省閩候県鴻尾窯。14c末～15c。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 10	中国産褐釉陶器	壷	底部	― ― 12.7	器形:器壁や形状などからナデ肩の壷の底部片とみられる。底面の造りは平坦で丁寧である。底面からの立ち上がり部分で僅かにくびれさせてから内側に閉じ気味に直線的に胴部へ移行する。器面調整:外面は釉が掛かるが轆轤調整による微弱な起伏がみられる。内面は丁寧な回転擦痕(指ナデ)がみられる。素地:淡灰色の細粒子で、粗細な石英や粗い黒色や茶褐色の鉱物を多量に含む。釉色:外面にのみ白濁した灰茶色の釉が底部近くまで雑に施されている。中国南部の窯。15c～16c。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 11				― ― ―	器形:器壁や形状などから怒り肩の壷の底部片とみられる。底面の造りは平坦ではあるが雑である。底面からの立ち上がり部分で微弱にくびれさせてから内側に閉じ気味にほぼ直線的に胴部へ移行する。器面調整:内外面から外底面まで釉が雑に施されているが、釉上や露胎部分からの観察では外面は起伏のある轆轤調整と雑な回転擦痕、指圧痕がみられる。内面も篦削りの様な轆轤調整痕と回転擦痕(指ナデ)がみられる。素地:淡灰白色の細粒子で、粗細な石英や黒色鉱物が少量ながら含まれている。釉色:茶褐色の釉が内外面及び外底面まで雑に施されている。中国南部の窯。15c～16c。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 12	タイ産土器(半練)	蓋	端部	端部径 11.6	蓋縁分類のⅤ類に近似する。残存する破片の形状や類似資料などから撮みを宝珠形で推定復元を試みたところ、外面から撮み頂部までの器厚は3.6cmと求められた。器形:蓋縁近くの肥厚は陶土を内側に折り曲げた後に突出部の上端を撮み上げて尖らせている。器面調整:外面は方向が定まらない雑な擦痕や篦削りがみられる。内面は丁寧な轆轤様の回転擦痕がみられる。その他に内面には白濁した石灰質の物質が付着している。素地:橙白色の細粒子で、粗細な石英や細かい黒色や茶褐色の鉱物が多く含まれている。色調:両面とも淡橙色を帯びる。焼成:良好で堅い。15c～16c。	B-11 SA02 覆土

注 「―」:計測不可



第 26 図　石積み SA02 出土品②　白磁：1、青花：2～6、瑠璃釉：7、黒釉陶器：8･9
中国産褐釉陶器：10･11、タイ産土器（半練）：12

第48表　石積みSA02　本土産磁器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・円盤状製品・金属製品出土状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						B-11 SA02 覆土	B-11 SA02 栗石内上層（淡黄色土層）第3層	合計
本土産磁器	印判染付（型紙+染）		皿		口縁部	1		1
	印判染付、型紙		碗		胴部	2		2
	クロム青磁		小碗		胴部	1		1
	近現		小碗		口～底部	1		1
			器種不明		胴部	2		2
					部位不明	2		2
合　計						9	0	9
沖縄産施釉陶器	碗	口縁部				2		2
		胴部				1	1	2
	皿	胴部				1		1
	鍋	胴部				1		1
	アンビン	把手				1		1
	急須	口縁部				1		1
		把手				1		1
		胴部				1		1
		底部				1		1
合　計						10	1	11
沖縄産無釉陶器	鉢	口縁部				1		1
	擂鉢	胴部				1		1
	壷	口縁部				1		1
	甕	胴部				1		1
	瓶	把手				1		1
	瓶or壷	底部				1		1
	火炉	底部				1		1
	器種不明	胴部				8		8
合　計						15	0	15
円盤状製品	グスク系土器					1		1
	中国産褐釉陶器					1		1
	本土産施釉陶器					1		1
	沖縄産無釉陶器					1		1
合　計						4	0	4
金属製品	工具類・生産用具	丸釘	頭部欠損	中	鉄	1		1
		角釘	完形	中	鉄	4		4
				小	鉄	5		5
			先端部欠損	中	鉄	16	1	17
				小	鉄	1		1
			頭部欠損	中	鉄	5		5
			先端＋頭部欠損	中	鉄	20		20
				不明	鉄	1	1	2
	武具	立物飾り金具	青銅			1		1
	生活用具	鍋	鉄			4		4
		薬缶等の把手	青銅			1		1
	武器	薙刀の逆輪	青銅			1		1
		砲弾片	鉄			7		7
		薬莢	青銅			1		1
	分類不明	用途不明	鉄			26		26
合　計						94	2	96

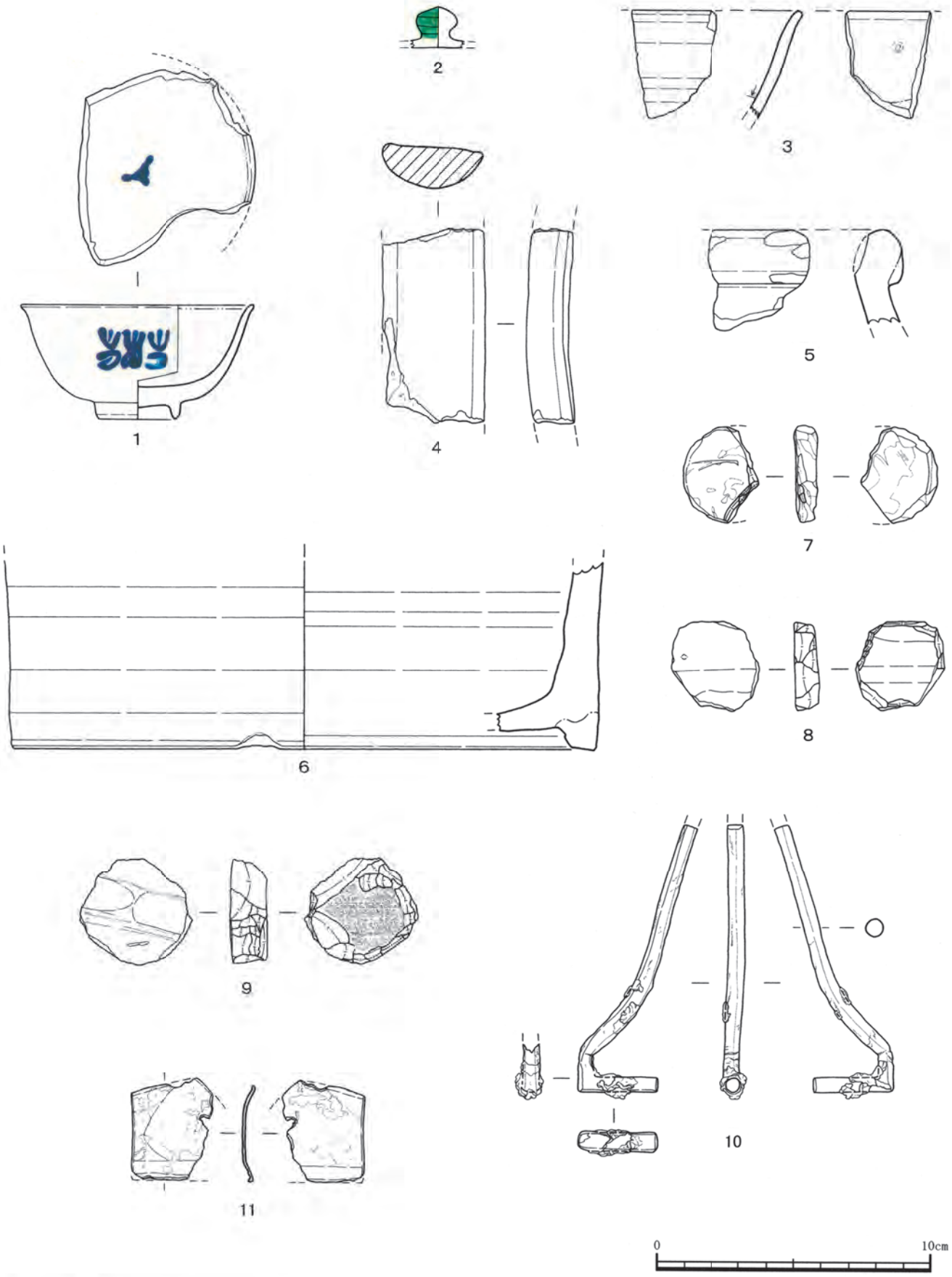
注　釘のサイズは、中：1寸半～5寸まで(3.75cm～15.75cm未満)、小：1寸まで(3.75cm未満)

第49表　石積みSA02　本土産陶磁器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・円盤状製品・金属製品観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第27図 図版19 1	本土産磁器	小碗	口縁部 底部	8.5 4.15 3.0	外反口縁の小碗。轆轤成形で畳付を外側から斜位に削り出して尖り気味に仕上げている。外面にコバルトで歪な「染色体文」を描き、見込みにも歪な丸文と三菱を組み合わせた文様を描く。口唇部には黄茶色の鉄錆がみられる。素地：光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色：淡青白色。近現代（明治～大正）。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 2	本土産陶器	蓋	撮み	― ― ―	蓋の撮みで、側面観が乳頭状となる。蓋甲頂部近くの孔は外側から内側に向かって穿たれている。素地：灰白色の微粒子。釉色：外面に微細な貫入のみられる緑色の釉を施す。内面は白濁する灰白を帯びた透明釉を雑に施した為、一部は露胎する。兵庫県淡路島の珉平焼。近現代。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 3	沖縄産施釉陶器	碗	口縁部	― ― ―	端反碗。釉上や露胎する部分から器面の調整を観察すると外面は轆轤成形で微弱な起伏がみられる。内面は丁寧に仕上げられて回転擦痕がみられる。素地は淡灰色の細粒子で、微細な鉱物（石英、黒色や茶褐色）を多く含んでいる。施釉は、フィガキー（釉薬に浸して釉掛けする手法）で実施された為、内面の胴下部が露胎する。釉色は両面に鉄釉（釉上に褐錆斑が浮遊）を施している。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 4		アンビン	把手	― ― ―	大型急須の把手。把手を折り曲げる際に生じた罅割れが二・三箇所みられる。横断面が低平な半円形状を呈する。釉上から観察では外面は縦位方向に面取りがなされている事から篦削りを主体とするものとみられる。内面は円柱状となった陶土から把手を製作する目的で縦位方向に半裁した際に生じた歪な平坦面となる。素地は淡灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物が多く含まれている。劈開面からは微細な気泡痕が多く見られる。釉色は粗い貫入が入った茶褐色の透明釉が両面に施されている。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 5	沖縄産無釉陶器	壷	口縁部	― ― ―	ナデ肩の壷。口縁部の玉縁状の肥厚は陶土を下方に折り返して造る。内外面には刷毛目様の擦痕がみられるが、内面よりも外面を丁寧に仕上げている。素地は茶紫色の細粒子で、粗い石英や黒色鉱物が僅かに混入する。劈開面からは白色の陶土が途切れながら散在する。器色は両面とも茶褐色を帯びる。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 6		火炉	底部	― ― 21.4	円筒形の火炉の底部。外底面の縁沿いに脚となる高台を造るが畳付も平坦ではなく雑で微弱な起伏がみられる。器面の調整は外面が雑な轆轤成形を主体とするが、底面近くでは刷毛目様の削りがみられる。外底面は反時計廻りの篦削りで仕上げている。内面及び内底面は回転擦痕が顕著となる轆轤痕がみられる。素地は茶紫色の細粒子で、微細な石英と茶褐色の鉱物がみられる。器色は外面が茶褐色で、内面は赤茶色を帯びる。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 7	円盤状製品	グスク系土器	―	残存長 3.5 残存幅 2.75	グスク系土器の底部片を利用した遊具の未製品。打割調整は表面の残存する部分で3回程度の打撃や打圧を加えて剥離させている。表裏面に僅かに研磨を加えているが徹底せず剥離面が残っている。素地：泥質の陶土で手に粉が付着する。混入物として微細な石英を多く含み、希に細かい鉱物（黒色や茶色）がみられる。器色：表裏面とも黄白色を呈するが、表面が僅かに赤みを帯びている。焼成は脆弱。残存厚：8㎜。重量：6.1g。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 8		本土産施釉陶器	―	残存長 3.24 残存幅 3.2	本土産施釉陶器の壷の胴部片を外面から打割調整を加えて円盤状とする。研磨を施した痕跡はみられない。素地：暗い茶紫色の細粒子で、粗い石英を多く含んでいる。釉色：外面は茶褐色で、内面が白濁した茶褐色となる。残存厚：9㎜、12.7g。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 9		沖縄産無釉陶器	―	残存長 3.9 残存幅 4.1	沖縄産無釉陶器の厚手の甕や鉢の胴部片を外側から打割調整を加えて円盤状に成形する。研磨調整はみられない。内面には陶器製作時の刷毛目様の擦痕がみられる。素地：茶紫色の細粒子で、粗細な石英を少量と細かい茶褐色の鉱物が僅かにみられる。器色：外面は茶褐色の化粧土を施したようである。内面が赤茶色を帯びる。残存厚：1.3㎝、重量：26.2g。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 10	金属製品	生活用具	薬缶等の把手	残存長 9.8 残存幅 0.56	鍋や薬缶などの把手とみられる。把手は断面が円形状を呈し、細い棒状の青銅を折り曲げている。更に屈曲部分は別途の細い棒状の青銅と溶接によって接続されたようである。その為、平面観が数字の「7」を逆さにした形状となっている。全体的に緑青がみられる特に容器本体の孔、或いは容器の突出部の孔に差し込まれる把手の先端及び周辺は緑青の錆汁などによって発生した錆瘤が顕著にみられる。材質：青銅。残存最大厚：5.78㎜、残存最小厚：4.60㎜、残存重量：26.6g。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 11		武器	薙刀・逆輪	残存長 3.7 残存幅 3.0	表裏面に鍍金が残る薙刀の組み合わせ式の逆輪か銅金とみられる。上下の縁辺部が外側に軽く折り曲げられている。文様は施されていない。緑青は表面より裏面が著しく広がっている。破損部分は緑色による浸食によって青白くなり、脆くなっている。材質：青銅。残存最大厚：0.86㎜、残存最小厚：0.68㎜、残存重量：4.6g。	B-11 SA02 覆土

注「―」：計測不可



第 27 図　石積み SA02 出土品③　本土産磁器：1、本土産陶器：2、沖縄産施釉陶器：3･4
沖縄産無釉陶器：5･6、円盤状製品：7～9、金属製品：10･11

第50表① 石積みSA02 二次的火熱溶解銭貨

銭名		片数	重量(g)	残存状況	出土層
開元通寶(唐621年初鋳)		1片	1.58	「開」・「元」・「寶」の三字が残存	B-11 SA02覆土
		1片	0.55	「開」の一字が残存	
開元通寶(唐845年or中世不詳)		1片	1.53	「開」・「通」・「寶」の三字が残存	
開元通寶(南唐960年初鋳)		1片	3.2	「開」・「元」・「通」の三字が残存	
開元通寶	(唐621年初鋳) or (唐845年初鋳) or (南唐960年初鋳)	1片	1.24	「開」・「寶」の二字が残存	
		1片	0.80	「開」の一字が残存	
		1片	1.44	「開」・「通」の二字が残存	
開元通寶(中世不詳)		1片	1.45	「開」・「通」の二字が残存	
宋通元寶(北宋960年初鋳)		1片	2.73	「宋」・「元」・「寶」の三字が残存	
		1片	1.15	「通」・「元」の二字が残存	
咸平元寶(北宋998年初鋳)		1片	2.00	「平」・「元」の二字が残存	
皇宋通寶(北宋1038年初鋳)		1片	1.34	「皇」・「寶」の二字が残存	
		1片	1.64	「皇」・「寶」の二字が残存	
		1片	1.57	「皇」・「通」の二字が残存	
至和通寶(北宋1054年初鋳) or 至和元寶(北宋1054年初鋳)		1片	0.79	「至」の一字が残存	
嘉祐通寶(北宋1056年初鋳)		1片	2.20	「嘉」・「祐」・「通」の三字が残存	
熙寧元寶(北宋1068年初鋳)		1片	0.66	「熙」の一字が残存	
元豊通寶(北宋1078年初鋳)		1片	3.14	「元」・「豊」・「通」・「寶」の四字が残存	
元祐通寶(北宋1086年初鋳)		1片	1.04	「祐」・「通」の二字が残存	
		1片	1.76	「元」・「寶」の二字が残存	
正隆元寶(金1157年初鋳)		1片	0.64	「正」の一字が残存	
洪武通寶(明1368年初鋳)		4枚	13.63	完形(4枚付着)	
		5枚	8.05	「寶」の一字が残存(5枚付着)	
		1片	1.69	「洪」・「通」・「寶」の三字が残存	
		1片	0.88	「洪」・「武」の二字が残存	
		1片	0.92	「武」・「通」の二字が残存	
		1片	0.66	「洪」の一字が残存	
		1片	1.36	「武」の一字が残存	
永樂通寶(明1408年初鋳)		1片	7.68	「樂」・「通」の二字が残存	
世高通寶(琉球1461年初鋳)		1片	1.10	「世」の一字が残存	
順治通寶(清1644年初鋳)		1片	2.02	「順」の一字が残存	
無文銭		1片	0.37	1/2残存	
不明銭貨		1片	0.58	「通」の一字が残存	
		1片	0.57	判読不可	
		―	2.66	判読不可	
		1片	1.36	「元」・「寶」の二字が残存	
		1片	0.50	「通」の一字が残存	
		1片	1.02		
		1片	1.15	「寶」の一字が残存	
		1片	1.67		

第50表② 石積みSA02 二次的火熱溶解銭貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
不明銭貨	1片	0.96	「寳」の一字が残存	B-11 SA02覆土
	1片	1.26	「寳」の一字が残存	
	1片	1.19	「寳」の一字が残存	
	1片	0.77	判読不可	
	1片	7.88	4枚付着銭	
	1片	0.90	「元」の一字が残存	
	1片	0.41		
	1片	0.52	「通」の一字が残存	
	1片	0.59	「通」の一字が残存	
	1片	2.29	「寳」の一字が残存	
	1片	0.44	「寳」の一字が残存	
	1片	0.66	「寳」の一字が残存	
	―	6.26	細破片	
	1片	0.46	判読不可	
合 計	59			

第51表① 石積みSA02 銭貨観察一覧

単位:mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銭種	鋳造種類	初鋳年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径 A B	肉郭内径 C D	方穿 E F	断面計測部位 ①	②	③	重量	観察事項	出土地点 出土層
第28図 図版20 1	開元通寳	公鋳銭	唐 621年	銅銭	対読	破損	行書	― ―	― ―	― 7.05	1.15	0.62	1.02	1.58	銭貨の1/2弱が残存する。字款は深く鋳造され鮮明である。「開」・「元」・「寳」の字款が確認できる。但し、「開」と「元」は半分程度欠落する。背には三日月が施された所謂「背上月」である。面には緑青による錆瘤が発生している。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 2	開元通寳	不明	唐 621年	鉄銭	対読	破損	楷書	― ―	― ―	― ―	1.07	0.96	1.14	0.55	「開」の字款部分が残存する。背は摩滅の傾向が強く、「背上月」が不鮮明ながらみられる。緑青の影響をほとんど受けていない。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 3	開元通寳	公鋳銭	南唐 960年	銅銭	対読	破損	楷書	24.89 ―	― ―	7.07 6.87	1.32	0.75	1.18	3.20	二次的な火熱を受けて変形した銭貨で部分的に溶解や再凝固がみられる。「寳」の字款の一部が欠損する。面には方形状の金具痕が「開」と「通」の字款に斜位に入ったり、銭貨を横断させるなどの痕跡から銭貨を溶解して別の製品を製作する目的で火熱を加えた可能性が高い。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 4	開元通寳	不明	唐 845年	銅銭	対読	破損	楷書	― 23.34	― 20.66	7.76 ―	1.38	0.78	1.28	1.53	武宗の845年(会昌5年)に補鋳した開元通寳とみられる。1/2強が残存し、「元」の字款部分に該当する箇所が欠損する。「紀地銭(会昌開元銭)」とみられる。背には紀地銭の鋳造地の地名を一字入れたものとみられるが、器面が全体的に緑青の錆汁による細かい石英粒が付着していて判読ができない。	B-11 SA02 覆土

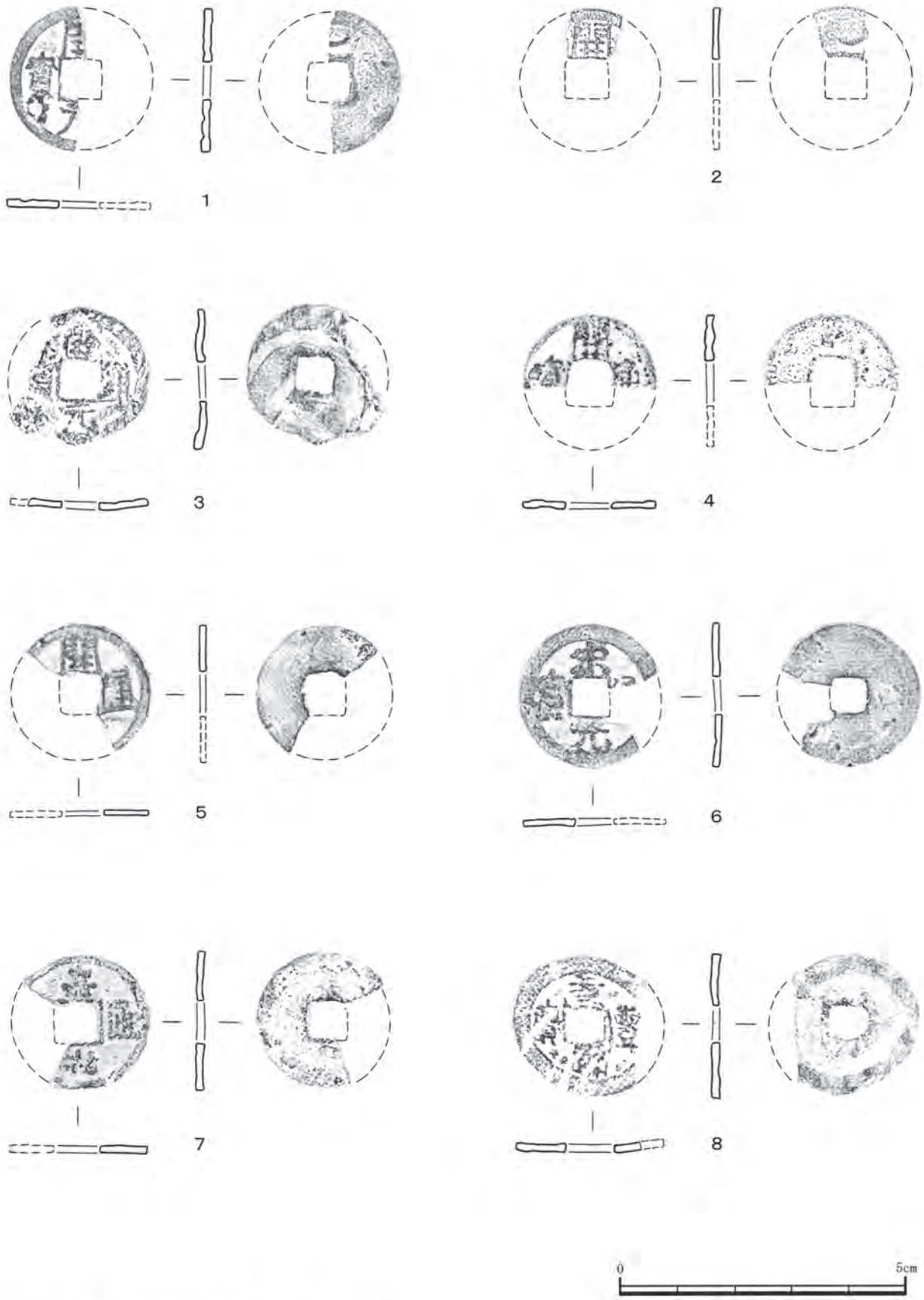
注 「―」:計測不可

第51表② 石積みSA02 銭貨観察一覧

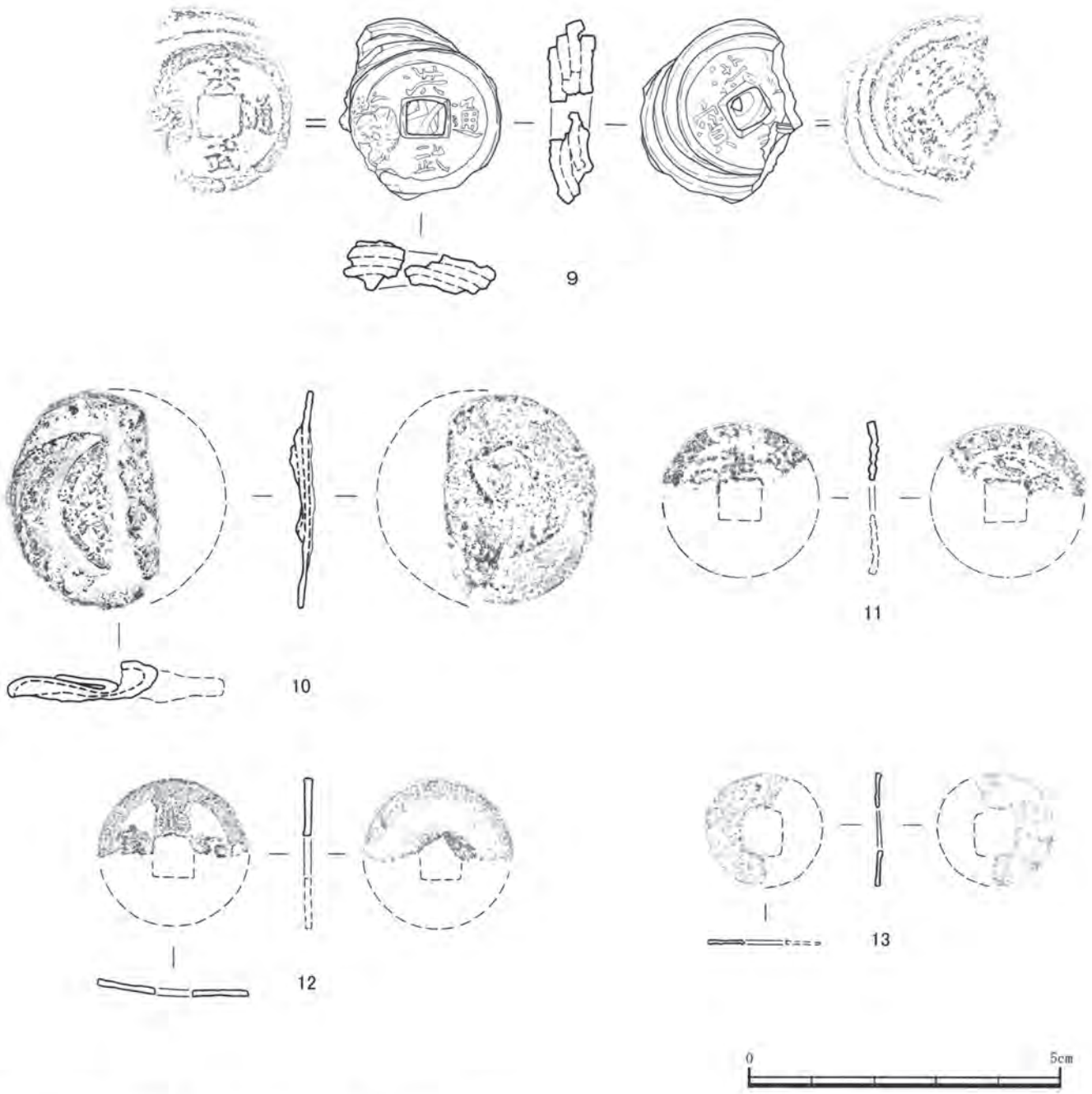
単位:㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銭種	鋳造種類	初鋳年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径 A B	肉郭内径 C D	方穿 E F	断面計測部位 ①	 ②	 ③	重量	観察事項	出土地点 出土層
第28図 図版20 5	開元通寶	模鋳銭	中世 不詳	鉄銭	対読	破損	楷書	― ―	― ―	― ―	0.95	0.66	0.99	1.45	1/2強が残存する銭貨で、「開」・「通」の二字が確認できるが、字款が潰れて不鮮明である事と背の肉郭と孔郭の消失からすると模鋳銭として考えられる。面背ともに緑青の発生は微弱であり、全体的に赤茶けている。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 6	宋通元寶	模鋳銭	北宋 960年	銅銭	回読	破損	行書	25.45 ―	20.16 ―	6.30 6.50	1.11	0.65	1.12	2.73	背の孔郭はなく、肉郭も薄く鋳造されているが、面の字款は深く鋳造されている事などから模鋳銭として考えられる。面・背は部分的に緑青の影響を受けて剥離や錆瘤がみられる。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 7	嘉祐通寶	公鋳銭	北宋 1056 年	銅銭	対読	破損	行書	23.83 ―	20.33 ―	― 7.07	1.40	0.71	1.12	2.20	銭貨の1/3程度が欠落する。両面とも緑青の影響を受けているが特に背は著しく器面の剥離や錆汁による細かい石英粒や微細な炭片(置換され硬質化)が付着する。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 8	元豊通寶	公鋳銭	北宋 1078 年	銅銭	回読	破損	篆書	24.87 ―	18.42 ―	6.84 6.06	1.26	0.49	0.95	3.14	二次的な火熱を受けて変形する。面に鏨による打痕(爪痕様の傷)が5箇所で確認できることから銭貨の溶解を目的としたようである。両面とも緑青の影響を受けているが特に背は著しく器面の剥離やケロイド状となる。	B-11 SA02 覆土
第29図 図版20 9	洪武通寶	不明	明 1368 年	銅銭	対読	破損	楷書	― ―	― ―	― ―	6.57	―	―	13.63	二次的な火熱を受けて4枚の銭貨が溶解・付着した銭貨の固まり(緡銭の一部とみられる。)。4枚の内、上位と下位の2枚は「洪武通寶」。中程にある2枚は判読不能。下位の「洪武通寶」は、直径が21.9㎜と小さく「小平銭」とみられる。参考までに上位の「洪武通寶」は直径23.9㎜である。銭貨の固まりは傾向として、銭貨の孔郭は4枚とも貫通し、緡紐を通したものとみられる。また、4枚とも左側のみが溶解によって消失していることから左側が箱の底、或いは床や地表面と接触していた事が考えられる。併せて、上位と下位の銭貨では下位の銭貨の火熱が強く、器面がケロイド状となっている。上位の銭貨には粗目の石英粒などが溶解により付着している事から上位の銭貨が埋土や覆土に覆い被されたようである。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 10	洪武通寶	不明	明 1368 年	銅銭	不明	破損	不明	33.38 22.28	― ―	― ―	1.78	―	―	8.05	銭貨が二次的な火熱を受けて5枚程度が変形しながら溶解し凝固する。正面に残る銭貨で、鋳造された字款の特徴などから「洪武通寶(1368年初鋳造)」とみられるものが確認できた。他の銭貨は不明であった。正面よりも裏面が器面の保持が悪く、火熱や緑青の影響を受けて正面よりも裏面がケロイド状となる部分が多い。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 11	世高通寶	不明	琉球 1461 年	銅銭	不明	破損	不明	― ―	― ―	― ―	1.64	0.63	1.25	1.10	2/3以上が破損し、世高通寶の「世」の字款のみが不鮮明ながらも確認できる。面・背とも緑青の影響を受けて剥離やケロイド状となるが、特に背は緑青の影響を強く受けている。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 12	順治通寶	不明	清 1644 年	銅銭	回読	破損	行書	― ―	― ―	― ―	1.31	0.94	1.26	2.02	1/2程度破損した「順治通寶」とみられるもので、「順」の字款のみが不鮮明ながら確認できる。「通」と「寶」の字款は2/3強が欠損する。背は肉郭や孔郭が無いことからすると模鋳銭の可能性が考えられる。緑青の影響は面よりも背が著しく、アバタ状となる。	B-11 SA02 覆土
〃 〃 13	無文銭	模鋳銭	中世 不詳	銅銭	―	破損	―	― ―	― ―	― ―	0.51	―	―	0.37	小振りで希薄な無文銭で、厚さも0.51㎜と薄く脆い。残存する最大の直径18.8㎜を測る。面・背とも緑青の影響が強く受けて剥離やケロイド状となる。	B-11 SA02 覆土

注 「―」:計測不可



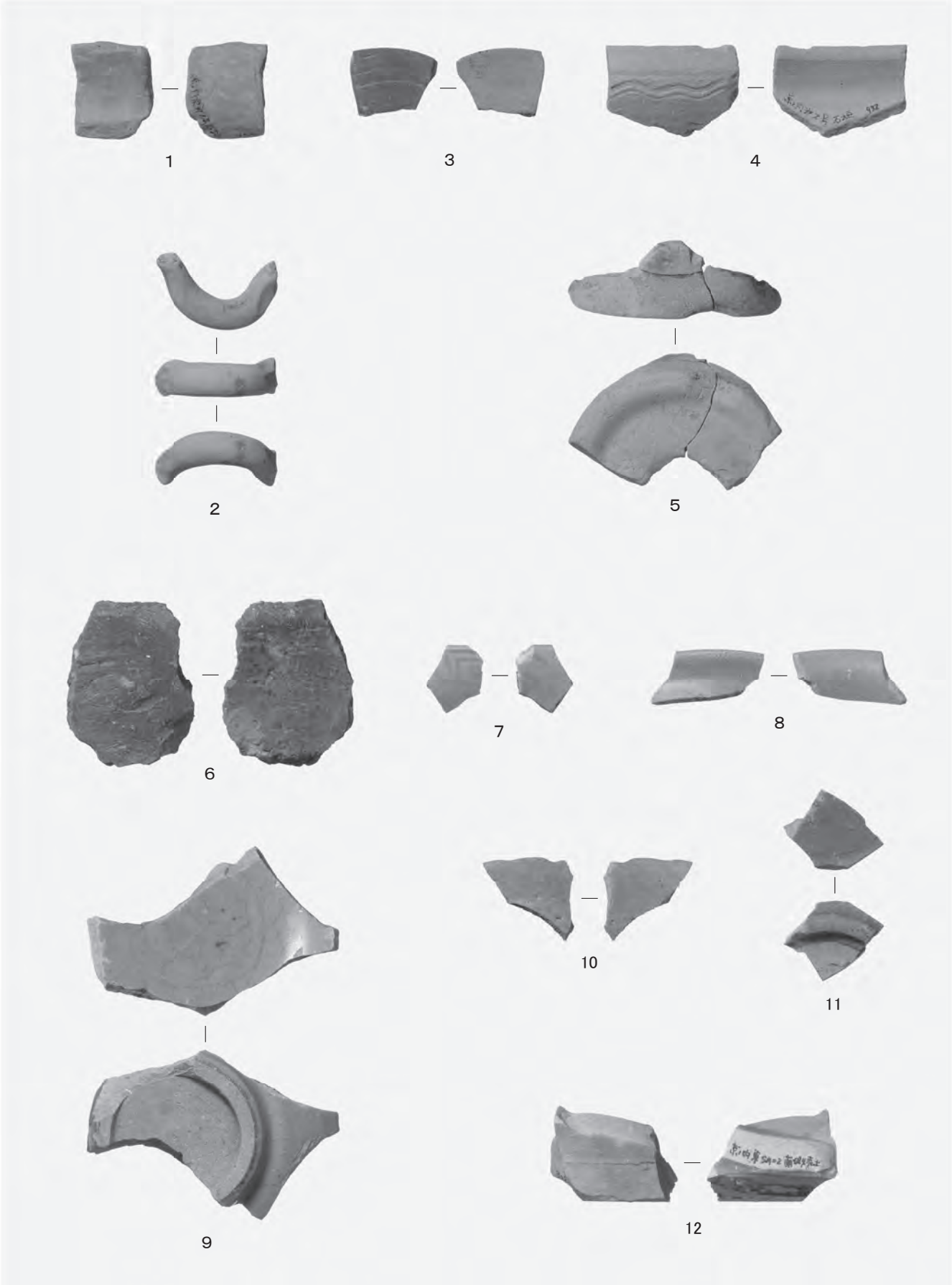
第 28 図　石積み SA02 出土品④　銭貨：1～8



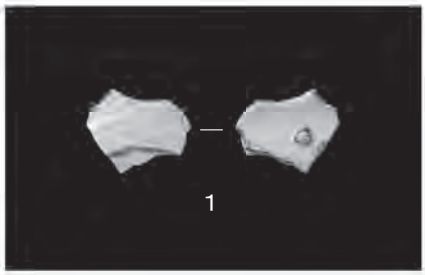
第 29 図　石積み SA02 出土品⑤　銭貨：9～ 13

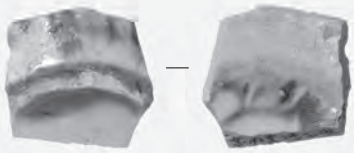
第52表　石積みSA02　出土遺物状況（図版外）

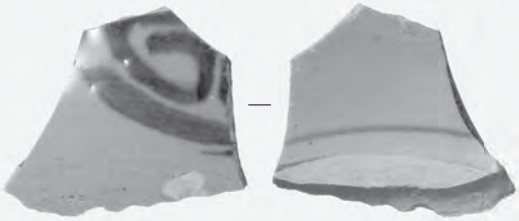
種類・器種・部位 ＼ 層序						B-11 SA02 覆土	第1層	栗石内上層（淡黄色土層）第3層	裏栗内下層（黄褐色土層）第5層	合計
屋瓦	高麗系	平瓦	灰色	漆喰無し		2				2
	大和系（古）	丸瓦	褐色	漆喰無し		1				1
		平瓦	灰色	漆喰無し		3				3
	大和系	丸瓦	灰色	漆喰無し				1		1
		平瓦	灰色	漆喰あり（片面）		1				1
				漆喰無し		3				3
	大和系（近代のもの）	丸瓦	灰色	漆喰無し		1				1
	明朝系	軒丸	灰色	漆喰無し		2				2
		丸瓦	灰色	漆喰あり（片面）		4				4
				漆喰無し		4				4
			褐色	漆喰無し		1				1
			赤色	漆喰あり（片面）		1				1
		平瓦	灰色	漆喰あり（片面）		5				5
				漆喰無し		31			1	32
			褐色	漆喰あり（片面）		1				1
				漆喰無し		1				1
			赤色	漆喰あり（片面）		1				1
				漆喰無し		3		1		4
合　計						65	0	2	1	68
塼瓦	Ⅰ類	不明	灰色	漆喰無し	角1	1				1
	Ⅱ類	―	灰色	漆喰無し	角無し	1				1
	Ⅲ類	形状不明a	灰色	漆喰無し	角1	1				1
					角無し	4				4
		形状不明b	灰色	漆喰無し	角無し	1				1
			赤色	漆喰無し	角1	1				1
					角無し	1				1
		形状・厚さ不明	灰色	漆喰無し	角1	1				1
合　計						11	0	0	0	11
彩釉陶器	鶴形水柱	胴部				3				3
合　計						3	0	0	0	3
宜興窯系、無釉陶器	茶器の蓋（中国）					1				1
合　計						1	0	0	0	1
タイ産褐釉陶器	壷	胴部				27				27
合　計						27	0	0	0	27
本土産陶器	蓋	撮み	近現			1				1
合　計						1	0	0	0	1
石器・石製品	硯片	頁岩				1				1
	石器片	細粒砂岩（ﾆｰﾋﾞ）				2				2
合　計						3	0	0	0	3
石材	細粒砂岩（ﾆｰﾋﾞ）					4				4
自然石	河原石					4		1		5
合　計						8	0	1	0	9
ガラス製品	瓶	口縁部				1				1
合　計						1	0	0	0	1
近・現代	製図用のコンパス針と金具					1				1
合　計						1	0	0	0	1

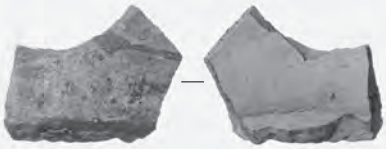


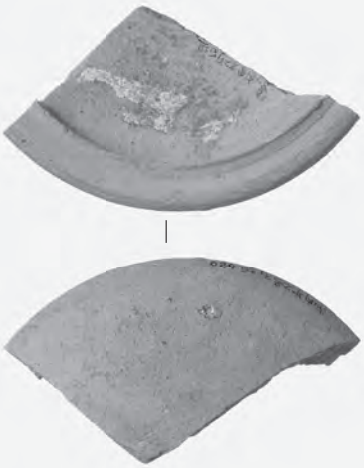
図版 17　石積み SA02 出土品①　土器：1、陶質土器：2～5、瓦質土器：6、青磁：7～ 12



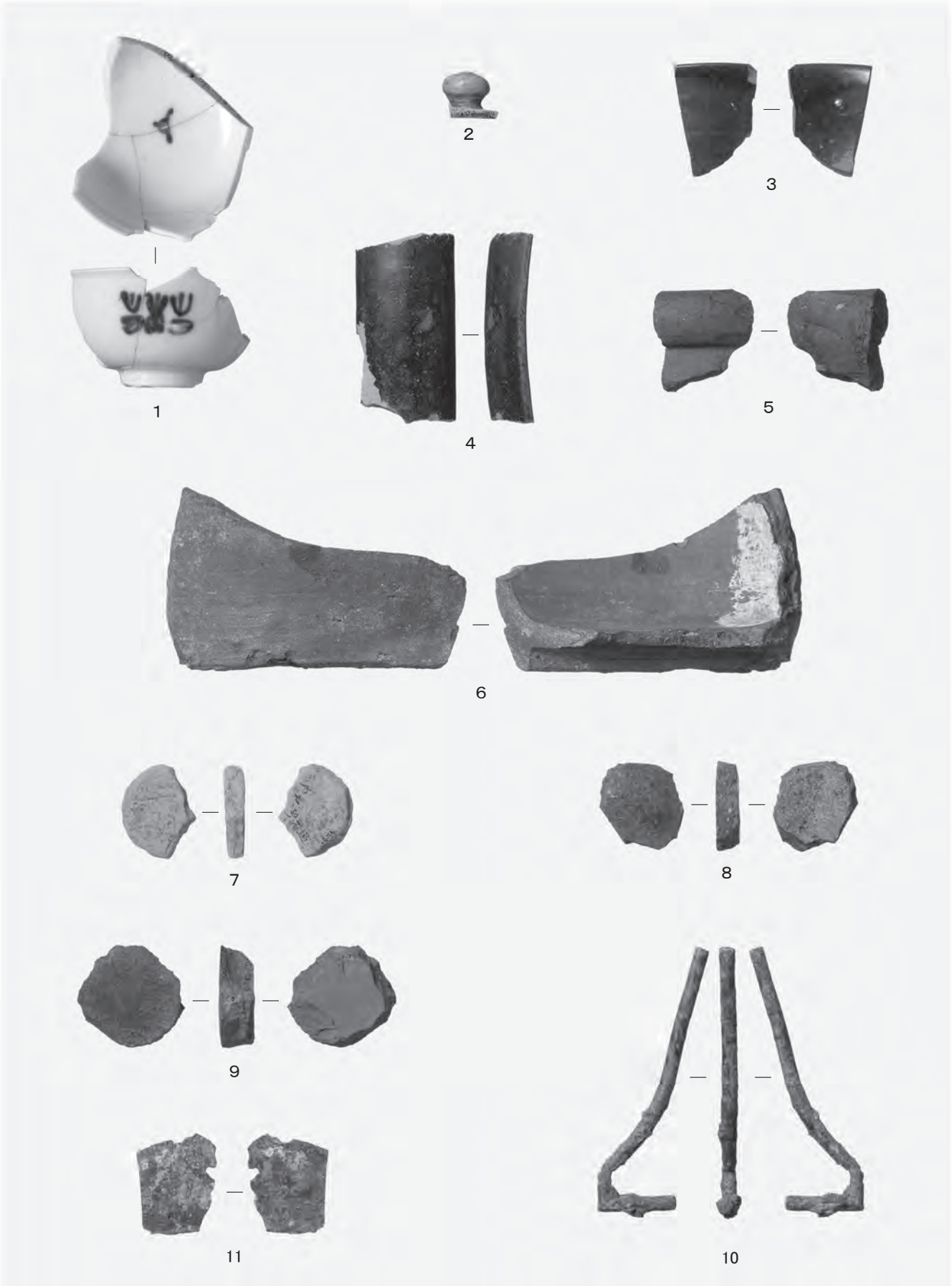




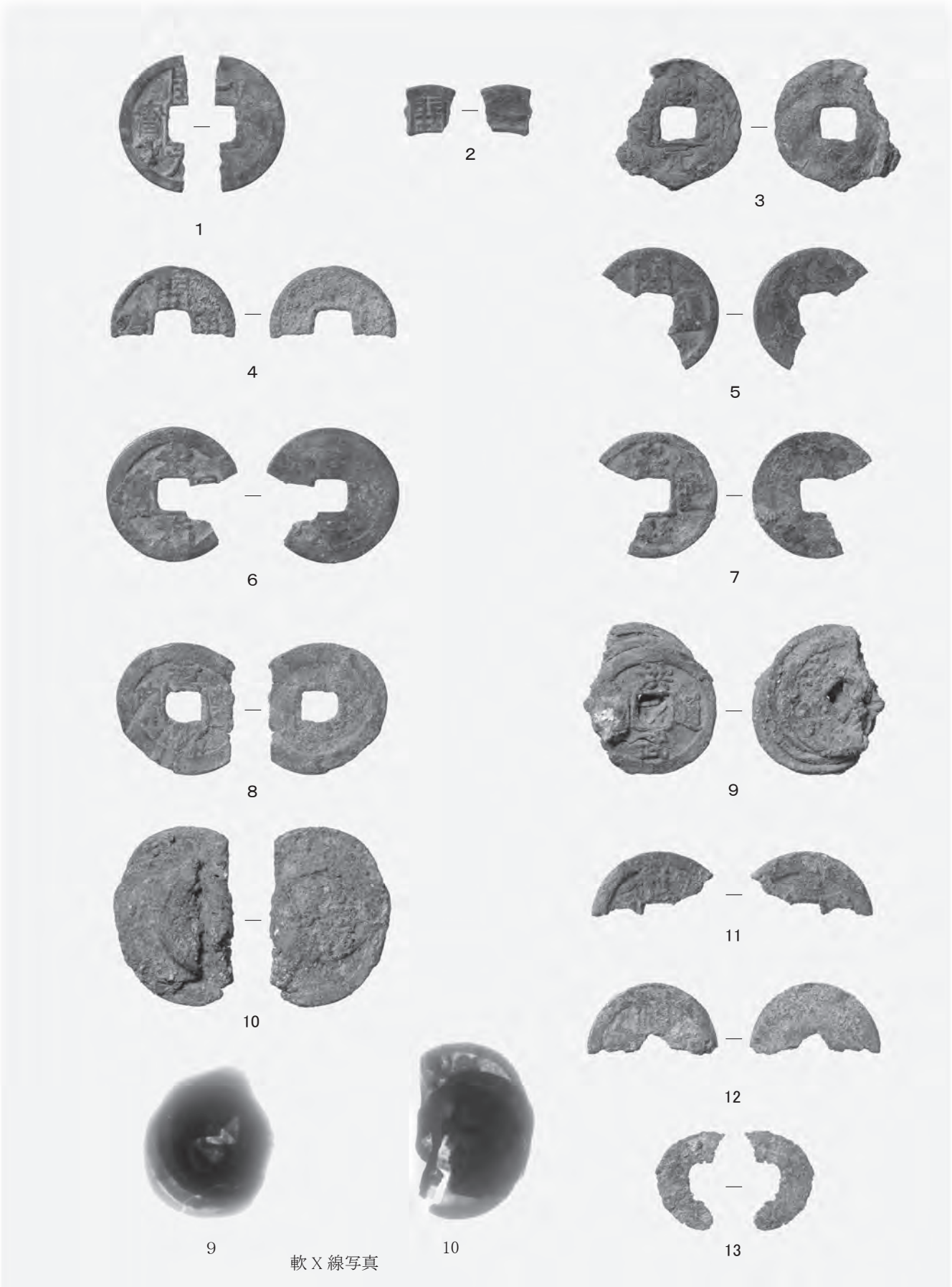




図版 18　石積み SA02 出土品②　白磁：1、青花：2～6、瑠璃釉：7、黒釉陶器：8･9
中国産褐釉陶器：10･11、タイ産土器（半練）：12



図版 19　石積み SA02 出土品③　本土産磁器：1、本土産陶器：2、沖縄産施釉陶器：3･4
沖縄産無釉陶器：5･6、円盤状製品：7～9、金属製品：10･11



図版 20　石積み SA02 出土品④⑤　銭貨：1～ 13

（10）溝 SD03 の出土遺物（第６図・第 30～35 図、図版 21～27、第 53～66 表）

溝 SD03（第６図）から出土した遺物の量は当該期に於いて建物 SB01・溝 SD04-B（総計 1,772 点）に次いで２番目に多く、その量は 1,391 点を数える。溝 SD03 出土遺物（総計 1,391 点を≒100％とする）で最も多く出土した遺物は、当該期の他の遺構と同じように沖縄産屋瓦（第５・66 表参照。高麗系、大和系古瓦、大和系、明朝系を含む）の 1,082 点（77.78％）と全体の 3/4 強を占めている。次いで中国産褐釉陶器の 70 点（5.03％）、塼瓦 57 点（4.1％）、タイ産褐釉陶器 30 点（2.16％）、近現代の釘やボタン・戦時中の砲弾破片などを含む金属製品 26 点（1.87％）、近現代の瓶類・お弾き・ビー玉・板ガラスなどを含むガラス製品 26 点（1.87％）、中国産青磁 22 点（1.58％）、沖縄産無釉陶器 16 点（1.15％）、石材片や自然礫を含む 12 点（0.86％）、本土産磁器 10 点（0.72％）、沖縄産施釉陶器６点（0.43％）などと順次減少している。

第53表　溝SD03　陶質土器・瓦質土器・塼瓦・煉瓦出土状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						B・C-11 SD03 覆土	遺構内 第2層a	遺構内 第2層b	合計
陶質土器	鉢	口縁部				1			1
		胴部						1	1
	蓋	－				1			1
合　計						2	0	1	3
瓦質土器	鉢	胴部				1	1		2
	壺	胴部				1			1
	器種不明	胴部				1			1
合　計						3	1	0	4
塼瓦	Ⅰ類	A	灰色	漆喰無し	角無し			1	1
		形状不明	灰色	漆喰無し	角無し			1	1
	Ⅱ類	－	灰色	漆喰無し	角1	1			1
	Ⅲ類	Cb	赤色	漆喰有り	角2			1	1
		形状不明a	灰色	漆喰無し	角1			1	1
					角無し			4	4
			赤色	漆喰無し	角1	1		5	6
					角無し	5		6	11
		形状不明b	灰色	漆喰有り（片面）	角無し	1		1	2
				漆喰無し	角1			2	2
					角無し	10		7	17
			赤色	漆喰無し	角1	2		2	4
					角無し	1		1	2
	Ⅲ類？	Ba	赤色	漆喰無し	角1	1			1
	分類不明	形状不明a	灰色	漆喰無し	角1			1	1
煉瓦	Ⅳ類	－	灰色	漆喰無し	角無し			1	1
			赤色	漆喰有り	角2			1	1
合　計						22	0	35	57

第54表①　溝SD03　陶質土器･瓦質土器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称・部位分類			口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第30図 図版21 1	陶質土器	鉢	口縁部	16.7 － －	器形：沖縄産無釉陶器にみられる鉢であるが、胎土や混入物は陶質土器に近似することから近現代に製作された鉢とみられる。器形は逆「ハ」の字状に開いて口縁部を「へ」の字状に屈曲させて口唇部を造る。口唇部の幅は15㎜と幅広である。文様：なし。器面調整：両面とも指ナデによる回転擦痕がみられるが、内面よりも外面が丁寧に施されている。口唇部の両端は縁を意識してナデが強く施された為、微弱に突出する。両面には明茶色の化粧土が薄く塗布されていたようであるが大半は剥落している。器厚：5.6～7.2㎜を測る。胎土：泥質の細粒子。混入物：粗細な石英を少量含み、希に粗い石英と黒色の鉱物がみられる。器色：両面とも明橙色を帯びる。焼成：堅緻。	B・C-11 SD03 覆土
〃 〃 2	瓦質土器	鉢	胴部	－ － －	器形：植木鉢の胴部破片。文様：外面には突帯を横位に貼り付けて指圧やナデを加えた縄目文（縄目状凸帯。或いは波状凸帯）と円筒印章による菊唐草文を器面に回転させて円筒から文様を起こしている。器面調整：外面は僅かに緻密な擦痕が横位に施されている。内面は器面の保持が悪いが僅かに刷毛目様の擦痕やナデがみられる。器厚：9.5㎜を測る。胎土：泥質の細粒子。混入物：微細な石英を多く含み、希に粗い石英と黒色の鉱物がみられる。器色：両面とも灰褐色を帯びるが外面は若干、黒味が強い。焼成：堅緻。	B・C-11 SD03 覆土

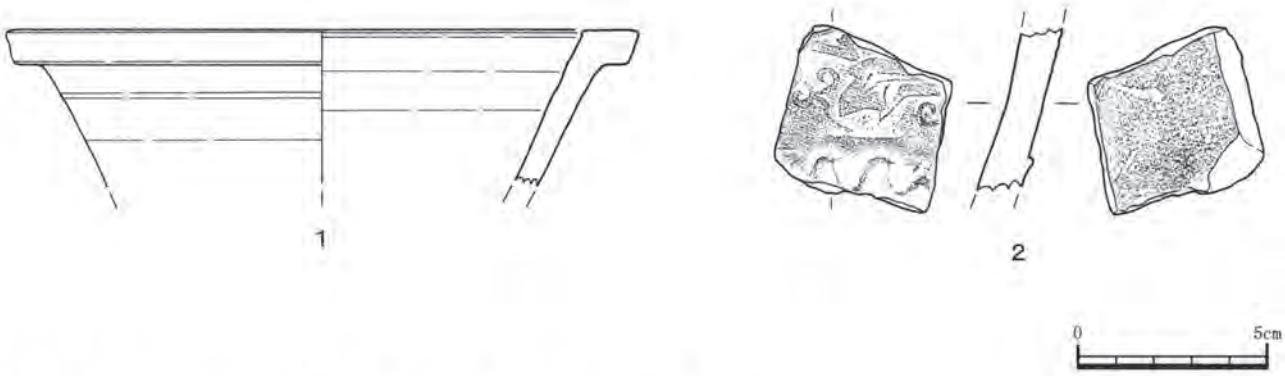
注「－」：計測不可

第54表② 溝SD03 塼瓦・煉瓦観察一覧

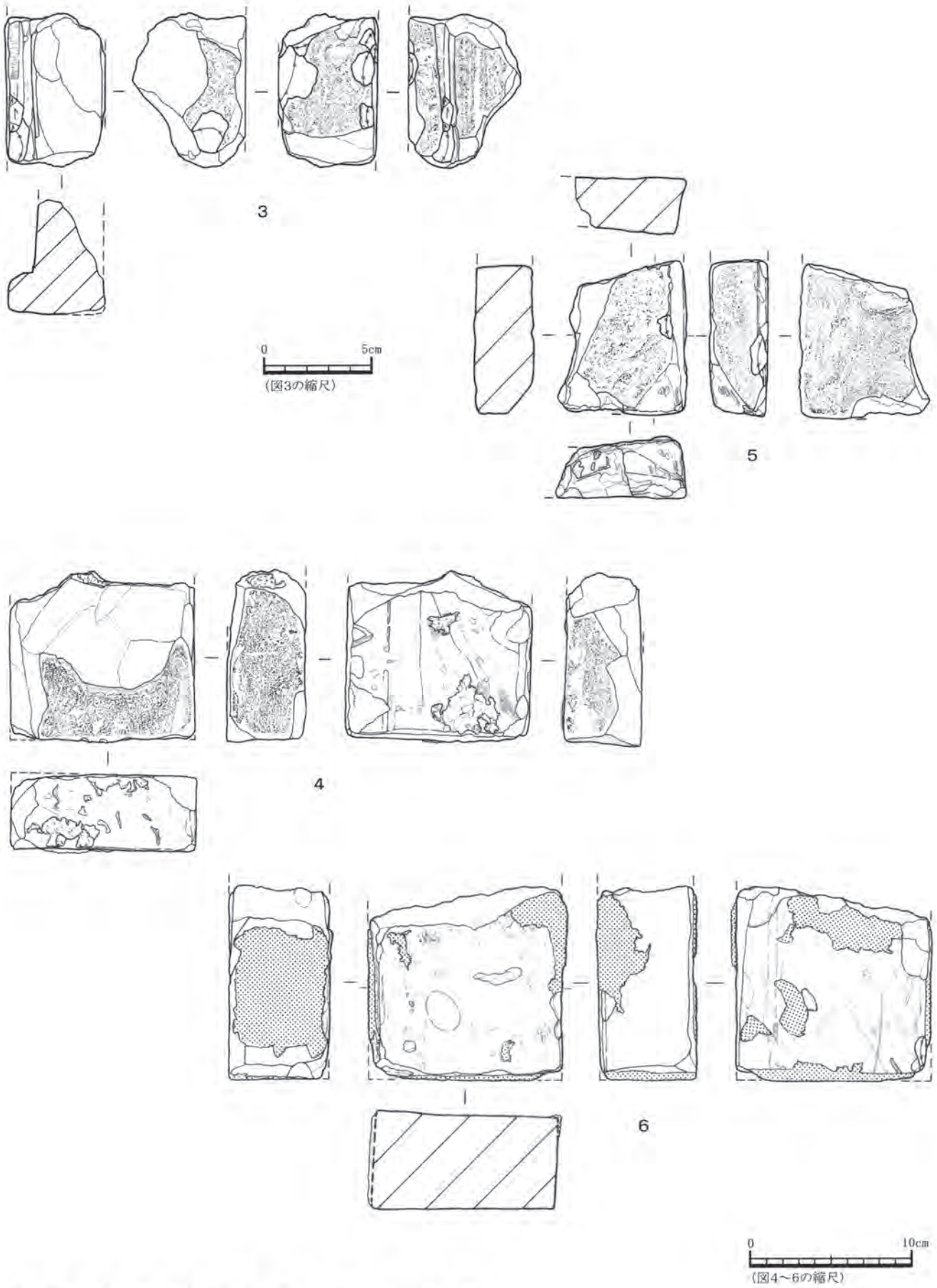
単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称・分類			観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第31図 図版22 3	塼瓦	分類不明	形状分類a	屋根用か土間用の塼か判断し難い資料である。左側面に下駄状の突起を篦削りを加えて仕上げている。器面調整:表面は篦削りを加えて仕上げているが調整は雑である。左側面と裏面は型枠に入った面で平坦面となる。裏面は器面の保持が悪い。器厚:平坦面は31㎜、裏面から突起部分までの厚さは45.9㎜を測った。胎土:泥質で細かい。混入物:微細な石英を主体とし、僅かながら微細な黒色鉱物が混入する。希に粗い石英や黒色や茶褐色の鉱物がみられる。器色:側面と裏面が灰色を帯び、表面が灰白色となる。焼成は良好で堅い。	B・C-11 SD03 第2層b
〃 〃 4		Ⅲ類	Cb	平面観が長方形状となる敷塼。上半部の大半が欠落する。表面の大半は剥離するが残存部分には雑なナデを主体に篦削りがみられる。両側面と下面及び裏面は型枠に入った平坦面であるが、型枠からはみ出した陶土を指圧やナデで軽く雑に加えて仕上げているため陶土が帯状に突出する。裏面は型枠の底面となる為、型枠の繋ぎ目の微弱な段差や取り外し後の指ナデがみられる。裏面と下面には白濁した漆喰が付着する。器厚:46.7㎜を測る。胎土:灰白色の細粒子。混入物:微細な石英、黒色鉱物が多く含まれている。希に粗い茶褐色の物質がみられる。色調:表面は暗橙白色で、裏面や両側面、下面が明橙白色を帯びる。焼成:良好で堅い。	B・C-11 SD03 第2層b
〃 〃 5		Ⅲ類?	Ba	裏面の角が斜位に面取り(三角形状の面)されたことからすると斜位に面取りされた型枠を利用したとみられる敷塼の破片。器面調整:表面は水を利用した指ナデを主体とする為、滑らかな面となる。その他に雑な指ナデもみられる。裏面には不鮮明で粗い布目の圧痕が平坦面に僅かにみられ、大半は器面の保持が悪く、剥落して微弱な起伏が発生する。左側面と下面は型枠に入る面で型枠から帯状にはみ出た陶土を篦ナデや指ナデで軽く調整をしている。器厚:残存部の厚さは35.3㎜を測る。胎土:泥質の細粒子。混入物:微細な石英と黒色の鉱物を少量含んでいる。希に粗い茶褐色の鉱物がみられる。器色:表面は茶褐色で、裏面が明橙色、側面及び下面は明茶色を帯びる。焼成:良好で堅い。	B・C-11 SD03 覆土
〃 〃 6	煉瓦	Ⅳ類	―	近現代の長方形状の煉瓦。漆喰セメントが表裏面と左側面及び下面に塗布されている。右側面は漆喰セメントが垂れて付着する。表面以外は型枠に入る面である。表裏面とも微細な擦痕を主体とし、部分的に篦削りがみられる。右側面には反転する「N」字状のヘラ記号がみられる。胎土は砂粒が多い砂質の陶土で粗粒子である。混入物:微細な石英を多く含む。希に細かい雲母片や煉瓦の細片が含まれている。器色:両面とも黄茶色を主体とするが部分的に暗茶色となる。焼成:良好で堅い。	B・C-11 SD03 第2層b

注 「―」:計測不可



第 30 図 溝 SD03 出土品① 陶質土器 : 1、瓦質土器 : 2



第 31 図　溝 SD03 出土品②　塼瓦：3～5、煉瓦：6

第55表　溝SD03　青磁・青花出土状況

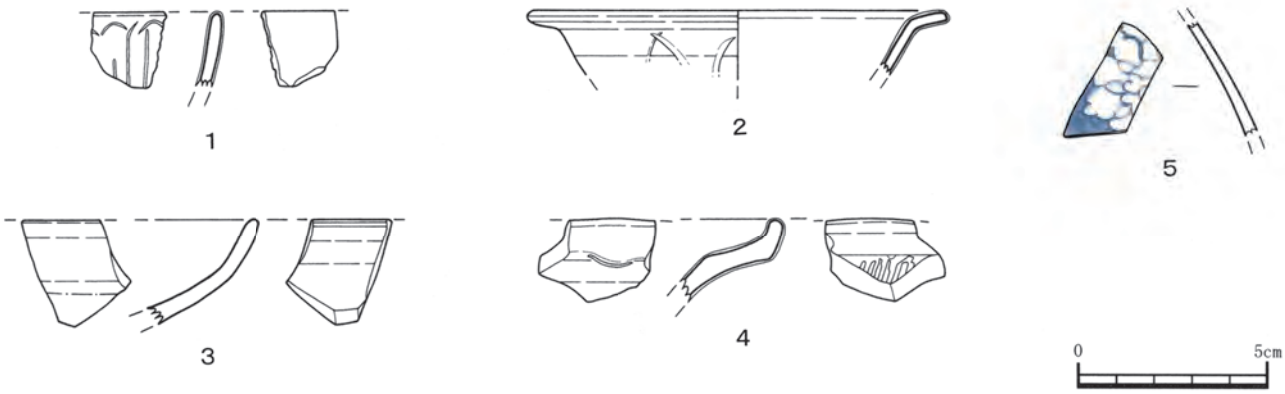
種類・器種・部位 ＼ 層序						B・C-11 SD03 覆土	B・C-11 SD03 遺構内 第2層b	合計
青磁	碗	口縁部	直口	蓮弁	線彫り	1		1
			外反	蓮弁	無文	1		1
		胴部	蓮弁		片切彫り	1		1
			有文			1		1
			無文			2		2
		底部	文様不明			1		1
	皿	口縁部	口折	蓮弁		1		1
			外反	蓮弁	片切彫り		2	2
				有文不明		1		1
				無文		1		1
			直口	無文		1		1
		胴部	蓮弁	片切彫り			2	2
			無文			1		1
		底部	有文不明			1		1
			無文			1		1
	盤	口縁部	鍔縁	蓮弁	櫛描		1	1
			タガ状鍔縁	文様不明		1		1
		胴部	蓮弁	丸篦		1		1
			文様不明				1	1
合　計						16	6	22
青花	瓶	胴部				1		1
合　計						1	0	1

第56表　溝SD03　青磁・青花観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第32図 図版23 1	青磁	蓮弁文細線刻碗	口縁部	― ― ―	器形：細線刻蓮弁文碗。直口口縁で口唇が丸味を持つ。文様：外面に線彫りで弁軸と弁先を描くが両者は一致しない。素地：橙白色の細粒子で、微細な黒色や茶色の鉱物が少量みられる。釉色：淡灰緑色の釉が両面にみられる。貫入：両面に細かい貫入がみられる。福建・広東省の窯。15c後半～16c前半。	B・C-11 SD03 覆土
〃 〃 2		皿	口縁部	11.1 ― ―	器形：外反口縁皿。文様：外面に片切彫りで弁先が交差する蓮弁文を描く。素地：灰白色の細粒子で、微細な黒色の鉱物が少量みられる。釉色：淡緑色の釉が両面にみられる。貫入：ない。龍泉窯系。14c後半～15c前半。	B・C-11 SD03 第2層b
〃 〃 3				― ― ―	器形：胴上部で軽く屈曲させてそのまま口縁部まで直線的に直口する無文皿。素地：淡灰色の細粒子で、粗細な白色や黒色鉱物を少量含む。釉色：淡黄緑色の釉が内面から外面途中まで施釉する。外面胴下部には粗密な刷毛目が鮮明にみられる。貫入はない。泉州窯系。14c後半～15c前半。	B・C-11 SD03 北側覆土
〃 〃 4		盤	口縁部	― ― ―	鍔縁盤。器形：口縁部を一旦外反させた後に口縁端部を上方に摘まみ上げて仕上げる。その為、内面の口頸部に鮮明な稜線がみられる。文様：内面に櫛描きで蓮弁文を描く。素地：灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物が多くみられる。釉色：淡灰緑色の釉が両面でみられる。貫入はない。中国南部（福建・広東）の窯。14c末～15c。	B・C-11 SD03 第2層b
〃 〃 5	青花	瓶	胴部	― ― ―	瓶の胴部破片とみられる。文様：外面の胴部は濃淡のある呉須で器面を埋めながら白抜きの牡丹文が描かれている。素地：淡灰白色の微粒子。釉色：内面に淡灰白色の釉が施されている。景徳鎮窯。16c末～17c前半？。	B・C-11 SD03 覆土

注「―」：計測不可



第 32 図　溝 SD03 出土品③　青磁：1～4、青花：5

第57表　溝SD03　中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器出土状況

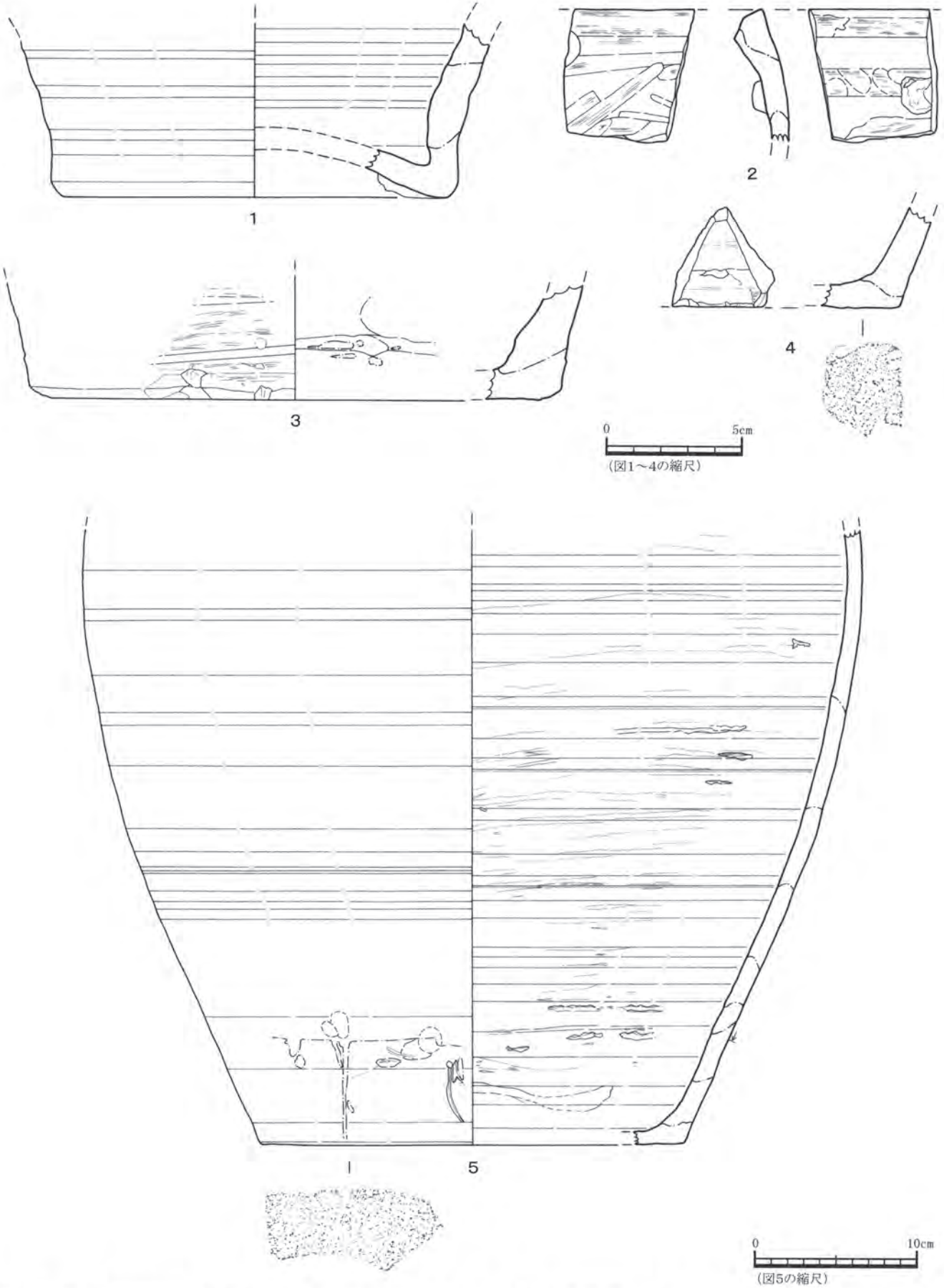
種類・器種・部位 ＼ 層序				B・C-11 SD03 覆土	遺構内 第1層	遺構内 第2層a	遺構内 第2層b	合計
中国産褐釉陶器	壷	口縁部	方形状	1				1
		胴部		50			17	67
		底部		1				1
	鉢	口縁部		1				1
合　計				53	0	0	17	70
タイ産褐釉陶器	壷	口縁部				1		1
		肩部					1	1
		胴部		12	1		10	23
		底部		3	1	1		5
合　計				15	2	2	11	30

第58表　溝SD03　中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第33図 図版24 1	中国産褐釉陶器	壷	底部	― ― 14.4	器形:怒り肩の壷の底部破片で、内外面の轆轤痕は内面よりも外面が顕著である。外底面の縁沿いに砂胎土目の目痕がみられる。外底面が内側に大きく窪んでいる。底面からの立ち上がりは、内側に閉じ気味で、ほぼ直線的に立ち上がりそのまま胴部へ移行する。文様：なし。素地：淡茶紫色の細粒子で、微細な石英を多く含み、希に粗い石英（2.6㎜×2.7㎜）と茶褐色の鉱物（3.0㎜×3.8㎜）がみられる。釉色：茶褐色の釉が内面から外底面まで施されているが、内面の釉のみ白濁している事から下地に白色の化粧土を塗布したようである。貫入：なし。中国南部の窯。14c～15c。	B・C-11 SD03 覆土
〃 〃 2		鉢	口縁部	― ― ―	器形:内彎口縁の鉢で、口唇部を尖らせて成形する。外面は水撫でを主体とし丁寧であるが部分的に微細な擦痕がみられる。内面は雑な轆轤痕と指ナデによる回転擦痕がみられる。内面に二次的な火熱を受けて細片化した炭片や骨片などが付着する。文様：なし。素地：淡橙白色の細粒子で、粗細な石英を少量含む。釉色：外面にのみ黄褐色の釉が施されている。貫入はない。中国南部の窯。15c～16c。	B・C-11 SD03 覆土
〃 〃 3	タイ産褐釉陶器	壷	底部	― ― 19.6	器形：底面から内側に閉じ気味に直線的に立ち上がる壷の底部破片。器面調整：外面は底面から立ち上がる部分に篦削りを加える以外は回転擦痕で仕上げている。外底面は微弱に起伏する平坦面であるが、全体的に黄白色の泥釉が付着して判然としない。内面は釉上からの観察では雑な轆轤痕がみられる。素地：明茶紫色の細粒子で、粗細な石英を少量含む。希に粗い鉱物（黒色、茶褐色、石英）がみられる。釉色：内面にのみ茶紫色の釉が施されている。メナムノイ窯。15c後半～16c前半。	B・C-11 SD03 覆土
〃 〃 4				― ― ―	器形：　〃　。薄造りの壷とみられる。器面調整：外面は篦削り後にナデで仕上げている。外底面は平坦面であるが、全体的に赤茶色の泥釉が付着して判然としない。内面はナデを主体とするが、胴部は丁寧で内底面が雑である。底面近くで指圧痕もみられる。素地：茶紫色の細粒子で、粗細な石英を多く含む。希に粗い鉱物（黒色、茶褐色、石英）がみられる。釉色：外面にのみ茶褐色の釉が施されていたようであるが、大半は剥落する。メナムノイ窯。15c後半～16c前半。	B・C-11 SD03 覆土
〃 〃 5				― ― 26.3	器形：　〃　。上記4と同様に薄造りの壷である。器面調整：外面は篦削り後にナデを加えて丁寧に仕上げている。外底面は平坦面であるが、全体的に粗い石英を主体とする砂粒が付着した痕跡があり、砂を敷いた上に陶土を乗せて製品を製作したようである。砂の大半は抜け落ちてアバタ状となる。内面は雑な篦削りを主体とし、部分的にナデがみられる。素地：赤橙色の細粒子で、粗細な石英を多く含む。釉色：外面の胴部にのみ黒褐色の釉を施すが、胴下部から変色して黄褐色や白色となる。メナムノイ窯。15c後半～16c前半。	B・C-11 SD03 第2層a ＋ D-10 フーチン④の南

注「―」：計測不可、「＋」：接合の意



第 33 図　溝 SD03 出土品④　中国産褐釉陶器：1･2、タイ産褐釉陶器：3～5

第59表　溝SD03　本土産磁器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器出土状況

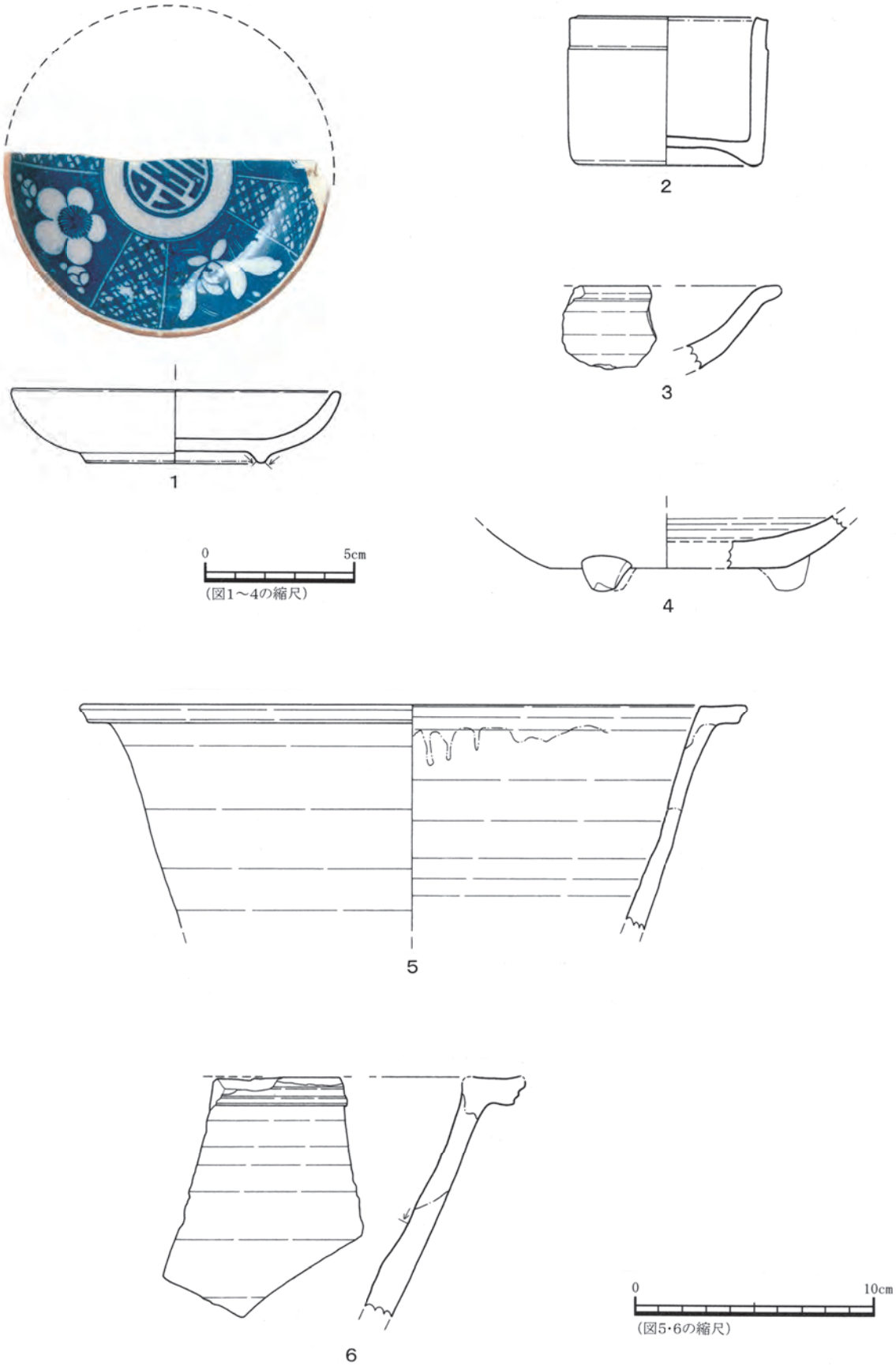
種類・器種・部位 ＼ 層序				B・C-11 SD03 覆土	遺構内 第2層a	遺構内 第2層b	合計
本土産磁器	印判染付（スタンプ）	小碗	底部	1			1
	型紙刷り	皿	口縁部～底部		1		1
	クロム青磁	碗	口縁部	1			1
	近現（スタンプ＋シール）	小碗	口縁部			1	1
	近現	円筒形容器	底部	1			1
		碍子	―			1	1
		碍子or実験用具	口縁部～底部	1			1
		器種不明	口縁部～底部	1			1
			胴部	1			1
			底部	1			1
合　計				7	1	2	10
沖縄産施釉陶器	碗	胴部		2			2
	皿	口縁部	外反		1		1
	急須	胴部		1			1
		底部		1			1
	香炉	底部			1		1
合　計				4	2	0	6
沖縄産無釉陶器	鉢	口縁部		2	1		3
		底部		2			2
	器種不明	胴部		5		5	10
		底部				1	1
合　計				9	1	6	16

第60表　溝SD03　本土産磁器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第34図 図版25 1	本土産磁器	皿	口縁部 底部	11.0 2.4 6.0	型紙刷りの製品。型抜き成形とみられ畳付が露胎する。文様：内面にのみ文様を施す。内面の見込みに丸文に「壽」の文字を、胴部から口縁には型紙で「牡丹（花文）」と「梅花文」をダミ技法で白抜きして、上下左右を区画して「牡丹」と「梅花」の間を区画帯（二重格子文で構成）で分けている。区画帯は「三本単位の格子文」と「波状文の十字文重ね格子文」の異なる格子文を重ねた文様構成となるが、この区画帯の二重格子文に文様のズレがみられる。素地：光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色：口唇部にのみ黄茶色の釉がみられ他は白色を帯びる。瀬戸・美濃系。明治・大正期か。	B・C-11 SD03 第2層a
〃 〃 2		碍子か実験用具	口縁部 底部	6.6 5.0 6.4	鋳型成形で円筒形の容器で外底面（高台内側部分）にはプレス加工時に発生した陶土の皺が放射線状にみられる。碍子若しくは実験用容器とみられる。口縁部分で微弱な段差がみられる。素地：光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色：内面にのみ白色の釉を施し、口縁部と口唇部及び外底面は露胎する。現代。	B・C-11 SD03 覆土
〃 〃 3	沖縄産施釉陶器	皿	口縁部	― ― ―	器形：外反口縁の白釉皿。釉上から外面に削り調整痕や轆轤痕が観察できる。文様：なし。素地：黄白色の細粒子で劈開面から微細な気泡痕が少量みられる。釉色：両面とも白濁した黄白色の釉を施す。釉下には白化粧土が施されている。表裏面に粗い貫入がみられる。	B・C-11 SD03 第2層a
〃 〃 4		香炉	底部	― ― 8.0	器形：三足の香炉若しくは急須の底部とみられる。内面が露胎となるため、前者の可能性が高い。外底面の立ち上がりの部分に瘤状の突起を貼り付けて脚とする。器面調整：外面は釉上や釉が剥げ落ちた部分から観察すると粗い刷毛目様の調整がなされている。内面は薄く白色の化粧土が塗布されているが、水引きの轆轤調整痕が確認できる。文様：なし。素地：黄白色の細粒子で劈開面から粗細な気泡痕が少量みられる。釉色：外面は白濁した黄白色の釉を施す。内面は薄く白化粧土が施されている。外面にのみ細かい貫入がみられる。	B・C-11 SD03 第2層a
〃 〃 5	沖縄産無釉陶器	鉢	口縁部	28.0 ― ―	器形：口縁部の縦断面が逆さ「L」状となり、口唇部が幅広となる鉢。下着洗い専用の水鉢（俗称：メーチャーアラヤー）。文様：口縁部に丸篦（幅2.5㎜）で二条の界線を施している。器面調整：外面及び口唇部は丁寧で微細な回転擦痕が施されている。内面は顕著な轆轤痕と粗い回転擦痕がみられ、外面よりも雑である。茶紫色の化粧土が外面から内面胴部の途中まで施されている。素地：明橙色の細粒子で、粗い石灰質砂粒と赤茶色や茶褐色の物質が少量含んでいる。焼成：良好で堅い。	B・C-11 SD03 第2層a
〃 〃 6				― ― ―	器形：　〃　。　〃　。文様：なし。器面調整：　〃　。内面は外面よりも雑な轆轤痕と細かい回転擦痕がみられる。茶紫色の化粧土が両面の口縁部と口唇部にのみ施されている。素地：灰褐色の細粒子で、微細な石英と黒色鉱物を少量含む。小型の巻貝（殻長11㎜。オニノツノガイ科の外洋ーサンゴ礁域、亜潮間帯上縁部、礫/砂/泥底に生息するヨコワカニモリとみられる。）が含まれている。焼成：良好で堅い。	B・C-11 SD03 覆土

注「―」：計測不可



第 34 図　溝 SD03 出土品⑤　本土産磁器：1･2、沖縄産施釉陶器：3･4、沖縄産無釉陶器：5･6

第61表　溝SD03　骨製品・石製品・金属製品出土状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						B・C-11 SD03 覆土	遺構内 第2層a	遺構内 第2層b	第3層	合計
骨製品	用途不明	肋骨	ｼﾞｭｺﾞﾝ			1				1
合　計						1	0	0	0	1
石製品	硯	凝灰岩製					1			1
合　計						0	1	0	0	1
金属製品	工具類・生産用具	丸釘	頭部欠損	中	鉄			2		2
		角釘	完形	中	鉄			5	1	6
				小	鉄			2		2
			頭部欠損	大	鉄			1		1
				中	鉄			2		2
		釘or鎹			鉄				1	1
	装身具	ボタン			真鍮・亜鉛				1	1
	生活用具？	量りの分銅？			青銅				1	1
	武器	砲弾片			鉄	2				2
	分類不明	用途不明			鉄			7		7
					青銅		1			1
合　計						2	1	19	4	26

注　釘のサイズは、大:5寸半以上(15.75cm以上)、中:1寸半～5寸まで(3.75cm～15.75cm未満)、小:1寸まで(3.75cm未満)

第62表　溝SD03　二次的火熱溶解銭貨

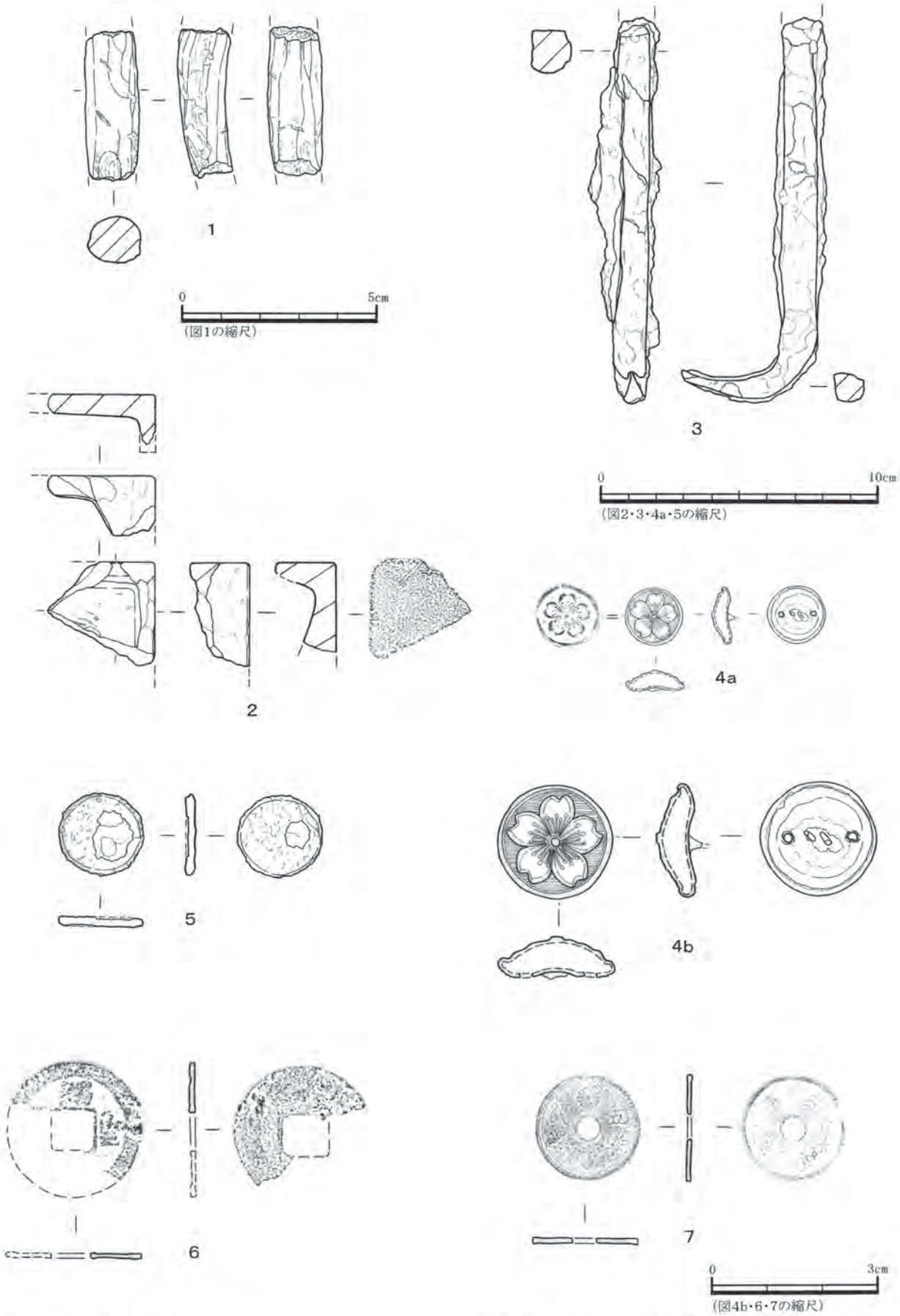
銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
紹聖元寳(北宋1094年初鋳)	1片	1.76	「紹」・「聖」の二字が残存	B・C-11 SD03覆土
五銭(大正十年)	1枚	2.22	完形	C-11 SD03覆土
合　計	2			

第63表　溝SD03　骨製品・石製品・金属製品・銭貨観察一覧

単位:cm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称・分類			残存長(縦) 残存幅(横)	残存厚 重量	観察事項	出土地点 出土層
第35図 図版27 1	骨製品	未製品		3.84 1.4	1.3 6.2	ジュゴンの肋骨を製品とする前に放棄されたとみられる資料である。表面には僅かな研磨面と刃物による傷が観察できる。裏面には同様の刃物傷がみられる。	B・C-11 SD03 覆土
〃 〃 2	石製品	硯		3.7 3.85	2.15 22.2	硯の海部破片。海部は丁寧に削って製作されている。裏面は使用によって滑らかな面となっている。上側面と右側面も丁寧な平坦面を形成する。凝灰岩製。	B・C-11 SD03 第2層a
〃 〃 3	金属製品	工具類・生産用具	釘か鎹	13.8 1.2	最大1.3 最小0.3 144.6	建築部材(梁や柱など)を連結・接合の際に使用した大型の釘、若しくは鎹。頭部が欠落し、身部の先端部分が内側に湾曲する。鎹の身部と比較した場合、身部の湾曲部分が緩やかなことからすると釘の可能性が高い。全体的に器面の保持が悪く、剥離や亀裂がみられ、地金の大半が露出する。材質:鉄。	B・C-11 SD03 第3層
〃 〃 4		装身具	ボタン	2.08 2.08	最大0.6 最小0.2 1.8	真鍮と亜鉛の合金とみられる小学生用の学生服の前ボタン。糸通しの輪っかが破損している。陽文の桜の花を型押し(プレス加工)で起こされている。	B・C-11 SD03 第3層
〃 〃 5		生活用具？	量りの分銅？	2.95 2.98	最大0.28 最小0.27 7.9	円盤状の製品で用途不明である。量りの分銅や無文の銭貨などが想定されるが緑青の影響を大きく受けて錆膨れや器面の剥離がみられる。横断面の観察から外周側縁部は扁平な隅丸を呈し、表裏面に肉郭様の縁の痕跡が窺える程度で、それ以外は無文である。銭貨として考えるのであれば、明治6年の1厘銅貨のサイズとほぼ一致する。材質:青銅。	B・C-11 SD03 第3層
〃 〃 6	銭貨	紹聖元寳		―　　 ―	重量 1.76	紹聖元寳の「紹」・「聖」の字款が残存するが磨耗が著しい。背は鋳型のズレによって肉郭もズレている。面・背とも緑青の影響で錆膨れや剥離がみられる。鋳造種類:公鋳銭。初鋳年:北宋1094年。素材:銅銭。読み方:回読。状態:破損。書体:行書。肉郭外径・内径:ー。方穿:Eー、F7.02㎜。断面計測部位:①1.07㎜、②0.77㎜、③0.99㎜。	B・C-11 SD03 覆土
〃 〃 7		五銭		―　　 ―	重量 2.22	面には型起こしの陽文で素地に「青波文」があり、その上から「大日本 大正十年」と円穿の廻りに花文が起こされている。背も陽文の型で起こされた「五銭」と「菊」・「桐」がみられる。面・背とも器面の保持が悪く、全体的に薄く剥離している。小型五銭白銅貨(銅・ニッケル)。肉郭外径:A19.01㎜、B19.00㎜。内径:ー。方穿:ー。断面計測部位:①1.26㎜、②ー、③ー。	B・C-11 SD03 覆土

注 「ー」:計測不可



第 35 図　溝 SD03 出土品⑥　骨製品：1、石製品：2、金属製品：3～5、銭貨：6・7

第64表　溝SD03　ガラス製品出土状況

器種・部位 ＼ 層序		B・C-11 SD03 覆土	遺構内 第2層b	第3層	合計
瓶	口縁部	1			1
	胴部		1		1
	底部		1		1
薬瓶？		1			1
目薬の容器？				1	1
お弾き				3	3
ビー玉		1	4	5	10
板ガラス		7			7
不明		1			1
合　計		11	6	9	26

第65表　溝SD03　ガラス製品(写真のみ)観察一覧

単位：mm/g

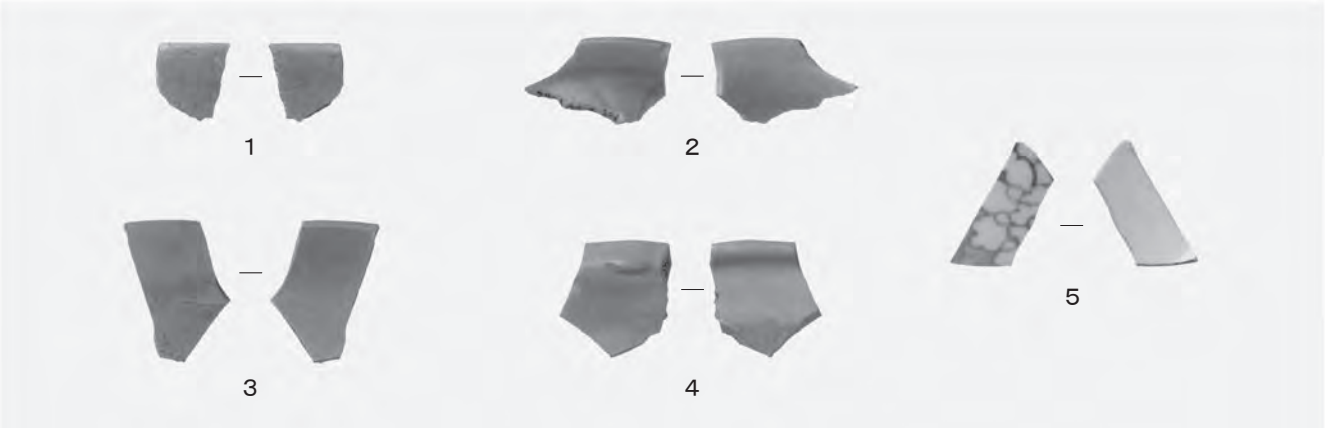
図版番号 遺物番号	名称・仮称	残存長(縦) 残存幅(横)	残存厚 重量	観察事項	出土地点 出土層
図版26 1	医療用品 薬瓶？	81.15 37.10	38.50 49.0	完形の医療用の薬瓶とみられるが製品としては粗雑な造りである。薄い緑茶色。型物成形で製作時の鋳型同士の重ね目にバリや鋳型からガラスを取り出す際に生じた傷様の窪みが残っている。上面からみると口縁と身部がズレている。また、側面からの観察では身部と口縁が若干ズレていて、口唇部も水平ではなく傾いている。ガラス内部に気泡がみられる。	B・C-11 SD03 覆土
〃 2	医療用品 目薬の容器？	48.92 33.37	最大 7.25 最小 5.86 4.9	平面観は滴状となるガラス製の目薬の容器、若しくは実験器具の撮みとみられる製品で上端が破損する。吹きガラス製法とみられる。横断面が扁平な隅丸となる。上部の排出口と身部のバランスは若干崩れている。	B・C-11 SD03 覆土
〃 3	お弾き	20.0 13.50	最大 3.82 最小 2.63 1.6	明治期後半以降の型押しのお弾き。平面観が楕円形となるお弾きで、表面にのみ陽文の格子目文がみられる。裏面には文様はないが、型から製品を取り外す為の細い沈線様(針金状)の窪みとバリなどがみられる程度である。色調は水色を帯びる。	B・C-11 SD03 覆土
〃 4	お弾き	18.69 16.01	最大 3.85 最小 2.60 1.9	〃　。〃　、〃　。〃　、〃　。色調は青色を主体に繊維状に銀色が入る。青色ガラスに金属を混合して製作されたものとみられる。その為、器面には粗細な気泡痕が多くみられる。	B・C-11 SD03 覆土
〃 5	お弾き	17.81 17.75	最大 4.40 最小 1.74 1.6	〃　。平面観は円形状となるお弾きで、表面にのみ陽文で手を開いたじゃん拳の「パー」(グー、チョキ、パー)を型で起こしているが型がズレて、「パー」の親指部分が欠落する。裏面には文様はないが、型から製品を取り外す為の細い沈線様(針金状)の窪みとバリなどがみられる程度である。色調は白色を主体に斑様に水色が混ざっている。	B・C-11 SD03 覆土
〃 6	ビー玉 (B玉)	16.83 16.78	16.79 6.1	明治30年以降の溝が刻まれた回転ロールで製作されたビー玉(B玉)とみられる。白色のガラスに明黄色のガラスを僅かに混ぜて製作されたようである。表面には製作時の発生した微細な気泡痕や窪みが僅かにみられる。その他に使用時や落下時に生じた微細な剥離痕が僅かにみられる。ビー玉としての形状は良好で、使用頻度は低いようである。	B・C-11 SD03 覆土
〃 7	ビー玉 (B玉)	16.87 16.71	17.15 6.3	〃　。白色のガラスに朱色のガラスを少量混合して製作されたようである。表面には製作時の発生した微細な気泡痕や窪み、皺がみられる。その他に使用時や落下時に生じた微細な剥離痕がみられる。ビー玉としての形状は不良で、使用頻度は高いようである。	B・C-11 SD03 覆土
〃 8	ビー玉 (B玉)	17.39 17.18	17.22 6.8	〃　。白色のガラスに三色(薄緑色、水色、朱色)のガラスを少量混合して製作されたようである。表面には製作時の発生した微細な気泡痕や窪み、皺がみられる。その他に使用時や落下時に生じた微細な剥離痕がみられ、剥離痕の周辺が摩滅する。ビー玉としての形状はやや不良で、使用頻度はやや高いようである。	B・C-11 SD03 覆土
〃 9	ビー玉 (B玉)	17.19 17.17	17.44 6.8	〃　。緑色の透明ガラスで製作されている。表面には製作時の回転ロールによって発生した蛇行する縞目状の粗細な線が全体的に観察できる。また、微細な気泡痕や窪み、皺がみられる。その他に使用時や落下時に生じた剥離痕(内部で生じた微細な三日月や円形の剥離)が多くみられる。剥離痕の周辺が摩滅する。ビー玉としての形状はやや不良で、使用頻度は高いようである。	B・C-11 SD03 覆土
〃 10	ビー玉 (B玉)	16.59 16.56	16.62 6.0	〃　。透明度の高い薄い青色ガラスで製作されている。表面からの内部観察では製作時に発生した微細な気泡が閉じ込められている。表面には微細な窪みや傷がみられる。ラムネの瓶の中に入る品質の高い「A玉」と称されているものの可能性が高い。製品としての形状などは良好で、使用頻度は低いようである。	B・C-11 SD03 覆土

第66表　溝SD03　出土遺物状況（図版外）

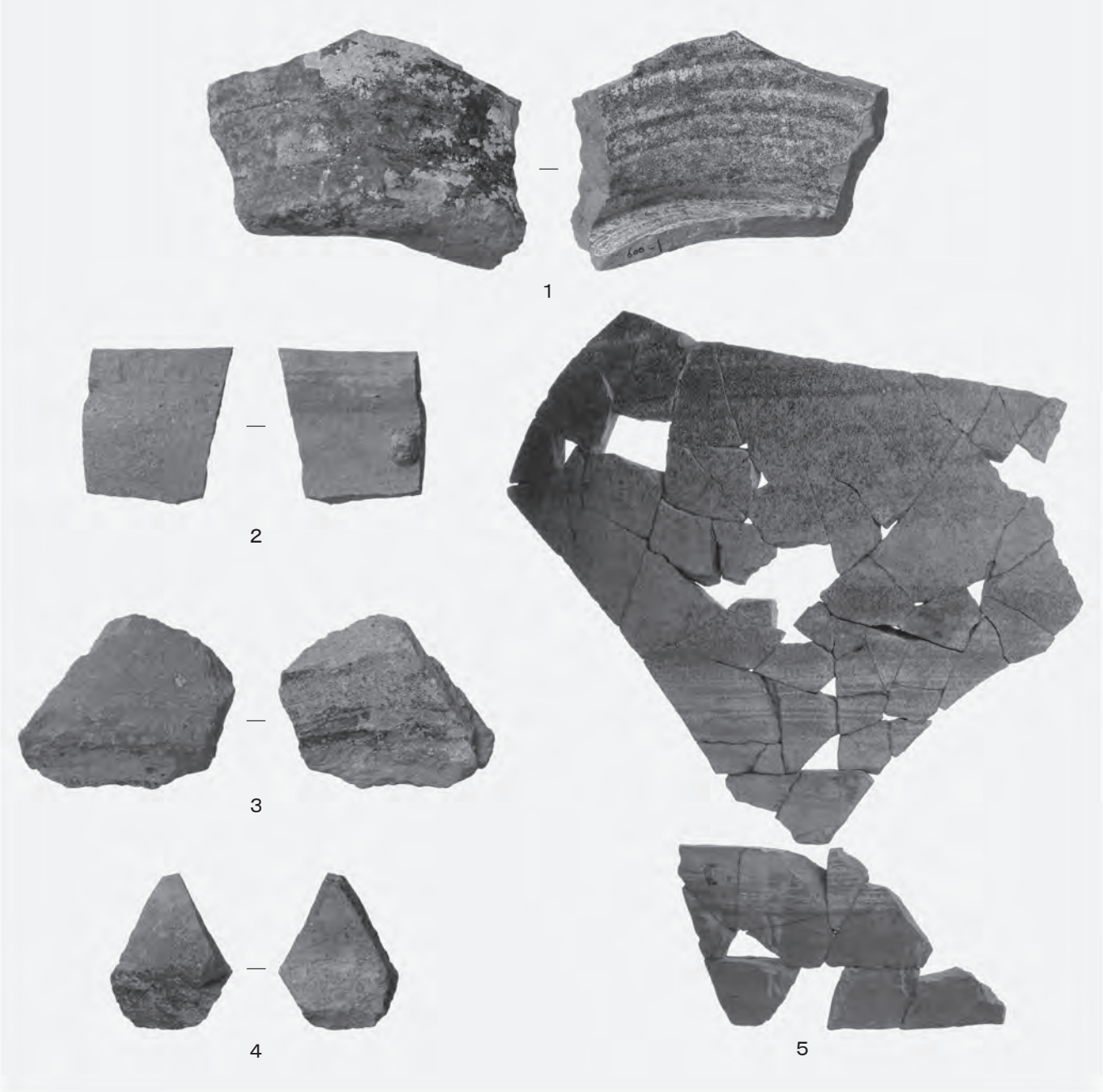
種類・器種・部位 ＼ 層序					B・C-11 SD03 覆土	遺構内 第2層a	遺構内 第2層b	合計
土器	グスク系	器種不明		胴部	3			3
合　計					3	0	0	3
屋瓦	高麗系	平瓦	灰色	漆喰無し	4		2	6
	大和系（古）	平瓦	灰色	漆喰無し	2		2	4
	大和系	丸瓦	灰色	漆喰あり（片面）	2		4	6
		平瓦	灰色	漆喰あり（片面）	3		7	10
				漆喰無し	8		11	19
	明朝系	軒丸	褐色	漆喰無し			1	1
			赤色				2	2
		軒平	褐色	漆喰無し			1	1
		丸瓦	灰色	漆喰あり（片面）	6		7	13
				漆喰無し	4		10	14
			褐色	漆喰あり（片面）			3	3
				漆喰無し			1	1
			赤色	漆喰あり（両面）	3		1	4
				漆喰あり（片面）	112		52	164
				漆喰無し	36		19	55
		平瓦	灰色	漆喰あり（両面）			1	1
				漆喰あり（片面）	2		8	10
				漆喰無し	17	1	48	66
			褐色	漆喰あり（片面）	2			2
				漆喰無し	2		1	3
			赤色	漆喰あり（両面）	3			3
				漆喰あり（片面）	187		75	262
				漆喰無し	276		156	432
合　計					669	1	412	1082
漆喰	―				1		6	7
合　計					1	0	6	7
焼土	―						1	1
合　計					0	0	1	1
白磁	碗	口縁部	外反		1			1
		胴部	―		1		1	2
合　計					2	0	1	3
彩釉陶器	瓶	胴部			1			1
	鶴形水注	底部					1	1
合　計					1	0	1	2
本土産陶器	壷or甕	胴部	薩摩系		1			1
合　計					1	0	0	1
石材	細粒砂岩（ニービ）						9	9
	石灰岩					1		1
自然石	河原石						2	2
合　計					0	1	11	12
近・現代	ボタン			青銅		1		1
	がまぐち財布の金具			青銅		1		1
	タバコケースの金具			青銅	1			1
	アルミ製容器の蓋			-		1		1
	銅線			銅		1		1
合　計					1	4	0	5

図版 21　溝 SD03 出土品①　陶質土器：1、瓦質土器：2

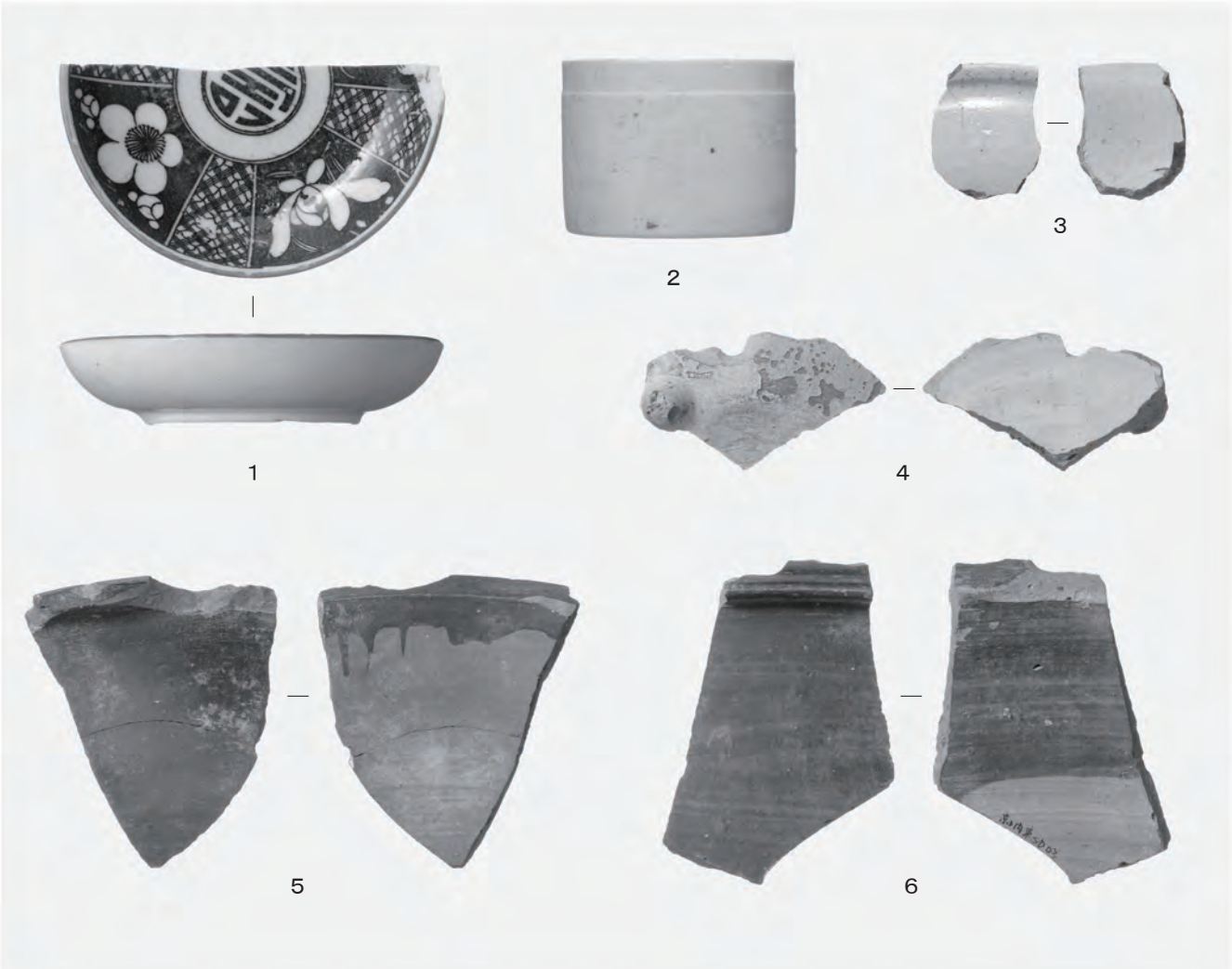
図版 22　溝 SD03 出土品②　塼瓦：3～5、煉瓦：6



図版 23　溝 SD03 出土品③　青磁：1～4、青花：5

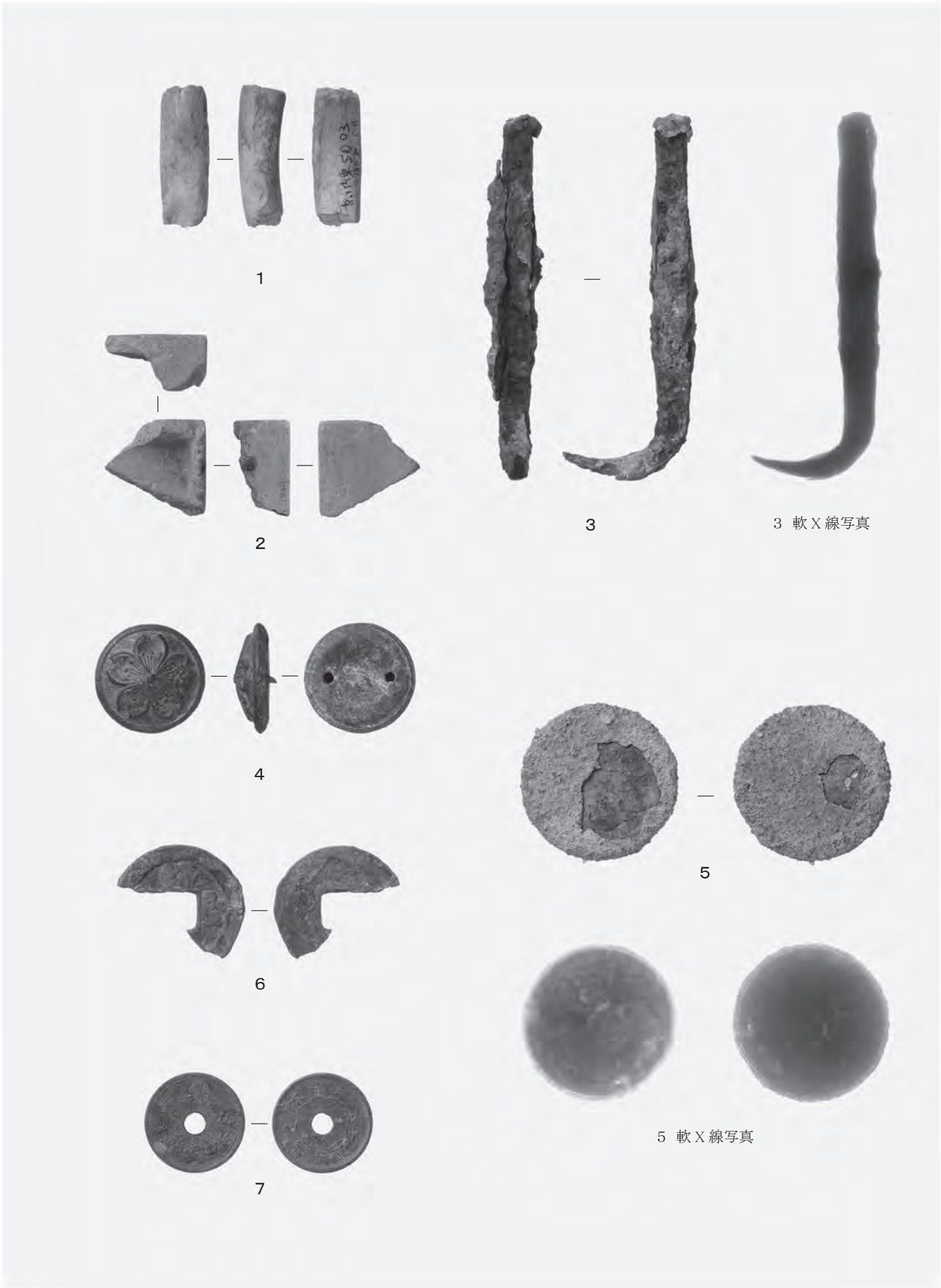


図版 24　溝 SD03 出土品④　中国産褐釉陶器：1･2、タイ産褐釉陶器：3～5



図版 25　溝 SD03 出土品⑤　本土産磁器：1･2、沖縄産施釉陶器：3･4、沖縄産無釉陶器：5･6

図版 26　溝 SD03 出土品⑦　ガラス製品：1～ 10（写真のみ）



図版 27 溝 SD03 出土品⑥ 骨製品：1、石製品：2、金属製品：3～5、銭貨：6･7

（11）石積み SA09 の出土遺物（第 6 図・第 36 図、図版 28、第 67～69 表）

石積み SA09 出土の遺物は総計で 160 点（≒100%）を数えた。最も多く出土したのは屋根瓦などに使用された漆喰が 38 点（23.7%）、次いで近現代の釘 3 点と戦時中の砲弾破片 20 点及び弾丸 1 点を含む金属製品 29 点（18.1%）、中国産褐釉陶器 24 点（15%）、沖縄産屋瓦（第 5・67 表参照。高麗系、大和系、明朝系を含む）の 13 点（8.1%）、塼瓦 10 点（6.2%）、中国産青磁 7 点（4.4%）、タイ産褐釉陶器 6 点（3.7%）、沖縄産施釉陶器 5 点（3.1%）、中国産青花 4 点（2.5%）、本土産磁器 4 点（2.5%）、近現代の瓶や板ガラス 4 点（2.5%）、中国産彩釉陶器 3 点（1.8%）、銭貨 3 点（1.8%）、沖縄産無釉陶器 2 点（1.2%）など順次減少する。なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的に大きな破片資料や特徴的な資料を図示（第 36 図、図版 28）した。参考までに石積み SA09（建物跡）の西側に溝 SD05（第 6 図参照）が設置されている。

第67表　石積みSA09　出土遺物状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						C-12・13 SA09 第1層	東西トレンチ 第1層	南北トレンチ 第1層	南北トレンチ 第1層(淡茶色混礫土層)	南北トレンチ 東側第2層b(茶褐色混土礫層)	合計
土器	グスク系	器種不明	胴部					1			1
合計						0	0	1	0	0	1
陶質土器	器種不明	胴部							1		1
合計						0	0	0	1	0	1
屋瓦	高麗系	平瓦	灰色		漆喰無し		1				1
	大和系	丸瓦	灰色		漆喰あり(両面)	1					1
		平瓦	灰色		漆喰あり(両面)	1					1
	明朝系	平瓦	灰色		漆喰あり(両面)			1			1
					漆喰あり(片面)			1			1
					漆喰無し			3		1	4
			褐色		漆喰無し					1	1
			赤色		漆喰無し	1		2			3
合計						3	1	7	0	2	13
塼瓦	Ⅰ類	不明	灰色	漆喰無し	角無し		1				1
	Ⅱ類	―	灰色	漆喰無し	角無し	1					1
	Ⅲ類	Aa	灰色	漆喰無し	角1		1				1
		Ba	赤色	漆喰無し	角1		1				1
		形状不明a	灰色	漆喰無し	角無し		1				1
			赤色	漆喰無し	角無し		1				1
		形状不明b	灰色	漆喰無し	角1			1			1
					角無し		1	2			3
合計						1	6	3	0	0	10
漆喰	―							38			38
合計						0	0	38	0	0	38
青磁	碗	胴部	蓮弁		片切り彫り				1		1
			有文						1		1
			無文			1			1		2
	盤	口縁部	鍔縁			1					1
	酒会壷	胴部				1					1
	瓶	胴部						1			1
合計						3	0	1	3	0	7
白磁	瓶	胴部				1					1
合計						1	0	0	0	0	1
青花	碗	口縁部					1				1
		胴部						1			1
		底部				1					1
	皿	底部					1				1
合計						1	2	1	0	0	4
彩釉陶器	鶴形水注	胴部				3					3
合計						3	0	0	0	0	3
黒釉陶器	碗	胴部								1	1
合計						0	0	0	0	1	1
中国産褐釉陶器	壷	胴部				2	10	3	7	1	23
	器種不明	胴部							1		1
合計						2	10	3	8	1	24
タイ産褐釉陶器	壷	口縁部								1	1
		肩部					1				1
		胴部				1	1		2		4
合計						1	2	0	2	1	6
本土産磁器	印判染付+型紙転写	碗	口縁部				1				1
		蓋				1					1
	近現	小杯	口縁部			1					1
		器種不明	胴部			1					1
合計						3	1	0	0	0	4
本土産陶器	器種不明	胴部				1					1
合計						1	0	0	0	0	1
沖縄産施釉陶器	碗	胴部				1					1
	皿	口縁部				1					1
	急須	胴部				1	1				2
	酒器or急須	胴部				1					1
合計						4	1	0	0	0	5
沖縄産無釉陶器	器種不明	胴部						1		1	2
合計						0	0	1	0	1	2
貝製品	有孔製品									1	1
合計						0	0	0	0	1	1
骨製品	ブラシ					1					1
合計						1	0	0	0	0	1
石製品	砥石片	細粒砂岩(ニーピ)						1			1
合計						0	0	1	0	0	1
金属製品	工具類・生産用具	笠釘	完形	中	鉄	1					1
		丸釘	先端部欠損	中	鉄	1	1				2
			頭部欠損	中	鉄	1					1
		角釘	完形	中	鉄	1					1
			先端＋頭部欠損	中	鉄	1	1				2
	武器	砲弾片			鉄	2	11	3			16
					青銅		4				4
		弾丸			鉄	1					1
	分類不明	用途不明			青銅	1					1
合計						9	17	3	0	0	29
ガラス製品	瓶	口縁部						1			1
		胴部							1		1
		底部				1					1
	板ガラス	―				1					1
合計						2	0	1	1	0	4

注　釘のサイズは、中:1寸半～5寸まで(3.75cm～15.75cm未満)

VI期前半

第68表　石積みSA09　二次的火熱溶解銭貨

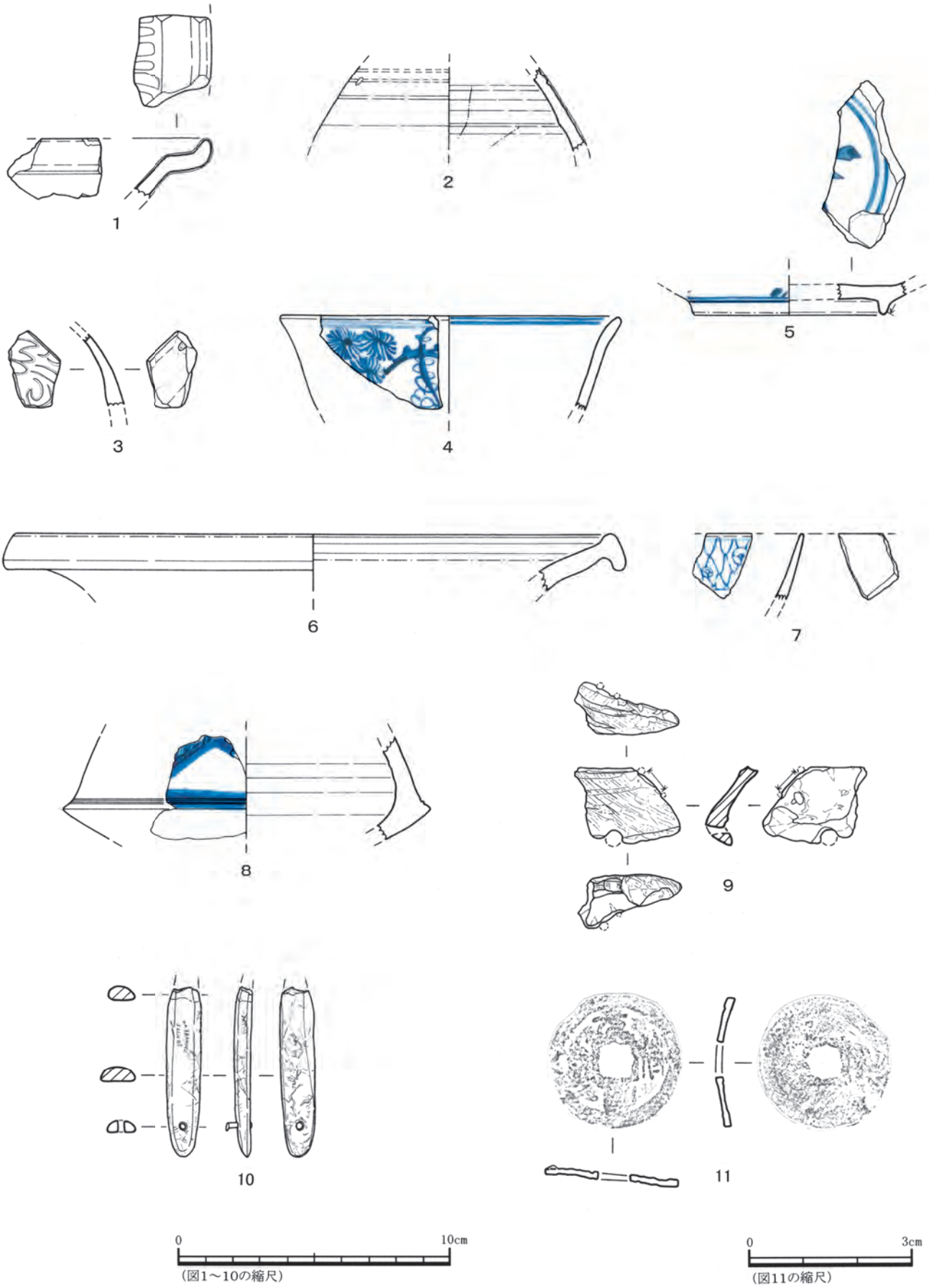
銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
元符通寶(北宋1098年初鋳)	1枚	3.47	完形	C-12・13 SA09 東西トレンチ第1層
元符通寶？(北宋1098年初鋳)	1片	1.02	「通」の一字が残存	C-12・13 SA09 第1層
不明銭貨	1片	0.86	「通」の一字が残存	C-12・13 SA09 第1層
合　計	3			

第69表　石積みSA09　青磁・白磁・青花・タイ産褐釉陶器・本土産磁器・沖縄産施釉陶器・貝製品・骨製品・銭貨観察一覧

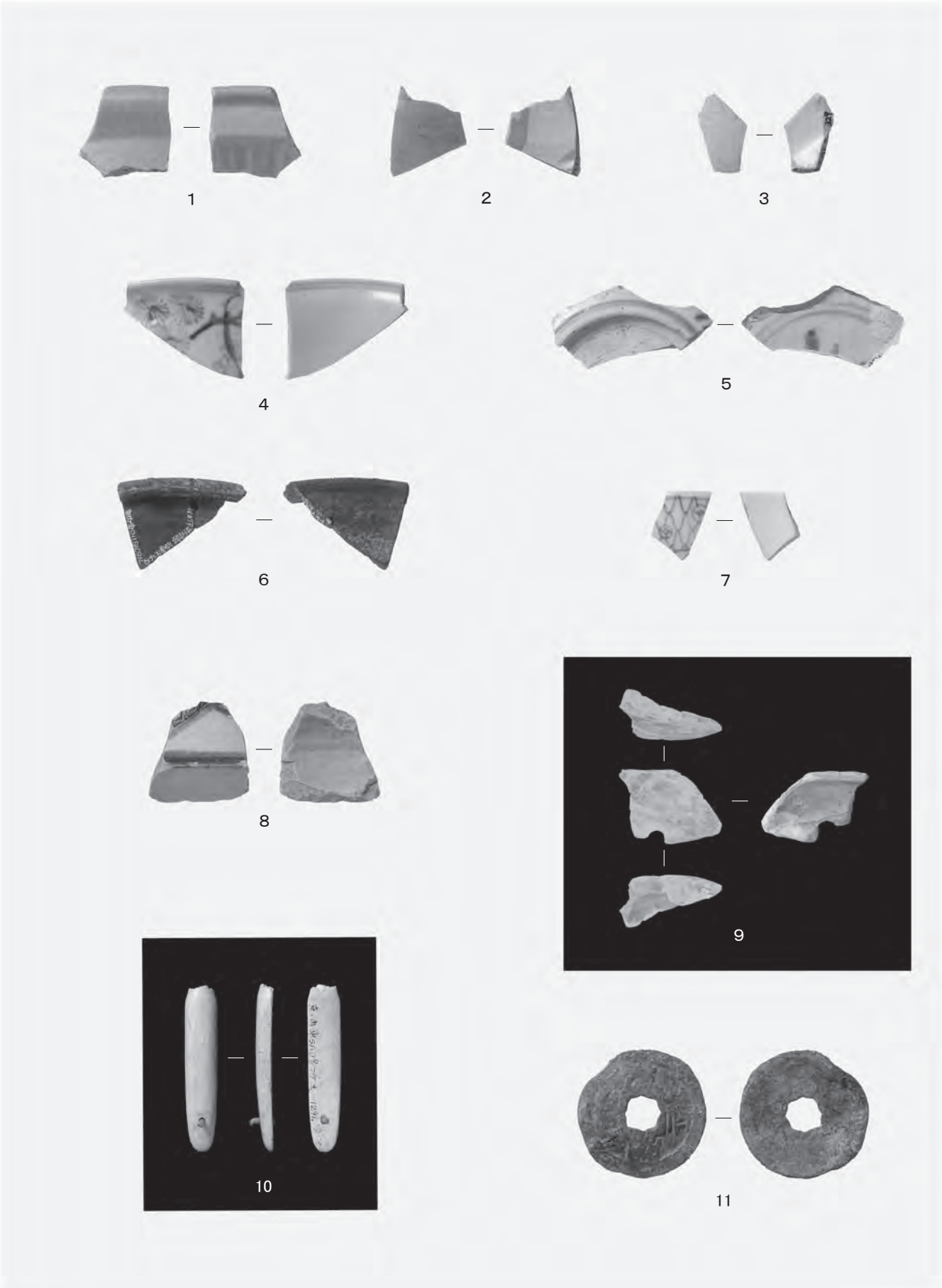
単位：cm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第36図 図版28 1	青磁	鍔縁盤	口縁部	― ― ―	器形：鍔縁盤。口縁端部を上方に折り曲げて口唇部を造る。文様：外面の口頸部に幅広の丸篦(幅4.5㎜)で沈線状に施して、口頸部を強調する。内面にも丸篦(幅5.3㎜)による蓮弁文を描いている。素地：灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物が僅かにみられる。釉色：淡灰緑色の釉が両面に残存する。両面に細かい貫入がみられる。龍泉窯系。14c終末～15c。	C-12・13 SA09 第1層
〃 〃 2		瓶	胴部	― ― ―	器形：玉壷春瓶の胴部片で、残存する胴部の最大径は9.3㎝を求めた。文様：外面の胴上部に線彫りによる界線が二条確認できる程度である。素地：灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物が少量みられる。釉色：灰緑色の釉が外面に施されている。内面は轆轤成形で露胎するが一部に釉垂れがみられる。貫入はない。龍泉窯系。14c後末～15c。	C-12・13 SA09 南北トレンチ 第1層
〃 〃 3	白磁	瓶	胴部	― ― ―	器形：玉壷春瓶の胴部片。文様：外面の胴部に線彫りによる宝相華唐草文を描いている。素地：光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色：白濁した白色の釉が両面に施されている。貫入はない。景徳鎮窯。15c代。	C-12・13 SA09 第1層
〃 〃 4	青花	碗	口縁部	12.6 ― ―	器形：端反碗の口縁破片。文様：外面の口縁端部近くに二条一組の界線を描き、その直下に「松葉文」や「松」・「蔓」を描いている。内面口縁にも二条一組の界線が描かれている。素地：光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色：白濁した淡灰白色の釉を両面に施す。景徳鎮窯。15c前半～中葉。	C-12・13 SA09 東西トレンチ 第1層
〃 〃 5		皿	底部	― ― 7.0	器形：皿の高台破片。文様：外面は高台外面途中から高台脇に二条一組の界線を描き、その直上に「花文」とみられる文様がある。内面の見込みにも「花文」とみられる文様と二条一組の圏線を描いている。素地：灰白色の細粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色：白濁した淡黄白色の釉を内面から外面の高台まで施釉し、畳付から外底面までを露胎とする。細かい貫入が両面でみられる。景徳鎮窯orベトナム？。15c後半～16c前半。	C-12・13 SA09 東西トレンチ 第1層
〃 〃 6	タイ産褐釉陶器	壷	口縁部	23.0 ― ―	器形：外反口縁の壷。口縁端部を上方と下方に突出させて肥厚口縁とする。文様：なし。器面調整：粗密のある回転擦痕が外面の頸部にみられる。素地：灰褐色の細粒子で、微細な石英を主体とし、希に粗細な黒色鉱物が少量含まれている。色調：茶褐色の釉が外面口縁から内面まで施釉されている。外面の頸部のみ露胎する。焼成：良好で堅い。シーサッチャナライ窯。15c～16c。	C-12・13 SA09 南北トレンチ 東側第2層b (茶褐色混土礫層)
〃 〃 7	本土産磁器	小杯	口縁部	― ― ―	器形：近現代の型物成形の小杯。口縁部は直口する。文様：「網目文」と「丸花(蕾み)」とみられるものを型紙で起こしている。但し、口縁部の界線のみ呉須で細線を描いたようである。その為、網目文と界線がズレている。素地：光沢のある白色微粒子。釉色：淡灰白色の釉が両面に施されている。貫入：なし。	C-12・13 SA09 第1層
〃 〃 8	沖縄産施釉陶器	酒器or急須	胴部	― ― ―	器形：側面観が歪な菱形(算盤玉様)となる酒器、若しくは急須の胴部破片。文様：胴部の突出部上部に線彫りで二重界線を施し、界線の上に藍色の呉須を太目の筆で重ね書きをする。二重界線の上には「葉文」を線彫りで葉脈や葉を描き、その上から呉須を重ねて描いている。器面調整：外面は施釉で判然としないが、内面は回転擦痕と轆轤痕がみられる。素地：黄白色の細粒子で、微細な黒色や茶褐色の鉱物を少量含み、希に細かい石英がみられる。色調：外面にのみ施釉。外面は白化粧土の上から透明釉を施し、発色が淡灰白色となる。粗細な貫入がみられる。	C-12・13 SA09 第1層
〃 〃 9	貝製品	有孔製品	―	残存 最大厚 0.7	螺鈿を取得する目的で巻貝のニシキウズ科サラサバテイラを使用したもので、残存部位は螺塔と殻底の一部である。表面には外側から穿孔された孔が左下(孔径6㎜)と右側面(小孔が上端と中央に二孔)が穿たれている。磨り切りは外側から右側面の小孔(上端)と小孔(中央)の間に実施されている。更に上面の左寄りに孔が2孔外側から内側に向かって穿たれたようである。打割は左側面に二箇所(剥離面を形成する)外側から実施されている。その他に上部の殻底には剥離調整による剥離痕が二・三箇所確認ができる。残存長(縦)：2.85㎝、残存幅(横)：3.52㎝、孔外径：0.59㎝、孔内径：0.68㎝、重量：8.7g。	C-12・13 SA09 南北トレンチ 東側第2層b (茶褐色混土礫層)
〃 〃 10	骨製品	ブラシ	―	残存厚 0.6	台部(植毛部)と首部(くびれ)が失われたブラシの柄部(柄把部)で牛骨(肋骨？)製とみられる。表面には細線彫りで「WARRANDED　SECURE(訳：安全保証)」と彫り込まれている。柄の先端から上に10.5～12.7㎜の範囲内には直径2.5㎜の孔が穿たれ、孔内にはプラスチック製とみられる樹脂(直径2.1㎜)が入っている。柄尻(柄の先端)は丸味を持つ。柄部は柄先端から柄上部までの長さが5.7㎝と短いことから靴磨き用のブラシなどの用途が考えられるところである。残存長(縦)：6.29㎝、残存幅(横)：1.28㎝、重量：5.6g。	C-12・13 SA09 第1層
〃 〃 11	銭貨	元符通寶	―	重量 3.47	ほぼ完形の「元符通寶(北宋：1098年初鋳造)」ではあるが二次的な火熱を受けて歪に変形する。「寶」が溶解により判読しにくい。面・背の孔郭は正方形であるが孔のみが方穿(正方形)ではなく、鋳造後に四辺の中央部分を「V」字状に4箇所の抉りを入れて花弁状の孔とする。花弁形の特殊な孔である。類似の孔は大暦元寶(唐：769年初鋳造)や淳熙元寶(南宋：1174年初鋳造)、紹熙元寶(南宋：1190年初鋳造)などにみられるようである。孔郭は面よりも背が不鮮明である。肉郭外径：A 24.42㎜、B24.60㎜。肉郭内径：C21.08㎜、D19.74㎜。方穿：E6.86㎜、F6.98㎜。断面計測部位：①1.33㎜、②0.71㎜、③0.91㎜。	C-12・13 SA09 東西トレンチ 第1層

注　「―」：計測不可



第 36 図　石積み SA09 出土品　青磁：1･2、白磁：3、青花：4･5、タイ産褐釉陶器：6、本土産磁器：7、沖縄産施釉陶器：8、貝製品：9、骨製品：10 銭貨：11



図版 28　石積み SA09 出土品　青磁：1･2、白磁：3、青花：4･5、タイ産褐釉陶器：6
本土産磁器：7、沖縄産施釉陶器：8、貝製品：9、骨製品：10
銭貨：11

(12) 溝 SD05 の出土遺物
（第６図・第 37 図、図版 29、第 70・71 表）

溝 SD05（第６図参照）は前記した石積み SA09 に附属する遺構である。当該遺構より出土した遺物の点数は、当該期の遺構で最も少なく 47 点を数え、当該期の総出土量の 8,600 点からすると 0.5%（47 点）に相当する出土量であった。当該遺構から最も多く出土したのは沖縄産屋瓦（第５・70 表参照。高麗系、大和系、明朝系を含む）の 13 点（27.6%）、中国産褐釉陶器 11 点（23.5%）、中国産彩釉陶器 8 点（17.0%）、近現代の釘 1 点と戦時中の砲弾破片 1 点を含む金属製品 5 点（10.6%）、本土産磁器 3 点（6.4%）、沖縄産施釉陶器 3 点（6.4%）、中国産青磁 2 点（4.2%）、沖縄産塼瓦 1 点（2.1%）、硯破片 1 点（2.1%）の順に減少している。なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的に大きな破片資料や特徴的な資料を図示（第 37 図、図版 29）した。

第70表　溝SD05　出土遺物状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						C-13 SD05 排水溝内埋土
屋瓦	高麗系	平瓦	灰色	漆喰無し		1
	大和系	丸瓦	灰色	漆喰あり（片面）		1
		平瓦	灰色	漆喰あり（片面）		1
				漆喰無し		6
	明朝系	丸瓦	赤色	漆喰無し		1
		平瓦	灰色			3
合　計						13
塼瓦	Ⅲ類	形状不明b	灰色	漆喰無し	角1	1
合　計						1
青磁	碗	口縁部	直口	無文		1
	皿	口縁部	口折	蓮弁	片切り彫り	1
合　計						2
彩釉陶器	盤	底部				1
	瓶	胴部				2
	鶴形水注	把手				1
		胴部				3
		底部				1
合　計						8
中国産褐釉陶器	壷	肩部				1
		胴部				10
合　計						11
本土産磁器	印判染付（型紙＋ﾀﾞﾐ）	碗	胴部			1
	近現	碗	口縁部			1
		蓋	―			1
合　計						3
沖縄産施釉陶器	碗	胴部				1
	急須	底部				1
	ｱﾝﾋﾟﾝ	胴部				1
合　計						3
石製品	硯片	（粘板岩）				1
合　計						1
金属製品	工具類・生産用具	丸釘	頭部欠損	中	鉄	1
	武器	砲弾片			鉄	1
	分類不明	用途不明			青銅	3
合　計						5

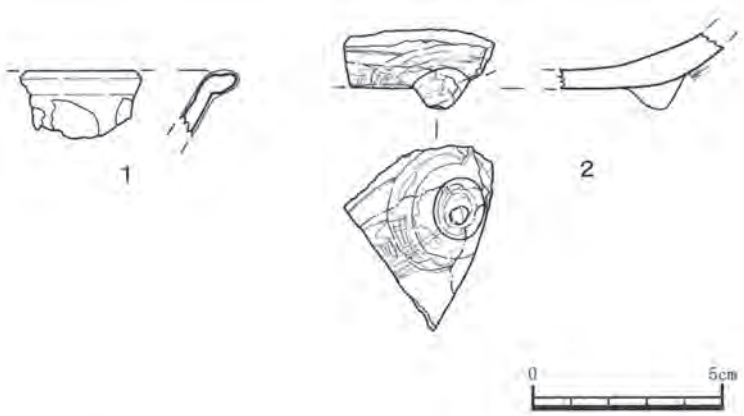
注　釘のサイズは、中：1寸半～5寸まで(3.75㎝～15.75㎝未満)

第71表　溝SD05　青磁・沖縄産施釉陶器観察一覧

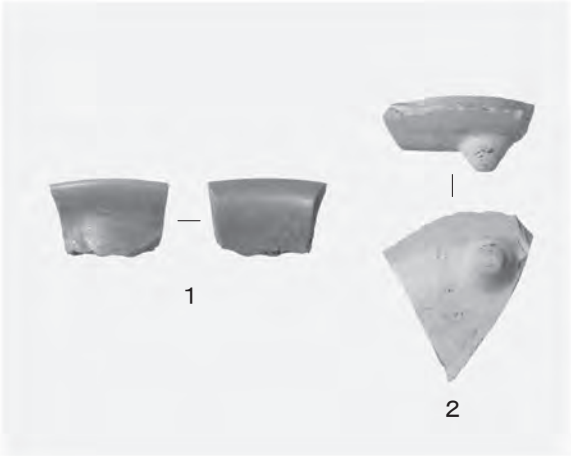
単位：㎝

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第37図 図版29 1	青磁	口折皿	口縁部	― ― ―	器形：鍔縁皿の口縁破片。文様：外面に片切彫りで深目に蓮弁文を描く。素地：淡灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物が少量混入する。希に粗く灰色を帯びた質の悪い石英がみられる。釉色：黄緑色の釉が両面に施されている。両面に粗い貫入がみられる。龍泉窯系。14c終末～15c前半。	C-13 SD05 排水溝内 埋土
〃 〃 2	沖縄産施釉陶器	急須	底部	― ― ―	器形：三足の脚が貼り付けられるタイプの急須の底部破片。器面調整：外面は釉上及び露胎部分からの観察で、外面には僅かに削り調整痕がみられる。外底面は平坦面ではあるが調整痕が確認できない。三角錐状の脚の周辺にはナデ調整を主体に指圧痕がみられる。内面は釉上から丁寧なナデが想定された。文様：なし。素地：淡黄白色の細粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。釉色：ガラス質の灰白色の釉を内面から外面の底部近くまで施す。両面に細かい貫入がみられる。	C-13 SD05 排水溝内 埋土

注「―」：計測不可



第 37 図　溝 SD05 出土品
青磁：1、沖縄産施釉陶器：2



図版 29　溝 SD05 出土品
青磁：1、沖縄産施釉陶器：2

（13）建物 SB01 の出土遺物（第６図・第 38～40 図、図版 30～32、第 72～76 表）

建物 SB01 と溝 SD04-B は、首里第一国民学校の便所と便所内にあった小便用の溝及び糞尿槽である。当該遺構（溝 SD04-B を含む）からは第５表のとおり 1772 点の遺物が得られていて、当該期の遺構の中で最も出土遺物が多い遺構であった。その量は当該期の総出土量 8,600 点からすると 20.6%と、全体の 1/5 強を占めている。建物 SB01 と溝 SD04-B から出土した遺物の中で最も多く出土したのが沖縄産屋瓦（第５・72 表参照。高麗系、大和系古瓦、大和系、明朝系を含む）の 1,202 点（67.8%）、中国産褐釉陶器 247 点（13.9%）、タイ産褐釉陶器 114 点（6.4%）、近現代の釘 37 点と戦時中の砲弾破片９点及び薬莢１点を含む金属製品 65 点（3.6%）、中国産青磁 35 点（1.9%）、近現代の瓶３点・ビー玉４点・お弾き１点・板ガラス 15 点などを含むガラス製品 24 点（1.3%）、沖縄産塼瓦 18 点（1.0%）、石器・石製品・石 14 点（0.8%）、本土産磁器 11 点（0.6%）、沖縄産施釉陶器９点（0.50%）、沖縄産無釉陶器８点（0.45%）、中国産青花５点（0.28%）などの順に減少する。

第72表①　建物SB01・溝SD04-B　出土遺物状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						C・D-16・17									合計
						SB01						SD04-B			
								便所糞尿槽内							
						覆土	第1層	第1層（覆土）	第2層（瓦層）	第3層	第3層（西側床面）	第4層a	第4層b	第5層	
土器	器種不明	胴部				2									2
合　計						2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
陶質土器	鉢	胴部								1					1
	蓋	－										1			1
合　計						0	0	0	0	1	0	1	0	0	2
瓦質土器	蓋	－				1									1
合　計						1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
屋瓦	高麗系	軒平	灰色	漆喰無し									1		1
		丸瓦	灰色	漆喰無し						3					3
		平瓦	灰色	漆喰無し		1	1		1	3		2	2		10
	大和系（古）	丸瓦	灰色	漆喰無し						1					1
		平瓦	灰色	漆喰無し						2			2		4
	大和系	丸瓦	灰色	漆喰無し								2			2
		平瓦	灰色	漆喰あり（両面）					10	6		4	2		22
				漆喰あり（片面）			1		185	180	13	88	4		471
				漆喰無し			5		78	126	4	64	8		285
			褐色	漆喰あり（片面）						4					4
				漆喰無し						2					2
	大和系(近代)	平瓦	灰色	漆喰無し						1					1
	大和（近代）	平瓦	灰色	漆喰無し								1			1
			褐色	漆喰無し						2					2
				漆喰あり（片面）						1					1
	明朝系	丸瓦	灰色	漆喰あり（片面）			3			1		2			6
				漆喰無し			10		2	5		5			22
			赤色	漆喰あり（両面）						2					2
				漆喰あり（片面）			1		35	142	2	24	1		205
				漆喰無し					4	14	1	2	2		23
		平瓦	灰色	漆喰あり（片面）			6					2			8
				漆喰無し		7	14		2	7		6			36
			褐色	漆喰無し			2			1					3
			赤色	漆喰あり（両面）					2	1					3
				漆喰あり（片面）						35		6			41
				漆喰無し			1		2	23		16			42
	島瓦	丸瓦	赤色	漆喰あり（片面）						1					1
合　計						8	44	0	321	563	20	224	22	0	1202
塼瓦	Ⅰ類	AorB	褐色	漆喰無し	角無し				1						1
		不明	灰色	漆喰無し	角無し					1					1
	Ⅱ類	－	灰色	漆喰無し	角無し	1									1
	Ⅲ類	形状不明a	灰色	漆喰無し	角無し				1						1
			赤色	漆喰無し	角無し	1				1					2
		形状不明b	灰色	漆喰無し	角1					5					5
				漆喰無し	角無し	1				3		1			5
			赤色	漆喰有り（片面）	角1					1					1
				漆喰無し	角無し							1			1
合　計						3	0	0	2	11	0	2	0	0	18
焼土	－									4					4
合　計						0	0	0	0	4	0	0	0	0	4

第72表② 建物SB01・溝SD04-B 出土遺物状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						C・D-16・17									合計
						SB01						SD04-B			
								便所糞尿槽内							
						覆土	第1層	第1層（覆土）	第2層（瓦層）	第3層	第3層（西側床面）	第4層a	第4層b	第5層	
青磁	碗	口縁部	直口	蓮弁	片切り彫り			1	1						2
				雷文	スタンプ			1							1
			外反	無文		1			1			1			3
		胴部	蓮弁		片切り彫り	1	1								2
			有文									1			1
			無文			1		1		1		1	1		5
		底部	eﾀｲﾌﾟ	印花文									1		1
				有文								1			1
			fﾀｲﾌﾟ	無文									1		1
			hﾀｲﾌﾟ	高台のみ	文様不明					1					1
			内底のみ	有文						1					1
	皿	口縁部	口折	蓮弁	片切り彫り			1	1						2
			外反	無文								1			1
			直口	蓮弁	丸箆		1								1
			稜花	有文不明					1						1
			八角	雷文	片切り彫り							1			1
		胴部	蓮弁		片切彫り			1							1
	盤	胴部	蓮弁		丸箆		1						1		2
			文様不明				1								1
		底部	aﾀｲﾌﾟ	蓮弁	丸箆								1		1
			高台なし		文様不明		1								1
	酒会壷	胴部	蓮弁・鎬						1						1
			有文不明						1				1		2
	大瓶	胴部	無文					1							1
合計						3	5	6	6	3	0	6	6	0	35
白磁	碗	胴部										1			1
	皿	口縁部	外反			1									1
合計						1	0	0	0	0	0	1	0	0	2
青花	碗	胴部						1	1						2
		底部								1					1
	皿	胴部						1							1
元青花	盤	胴部										1			1
合計						0	0	2	1	1	0	1	0	0	5
彩釉陶器	瓶	胴部										1			1
	鶴形水注	胴部										1			1
	水注	把手											1		1
合計						0	0	0	0	0	0	2	1	0	3
黒釉陶器	茶壷	口縁部												1	1
合計						0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
中国産褐釉陶器	壷	口縁部	隅丸方形状					2							2
		頸部						4							4
		把手						1							1
		胴部				7	8	182	5	4		13	21		240
合計						7	8	189	5	4	0	13	21	0	247
タイ産褐釉陶器	壷	頸部						4	1						5
		肩部						1							1
		胴部				2	2	73	3	3	1	20			104
		底部					1	1				2			4
合計						2	3	79	4	3	1	22	0	0	114
本土産磁器	印判染付	碗	口縁部	型紙ずり								1			1
				銅板＋ﾀﾞﾐ								1			1
			胴部	型紙転写					1						1
		小碗	胴部	銅版転写		1			1						2
		小碗（筒形）	底部	銅版転写						1					1
	ｸﾛﾑ青磁	小碗	口縁部	掛け分け	瀬戸美濃					1					1
	近現	碗	胴部			1							1		2
			底部						1						1
		水入れ	口縁部～底部							1					1
合計						2	0	0	3	3	0	2	1	0	11
本土産陶器	壷	胴部						1							1
	甕	胴部			薩摩		1								1
合計						0	1	1	0	0	0	0	0	0	2
沖縄産施釉陶器	碗	胴部										2			2
		底部					2								2
	皿	口縁部										1			1
		胴部										1			1
	壷	蓋								1					1
	火取	胴部										1			1
	器種不明	胴部					1								1
合計						0	3	0	0	1	0	5	0	0	9
沖縄産無釉陶器	擂鉢	胴部										1			1
	壷	胴部						2							2
	壷or甕	胴部					1	2							3
		底部						1							1
	器種不明	胴部										1			1
合計						0	1	5	0	0	0	2	0	0	8
石製品	硯					1									1
	石器片			細粒砂岩（ﾆｰﾋﾞ）								1			1
合計						1	0	0	0	0	0	1	0	0	2
石材	緑色千枚岩						1								1
	細粒砂岩（ﾆｰﾋﾞ）									3			1		4
	溶結凝灰岩				（鹿児島県産）								1		1
自然石	河原石						3		1			2			6
合計						0	4	0	1	3	0	2	2	0	12

第72表③　建物SB01・溝SD04-B　出土遺物状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						C・D-16・17								合計
						SB01						SD04-B		
								便所糞尿槽内						
						覆土	第1層	第1層（覆土）	第2層（瓦層）	第3層	第3層（西側床面）	第4層a	第4層b	
金属製品	工具類・生産用具	丸釘	完形	中	鉄					18		1		19
			先端部欠損	不明	鉄					6				6
			頭部欠損	中	鉄				1					1
				不明	鉄					7				7
			先端＋頭部欠損	不明	鉄					3				3
		丸釘(ねじ)	完形(近現)	小	青銅						1			1
		角釘	完形	中	鉄					2				2
			頭部欠損	小	鉄	1								1
		接続金具			鉄					1				1
		吊り下げ金具？			鉄					1				1
		受け金具			鉄								1	1
		機械部品		近現	真鍮？					1				1
	装身具	指輪			白銅		1							1
	武器	薬莢			青銅				1					1
		砲弾片			鉄	1				4			1	6
					青銅				2			1		3
	その他(装飾品)	龍の髭			鉄								1	1
	分類不明	用途不明			鉄			1				2		3
					青銅					6				6
合　計						2	1	1	4	49	1	4	3	65
ガラス玉	Ⅱ類				青色					1				1
合　計						0	0	0	0	1	0	0	0	1
ガラス製品	瓶									1		2		3
	ビー玉									4				4
	お弾き					1								1
	板ガラス									8		7		15
	器種不明					1								1
合　計						2	0	0	0	13	0	9	0	24

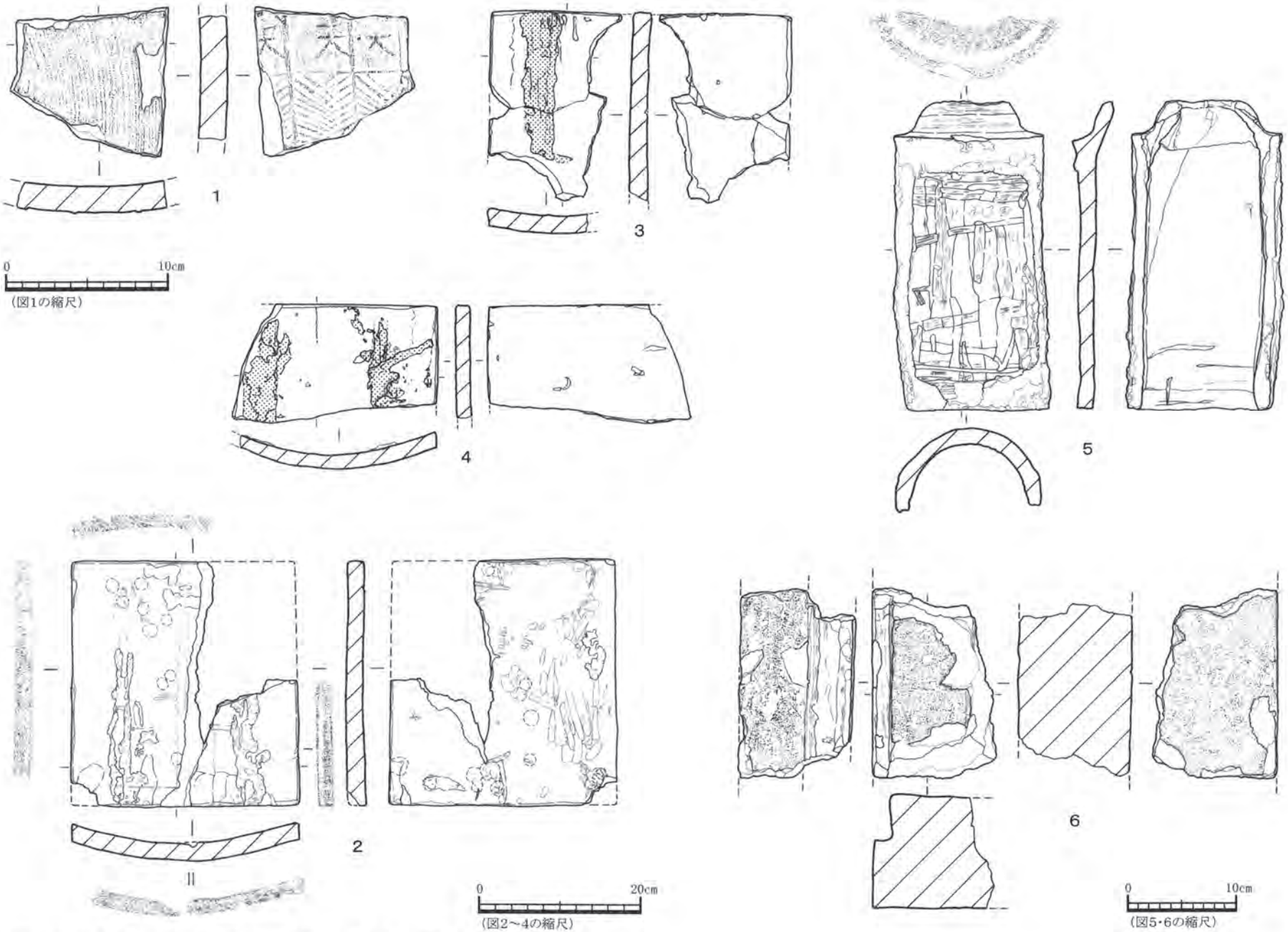
注　釘のサイズは、中：1寸半～5寸まで(3.75cm～15.75cm未満)、小：1寸まで(3.75cm未満)

第73表　建物SB01　二次的火熱溶解銭貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
不明銭貨	2片	0.71	判読不可	C・D-16・17 SB01 第1層
合　計	2			

第74表　建物SB01　屋瓦・塼瓦観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		観察事項	出土地点 出土層
第38図 図版30 1	高麗系・屋瓦	平瓦	「大天」の在銘瓦片。凸面には、羽状文の打捺と「天」の一文字が不鮮明ながら確認できる。僅かに左隅に「天」の字款の一部が確認できる程度である。凹面には右から左に走る糸切り痕が明瞭にみられ、布目圧痕は斜めに左上から右下に向かって孤状に薄くみられる。素地：灰白色の細粒子で、微細な石英を少量含み、粗い茶褐色の鉱物と微細な雲母が僅かに含まれている。色調：凸面は灰白色で、凹面が濁りのある灰白色を帯びる。焼成は堅緻。	C・D-16・17 SB01 便所糞尿槽内第3層
〃 〃 2	大和瓦・屋瓦	平瓦（近代瓦）	残存部位は左側面と両端部がほぼ良好に残存し、右側面部の大半が欠落する。凹面は糸切りの痕跡を僅かに留める程度で確認がしにくい。また、布目圧痕も僅かに確認できる程度である。大半はナデ調整で仕上げている。両側面の縁沿いには分割目安となる平坦面はヘラ削り様に入り斜位傾斜する。両側面は凸面から凹面に向かって鎌で切り込んだ後にナデ消された平坦面となる。凹面の両側面沿いには陶土がバリとなって微弱な肥厚状となる。両側面下端の中央寄りに細紐圧痕が確認できる。その他に丸瓦を重ねた部分が左右に痕跡（漆喰が平行して走る）がみられる。上下の端部は下端が丁寧なナデ仕上げであるが、上端が雑な刷毛目を加えて放置されナデ消しも徹底していない。凸面が丁寧なナデを主体とするが、部分的に削り調整と削り痕、雑な指ナデがみられる。端部には指圧痕や篦ナデ様の調整痕がみられる。素地：黄茶色の細粒子（砂質傾向の強い陶土）で、微細な石英を主体に細かい雲母片や貝殻片も僅かに含まれている。器色：両面とも黄茶色を主体とするが部分的に褐色を帯びる。大阪産瓦？。焼成：堅緻。	C・D- 16・17 SB01 便所 糞尿槽内 第3層
〃 〃 3	大和瓦・屋瓦	平瓦（近代瓦）	残存部位は左側面と上端部である。凹面は横位のナデ調整を主体とするが、縦位方向に走る陶土の継ぎ足し部分に微弱な段差が生じている。左側面の縁沿いには分割目安となる平坦面は微弱な丸味を持たせて微弱に面を傾斜させている。凹面の上端近くの縁沿いも微弱な面取りがなされているが途中で消失する。上側面は左上から右下に向かって斜めに走る削り調整をナデ消しているが徹底しない。凹面の左端近くには縦方向に延びる漆喰の痕（二次的な火災を受けて黒色となる）がみられる。左側面は凸面から凹面に向かって鎌で切り込んだ後にナデ消すが微弱に窪んだ平坦面となる。凸面は凹面よりも雑なナデを主体とし、部分的に指圧痕がみられる上端近くに細紐圧痕の痕跡が僅かにみられる。素地：茶白色の細粒子で、微細な鉱物（石英、黒色・茶褐色）を主体とし、表面には雲母片とみられる鉱物が少量みられる。その他に粗い石灰質の砂粒が僅かに含まれている。器色：両面とも茶白色を帯びるが、凸面で部分的に黄白色となる。大阪産瓦？。焼成：堅緻。	C・D- 16・17 SB01 便所 糞尿槽内 第3層
〃 〃 4		平瓦（近代瓦）	残存部位は右側面と上端部である。凹面は横位のナデ調整を主体とするが、縦位方向に走る陶土の継ぎ足し部分に微弱な段差が生じている。右側面の縁沿いには分割目安となる平坦面は微弱に傾斜する。凹面の上端近くの縁沿いも微弱な面取りがなされている。上側面はナデを丁寧に施すが、部分的に指圧痕もみられる。凹面には漆喰の付着がみられ、左端近くには縦方向に延びる漆喰の痕がみられる。右側面近くには途中から分岐するような漆喰の付着がみられる。漆喰は縦位の方向と途中から分岐して右斜めに方向に延びる付着痕がみられる。右側面は凸面から凹面に向かって鎌で切り込んだ後に丁寧にナデを施すが部分的に指圧痕もみられる。凸面は凹面よりも雑なナデを主体とするが、篦削りや指圧痕が部分的にみられる。素地：淡灰白色の細粒子で、微細な鉱物（石英、黒色・茶褐色）を主体とし、表面に雲母片とみられる鉱物が少量みられる。その他に粗い石灰質の砂粒が僅かに含まれている。器色：両面とも茶白色を帯びるが、凸面で部分的に黒褐色を帯びる。大阪産瓦？。焼成：堅緻。	C・D- 16・17 SB01 便所 糞尿槽内 第3層
〃 〃 5	島瓦・屋瓦	丸瓦	凸面の筒部には漆喰コンクリートが縁に沿うように付着（長方形の枠状に付着）する。玉縁の外面は丁寧なナデを加えて、筒部近くは半同心円状の粗密な擦痕がみられる。筒部は縦位方向の篦削りをナデ消すが筒部下位には横位方向に施した粗目の櫛目が入っている。凹面の両端は分割破口で面取は実施されていない。玉縁から筒部下端近くまで布目圧痕が満遍なくみられる。筒部下端から縁沿いまでは横位の粗細な刷毛目調整がみられる。同部位への面取はない。筒部下端面（広端面）は雑なナデが施されている。素地：赤茶色の細粒子で、微細な鉱物（石英、雲母）を主体とし、それ以外に粗い茶褐色の鉱物や石灰質の粗砂粒がみられる。色調：表裏面とも赤茶色を帯びる。焼成：良好で堅い。明治から昭和20年までに製作された製品で、明朝系造瓦の伝統技術を汲む近代の瓦（島瓦）。	C・D- 16・17 SB01 便所 糞尿槽内 第3層
〃 〃 6	塼瓦 Ⅰ類 AorB		型枠成形とみられ、裏面が真性の平坦面に近い。左側面を段状に成形した暗渠の蓋、若しくは底面に利用されたとみられる塼の破片で厚さが103㎜を測る。左側面の段は、表面から段差面までの長さが42.8㎜を測る。更に段差面から裏面までの長さは61.8㎜を測った。表面は長軸に沿って微弱に溝状に窪んだ平坦面となっている。ナデ調整で仕上げられたとみられるが、使用によって生じた細かい条痕（箒などによるものとみられる）が多くみられる。段差面の角部分は指ナデを雑に加え、段差面の平坦面は篦削りをナデ消したようである。段差面の右側面も篦削りをナデ消して仕上げるが雑である。裏面には黒褐色の固形物（鉄分の変色？）が付着する。この鉄分の変色とみられるものは劈開面でも観察できる。素地：粘土質で赤茶色の細粒子。素地に微細な石英や細かい茶褐色の物質が少量含まれている。希に粗い茶褐色や黒褐色の物質の固まりが裏面の2箇所（サイズ：10～16.5㎜、10.1～20.7㎜）でみられる。色調：表面は黄茶色で、裏面は黄茶色が本来の色調であるが、その上から黒褐色の固形物が付着し全体的に広がっている。焼成：悪く脆い。	C・D- 16・17 SB01 便所 糞尿槽内 第2層 （瓦層）



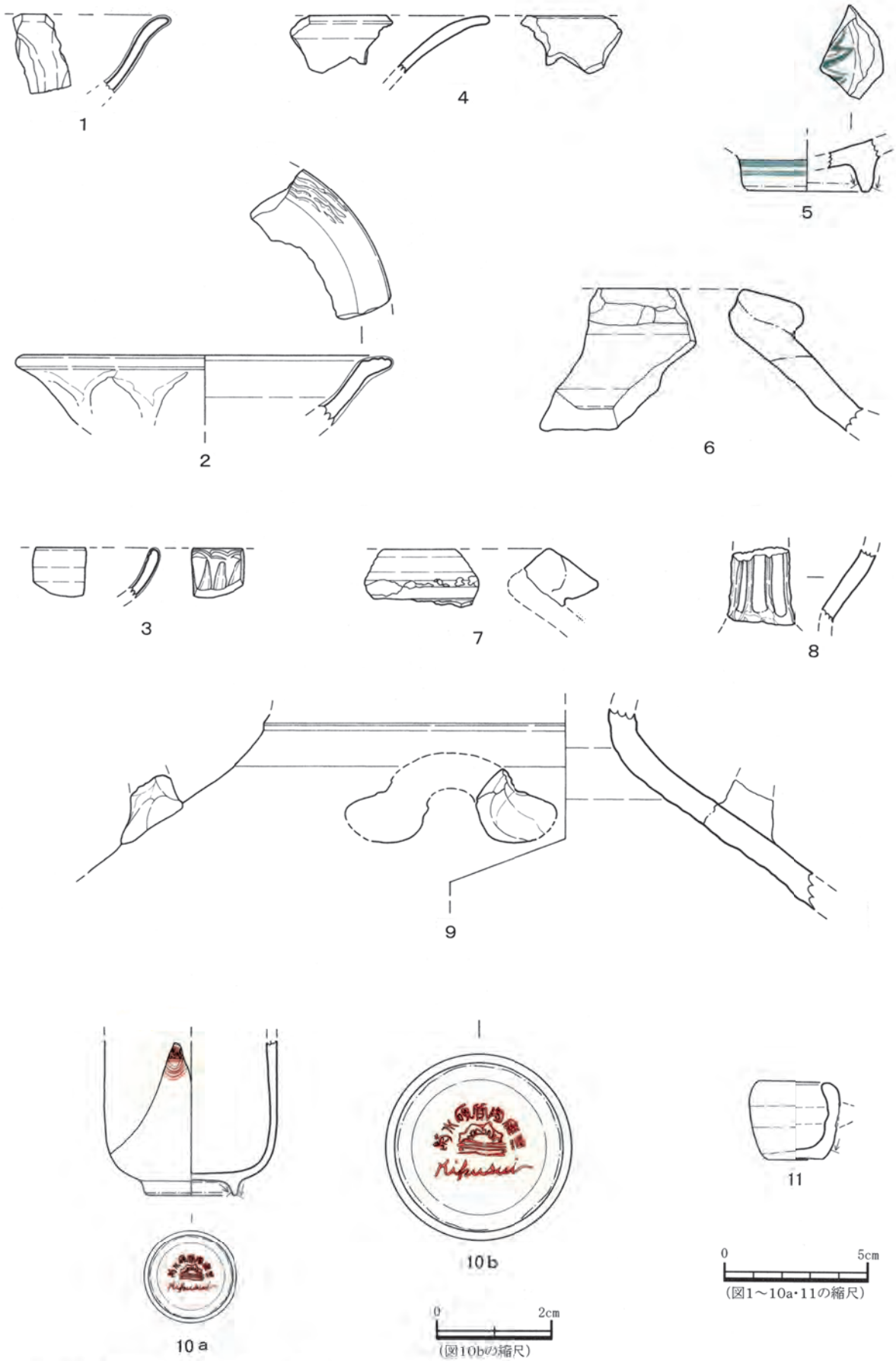
第 38 図　建物 SB01 出土品①　屋瓦：1～5、塼瓦：6

第75表　建物SB01　青磁･白磁･青花･中国産褐釉陶器･タイ産褐釉陶器･本土産磁器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第39図 図版31 1	青磁	口折皿	口縁部	― ― ―	器形：口縁部で緩やかに外反する口折皿。二次的な火熱を受けて釉上に微細な罅割れが生じている。文様：外面に片切彫りで蓮弁文を描く。素地：光沢のある灰白色の微粒子。釉色：濃緑色の釉が両面にみられる。貫入：なし。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	C･D-16･17 SB01 便所 糞尿槽内 第1層（覆土）
〃 〃 2				13.2 ― ―	器形：口折皿で内面口縁部に4本櫛で波状文を施すタイプの皿。文様：外面に片切彫りで蓮弁文を描く。内面の口縁部に波状文を4本櫛で描く。素地：灰白色の細粒子。釉色：黄緑色の釉が両面にみられる。貫入：なし。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	C･D-16･17 SB01 便所 糞尿槽内 第2層（瓦層）
〃 〃 3		直口口縁皿		― ― ―	器形：直口口縁皿。文様：内面の口縁端部近くに叉状の線彫り工具で弁先を描き、その直下に丸彫りで弁軸を施し花弁を表現する。素地：灰白色の微粒子。釉色：濃緑色の釉が両面にみられる。貫入：なし。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	C･D-16･17 SB01 便所 糞尿槽内 第1層（覆土）
〃 〃 4	白磁	外反口縁皿	口縁部	― ― ―	器形：外反口縁の皿で推算口径が14.8cmを求めた。文様：なし。素地：光沢のある灰白色の微粒子。釉色：乳白色の釉が両面に施されている。貫入：内面にのみ細かい貫入がみられる。景徳鎮窯。15c代。	C･D-16･17 SB01 覆土
〃 〃 5	青花	碗	底部	― ― 4.2	器形：碗の高台破片。内底面に十字花文を施すグループの碗とみられる。文様：外面の高台途中から高台脇に二条一組の圏線を描く。見込みに十字花文を描く。素地：光沢のある灰白色の細粒子。釉色：灰白色の釉が両面に施されている。高台の内外面下端から畳付は露胎とする。貫入：なし。景徳鎮窯。15c前半～中葉。	C･D-16･17 SB01 便所 糞尿槽内 第3層
〃 〃 6	中国産褐釉陶器	壷	口縁部	― ― ―	器形：怒り肩のタイプとなる壷の口縁破片。口縁部の縦断面が歪な隅丸方形状となる。文様：なし。素地：淡灰色の細粒子で、粗細な石英を多く含み、希に細かい鉱物（茶褐色、黒色）がみられる。釉色：茶褐色の釉が両面に施されているが、二次的な火熱を受けて裏面の釉の上には細かい気泡痕がみられる。貫入：なし。中国南部の窯。15c～16c。	C･D-16･17 SB01 便所 糞尿槽内 第1層（覆土）
〃 〃 7				― ― ―	器形：　〃　。口縁部の縦断面が歪な隅丸方形状となるが内面途中で破損している。文様：なし。素地：淡灰色の細粒子で、粗細な石英を多く含み、希に粗細な鉱物（茶褐色、黒色）がみられる。釉色：茶褐色の釉が両面に施されているが、二次的な火熱を受けて裏面の釉の上には細かい気泡痕がみられる。貫入：なし。中国南部の窯。15c～16c。	C･D-16･17 SB01 便所 糞尿槽内 第1層（覆土）
〃 〃 8			把手	― ― ―	器形：ナデ肩タイプの壷の把手破片。文様：外面に幅広（4.5㎜）の篦で縦位に沈線文を三条施している。素地：光沢のある淡灰白色の微粒子で磁器質の陶土である。細かい黒色鉱物と粗細な石英と灰色の鉱物が含まれている。釉色：茶褐色の釉が両面に施されているが、二次的な火熱を受けて両面に粗い気泡痕がみられる。貫入：なし。中国南部の窯。14c～15c。	C･D-16･17 SB01 便所 糞尿槽内 第1層（覆土）
〃 〃 9	タイ産褐釉陶器	壷	胴部	― ― ―	器形：ナデ肩タイプの壷の胴部片で、胴部に把手が貼り付けられている。文様：外面の胴部に左上がり右下がりのリボン状の把手が貼り付けられている。素地：灰褐色の細粒子で粗細な石英を多く含み、希に細かい黒色や茶褐色の鉱物がみられる。釉色：外面は黒褐色の釉を施し、内面には茶褐色の化粧土が塗布されていたようであるが、器面全体が大きなアバタ状に剥離している。本資料も二次的な火熱を受けて外面の釉に粗い気泡痕や剥離がみられる。貫入：なし。中国南部の窯。14c～15c。	C･D-16･17 SB01 便所 糞尿槽内 第1層（覆土）
〃 〃 10	本土産磁器	碗	底部	― ― 3.2	器形：円筒形の茶碗。文様：外面に赤茶色で太目の界線とその直下に垂下する半円（四本単位の細線）を印判で起こしている。外底面には「菊水硬質陶磁器」、「半菊文と波文（水面を表現）」、「*Kikusui*」の文様と文字が朱色の印判で起されている。素地：光沢のある白色の微粒子。釉色：白色の釉を両面に施すが、内外面の高台下端及び畳付を露胎とする。貫入：なし。岐阜県産？。昭和初期の統制陶器。	C･D-16･17 SB01 便所 糞尿槽内 第2層（瓦層）
〃 〃 11		水入れ	口縁部 底部	2.6 2.7 2.0	器形：側面観が太鼓様の形となる小鳥の水入れ、若しくは餌入れ。轆轤成形の製品。文様：外面胴部に鳥籠に固定する為の把手を貼り付けた痕跡（隅丸方形状）がみられる。素地：光沢のある白色の微粒子。釉色：淡灰白色の釉が内面から外面の胴下部まで施釉。貫入：なし。国産品。19c後半～大正期。	C･D-16･17 SB01 便所 糞尿槽内 第3層

注　「―」：計測不可

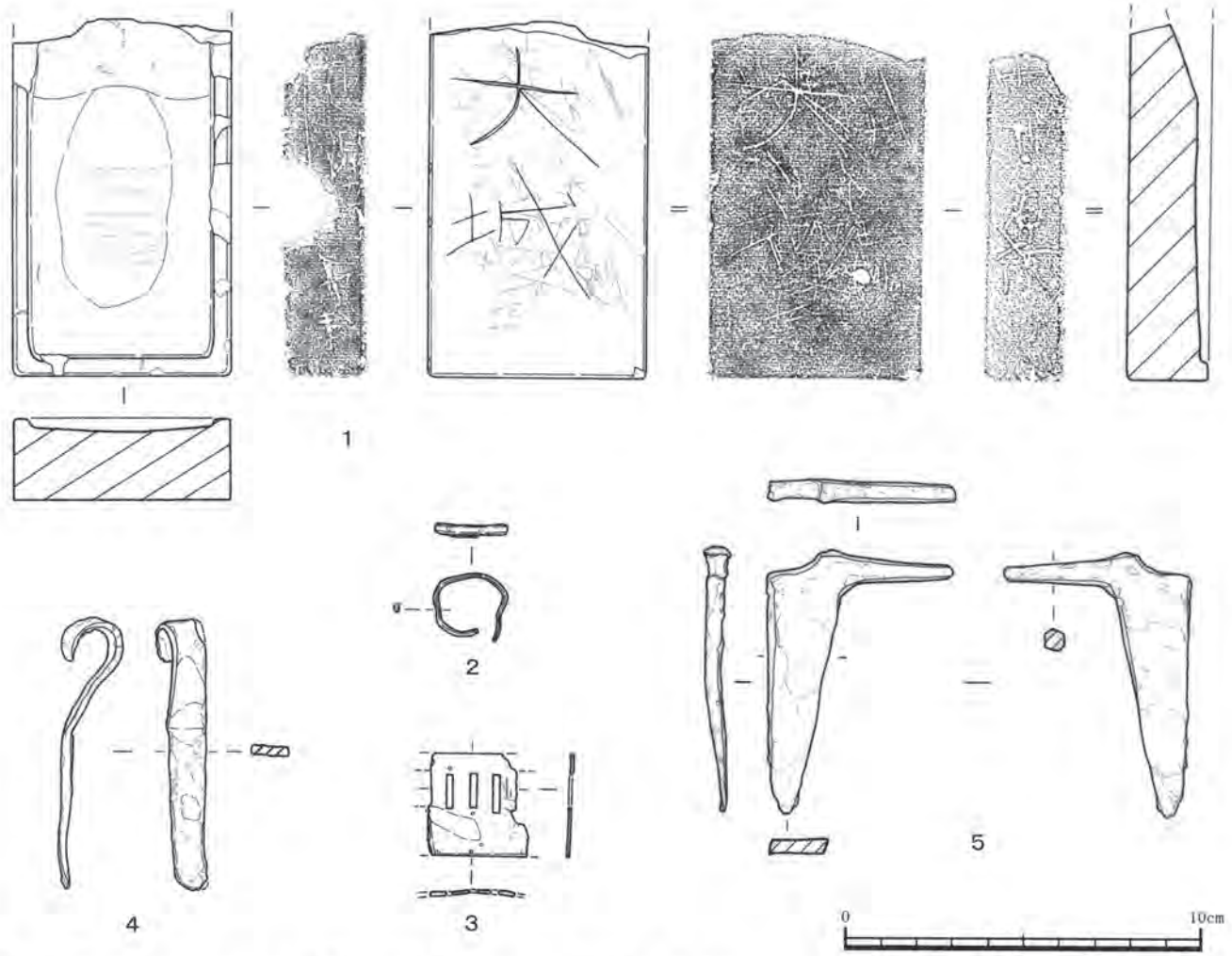


第 39 図　建物 SB01 出土品②　青磁：1～3、白磁：4、青花：5、中国産褐釉陶器：6～8
タイ産褐釉陶器：9、本土産磁器：10･11

第76表　建物SB01　石製品・金属製品観察一覧

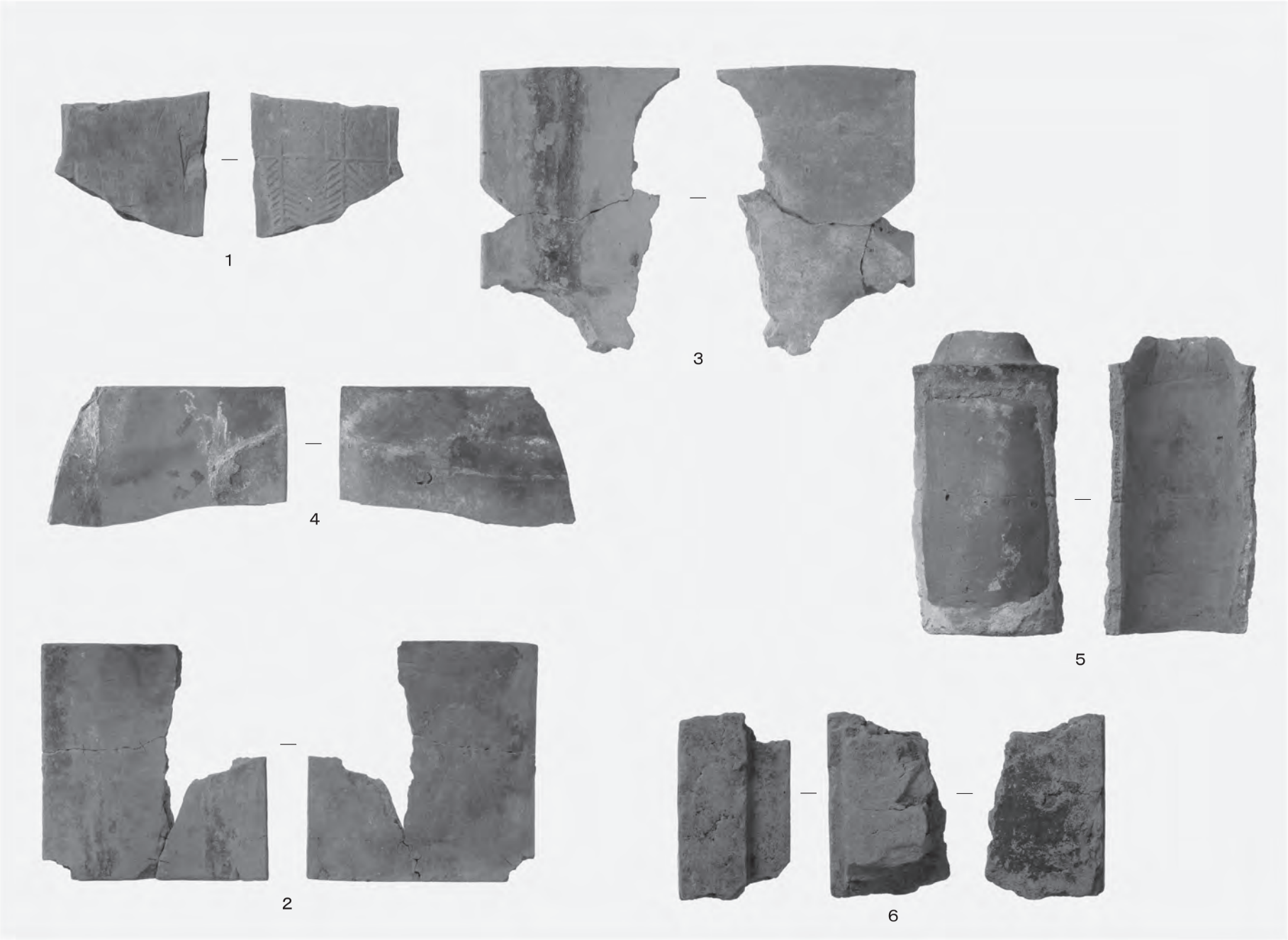
単位:cm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称・分類			残存長(縦) 残存幅(横)	残存最大厚 残存最小厚 重量	観察事項	出土地点 出土層
第40図 図版32 1	石製品	硯		10.0 6.1	2.35 2.30 239.2	海部の大半と陸部の右側面の一部が破損する硯で、灰白色の石材に墨とみられるものを塗布したものである。裏面には墨を塗布した痕跡が小規模ながら残存する。表面の陸部中央付近は固形墨を頻繁に摺った為、浅く楕円形状に窪む。この浅い窪みには固形墨が水に溶けやすいように横位方向に細線を20本刻んでいる。両側面及び裏面には刃物で彫り込んだとみられる細線と使用による傷などが多くみられる。数字や漢字などがみられ、判読できたものは右側面下段に漢数字の「三」、左側面の上段左寄りに「シ」、裏面が所有者とみられる「大城」姓が彫り込まれている。表面の下側面のみ微細な線がみられる程度で他の面と比較して綺麗な平坦面を保っている。石質は砂質傾向の強い凝灰岩製。	C・D-16・17 SB01 覆土
〃 〃 2	金属製品	装身具	指輪	1.88 0.25	0.11 0.11 0.8	接続部分から外れて歪に変形した指輪とみられる資料である。指輪の縦断面は扁平な半円形を呈し、外側が半円形状の凸面となる。内側は平坦面を主とするが内周縁の一部分は角がとれて丸味のある縁となっている。縁の外れた部分が指の内側にあたる部分とみられる。文様はなく無文である。緑青が内外面でみられ、剥離面から銀色を帯びる箇所が確認されたことから銅・亜鉛・ニッケルの合金(白銅製)とみられる。	C・D-16・17 SB01 第1層
〃 〃 3		工具類・生産用具	機械部品	2.85 2.80	0.07 0.06 2.8	板状の製品に短冊形に空いた孔が三つあり、サイズ(左:縦9.5㎜、横2㎜。中央:縦9.4㎜、横2.1㎜。右:10.2㎜、横2.3㎜)や位置も不揃いで、周辺には小孔(直径1～1.1㎜)が疎らに4箇所穿たれている。緑青が僅かにみられる。機械類の制御盤の可能性が考えられる。真鍮(銅と亜鉛の合金)製？。昭和期。	C・D-16・17 SB01便所 糞尿槽内 第3層
〃 〃 4		工具類・生産用具	吊り下げ金具？	7.60 1.0	0.23 0.14 8.8	身上部の先端部分に丸味を持たせて釣り針状に折り曲げられた製品で吊り下げ鉤や締め金具などの用途が考えられる。身下部の先端は歪な半円形となっている。身の中央部が2.3㎜と厚く、下部先端部で1.3㎜と厚みを減じている。表裏面とも錆が著しく、錆による剥離や錆膨れがみられる。材質:鉄。	C・D-16・17 SB01便所 糞尿槽内 第3層
〃 〃 5			接続金具	7.44 5.30	0.58 0.19 30.1	柱や梁などを接続する際の固定金具とみられる。平面観は逆「L」状を呈し、側面観が細身の楔様の形状となる。頭部が抉れていて、頭部左端は金槌で叩かれて潰れている。同様の潰れが左角の抉れ部の右上にもみられるが、金槌は左斜め方向から叩いた為、潰れ面が左方向に傾いた面を形成する。側面は使用によって生じた屈曲がみられる。右側の突出部も身部となるため、先端部が使用によって潰れている。表裏面とも錆による剥離痕や錆汁による砂粒の付着がみられる。材質:鉄。	C・D-16・17 SB01便所 糞尿槽内 第3層

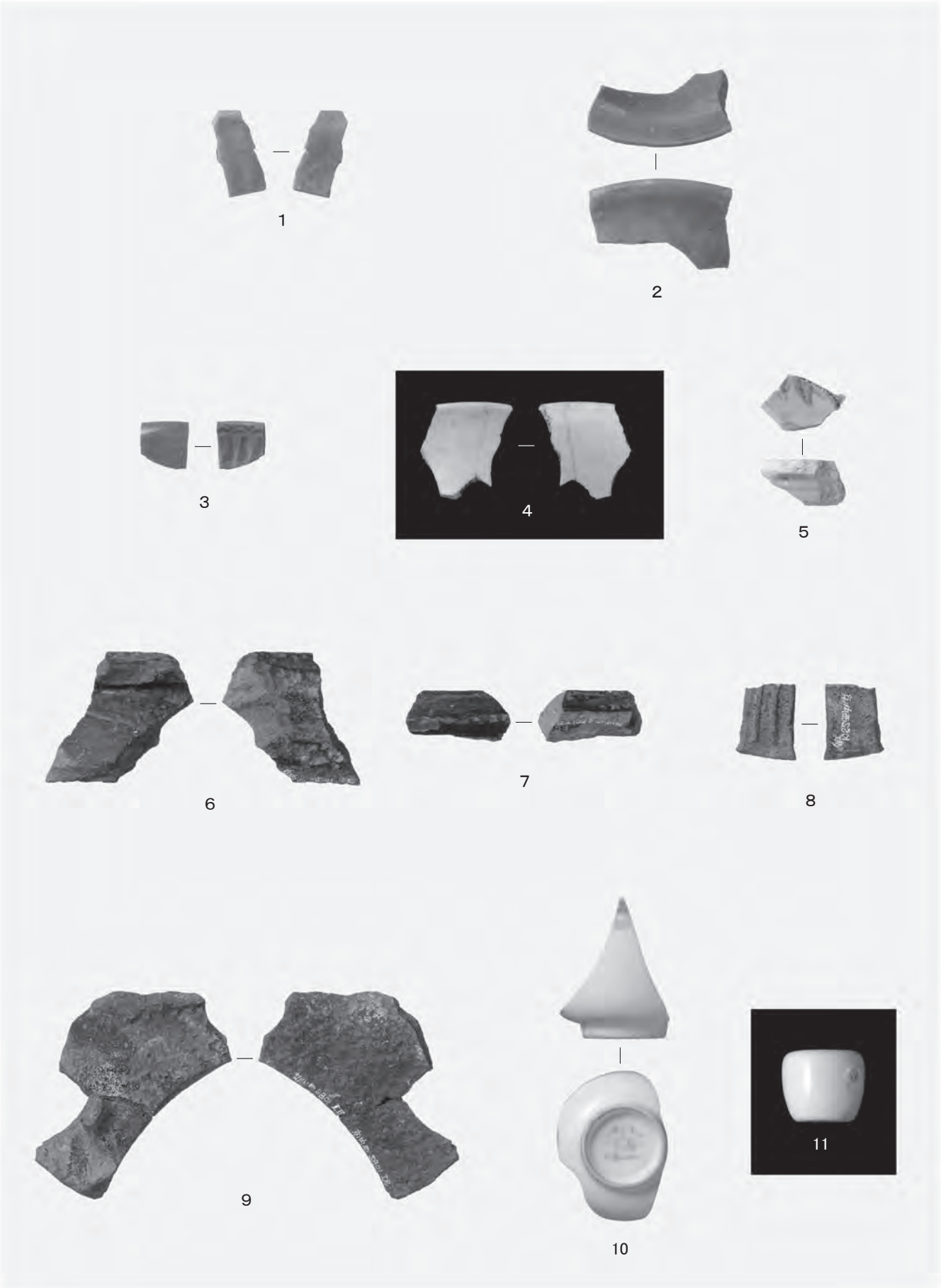


第 40 図　建物 SB01 出土品③　石製品：1、金属製品：2～5

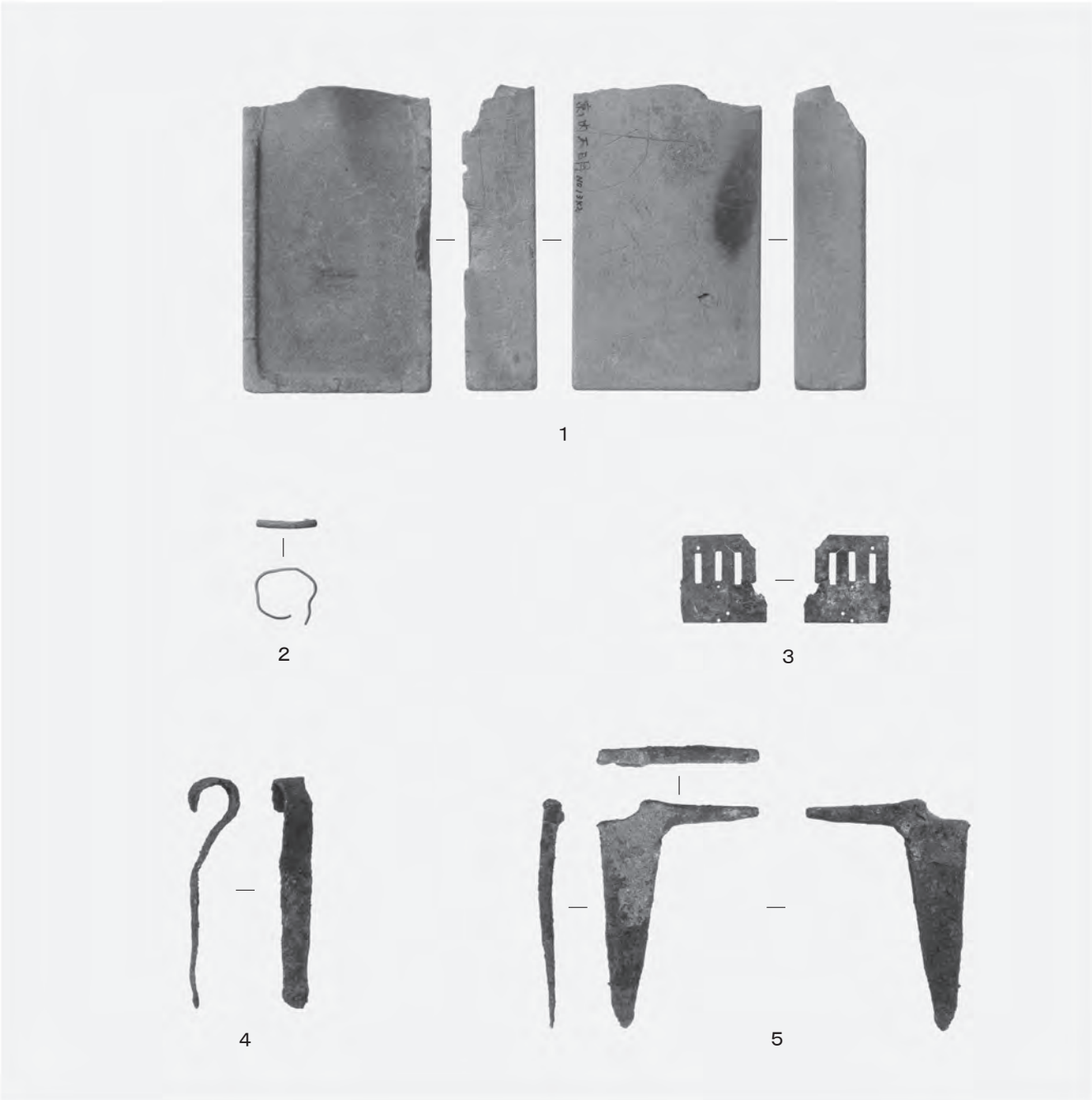
VI期前半



図版 30　建物 SB01 出土品①　屋瓦：1～5、塼瓦：6



図版 31　建物 SB01 出土品②　青磁：1～3、白磁：4、青花：5、中国産褐釉陶器：6～8
タイ産褐釉陶器：9、本土産磁器：10･11



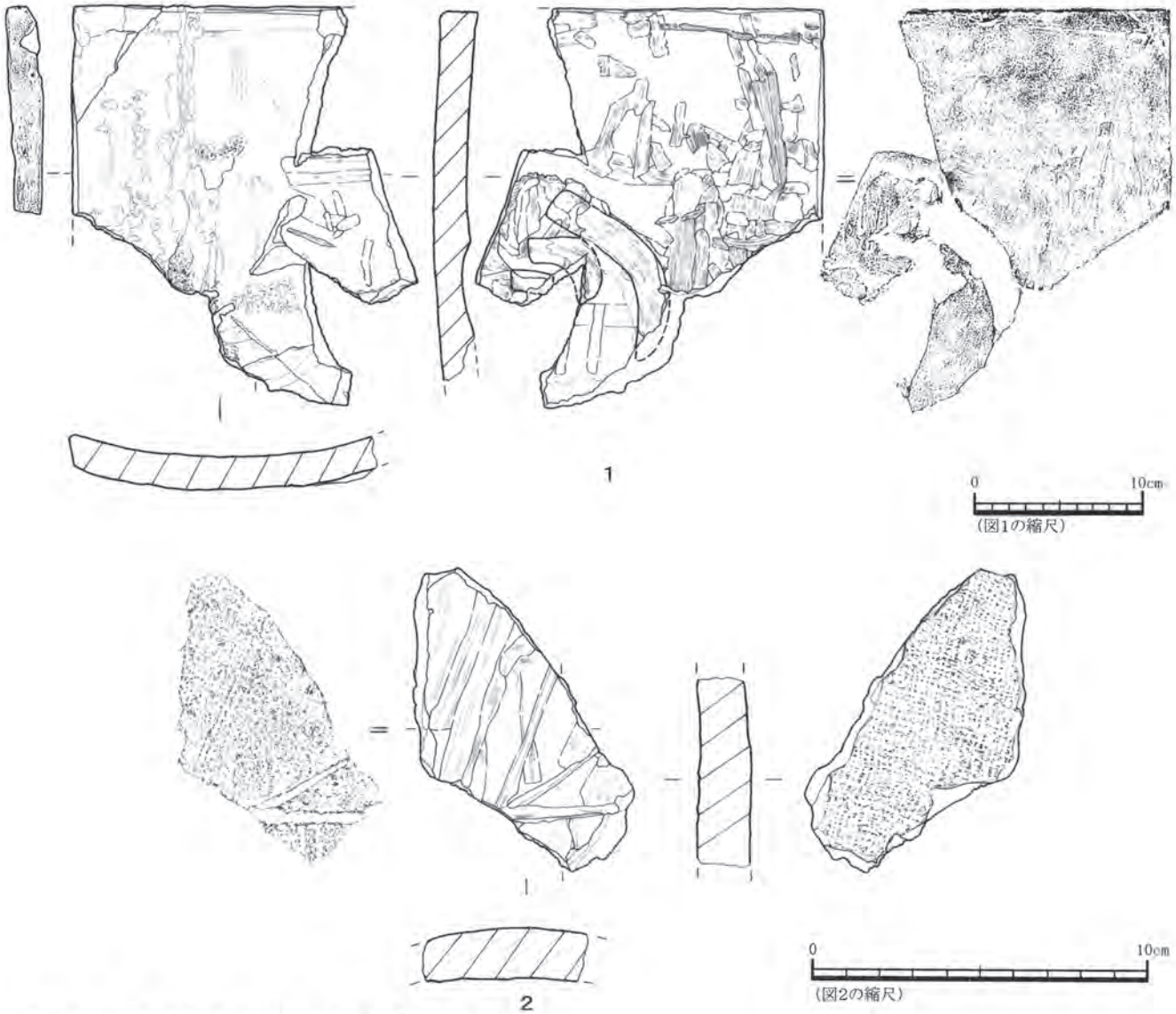
図版 32　建物 SB01 出土品③　石製品：1、金属製品：2～5

(14) 溝 SD04-B の出土遺物（第 6 図・第 41・42 図、図版 33・34、第 72・77・78 表）

首里第一国民学校の便所内にあった小便用の溝及び糞尿槽である溝 SD04-B から出土した遺物については、前記した建物 SB01 とセット関係にある遺構であることから出土遺物は第 5・72 表のとおり建物 SB01 にまとめた。

第77表　溝SD04-B　屋瓦観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		観察事項	出土地点 出土層
第41図 図版33 1	大和瓦	（近代瓦）平瓦	残存部位は左側面と上端部である。凹面は縦位のナデ調整を主体とし、上端近くが横位のナデで仕上げている。左側面の縁沿いには分割目安となる平坦面は篦削り様に仕上がり、面取りは斜位となり傾斜する。凹面の上端近くの縁沿いにも微弱な面取りがなされている。上側面もナデで仕上げるが微弱な起伏の有る平坦面となる。凹面の左端近くには縦方向に延びる漆喰がみられる。左側面は凸面から凹面に向かって鎌で切り込んだ後にナデ消されて平坦面となる。凸面は凹面よりも雑なナデと指圧痕がみられる。下端近くに細紐圧痕がみられる。また、中央寄りに指先で陶土を深く抉り取るようにカタカナの「ツ」とみられる文字を施している。恐らく瓦を屋根に葺く際に瓦の順番や位置を決める目印となる瓦の記号とみられる。素地：灰白色の細粒子で、微細な鉱物（石英、黒色・茶褐色）を主体とし、表面に雲母（銀色）の粉末片？とみられる鉱物が多くみられる。その他に粗い石灰質の砂粒が僅かに含まれている。器色：凹面は黒褐色を主体とし部分的に灰褐色となる。凸面が灰褐色を主体とする。大阪産瓦。焼成：堅緻。	C・D-16・17 SD04-B 第4層a
〃 〃 2	明朝系	丸瓦	明朝系丸瓦の筒部破片。凸部に「V」字状のヘラ記号がみられる。凸部は雑なナデ調整で仕上げている。凹部は布目圧痕がみられる。素地：灰褐色の細粒子で、細かい鉱物（石英、黒色）を多く含み希に粗い石英や黒色の鉱物がみられる。器色：両面とも灰褐色を帯びる。焼成：堅緻。	C・D-16・17 SD04-B 第4層a



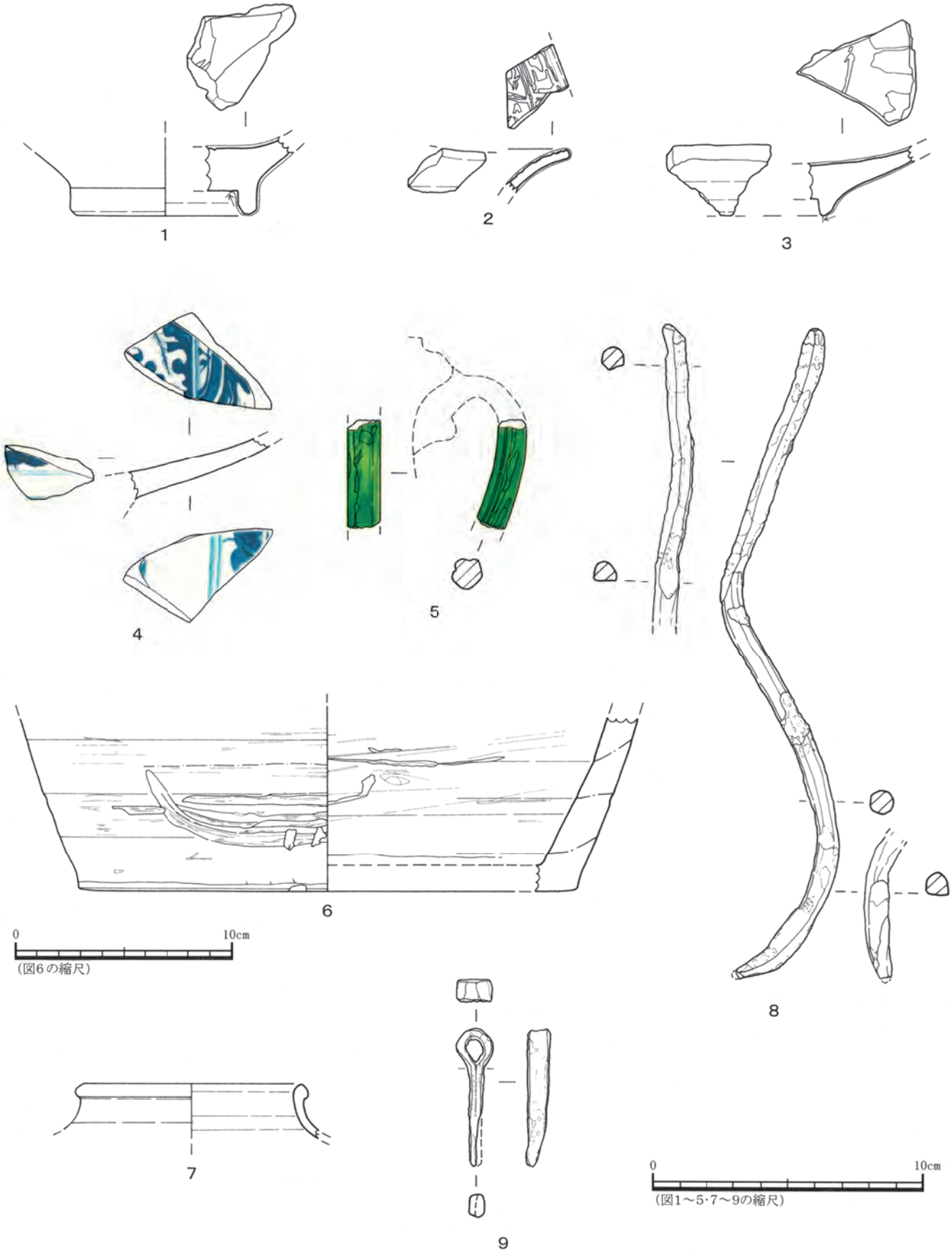
第 41 図　溝 SD04-B 出土品①　屋瓦：1・2

第78表　溝SD04-B　青磁・青花・彩釉陶器・タイ産褐釉陶器・黒釉陶器・金属製品観察一覧

単位：cm

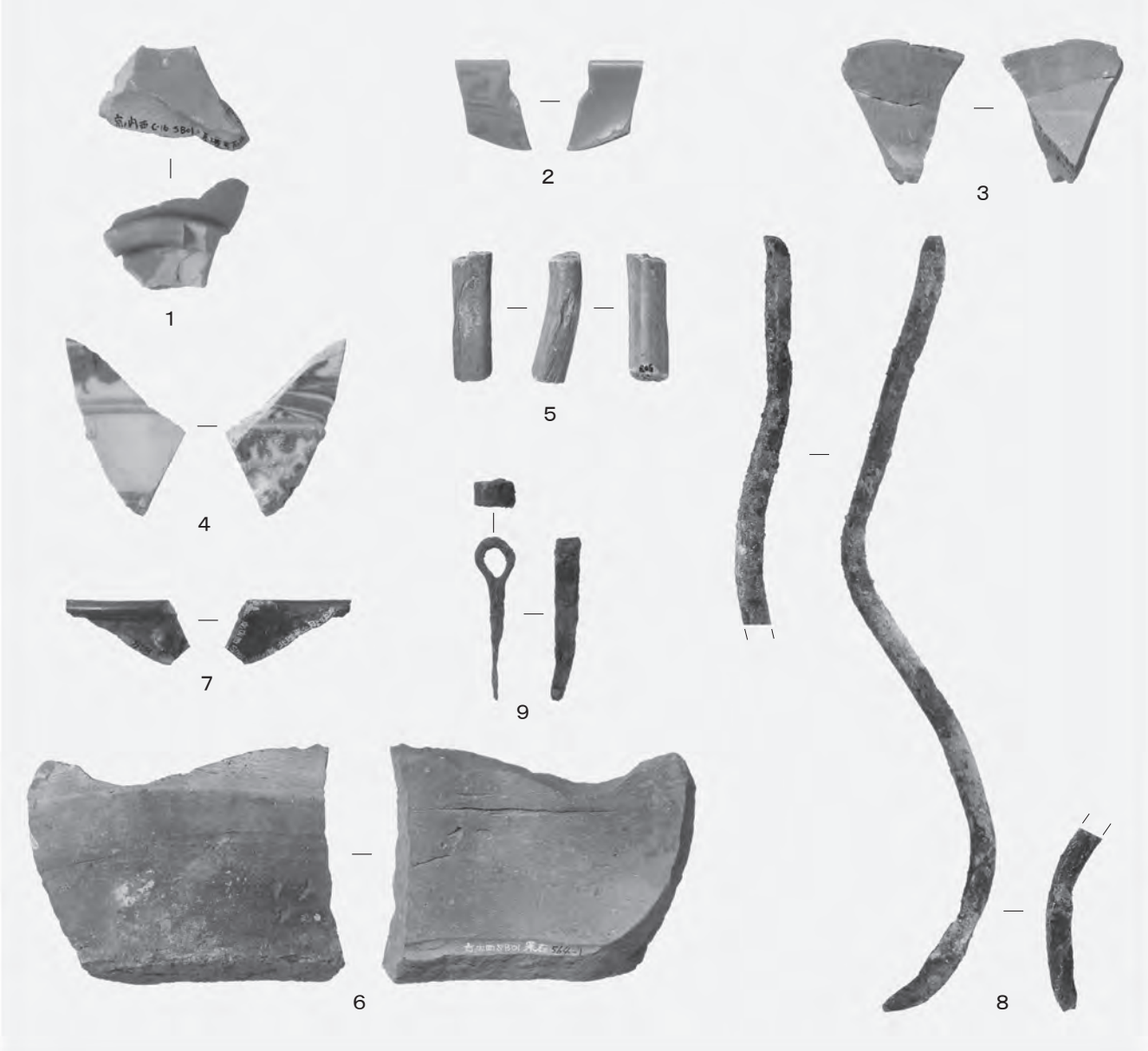
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称・分類		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第42図 図版34 1	青磁	碗	底部	― ― 6.8	器形：無文碗の高台分類eタイプの破片とみられる。外底面の釉は掻き取られ露胎する。文様：見込みに印花文が施されている。素地：淡灰白色の微粒子。釉色：淡青緑色の釉を内面から高台内面まで施釉。貫入：なし。龍泉窯。14c後半～15c前半。	C・D-16・17 SD04-B 第4層b
〃 〃 2		八角皿	口縁部	― ― ―	器形：八角皿の口縁破片。文様：内面の口縁部に片切彫りで時計廻りの雷文を描くが、途中で反時計廻りとなるタイプの文様を描く。八角の頂点から叉状工具による区画沈線文を胴部まで施す。更に横位方向にも叉状工具による区画沈線文を雷文帯直下に描いている。雷文帯の直下には片切彫りによる垂下葉文とみられる文様を描いている。素地：淡灰白色の微粒子。釉色：淡青緑色の釉が両面に施されている。貫入：なし。龍泉窯。14c後半～15c前半。	C・D-16・17 SD04-B 第4層a
〃 〃 3		盤	底部	― ― ―	器形：青磁盤の高台分類でaタイプとなる破片。文様：内面の見込みに陽圏線、胴下部に丸篦（幅8㎜）で蓮弁文を描く。素地：灰白色の細粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。釉色：ガラス質の透明釉（淡灰緑色の釉）を内面から外面の畳付外端まで施釉。貫入：両面に細かい貫入がみられる。中国（福建・広東）の窯。14c終末～15c	C・D-16・17 SD04-B 第4層b
〃 〃 4	元青花	盤	胴部	― ― ―	青花如意頭牡丹唐草文稜花盤の破片（胴部～高台脇）。文様：外面胴部に宝相華唐草文と二条界線を描き、高台脇に太目の界線が描かれている。内面には逆さの如意頭文と内側に鳳凰の右翼の一部が描かれ、その直下に白抜花草文（葉縁、葉脈の中肋と側脈までを丁寧に描いている）がみられる。素地：光沢のある白色の微粒子。釉色：淡青白色の釉が両面にみられる。貫入：なし。景徳鎮窯。14c。	C・D-16・17 SD04-B 第4層a
〃 〃 5	彩釉陶器	水注	把手	― ― ―	器形：把手の横断面の形状（歪な隅丸五角形状）から緑釉柑子形水注のものとみられる。文様：把手の裏面には縦位方向に間隔を空けた細沈線が2本みられる。外面の中央部は面取がなされている。両側面は雑なナデ成形とみられる。右側面には傷様の陶土の皺がそのまま放置されている。素地：黄白色の粗粒子で、微細な石英が少量みられ、希に粗い石英もみられる。釉色：緑色の釉が各面に施されている。貫入：微細な貫入が各面でみられる。中国福建産。15c後半～16c。	C・D-16・17 SD04-B 第4層b
〃 〃 6	タイ産褐釉陶器	壷	底部	― ― 23.0	器形：外反口縁の壷の底部。外底面からの立ち上がりの部分で微弱にくびれてそのまま直線的に外側に軽く開いて胴部へ移行する。器面調整：外面は雑な篦削りをナデ消すが消えきっていない。外底面は平坦面となるが全面に石灰分が付着して判然としない。内面も雑なナデを主体とし部分的に陶土の継ぎ目もみられる。素地：淡茶紫色の細粒子で、粗細な鉱物（石英、茶色、白色）が多く含まれている。釉色：外面にのみ化粧土とみられるものが施されているが、二次的な火熱を受けて白濁した灰白色となる。シーサッチャナライ窯。15c～16c前半。	C・D-16・17 SD04-B 第4層a
〃 〃 7	黒釉陶器	茶壷	口縁部	8.6 ― ―	器形：肩の張る茶入れ壷の口縁破片で、口縁部を隅丸方形状に肥厚させている。口唇部に成形時の陶土が弧状のバリとなって現れている。肥厚部を強調する目的で肥厚帯直下に幅1㎜程度の沈線が雑に施されている。素地：灰茶色の微粒子。劈開面から亀裂様の気泡痕がみられる。釉色：茶黒色の釉が両面でみられる。貫入はない。中国南部（福建・広東）の窯。明代。	C・D-16・17 SD04-B 第5層
〃 〃 8	金属製品	その他（装飾品）	龍の髭？	残存長 24.1 残存幅 0.85	蛇行する龍の髭とみられる製品。上端部は丸味を持ち、下端部が尖る。裏面下部の先端近くに小規模な範囲（最大長22.3㎜、最大幅6.5㎜）で歪なバリのみられる平坦面が形成されていることから他の顔・頭などの部分と接着、或いは接合（溶接）面から剥離したものとみられる。上部左側にも歪で蛇行する平坦面（最大直線長100.3㎜、最大幅6.7㎜）がみられることから当該部分も他の部位（口唇の周辺）との接着や接合面であったものとみられる。全体的に錆による剥離や欠落などがみられる。錆汁によって砂粒が取り込まれているところもみられる。材質：鉄。残存最大厚：8.84㎜、残存最小厚：7.35㎜、重量：90.5g。	C・D-16・17 SD04-B 第4層b
〃 〃 9		工具類・生産用具	受け金具	残存長 5.1 残存幅 0.76	頭部が鐶状（最大内径：縦9.2㎜、横7.4㎜）となる受け金具で、身部が二股となるが右側が途中から欠落する。身部の右側面観は先端近くで反っていて、先端部で丸味を持たせて成形（側面観は屈曲のあるピンセットに近い形状）する。全体的に錆による剥離が著しい。材質：鉄。残存最大厚：4.64㎜、残存最小厚：1.32㎜、頭部：縦7.5㎜、横12.9㎜、重量7.8g。	C・D-16・17 SD04-B 第4層b

注「―」：計測不可



第 42 図　溝 SD04-B 出土品②　青磁：1～3、青花：4、彩釉陶器：5、タイ産褐釉陶器：6
黒釉陶器：7、金属製品：8･9

図版 33　溝 SD04-B 出土品①　屋瓦：1･2



図版 34　溝 SD04-B 出土品②　青磁：1～3、青花：4、彩釉陶器：5、タイ産褐釉陶器：6
黒釉陶器：7、金属製品：8･9

（15）石積み SA24（A・B 地点）の出土遺物（第８図・第 43 図、図版 35、第 79～81 表）

第８・９図のとおり石積み SA24 の直上に設定した A 地点・B 地点の覆土及び撹乱層（客土を含む）と石積み SA16（D・F 地点）、土壙 SK03（C・E 地点）の覆土から出土した遺物を A 地点から F 地点にまとめて集計したのが第５表と第 80・81 表である。但し、土壙 SK03（C・E 地点）を除いた出土遺物の総数は 244 点（≒100％）を数えた。内訳は、当該期の他の遺構と同様に沖縄産屋瓦（第５表・第 80 表①参照。高麗系、大和系古瓦、大和系、明朝系を含む）が多く、その量は 90 点（36.8％）と当該遺構出土の遺物の 1/3 強を占めている。これに次いで多いのが近現代の釘 23 点と針金 1 点及び戦時中の砲弾片 1 点などを含む金属製品 35 点（14.3％）、中国産褐釉陶器 33 点（13.5％）、中国産青磁 19 点（7.7％）、石皿片 1 点と石材片及びサンゴ礫などを含む 18 点（7.4％）、近現代の瓶や板ガラスを含むガラス製品 16 点（6.5％）、タイ産褐釉陶器 11 点（4.5％）、沖縄産無釉陶器 4 点（1.6％）、グスク系土器 3 点（1.2％）、瓦質土器 2 点（0.8％）、中国産白磁 2 点（0.8％）、本土産陶器 2 点（0.8％）、銭貨 2 点（0.8％）、ガラス玉 2 点（0.8％）、中国産青花 1 点（0.4％）、中国産彩釉陶器 1 点（0.4％）、中国産黒釉陶器 1 点（0.4％）、カムィヤキ須恵器 1 点（0.4％）、沖縄産施釉陶器 1 点（0.4％）の順に減少するようである。当該遺構の直下には京の内北地区の遺構時期区分の第Ⅰ期（14 世紀前半～14 世紀後半）の時期に比定される土壙 SK03 や石積み SA24 が確認されている。その為、当該期とかけ離れたグスク系土器（第 43 図１）、中国産の鎬蓮弁文碗（同図２）・無文碗（同図３）・盤（同図４）、カムィヤキ須恵器（同図５）などを含んだ下層の遺物包含層が後世の撹乱を受けて上層や覆土に混ざって出土している。なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的に大きな破片資料や特徴的な資料を図示（第 43 図、図版 35）した。

第79表①　石積みSA24（A･B地点）　土器･青磁･カムィヤキ須恵器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第43図 図版35 1	グスク系土器	壷	口縁部	(30.0) － －	器形：肩部で丸味を持つ壷形土器の頸部破片。器面調整：外面は篦削りを主体とするが部分的に刷毛目様のナデが頸部に施されている。内面は胴部に篦削り、頸部から上部はナデで仕上げている。器厚は8～11.2㎜を測る。胎土：砂質の胎土で細かい。混入物：粗細な鉱物（石英、黒色、茶褐色）を多く含み、希に角が取れた粗いチャート片がみられることなどから北部地域から搬入された土器とみられる。色調：外面は黒褐色で内面が淡橙白色を帯びる。焼成：良好で堅い。	B-15・16 SA24 B地点 覆土
〃 〃 2	青磁	鎬蓮弁文碗	口縁部	－ － －	器形：口唇部は鋭角で先端のみが丸味を小さくする為、尖り気味となる鎬蓮弁文碗の口縁破片。文様：外面は弁内に明瞭な鎬を入れ、縁取りは片切彫りによる蓮弁文を描く、右側に僅かに蓮弁文が確認できることから間弁を持つ鎬蓮弁文である。素地：光沢のある灰白色の微粒子。釉色：淡青緑色の釉は厚く、両面に施されている。貫入：外面にのみ粗い貫入がみられる。龍泉窯。13c後半～14c前半。	B-15・16 SA24 A地点 覆土
〃 〃 3		無文碗	口縁部	－ － －	器形：直口気味の口縁であるが口縁端部に指圧を加えて成形した為、側面観が歪な直口口縁碗となる。文様：なし。素地：灰白色の微粒子で、僅かに微細な黒色鉱物がみられる。釉色：青緑色の釉は両面に施されている。貫入はない。龍泉窯系。14c後半～15c前半。	B-15・16 SA24 A地点 覆土
〃 〃 4		盤	底部	－ － 16.5	器形：青磁盤の高台分類aタイプ。高台内面に蛇ノ目状の釉の掻き取りがみられる。文様：外面の高台脇から片切彫りによる蓮弁文が描かれているが間隔は不均等である。内面の見込みに不鮮明ではあるが印花牡丹唐草文とみられるものを施したようである。内面胴下部には陽圏線と片切彫りによる牡丹唐草文の一部が残存する。素地：光沢のある灰白色の微粒子。釉色：淡青緑色の釉が両面に施されている。貫入：両面に粗細な貫入がみられる。龍泉窯系。14c後半～15c前半。	B-15・16 SA24 B地点 覆土
〃 〃 5	カムィヤキ須恵器	壷	底部	－ － 16.4	器形：壷の底部破片で、外底面にヘラ描きでカタカナの「ヘ」の字様の記号を描いている。器面調整：外面は篦削り後にナデを施すが消えきっていない。外底面は微弱な起伏のある平坦面でナデや指圧痕がみられる。底面の縁沿いには陶土の固まりがバリとなって付着する。内底面に指圧の強い回転擦痕がみられ、内底面の立ち上がりの部分から丁寧なナデに移行する。素地：粗細な石英を少量含み、希に細かい鉱物（黒色、茶色）が僅かにみられる。色調：外面は黒褐色で光沢がある。外底面が灰黒色を帯びる。内面は灰褐色となる。焼成：良好で堅い。	B-15・16 SA24 A地点 覆土

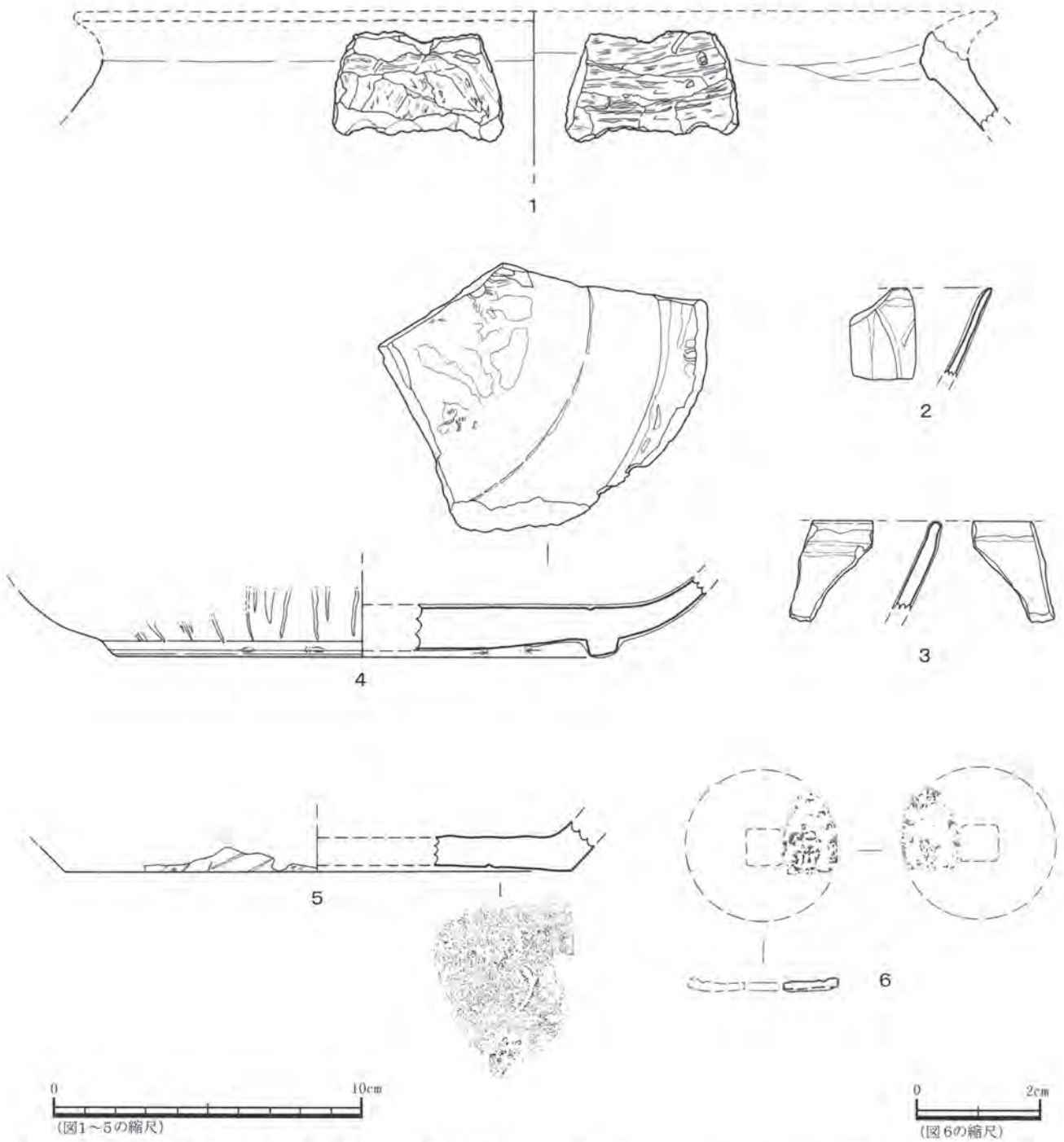
注　( )：推定、「－」：計測不可

第79表② 石積みSA24（A･B地点） 銭貨観察一覧

単位：mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銭種	鋳造種類	初鋳年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径 A B	肉郭内径 C D	方穿 E F	断面計測部位 ①	②	③	重量	観察事項	出土地点 出土層
第43図 図版35 6	熙寧元寶 or 熙寧重寶	公鋳銭	北宋 1068年 1071年	銅銭	回読	破損	真書	― ―	― ―	― ―	1.52	1.31	1.51	0.78	「寧」の字款のみが残存する。「熙寧元寶」の可能性が高いようである。当該銭貨は二次的な火熱を受けて背の一部で素材の溶解と再凝固の痕跡（緑青による瘤状の固まりや膨張）がみられる。面・背ともに緑青がみられ特に背はその影響を強く受けている。	B-15･16 SA24 A地点 覆土

注 「―」：計測不可



第 43 図 石積み SA24（A・B 地点）出土品 土器：1、青磁：2～4、カムィヤキ須恵器：5、銭貨：6

VI期前半

第80表① 石積みSA24（A･B地点） 出土遺物状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						B-15･16								合計
						SA24							SA24･SA16･SK03	
						A地点		B地点				A･B地点	A～F地点	
						覆土	第2層	覆土	撹乱層2	第1層	第2層 灰褐色土層	覆土	覆土	
土器	器種不明	胴部						1	1					2
	グスク系	壺	口縁部					1						1
合 計						0	0	2	1	0	0	0	0	3
瓦質土器	鉢	胴部										1		1
	器種不明	胴部											1	1
合 計						0	0	0	0	0	0	1	1	2
屋瓦	高麗系	丸瓦	灰色	漆喰無し		2								2
		平瓦				4		2						6
	大和系（古）	丸瓦	灰色	漆喰無し		1								1
		平瓦				1							1	2
	大和系	平瓦	灰色	漆喰有り（片面）				2	1					3
	明朝系	軒平	灰色	漆喰無し					1					1
			褐色			1								1
		丸瓦	灰色	漆喰無し					2					2
			褐色	漆喰有り（片面）									1	1
			赤色	漆喰有り（片面）		1		6	3				5	15
				漆喰無し				1			1			2
		平瓦	灰色	漆喰有り（片面）				1						1
				漆喰無し		8		7	6					21
			褐色	漆喰無し		1								1
			赤色	漆喰有り（両面）		1								1
				漆喰有り（片面）				2	3		1		5	11
				漆喰無し		2		4	4		2		7	19
合 計						22	0	25	20	0	4	0	19	90
青磁	碗	口縁部	直口	鎬蓮弁	片切彫り	1								1
				蓮弁	線彫り	1								1
				無文		2								2
			外反	無文		2								2
		胴部	無文			3			1					4
		底部	gﾀｲﾌﾟ	無文		1								1
	皿	口縁部	外反	無文		1								1
		底部	蓮弁	片切彫り				1						1
			印花文			1								1
			無文			1								1
	盤	口縁部	稜花	有文不明		1								1
		底部	aﾀｲﾌﾟ	蓮弁	片切彫り			1						1
				印花文		1								1
	酒会壷	胴部	有文不明			1								1
合 計						16	0	2	1	0	0	0	0	19
白磁	碗or皿	胴部				2								2
合 計						2	0	0	0	0	0	0	0	2
青花	碗	底部											1	1
合 計						0	0	0	0	0	0	0	1	1
彩釉陶器	瓶	胴部											1	1
合 計						0	0	0	0	0	0	0	1	1
黒釉陶器	碗	胴部						1						1
合 計						0	0	1	0	0	0	0	0	1
中国産 褐釉陶器	壺	口縁部	逆「L」字状			1								1
		把手				1								1
		胴部				23		3	1				1	28
	器種不明	胴部				2			1					3
合 計						27	0	3	2	0	0	0	1	33
タイ産褐釉陶器	壺	胴部				9		2						11
合 計						9	0	2	0	0	0	0	0	11
カムィヤキ須恵器	壺	底部				1								1
合 計						1	0	0	0	0	0	0	0	1
本土産 陶器	唐津系、肥前	鉢	胴部						1					1
	―	壺	胴部							1				1
合 計						0	0	0	1	1	0	0	0	2
沖縄産施釉陶器	鉢	胴部				1								1
合 計						1	0	0	0	0	0	0	0	1
沖縄産 無釉陶器	鉢	口縁部				1			1					2
	甕	胴部									1			1
	器種不明	胴部							1					1
合 計						1	0	0	2	0	1	0	0	4
石製品	石皿片	細粒砂岩（ﾆｰﾋﾞ）											1	1
合 計						0	0	0	0	0	0	0	1	1
石材	緑色千枚岩								1					1
	細粒砂岩（ﾆｰﾋﾞ）					3					1			4
自然石	河原石					1		8	2					11
	サンゴ礫							1						1
合 計						4	0	9	3	0	1	0	0	17

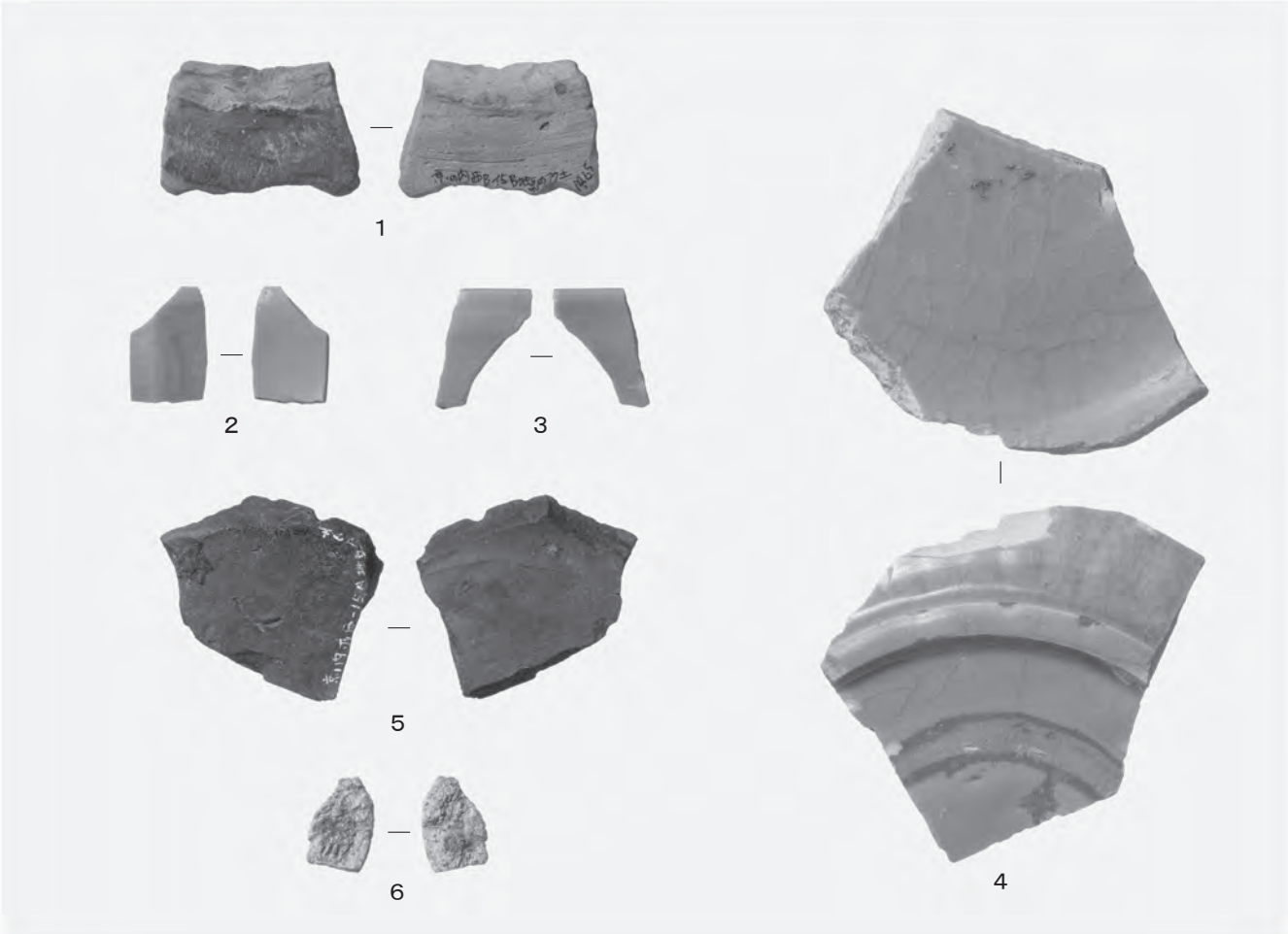
第80表② 石積みSA24（A･B地点） 出土遺物状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						B-15・16					合計
						SA24				SA24・SA16・SK03	
						A地点		B地点		A～F地点	
						覆土	第2層	覆土	撹乱層2	覆土	
金属製品	工具類・生産用具	丸釘	完形	中	鉄			4	6		10
			先端部欠損	中	鉄			4			4
			頭部欠損	中	鉄			1			1
			先端+頭部欠損	中	鉄			7		1	8
		角釘	先端部欠損	中	鉄	1		1			2
			頭部欠損	中	鉄			1			1
			先端+頭部欠損	中	鉄			1			1
	武具	覆輪			青銅				1		1
	武器	砲弾片			青銅			1			1
	近現	針金			青銅				1		1
	用途不明				青銅				1		1
					鉄	1		2	1		4
合 計						2	0	22	10	1	35
ガラス玉	形状不明	淡青色					2				2
合 計						0	2	0	0	0	2
ガラス製品	瓶	破片						2			2
	板ｶﾞﾗｽ	破片				8		6			14
合 計						8	0	8	0	0	16

注　釘のサイズは、中:1寸半～5寸まで(3.75cm～15.75cm未満)

第81表 石積みSA24（A･B地点） 二次的火熱溶解銭貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
熙寧元寳(北宋1068年)or熙寧重寳(北宋1071年)	1片	0.78	「寧」の一字が残存	B-15 SA24 A地点覆土
不明銭貨	1片	0.69	「通」の一字が残存	B-15 SA24 A地点覆土
合 計	2			



図版 35 石積み SA24（A･B 地点）出土品 土器：1、青磁：2～4、カムィヤキ須恵器：5、銭貨：6

(16) 土壙 SK03（C・E 地点）の出土遺物（第８・９図・第 44 図、図版 36、第 82～84 表）

第８・９図に示したようにB－16 グリット内に土壙 SK03 を検出する前に設定した試掘穴 C 地点・E 地点の覆土及び客土から出土した遺物を第５表及び第 83 表・第 84 表に呈示した。土壙 SK03（C・E 地点）からは 130 点（≒100%）の遺物が出土している。当該期の遺構出土の遺物の総数 8,600 点を 100 とした場合、当該遺構の出土量は 1.51%で１割強と少ない量である。さて、当該遺構で最も多く出土したのは沖縄産屋瓦（第５・83 表参照。高麗系、大和系古瓦、大和系、明朝系を含む）が多く、その量は 44 点（33.85%）と当該遺構出土の遺物の 1/3 強を占めている。この状況は当該期の遺構と共通する。これに次いで多いのが中国産褐釉陶器 26 点（20%）、中国産青磁 15 点（11.5%）、戦時中の砲弾片２点を含む金属製品 9 点（7.0%）、中国産黒釉陶器 6 点（4.6%）、沖縄産無釉陶器 6 点（4.6%）、グスク系土器 5 点（3.85%）、タイ産褐釉陶器 4 点（3.0%）、中国産青花 3 点（2.3%）、砥石か石製品及び石器片を含む 3 点（2.3%）、陶質土器１点（0.77%）、塼瓦１点（0.77%）、本土産磁器１点（0.77%）・同陶器１点（0.77%）、沖縄産施釉陶器１点（0.77%）、遊具の円盤状製品１点（0.77%）、銭貨１点（0.77%）、鍛冶関連の遺物としてガラス質鉄滓１点（0.77%）、近現代の板ガラスであるガラス製品１点（0.77%）であった。集計表の第 83 表の金属製品の武器弾の１点は、戦時中の弾ではなく石火矢の青銅製の弾（第 44 図４）として考えられた資料である。なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的に大きな破片資料や特徴的な資料を図示（第 44 図、図版 36）した。参考までに土壙 SK03（B－16 グリッド）は、京の内北地区遺構時期区分（第３表）の第Ⅰ期（14 世紀前半～14 世紀後半）の時期に比定される遺構である。

第82表① 土壙SK03（C・E地点） 青磁・黒釉陶器・円盤状製品・金属製品観察一覧

単位：cm

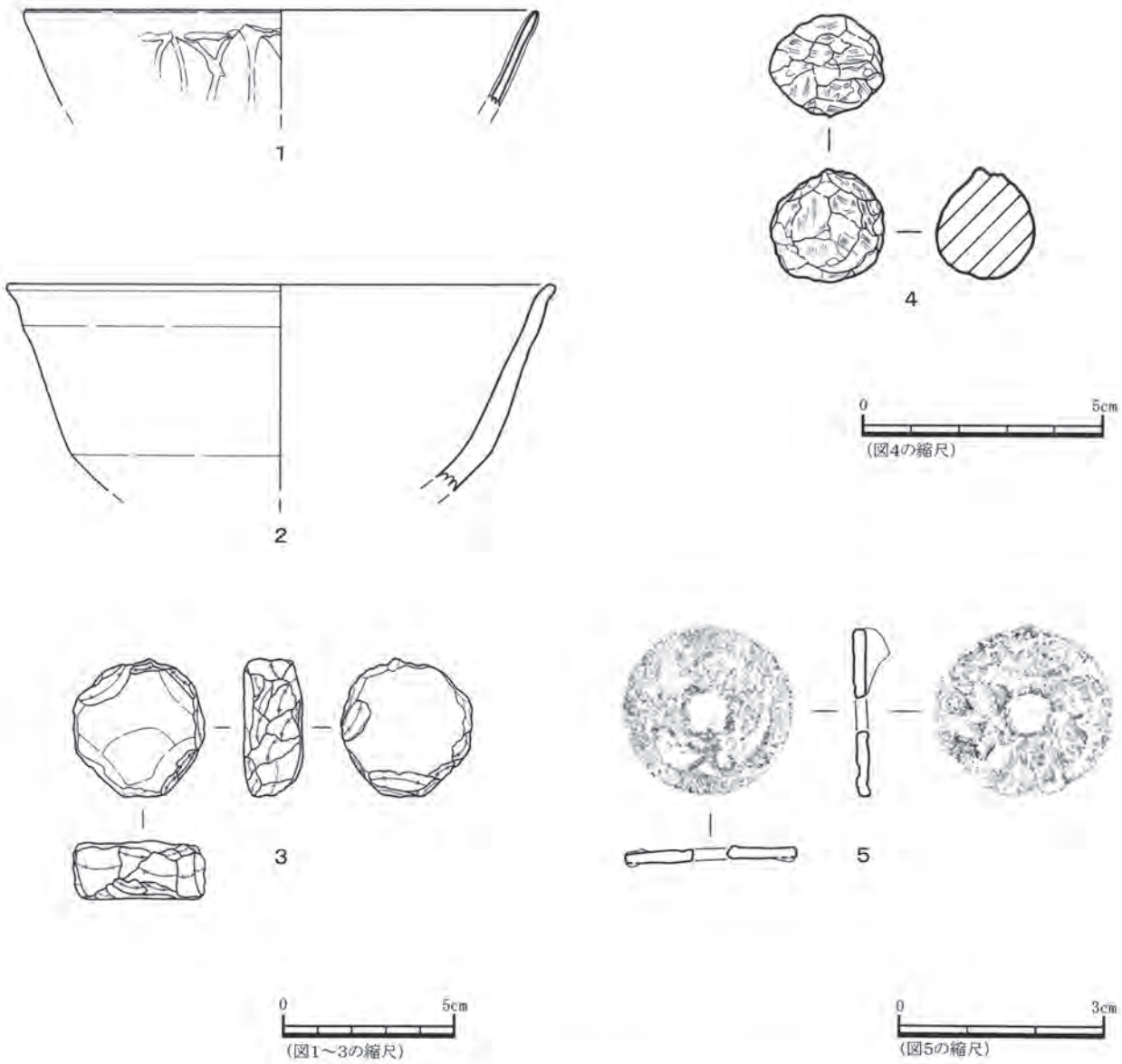
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称・部位			観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第44図 図版36 1	青磁	鎬蓮弁文碗	口縁部	器形：口唇部は鋭角で先端のみが丸味を小さくする為、尖り気味となる鎬蓮弁文碗の口縁破片で、推算口径は15.0cmが求められている。器厚が3.1～4.8mmを測り、全体的に薄手の傾向が強い。文様：外面は弁内に明瞭な鎬を入れ、縁取りは片切彫りによる蓮弁文を描いている。素地：光沢のある灰白色の微粒子。釉色：淡青緑色の釉は厚く、両面に施されている。貫入：両面に微細な貫入がみられる。龍泉窯。13c後半～14c前半。	B-16 SK03 E地点 西側客土
〃 〃 2	黒釉陶器	碗	口縁部	器形：口縁分類Ⅷ類の範疇にある碗とみられる。腰下部から丸味を持って口縁部に向かって軽く外側に外傾しながらほぼ直線的に口縁部に移行する。口縁部で軽く外反する。推算口径は16.0cmが求められた。素地：泥質（緻密で精選された陶土）で、光沢のある淡灰白色（セメント色）の細粒子。粗細な鉱物（石英、黒色）が多量に含まれている。釉色：両面に黒褐色の釉が施釉され、表面に鉄錆斑（茶褐色）が口縁から胴部に向かって轆轤痕に沿うような形で浮き出ている。内面は釉が垂れた状態である。福建省寧徳市飛鸞窯。14c終末～15c。	B-16 SK03 E地点 西側客土
〃 〃 3	円盤状製品	屋瓦	―	明朝系平瓦の身部の破片を利用した遊具。打割は主に凸面から実施されている。凹面には粗目の布目圧痕がみられる。凸面はナデ調整を主体とし、部分的に細かい刷毛目様の擦痕がみられる。素地：黄茶色の細粒子で、微細な石英を主体にして細かい石灰質の砂粒や粗い石英や茶褐色の物質が僅かに含まれている。色調：凹面は淡黄茶色で、凸面が淡橙色を帯びる。サイズは縦4.0cm、横3.8cm、厚さ1.8cm、重量26.5gであった。	B-16 SK03 C地点 東側客土
〃 〃 4	金属製品	武器	弾	石火矢の弾とみられる。弾は鋳型（半円球状の型同士を合わせて製作）製法によるものであるが、鋳型同士が歪な半円球であった為、真正の球体とならない。また、鋳型から外された製品となった弾には、鋳型同士を噛合わせた部分には外周する溝やバリがみられる。その他に鋳型に溶解した素材を注入した際に生じたとみられる三角錐状（鋳型注入用の注入口）の微弱な突出部もみられる。歪な鋳型であった為、全体的に球体表面が微弱な起伏のある面となっている。緑青の錆汁で砂粒（細かい石英を主体とする）が取り込まれている。材質：青銅。残存長：23.0mm、残存幅：23.0mm、残存最大厚：23.0mm、残存最小厚：20.0mm、残存重量：39.8g。	B-16 SK03 E地点 西側客土

注「－」：計測不可

第82表② 土壙SK03（C･E地点） 銭貨観察一覧

単位：mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銭種	鋳造種類	初鋳年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径 A B	肉郭内径 C D	方穿 E F	断面計測部位 ①	②	③	重量	観察事項	出土地点 出土層
第44図 図版36 5	祥符元寶	公鋳銭	北宋 1009年	銅銭	回読	完形	草書	25.36 25.10	18.99 19.39	5.12 5.58	2.12	1.61	1.68	5.73	完形の銭貨である。緑青による膨張などの影響を受けて面の字款は「元」の一字しか確認はできないが、「元」の書体が草体であったことから類似する銭貨は「淳化元寶（北宋：990年初鋳造）」にも存在するが、字款の配置や文字のサイズなどから「祥符元寶(北宋：1009年初鋳造)」の可能性が高いようである。	B-16 SK03 E地点 西側 客土



第 44 図 土壙 SK03（C･E 地点）出土品 青磁：1、黒釉陶器：2、円盤状製品：3、金属製品：4
銭貨：5

VI期前半

第83表　土壙SK03（C･E地点）　出土遺物状況

種類・器種・部位 ＼ 層序						B-16 SK03 C地点 東側客土	B-16 SK03 C地点 東側撹乱層2	B-16 SK03 E地点 西側客土	B-16 SK03 E地点 西側排水溝覆土	合計
土器	器種不明				胴部	5				5
合　計						5	0	0	0	5
陶質土器	器種不明				部位不明	1				1
合　計						1	0	0	0	1
屋瓦	高麗系	丸瓦	灰色		漆喰無し				1	1
		平瓦	灰色		漆喰無し	1				1
	大和系（古）	平瓦	灰色		漆喰無し				1	1
	大和系	平瓦	灰色		漆喰有り（片面）			4		4
					漆喰無し			3	1	4
	明朝系	丸瓦	灰色		漆喰無し	3				3
			赤色		漆喰有り（片面）			3		3
					漆喰無し			2		2
		平瓦	灰色		漆喰無し	3		5	2	10
			褐色		漆喰無し	2				2
			赤色		漆喰有り（片面）	2		3	3	8
					漆喰無し	2		3		5
合　計						13	0	23	8	44
塼瓦	Ⅲ類	形状不明b	赤色	漆喰なし	角1	1				1
合　計						1	0	0	0	1
青磁	碗	口縁部	直口	蓮弁	片切彫り			1		1
				有文		1				1
				無文		1				1
			外反	無文	口縁部				1	1
		胴部	蓮弁	片切彫り				1	1	2
				線彫り		1				1
			無文					1		1
		底部	eﾀｲﾌﾟ	無文		1				1
		底面のみ	ー			1				1
	皿	口縁部	外反	無文		1	1			2
			内彎	無文		1				1
		底部	有文不明					1		1
	盤	口縁部	稜花	文様不明				1		1
合　計						7	1	5	2	15
青花	碗	口縁部	直口			1				1
		胴部				1				1
	皿	底部				1				1
合　計						3	0	0	0	3
黒釉陶器	碗	口縁部			Ⅷ類			1		1
		胴部				1		4		5
合　計						1	0	5	0	6
中国産褐釉陶器	壷	肩部						1		1
		胴部				10		10	5	25
合　計						10	0	11	5	26
タイ産褐釉陶器	壷	胴部				1		1	2	4
合　計						1	0	1	2	4
本土産磁器	皿	底部				1				1
合　計						1	0	0	0	1
本土産陶器	壷	胴部			黒薩摩	1				1
合　計						1	0	0	0	1
沖縄産施釉陶器	急須	撮み						1		1
合　計						0	0	1	0	1
沖縄産無釉陶器	鉢	底部						1		1
	壷	胴部				1			2	3
	壷or甕	胴部				2				2
合　計						3	0	1	2	6
石器･石製品	砥石or石製品							1		1
	石器片	細粒砂岩（ニービ）						1		1
合　計						0	0	2	0	2
石材	石灰岩					1				1
合　計						1	0	0	0	1
円盤状製品	屋瓦（明朝系）					1				1
合　計						1	0	0	0	1
金属製品	工具類・生産用具	角釘	先端+頭部欠損	中	鉄	1				1
	武具	覆輪			青銅			1		1
	武器	弾			青銅			1		1
		砲弾片			青銅			1	1	2
	分類不明	用途不明			鉄	2		1		3
					青銅	1				1
合　計						4	0	4	1	9
鍛冶関連	ガラス質鉄滓							1		1
合　計						0	0	1	0	1
ガラス製品	板ｶﾞﾗｽ								1	1
合　計						0	0	0	1	1

注　釘のサイズは、中：1寸半～5寸まで(3.75㎝～15.75㎝未満)

第84表　土壙SK03（C･E地点）　二次的火熱溶解銭貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
祥符元寳（北宋1009年）	1片	5.73	「元」の一字が残存	B-16 SK03　E地点　西側客土
合　計	1			

図版 36　土壙 SK03（C･E 地点）出土品　青磁：1、黒釉陶器：2、円盤状製品：3、金属製品：4
銭貨：5、ビー玉：6（写真のみ）

（17）土壙 SK02 の出土遺物（第４図・第 45～54 図、図版 37～44、第 85 表～第 104 表）

第４図に図示した土壙 SK02（B-14・15 グリッド）は、京の内北地区遺構時期区分（第３表）の第Ⅱ期（14 世紀終末～15 世紀前半）の時期に比定される遺構であるが、遺構直上に B-14・15 の二つのグリッドを設定して発掘調査を進めた為、最終的に土壙 SK02 の名称を関した。土壙 SK02 から出土した遺物については、既に『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－平成６年度調査の遺物編（１）』（2012 年３月）刊行で報告。ここでは当該期のグリット出土の遺物を中心に報告をする。土壙 SK02 から出土した遺物の量は 1,372 点を数えた。当該期の遺構から出土した遺物の総出土量（8.600 点）からすると約 16%を占めている。当該遺構で最も多く出土したのは沖縄産屋瓦（第５表・第 85 表参照。高麗系、大和系古瓦、大和系、明朝系を含む）が多く、その量は 513 点（37.4%）と当該遺構出土の遺物の 1/3 強を占めている。この出土状況は当該期の遺構と共通するところである。これに次いで多いのが中国産褐釉陶器 382 点（27.8%）、タイ産褐釉陶器 106 点（7.7%）、近現代の釘３点と戦時中の砲弾片 16 点及び薬莢１点を含む金属製品 91 点（6.6%）、中国産青磁 83 点（6.0%）、石器・石製品４点と石材片などを含む 38 点（2.7%）、沖縄産無釉陶器 30 点（2.2%）、中国産青花 18 点（1.3%）、銭貨 17 点（1.2%）などの順に減少する。

第85表　土壙SK02　陶質土器・瓦質土器・屋瓦・塼瓦出土状況

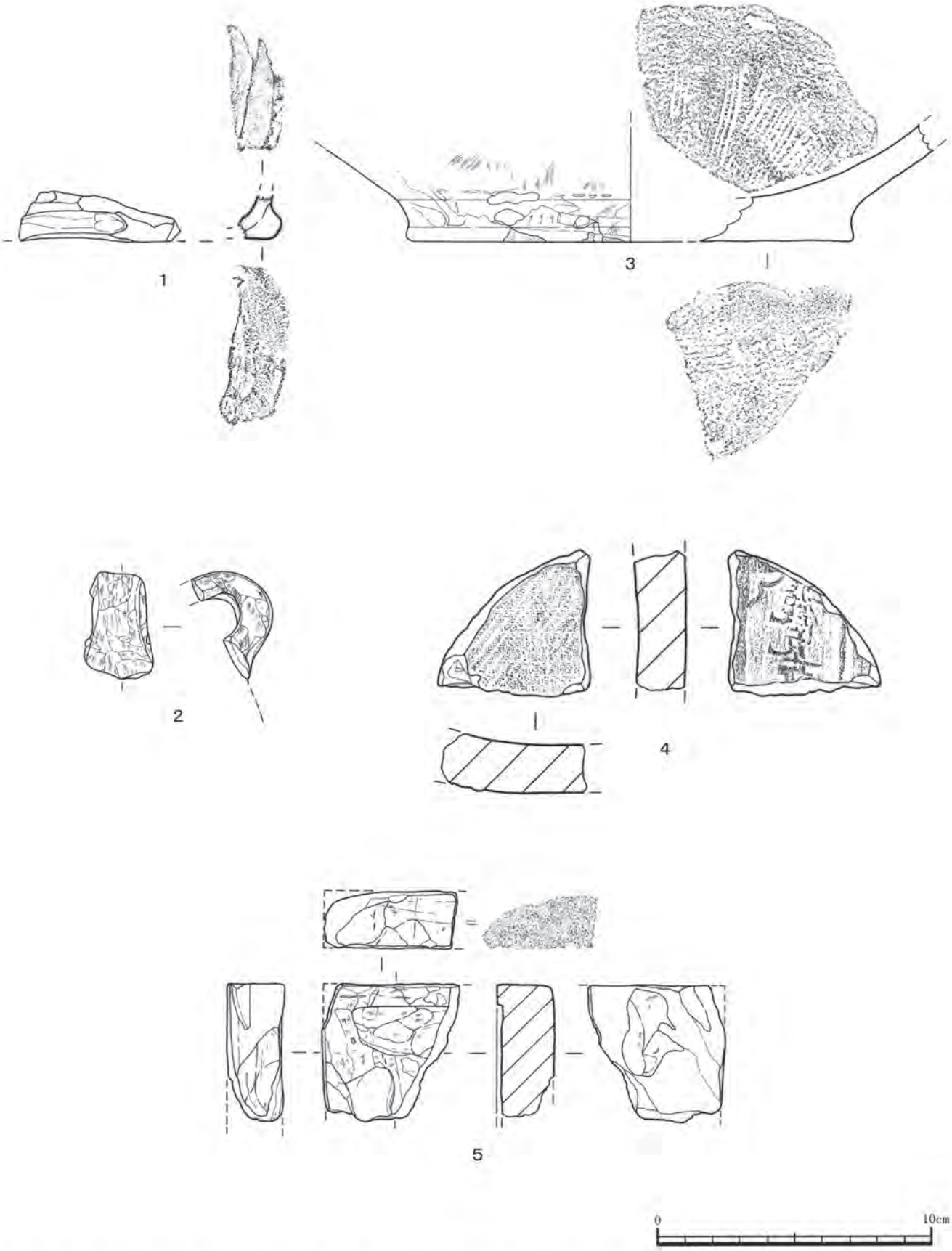
種類・器種・部位 ＼ 層序図面対応の出土層 ＼ グリット						B-14・15 SK02 西側層序 第3層b	北側層序 覆土	第1層b	第1層d（瓦層）	第1層f	第4層	SA15東側トレンチ層序 覆土	撹乱層	第1層b	第1層d	第3層a	SA15西側トレンチ層序 覆土	第1層	合計
陶質土器	鉢	底部											1						1
	器種不明	胴部								1									1
合計						0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2
瓦質土器	茶釜	把手										1							1
	擂鉢	底部															1		1
		脚										1							1
	壷	胴部										1							1
	蓋	―										1							1
	器種不明	胴部														1			1
		部位不明											1						1
合計						0	0	0	0	0	0	4	1	0	0	1	1	0	7
屋瓦	高麗系	軒丸	灰色	漆喰無し		1													1
			褐色										1						1
		丸瓦	灰色	漆喰無し					2	3		10	21	1		1			38
			褐色									8	1	1		1			11
		平瓦	灰色	漆喰無し			1		1	15		48	35		1	5	1	1	108
			褐色								1	2					1		4
	大和系（古）	丸瓦	灰色	漆喰無し								8	6	1		1			16
			褐色													1			1
		平瓦	灰色	漆喰無し					1	1		9	1			2			14
	大和系	丸瓦	褐色	漆喰無し								1	2						3
		平瓦	灰色	漆喰有り（片面）														1	1
	明朝系	軒丸	灰色	漆喰無し						1								1	2
			暗褐色															1	1
		丸瓦	灰色	漆喰無し					5	4			3			1		4	17
			褐色							1		2							3
			赤色	漆喰有り（片面）					26	4								9	39
				漆喰無し					7									4	11
		平瓦	灰色	漆喰無し					5	4		1	1			2		6	19
			褐色									1							1
			赤色	漆喰有り（両面）														3	3
				漆喰有り（片面）				4	35	9						10		39	97
				漆喰無し				2	58	11						10		41	122
合計						1	1	6	140	53	1	90	71	3	1	34	2	110	513
塼瓦?	Ⅰ類	不明	褐色	漆喰無し	角無し								1						1
塼瓦	Ⅲ類	Ab	灰色	漆喰無し	角無し													1	1
		分類不明a	赤色	漆喰無し	角1				1										1
					角無し				1										1
		分類不明b	灰色	漆喰無し	角1											2			2
					角無し							1				1		2	4
合計						0	0	0	2	0	0	1	1	0	0	3	0	3	10

第86表　土壙SK02　陶質土器･瓦質土器･屋瓦･塼瓦？観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称・部位			口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第45図 図版37 1	陶質土器	鉢	底部	― ― ―	器形：底面からの立ち上がりの部分でくびれることなどからすると浅鉢の底部片として考えられる。陶土の継ぎ足しがくびれ部分と外底面で実施されているが雑である。器面調整：外面はくびれ部分が雑な指ナデと指圧痕がみられる。外底面は陶土の継ぎ足しの痕跡が顕著であり、雑な指ナデが施されている。内面は横位方向に指圧の強い指ナデが施されている。素地：灰白色の細粒子で、微細な石英が多く含まれ、希に粗い石英や茶褐色の物質が含まれている。色調：外面は灰白色を呈し、内面が灰褐色となる。焼成：良好で堅い。	B-14・15 SK02 （SA15東側トレンチ層序） 撹乱層
〃 〃 2	瓦質土器	茶釜	把手	― ― ―	器形：湧田古窯跡出土の類似資料から茶釜の肩部に貼り付けられた把手（把手の幅19㎜、厚さ8.7～11.1㎜）とみられる。器面調整：外面と両側面にはナデや指圧痕がみられ、外面のみ丁寧なナデを加えている。内面は篦削り（縦位方向）後にナデ消しを行うが消えきっていない。素地：灰色の細粒子で、微細な鉱物（石英、黒色。茶褐色）を多く含み、少量ながら石灰質砂粒が含まれている。希に粗い石英もみられる。色調：外面のみ淡茶色で、他は淡橙白色を帯びる。焼成：良好で堅い。	B-14・15 SK02 （SA15東側トレンチ層序） 覆土
〃 〃 3		擂鉢	底部	― ― 16.2	器形：底部の立ち上がりの部分の陶土を篦で削り取ってくびれを造る擂鉢で、内面の底面近くから胴部に向かって櫛目（8条一組）を入れている。器面調整：外面は篦削りを主体とし部分的にナデを加えている。外底面は粗い縄目様の圧痕とナデが部分的にみられる以外は平坦な滑面となる。内面は器面の保持が悪く判然としないが器面は滑らかな面となっている事からするとナデ仕上げの可能性が考えられる。素地：灰白色の細粒子で、微細な石英と黒色や茶褐色の鉱物を少量含み、希に粗い茶褐色の物質がみられる。色調：外面と外底面の一部は暗褐色で、部分的に灰色を帯びる。内面は灰色を主体とし、部分的に淡灰茶色を帯びている。焼成：良好で堅い。	B-14・15 SK02 （SA15西側トレンチ層序） 覆土
〃 〃 4	屋瓦・高麗系	平瓦		― ― ―	「癸酉年高麗瓦匠造」の在銘瓦片。凸面には「麗瓦匠」の三文字が明瞭にみられるが、文字は重なり合うが僅かに「高」の文字の一部がみられる。その他に指圧痕もみられる。凹面には布目圧痕と右上から左下に走る糸切り痕がみられる。素地：灰色の細粒子で、微細な石英や粗い茶褐色の鉱物が僅かにみられる。色調：凹面は灰茶色で、凸面が灰褐色を呈する。焼成は堅緻。	B-14・15 SK02 （東側層序） 第1層d
〃 〃 5	塼瓦？	端部		― ― ―	塼瓦分類のⅠ類（塼の端部組み合わせ式）の端部破片とみられるが判然としない。器面調整：表面の上部近くに横位に入る窪みは成形時の傷と剥離面であるが、製作時に剥離した剥離面にも指圧を加えて仕上げている。表面は篦削りを主体とする。上側面は篦削り（弧を描くような篦削り）で仕上げる。左側面は縦位方向のナデを主体とするが側面上部は丁寧で下部は面取成形で施した篦削りをナデ消しているが徹底しない。裏面は微弱に起伏する平坦面でナデと指圧痕が僅かにみられる程度である。素地：灰色の細粒子で、微細な石英を主体とし、少量ながら細かい黒色鉱物や粗い茶褐色の物質、石灰質粗砂粒が含まれている。焼成：良好で堅い。	B-14・15 SK02 （SA15東側トレンチ層序） 撹乱層

注「―」：計測不可



第 45 図　土壙 SK02 出土品①　陶質土器：1、瓦質土器：2･3、屋瓦：4、塼瓦？：5

第87表　土壙SK02　青磁出土状況

種類・器種・部位 ＼ 層序図面対応の出土層 ＼ グリット					B-14・15 SK02 西側層序 第3層b	北側層序 覆土	第1層b	第1層d（瓦層）	第1層f	東側トレンチ層序 覆土	撹乱層	第1層b	第3層a	第4層a	西側トレンチ層序 覆土	合計
碗	口縁部～底部	玉縁	蓮弁	片切彫り						1						1
	口縁部	直口	蓮弁	片切彫り						1						1
				線彫り						1					1	2
			雷文	片切彫り										1		1
			波濤文	櫛描き					1							1
			無文						2							2
		外反	有文							2	1					3
			無文		1		1		3	5	1					11
		玉縁	無文						1							1
	胴部	蓮弁	片切彫り						2	1						3
			線彫り		1				1	1						3
		無文						1	4	4	4		1			14
	底部	bタイプ	無文					1								1
		cタイプ	蓮弁	片切彫り				1								1
		eタイプ	有文									1				1
			無文						1							1
		fタイプ	無文							1						1
		hタイプ	文様不明							1						1
		底面のみ	有文							1						1
皿	口縁部～底部	外反	無文		1						1					2
	口縁部	口折	蓮弁	片切彫り						1						1
		外反	無文						1	2		1			1	5
		稜花	無文						1							1
			文様不明		1					1						2
	胴部	無文					1			4						5
盤	口縁部	タガ状鍔縁	文様不明					1	1	1	1					4
		直口	文様不明							1						1
	胴部	無文			1								1			2
		文様不明								3		1				4
	底部	aタイプ	印花文		1											1
			無文										1			1
		bタイプ	文様不明			1										1
酒会壷	蓋	有文不明									1					1
	撮み	―								1						1
	底部	無文								1						1
合　計					6	1	2	4	18	34	9	3	3	1	2	83

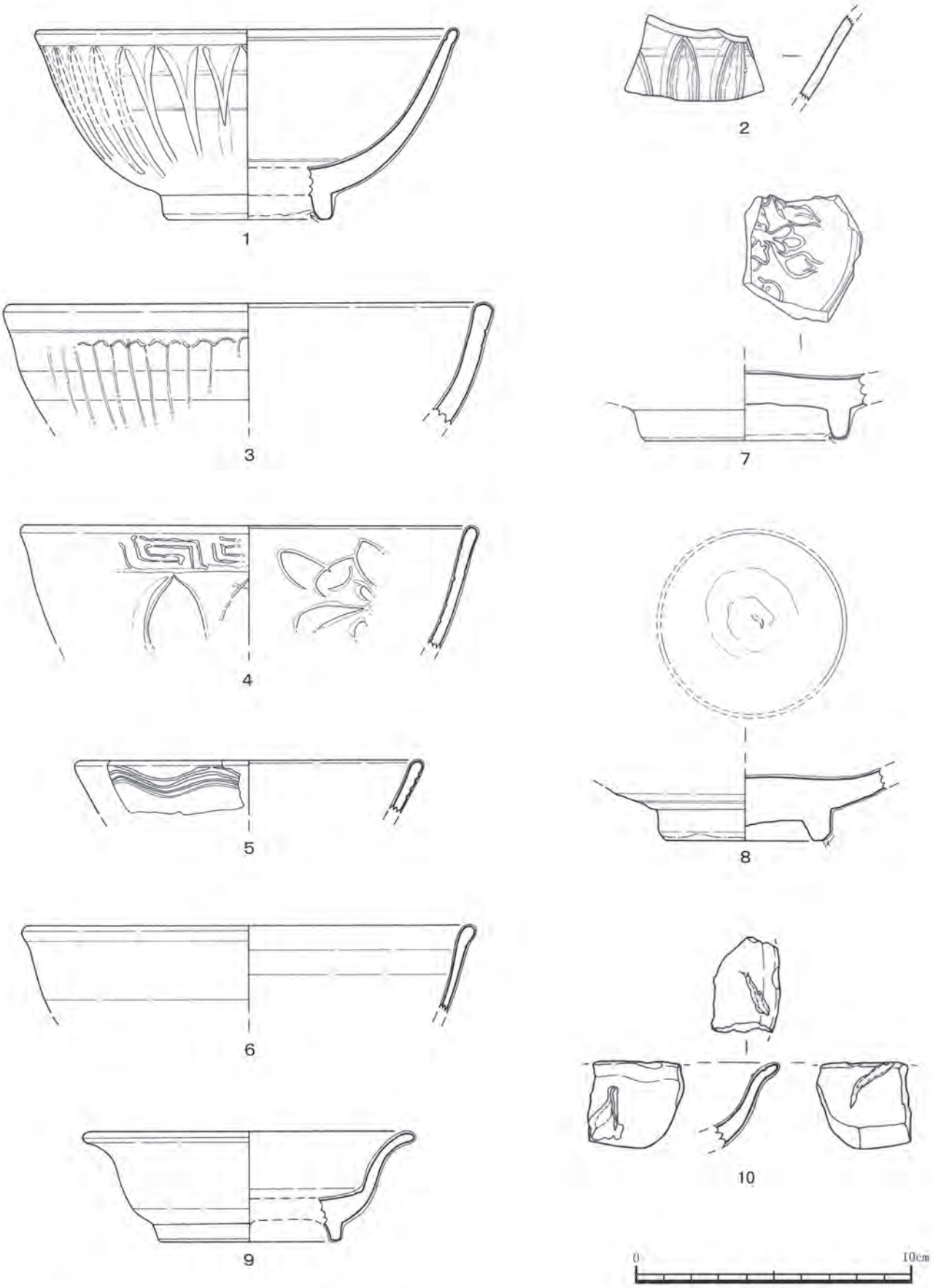
VI期前半

第88表　土壙 SK02　青磁観察一覧

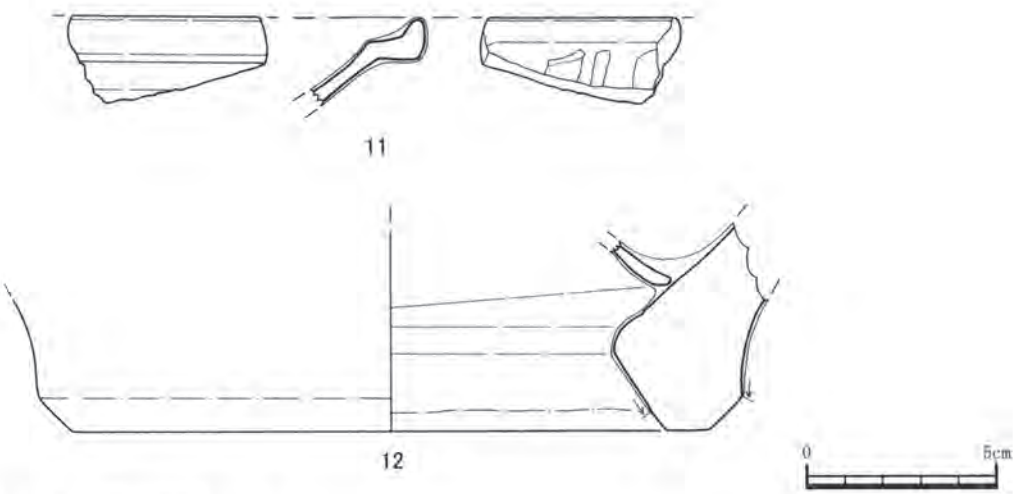
単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第46図 図版38 1	碗	蓮弁文碗	口縁部～底部	15.4 6.9 6.2	器形:高台分類eタイプ。高台脇から丸味を持って胴下部まで移行し、そのまま直線的に口縁部に向かって開き気味に移行する。口縁部に小さな玉縁状の肥厚を造る。文様:外面の胴下部から口縁部まで片切彫りによる蓮弁文を描く。内面の口縁部に線彫りで界線を施している。胴下部にも圏線を施している。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。劈開面から粗細な気泡痕が多くみられる。釉色:釉は内面から外面の高台内側途中まで施釉。貫入:なし。龍泉窯。14c後半～15c。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 2			頸部～胴部	― ― ―	器形:頸部で僅かに外反することから外反口縁碗の可能性が高い。文様:外面に叉状工具で弁先の尖った蓮弁文を描く。素地:灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物を少量含んでいる。釉色:灰緑色の釉が両面に施されている。貫入はない。中国(福建・広東)の窯。14c終末～15c中頃。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 3		線刻細蓮弁文碗	口縁部	17.8 ― ―	器形:厚手(器厚:7.9㎜)の直口口縁碗(線刻細蓮弁文碗)。文様:外面に線彫りで蓮弁の弁軸と、その後に弁先を一致させて描くが、若干のズレがみられる。弁先の上にも界線が一条線彫りで施されている。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:灰白色の釉を両面に施釉。粗い貫入が両面でみられる。龍泉窯系。15c後半～16c前半。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 4		雷文帯碗		16.6 ― ―	器形:雷文帯碗(直口口縁碗)。文様:外面口縁に時計廻りと反時計廻りで雷文を描き、その直下を界線で区画帯を造る。区画直下に片切彫りで丸味のある蓮弁文を描く。内面は片切彫りで牡丹唐草文を描く。素地:灰白色の微粒子。釉色:黄緑色の釉が両面に施されている。貫入:両面に微細な貫入がみられる。中国(福建・広東)の窯。14c終末～15c中頃。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 第4層a
〃 〃 5		波濤文帯碗		12.6 ― ―	器形:直口口縁碗。文様:外面口縁に櫛描きで波濤文を描いた波濤文帯の碗。素地:灰白色の細粒子で、粗細な黒色の鉱物が多くみられる。釉色:淡黄緑色の釉が両面に施されている。貫入:両面に粗細な貫入がみられる。中国(福建・広東)の窯。14c終末～15c後半。	B-14・15 SK02 (北側層序) 第1層f
〃 〃 6		無文玉縁口縁碗		16.4 ― ―	器形:無文玉縁口縁碗。口縁部に小振りの玉縁状の肥厚をつくる。素地:灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物が多くみられる。釉色:淡灰緑色の釉が両面に施釉。貫入:なし。中国(福建・広東)の窯。14c終末～15c中頃。	B-14・15 SK02 (北側層序) 第1層f
〃 〃 7		無文碗	底部	― ― 7.6	器形:高台分類eタイプの碗。文様:見込みに印花文(花唐草文とみられる)が施されている。外底面に輪状の胎土目の目跡がみられる。素地:光沢のある灰白色の微粒子。釉色:黄緑色の釉が内面から外面の高台内側途中まで施釉。貫入:粗い貫入がみられる。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	B-14・15 SK02 (北側層序) 第1層f
〃 〃 8		無文碗?		― ― 6.3	器形:高台分類fタイプの碗。高台内面の内刳り及び轆轤成形も雑で、更に施釉も雑である。文様:見込みに陽圏線を施す。見込み中央が浅く窪んでいる状況からすると窪みに中心(点)となる道具をおいて棒状の工具を利用して圏線を描いたものとみられる。素地:淡橙白色の細粒子で、微細な石英や鉱物(黒色・茶褐色)が多くみられる。釉色:内面から外面の高台まで施釉。貫入:細かい貫入が両面でみられる。中国(福建・広東)の窯。14c終末～15c中頃。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 9	皿	無文外反口縁皿	口縁部～底部	12.0 4.0 6.6	器形:無文外反口縁皿。高台脇から胴部まで丸味を持たせて胴上部から大きく外側に外反させている。素地:灰白色の微粒子。釉色:濃緑色の釉が内面から外面高台内側まで施釉。貫入:両面に粗い貫入がみられる。龍泉窯系。14c中頃～15c中頃。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 撹乱
〃 〃 10		稜花皿	口縁部	― ― ―	器形:口唇部の一部を抉って稜花とする所謂、稜花皿であるが、二次的な火熱を受けて両面の釉が爛れている。その為、文様構成が確認できない。劈開面からの観察では叉状工具や片切彫りの工具が使用された痕跡がみられる程度である。素地:灰白色の微粒子で、微細な黒色鉱物が僅かにみられる。釉色:両面に淡青緑色の釉がみられる。貫入はない。龍泉窯系。14c後半～15c前半。	B-14・15 SK02 (西側層序) 第3層b
第47図 図版38 11	盤	鍔縁盤	口縁部	― ― ―	器形:口縁端部を上方に摘まみ上げてタガ状に成形する。内面に頸部と胴部の屈曲部に明瞭な稜線が走る。文様:内面胴部に幅広の蓮弁文を描くが不鮮明である。素地:淡灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物が多くみられる。釉色:淡緑色の釉を両面に施釉。細かい貫入が両面でみられる。中国(福建・広東)の窯。14c終末～15c中頃。	B-14・15 SK02 (北側層序) 第1層f
〃 〃 12	壷	酒会壷	底部	― ― 16.8	器形:高台外面から緩やかに外側に開く酒会壷の底部片で、内面には円盤状となった底部が貼り付けられている。文様は残存しない。素地:光沢のある灰白色の微粒子で、僅かに微細な黒色鉱物がみられる。釉色:黄緑色の釉を両面に施すが、畳付と内外面の高台途中までは露胎する。微細な貫入が両面みられる。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土

注「―」:計測不可



第 46 図　土壙 SK02 出土品②　青磁：1～ 10



第 47 図　土壙 SK02 出土品③　青磁：11･12

第89表　土壙SK02　白磁･青花･黒釉陶器出土状況

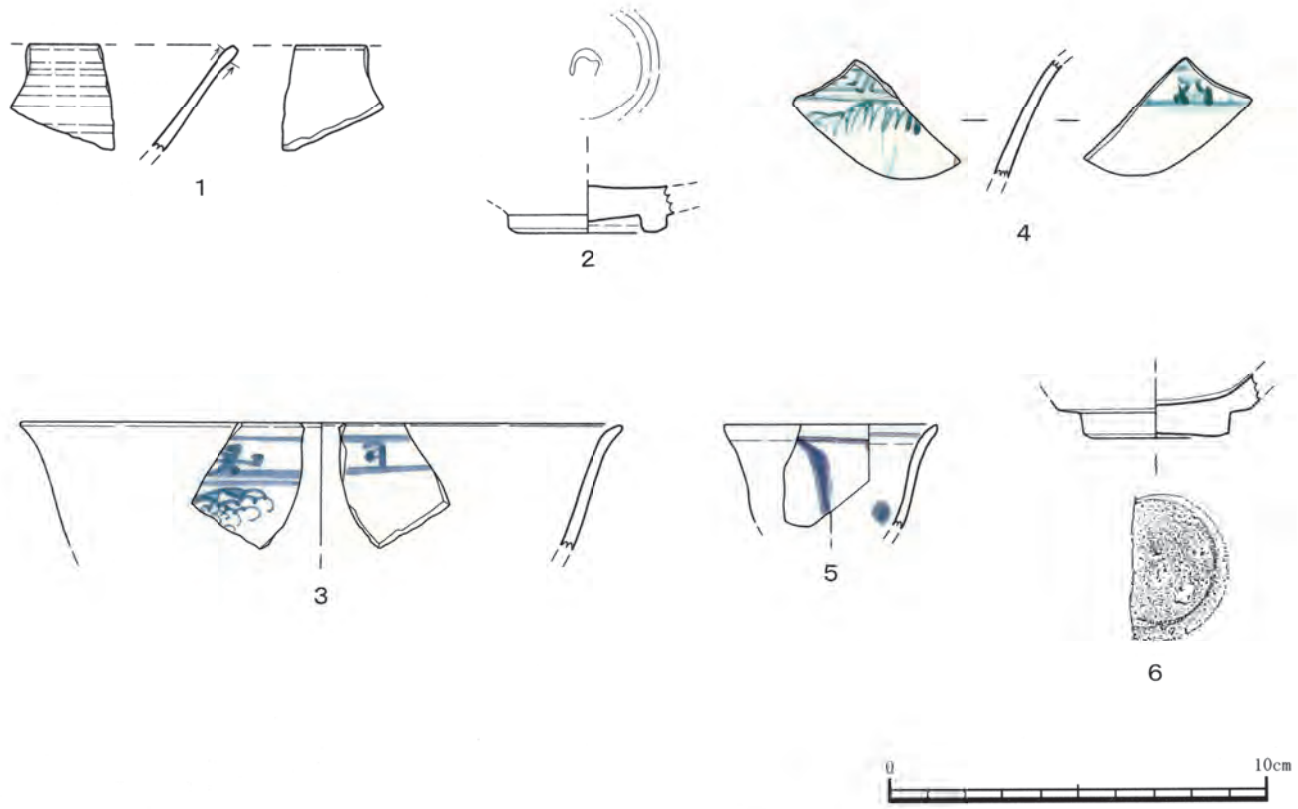
種類･器種･部位 ＼ 層序図面対応の出土層 ＼ グリット				B-14･15 SK02 北側層序 第1層b	第1層d(瓦層)	第1層d	第1層f	SA15東側トレンチ層序 撹乱層	覆土	SA15西側トレンチ層序 覆土	合計
白磁	碗	口縁部	外反					1	1		2
	皿	口縁部	外反				1		1	1	3
			内彎	1							1
		底部						1			1
合　計				1	0	0	1	2	2	1	7
青花	碗	口縁部	外反				2		1		3
			直口		1	1	3		1		6
		胴部					3		2		5
	皿	胴部		1			1		1		3
	杯	口縁部							1		1
合　計				1	1	1	9	0	6	0	18
黒釉陶器	碗	胴部							1		1
		底部	Ⅷ類						1		1
	茶入れ壷	胴部							1		1
合　計				0	0	0	0	0	3	0	3

第90表　土壙 SK02　白磁･青花･黒釉陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称･仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地･混入物･色調･釉色等)	出土地点 出土層
第48図 図版39 1	白磁	口禿碗	口縁部	― ― ―	器形：大きく外側に外傾する所謂、口禿碗で口縁部が緩やかに軽く外反する。内外面の口縁端部近くと口唇部の釉を掻き取って露胎とする。釉上からの観察では、外面に粗密な轆轤が顕著にみられる。文様：なし。素地：光沢のある白色の微粒子。釉色：淡灰白色の釉は口唇及び内外面の口縁端部を除いて施釉。貫入：なし。福建産。15c代？。	B-14･15 SK02(SA15東側トレンチ層序) 撹乱層
〃 〃 2	白磁	皿 内彎口縁	底部	― ― 4.2	器形：内彎口縁皿の高台破片。高台内刳りは雑で深く、高台は幅広である。釉上からの観察では内底面の調整は雑で見込みに歪な三日月様の窪みや細かい轆轤痕が外周縁でみられる。文様：なし。素地：半磁胎の白色の細粒子で、劈開面から微細な気泡痕が多くみられる。釉色：淡黄白色の釉は内面と高台脇に施釉。貫入：微細な貫入が多くみられる。福建産(邵武四都窯)。14c後半～15c前半。	B-14･15 SK02(SA15東側トレンチ層序) 撹乱層
〃 〃 3	青花	雲堂手の碗	口縁部	16.0 ― ―	器形：所謂、「雲堂手」と称される外反口縁碗の口縁破片。文様：外面の口縁部に界線を上位に一条、下位に二条を施して区画とし、その区画内に「呉」の字款とみられる文様を描く。区画帯直下には雲文を描いている。内面口縁にも界線で区画し、区画内に梵字様の文様を描く。素地：淡灰白色の細粒子で、劈開面から微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色：淡青白色の釉は両面に施釉。貫入：なし。景徳鎮窯。15c前半～中葉。	B-14･15 SK02 (北側層序) 第1層f
〃 〃 4	青花	雲堂手の碗	胴部	― ― ―	器形：雲堂手文の外反口縁碗(口頸部破片)。文様：外面の口頸部に二条一組の界線の上位に反時計廻りの雷文を描き、その下位には山や木々を雲文で描いている。内面にも区画界線がみられ上位に一条と下位に二条一組を描く、区画内に梵字様の文様を描いている。素地：　〃　。釉色：明青白色の釉を両面に施釉。貫入：なし。景徳鎮窯。15c前半～中葉。	B-14･15 SK02(SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 5	青花	杯	口縁部	5.6 ― ―	器形：外反口縁の杯。口縁部で外反し、口唇部を尖り気味に成形する。文様：両面に界線と草花文とみられる文様を描く。素地：光沢のある白色の微粒子。釉色：明青白色の釉を両面に施釉。貫入：なし。景徳鎮窯。17c後半？。	B-14･15 SK02(SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 6	黒釉陶器	碗	底部	― ― 3.9	器形：天目茶碗分類のⅧ類に該当する高台破片。高台脇を水平に削り出している。外底面の内刳りが浅い。素地：光沢のある灰白色の細粒子で、微細な鉱物(黒色、灰色)が多くみられる。劈開面からは微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色：黒色の釉が見込みに1.2～2.2㎜と厚く溜まっている。釉上に放射状に茶色の釉が浮遊する。貫入：なし。福建省寧徳市飛鸞窯。14c終末～15c。	B-14･15 SK02(SA15東側トレンチ層序) 覆土

注 「―」：計測不可



第 48 図　土壙 SK02 出土品④　白磁：1･2、青花：3～5、黒釉陶器：6

第91表　土壙SK02　中国産褐釉陶器出土状況

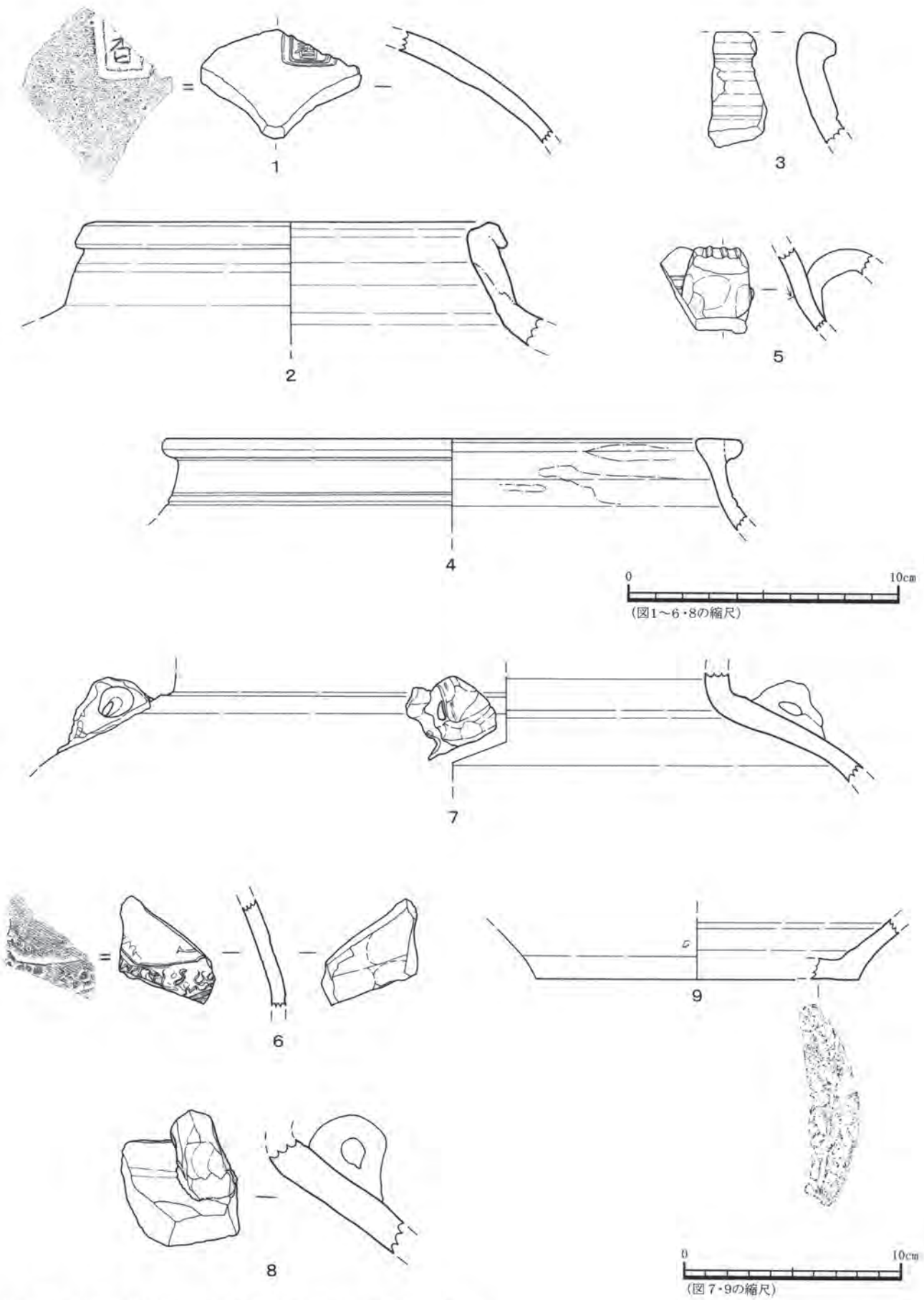
グリット		B-14･15														合計
		SK02														
層序図面対応の出土層		東側層序	西側層序	北側層序				SA15東側トレンチ層序						SA15西側トレンチ層序		
器種・部位		第1層d	覆土	覆土	第1層b	第1層d（瓦層）	第1層f	表土層②	覆土	撹乱層	第1層b	第2層	第3層a	覆土	撹乱	
壷	口縁部 玉縁状								2		1					3
	口縁部 方形状					1	1									2
	口縁部 「く」字状								1							1
	口縁部 「フ」字状								1			1	1			3
	口縁部 逆「L」字状								2	2	1		1			6
	頸部					1			5		1					7
	肩部								5				1			6
	把手								3							3
	胴部		3	3	2	42	14	5	191	19	20		27	12	1	339
	底部								7	1						8
鉢	底部	1														1
器種不明	胴部					1			2							3
合　計		1	3	3	2	45	15	5	219	22	23	1	30	12	1	382

第92表　土壙 SK02　中国産褐釉陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第49図 図版40 1	壷	胴部	― ― ―	器形：肩の張る玉縁口縁となる壷の胴部片で、内面は滑らかな面で水撫でで調整するが、部分的に指圧痕がみられる。文様：肩部に「香」の刻印がみられることから「清香」などの刻印であったものとみられる。素地：磁器質の陶土で淡灰白色の細粒子であるが、粗細な鉱物（石英、黒色、茶褐色）を多く含む。釉色：暗褐色の釉が外面にのみみられる。中国（福建・広東）の窯。14c終末～15c。	B-14・15 SK02 （SA15東側トレンチ層序） 覆土
〃 〃 2		口縁部	15.4 ― ―	器形：口頸部の縦断面が「く」の字状となる怒り肩の壷で、口縁の造りは陶土を下方に屈曲させた歪な方形状の肥厚口縁となる。器面の調整を釉上から観察すると外面は頸下部には雑な轆轤痕が顕著にみられる。口縁部も雑なナデを施したようである。内面にも轆轤痕とナデが施されたようである。素地：灰色の細粒子で、粗細な鉱物（石英、黒色、茶褐色）を多く含むが、特に1～3㎜程度の粗い石英が目立つ。釉色：茶黒色の釉が両面にみられる。中国（福建・広東）の窯。14c終末～15c。	B-14・15 SK02 （SA15東側トレンチ層序） 覆土
〃 〃 3			― ― ―	器形：口縁部の縦断面が「フ」の字状となり、肥厚部が歪な台形状となる壷。文様：外面は肥厚帯下端と頸部に丸篦状の工具で沈線（界線）を加えて強調する。釉上から器面調整をみると両面とも轆轤痕をナデ消すが外面は轆轤痕が消えきっていない。素地：淡橙白色の細粒子で、粗細な鉱物（黒色、茶褐色）を少量含む。劈開面から白色の陶土が縞状に入っている。釉色：黄褐色の釉が両面にみられる。中国（福建・広東）の窯。14c終末～15c。	B-14・15 SK02 （SA15東側トレンチ層序） 第2層
〃 〃 4			21.4 ― ―	器形：口縁部の縦断面が「フ」の字状となり、内外面に肥厚を造る為、口唇部は幅広（幅15.4㎜）となる。玉縁状の肥厚口縁となるナデ肩の壷。文様：外面の頸部に二条一組の界線を棒状の工具（幅1㎜前後）で施している。当該界線は、文様以外に縦位の把手を取り付けの為の滑り止めや把手の剥離防止も兼ねている。釉上から器面調整をみると外面の轆轤痕は丁寧にナデ消されているが、内面は轆轤痕を雑にナデ消すため轆轤痕が消えきっていない。口唇部の調整は丁寧で同心円状の細かい擦痕がみられる。素地：精選された磁器質に近い灰白色の細粒子で、細かい鉱物（黒色、灰色）も少量みられるが、1㎜程度の石英や長石も混入し目立っている。釉色：口唇部のみ露胎し、外面は黄褐色の釉を施す。内面は茶褐色の釉が雑に施されている。中国（福建・広東）の窯。14c終末～15c。	B-14・15 SK02 （SA15東側トレンチ層序） 覆土
〃 〃 5		把手	― ― ―	器形：上記の図3・4のタイプのナデ肩壷に貼付られる把手。文様：頸下部に丸篦状の工具（幅1.8㎜）で界線を二条施して把手を貼付ている。把手の外面には縦位の3本単位の沈線文が施されている。沈線は篦状の工具（幅2～3㎜）で器面から1㎜程度深めに施されている。釉上から器面調整をみると頸部は両面ともナデ仕上げであるが外面は雑である。把手の両側面は粗細なナデで仕上げる。内面は指圧痕と雑なナデがみられる。素地：光沢のある灰白色の細粒子で、粗細な鉱物（黒色、灰褐色）を少量含む。劈開面から粗い石英と黒色や白色鉱物が僅かにみられる。釉色：黄緑色の釉が外面にみられる。内面は茶褐色の化粧土がみられ、その上から茶褐色の釉が施されている。中国（福建・広東）の窯。14c終末～15c。	B-14・15 SK02 （SA15東側トレンチ層序） 覆土
〃 〃 6		胴部	― ― ―	器形：ナデ肩壷の胴部に凸文の「龍文」を型で起こして貼り付けた破片。文様：外面に浮文の龍を型で起こしている。龍の胴体の一部が残存する。内面はナデ調整を主体とするが部分的に指圧痕がみられる。素地：淡橙白色の細粒子で、微細な鉱物（黒色、灰色）が僅かにみられるが、大半は粗い1㎜程度の石英や黒色の鉱物が目立っている。釉色：外面にのみ黄茶色の釉が施され、内面は露胎する。微細な貫入がみられる。中国（福建・広東）の窯。14c～15c。	B-14・15 SK02 （SA15東側トレンチ層序） 覆土
〃 〃 7		頸部	― ― ―	器形：怒り肩の壷の胴部破片。文様：外面の頸部下部に丸篦状の工具（幅5㎜前後）で界線を施し、その直下に左寄りに傾いた把手を貼り付けている。把手の成形は雑なナデを主体とし、指圧痕が部分的にみられる。把手の紐通しの孔は歪な扁楕円形で左右の孔のサイズも異なっている。右側の孔のサイズは長軸17.2㎜、短軸12.5㎜、左側が長軸15㎜、短軸6㎜を測り右側の孔径が大きい事から紐は右から左に通したようである。内面の頸部は露胎し、雑なナデを主体とするが部分的に工具の削り痕がみられる。素地：濃茶紫色の細粒子で、粗細な石英を多く含み、希に細かい鉱物（黒色、茶色）がみられる。釉色：二次的な火熱を受けて釉が灰褐色を呈する。釉は両面に施釉されるが内面は雑で露胎する部分が頸部でみられる。中国（福建・広東）の窯。14c～15c。	B-14・15 SK02 （北側層序） 第1層d （瓦層）
〃 〃 8		胴部	― ― ―	器形：怒り肩の壷で把手を貼り付けた胴部破片。文様：外面の胴部上部に丸篦状の工具（幅4.5㎜）による界線が施され、その直下に左寄りに傾いた把手を貼付けている。把手の成形は丁寧で把手中央にナデによる稜線を形作る。把手の下端に指圧を加えて胴部に圧着させている。把手の紐通しの孔は一辺が尖りのある楕円形状を呈し、左右の孔のサイズも異なっている。右側の孔のサイズは長軸17㎜、短軸12.6㎜、左側が長軸13.8㎜、短軸8㎜を測り右側の孔径が大きい事から紐は右から左に通したようである。右側の孔内には指圧を兼ねた指ナデが顕著にみられる。素地：淡茶紫色の細粒子で、粗細な石英を多く含み、僅かに微細な鉱物（黒色、茶色）がみられる。釉色：二次的な火熱を受けて釉の大半が剥落する。暗褐色の釉は外面に施釉される。内面には釉垂れもみられる。中国（福建・広東）の窯。14c～15c。	B-14・15 SK02 （北側層序） 第1層d （瓦層）
〃 〃 9	鉢	底部	― ― 14.9	器形：鉢（洗）の底部片で内面にのみ茶褐色の釉が施釉されている。底面の立ち上がりの部分を微弱にくびれさせてから外側に開きながら直線的に胴部へ移行する。器面調整：外面は轆轤痕をナデ消すが消えきっていない。外底面には粗目の敷物に敷かれて製作されたものとみられ器面全体が水分を多く含んだ織物の折り目から切り離す際に折り目が崩れ歪な目痕として現れている。その他に稲藁の茎とみられる圧痕もみられる。素地：灰白色の細粒子で、微細な鉱物（黒色、茶褐色）を少量含む。粗細な石英が目立っている。釉色：内面にのみ茶褐色の釉が薄く施されている。中国（福建・広東）の窯。14c～15c。	B-14・15 SK02 （東側層序） 第1層d

注「―」：計測不可



第 49 図　土壙 SK02 出土品⑤　中国産褐釉陶器：1～9

VI期前半

第93表　土壙SK02　タイ産土器（半練）・タイ産炻器出土状況

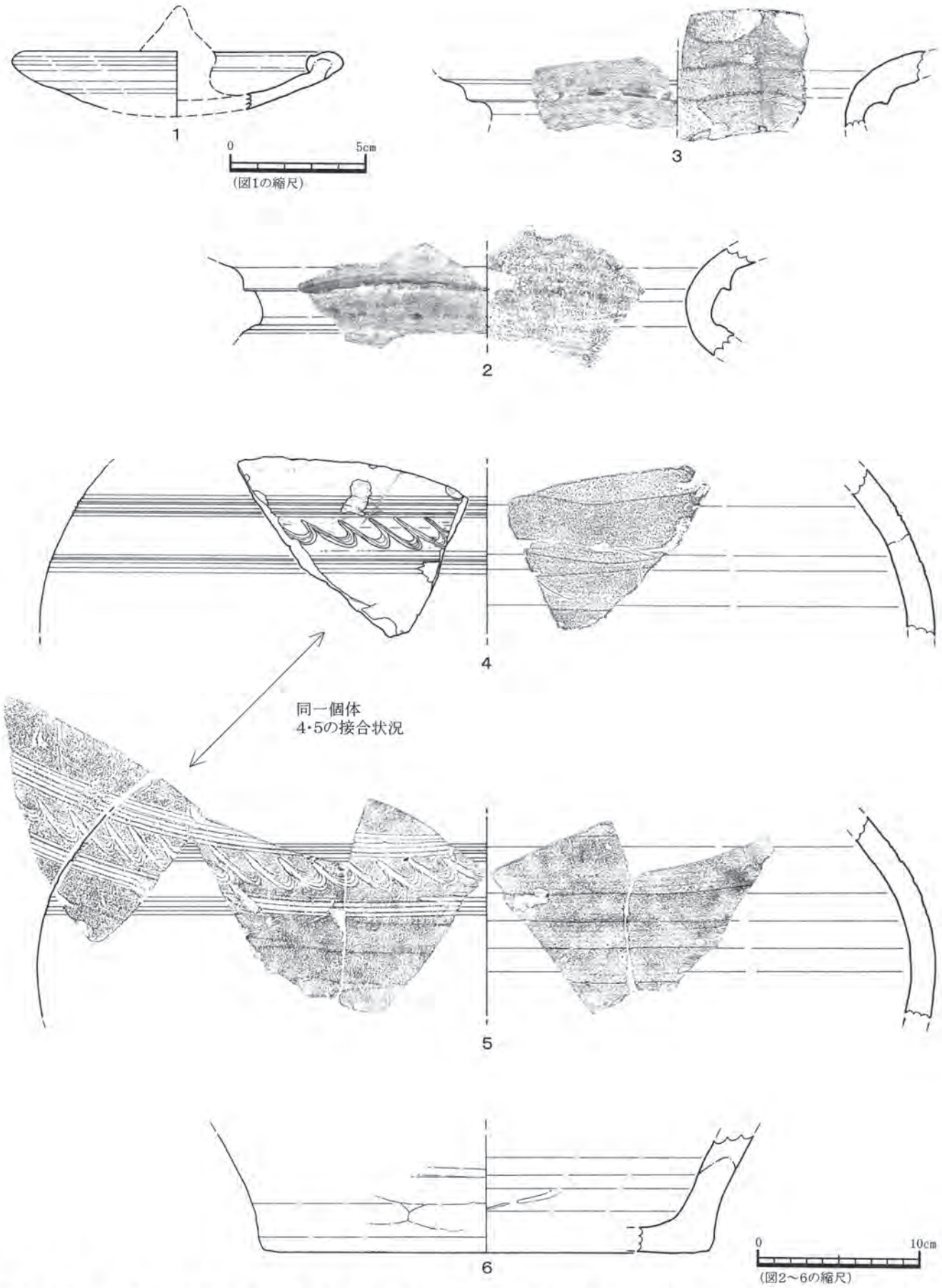
種類・器種・部位 ＼ 層序図面対応の出土層 ＼ グリット				B-14・15 SK02 北側層序 覆土	SA15東側トレンチ層序 覆土	SA15東側トレンチ層序 第3層a	SA15東側トレンチ層序 第4層a	SA15西側トレンチ層序 覆土	合計
タイ産土器（半練）	蓋	蓋端部	Ⅰ類		1	1		1	3
			Ⅱ類		1	1	1		3
	器種不明	撮み						1	1
合　計				0	2	2	1	2	7
タイ産炻器	壷	頸部		1	1				2
		胴部			2				2
		底部			1				1
合　計				1	4	0	0	0	5

第94表　土壙SK02　タイ産土器（半練）・タイ産炻器観察一覧

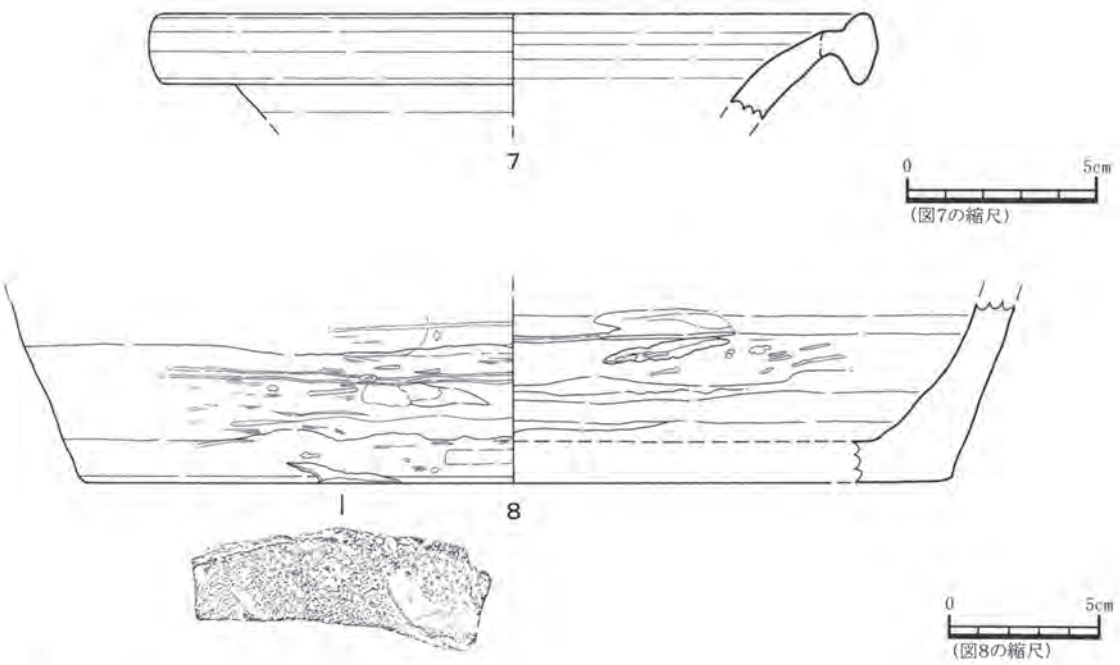
単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第50図 図版41 1	タイ産土器（半練）	蓋	端部	端部径 12.2 高さ (4.0)	器形：落とし蓋。蓋縁分類のⅡ類。内面の肥厚部は陶土を折り返して隅丸方形状の肥厚を造る。肥厚帯の上端部を微弱に突出させている。器面調整：外面は6mm幅の篦状の工具による雑なナデを施しているが、周縁近くは、外周縁に沿うようにナデが施されている。内面は丁寧な回転擦痕を主体とし、肥厚部上面は丁寧なナデが施されている。素地：灰褐色の粗粒子で、粗細な石英を主体に茶褐色や黒色の鉱物が少量含まれている。色調：両面とも淡橙白色を帯びる。焼成：良好で堅い。15c～16c。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 第4層a
〃 〃 2	タイ産炻器	壷	頸部	― ― ―	器形：外反する壷の頸部破片。頸部が最も窄まる部分での最大の推算直径は27.6cmを測った。文様：外面の頸部には縦断面が三角形状の突帯文で囲繞する。器面調整：外面は丁寧で鮮明な回転擦痕がみられる。内面は丁寧なナデと刷毛目及び雑なナデが併存する。素地：明るい灰白色の粗粒子で、粗細な石英を主体に細かい黒色や灰色の物質が僅かに含まれている。色調：両面とも灰白色を帯びる。焼成：良好で堅い。バンプーン村窯。15c～16c。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 3				― ― ―	器形：外反する壷の頸部破片。頸部が最も窄まる部分での最大の直径は推算で23cmを測った。文様：外面の頸上部には縦断面が三角形状の突帯文で囲繞し、頸下部には縦断面が低平な長方形状となる突帯がみられるが、成形が雑である。器面調整：外面は丁寧で鮮明な回転擦痕がみられる。内面も丁寧なナデを主体とするが、部分的に刷毛目がみられる。素地：暗い灰白色の粗粒子で、粗細な石英を主体に黒色や茶褐色の物質が僅かに含まれている。色調：両面とも灰白色を帯びる。焼成：良好で堅い。バンプーン村窯。15c～16c。	B-14・15 SK02 (北側層序) 覆土
〃 〃 4			胴部	― ― ―	器形：上記の2・3のタイプの壷の胴部破片とみられる。胴部での最大胴径は推算で55.4cmを測った。文様：外面には上位に5条一組、下位に4条一組の丸篦状の工具で沈線文を施して区画をつくり、区画内に沈線文の3条一組の刷毛状の工具で波状文を施す。器面調整：外面は横走する丁寧なナデを主体とし、部分的に指圧痕や雑なナデが縦位に入っている。内面も雑なナデで仕上げる。素地：灰白色の粗粒子で、粗細な石英を主体に細かい黒色の物質が少量含まれている。希に細かい雲母片がみられる。色調：外面は灰褐色で、内面が灰白色を帯びる。焼成：良好で堅い。バンプーン村窯。15c～16c。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 5			胴部	― ― ―	器形：壷の胴部破片で上記4と同一個体として接合ができた資料である。胴部での最大胴径は推算で55.6cmを測った。文様：外面には上位に5条一組、下位に4条一組の丸篦状の工具で沈線文を施して区画をつくり、区画内に3条一組の刷毛状の工具で波状文を施す。器面調整：外面は横走する丁寧なナデを主体とし、部分的に指圧痕や雑なナデがみられる。ナデ調整以前に篦削りが施されている。内面は丁寧なナデで仕上げているが、轆轤痕がみられる。素地：〃　。〃　。色調：〃　。焼成：堅緻。バンプーン村窯。15c～16c。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 6			底部	― ― 27.4	器形：前述した3～5のタイプの壷の底部片とみられる。器面調整：外面はナデと篦削り（右方向と左方向の削りが存在する）の両者がみられる。外面は歪な平坦面でアバタ状に微細な起伏がみられる。内面の胴部には篦ナデとナデが混在する。内底面は器面が剥離し、多量の混入物が露出する。素地：明るい灰白色の粗粒子で、粗い石英を主体に粗い黒色や茶褐色の鉱物が少量含まれている。色調：外面は灰褐色で、内面が灰白色を帯びる。焼成：良好で堅い。バンプーン村窯。15c～16c。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土

注「―」：計測不可、（ ）：推定



第 50 図　土壙 SK02 出土品⑥　タイ産土器（半練）：1、タイ産炻器：2～6



第 51 図　土壙 SK02 出土品⑦　タイ産褐釉陶器：7･8

第95表　土壙 SK02　タイ産褐釉陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）	出土地点 出土層
第51図 図版41 7	壷	口 縁 部	19.2 ー ー	器形：外反口縁の壷。口縁端部を上方と下方に突出させて肥厚部を造る。文様：なし。器面調整：外面は丁寧に施された回転擦痕がみられる。内面は破損後に付着した石灰分に覆われて不明である。素地：灰褐色の細粒子で、微細な黒色や茶褐色の鉱物が多く含まれ、希に粗い茶褐色の物質がみられる。。色調：灰褐色を基調とするが部分的に褐色となる。焼成：堅緻。シーサッチャナライ窯。15c～16c。	B-14･15 SK02 （北側層序） 第1層d （瓦層）
〃 〃 8		底 部	ー ー 29.0	器形：底面からの立ち上がりは直線的に軽く外側に外傾しながら胴部に移行する壷の底部破片。文様：なし。器面調整：外面は雑な篦削り（右から左に方向の削り）を主体とし、ナデは底面から立ち上がる部分にみられる。外底面は細かい起伏の有る面で白濁した灰、若しくは石灰分が付着した面となる。内面は雑なナデ（左から右方向に施す）が施された為、粗目の轆轤曳きの様な痕跡を留める。素地：淡灰白色の細粒子で、微細な石英や粗細な黒色や茶褐色の鉱物が多く含まれている。希に粗い茶褐色の物質がみられる。劈開面から縞状に走る白色や灰褐色の陶土がみられる。色調：外面は褐色を基調とするが部分的に茶紫色となる。内面が明茶色となる。焼成：堅緻。シーサッチャナライ窯。15c～16c。	B-14･15 SK02 （北側層序） 第1層d （瓦層）

注「ー」：計測不可

第96表　土壙SK02　タイ産褐釉陶器出土状況

グリット		B-14･15						合計
層序図面対応の出土層		SK02						
		北側層序		SA15東側トレンチ層序				
器種・部位		第1層d(瓦層)	第1層f	覆土	撹乱層	第1層b	第3層a	
壷	口縁部	1				2		3
	頸部			3				3
	肩部	6		1				7
	胴部	38	6	33	2	4	9	92
	底部	1						1
合　計		46	6	37	2	6	9	106

第97表　土壙SK02　ベトナム青花・産地不明白磁・本土産陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器出土状況

種類・器種・部位			グリット	B-14・15 SK02 東側層序 第1層d	第5層(撹乱)	西側層序 第3層b	北側層序 第1層b	第1層d(瓦層)	第1層f	SA15東側トレンチ層序 表土層①	覆土	第1層b	第3層a	合計
ベトナム青花	小壷	口縁部									1			1
合　計				0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
産地不明白磁	碗	口縁部							1					1
合　計				0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
本土産陶器	碗	底部	薩摩								1			1
	壷	胴部	―					2						2
	擂鉢	口縁部	備前焼								2			2
	器種不明	胴部	薩摩					1						1
		底部	―										1	1
合　計				0	0	0	0	3	0	0	3	0	1	7
沖縄産施釉陶器	碗	口縁部							1					1
	壷	胴部			1									1
	急須	底部							1					1
	火取	胴部						1						1
	器種不明	胴部									2			2
合　計				0	1	0	0	1	2	0	2	0	0	6
沖縄産無釉陶器	碗	口縁部		1										1
	壷	口縁部				1					1			2
		肩部							1					1
		胴部				2		3	2		2	1		10
	壷or甕	胴部					1		4		1			6
	鉢	胴部									1			1
	擂鉢	胴部									1			1
	器種不明	口縁部						1						1
		胴部					1			1	1		1	4
		底部						1	1		1			3
合　計				1	0	3	2	5	8	1	8	1	1	30

第98表①　土壙SK02　ベトナム青花・産地不明白磁・本土産陶器・沖縄産施釉陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第52図 図版42 1	ベトナム青花	小壷	口縁部	4.2 ― ―	器形：小振りの壷で、口唇部の釉は掻き取られて露胎とする。文様：外面の肩部に二条一組の界線と胴上部に一条の界線を黒色の呉須で描き、その直下に簡素化した雷文を藍色の呉須で描いている。内面口縁は回転篦削りで丁寧に仕上げる。頸下部は無釉で轆轤痕と回転擦痕が顕著である。口唇部は回転篦削りで歪な同心円状の削り痕がみられる。素地：光沢のある白色の微粒子。釉色：淡灰白色の釉を外面に施す。内面に釉垂れがみられる。貫入：なし。ベトナム産。15c。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 2	産地不明白磁	碗	口縁部	― ― ―	器形：直口口縁碗。口唇部は丸味を持たせて成形する。外面の成形は雑な轆轤成形。文様：内面の「草花文」は型で起こす。文様の部分のみ白濁している。素地：淡灰白色の細粒子で、細かい黒色の鉱物が多く含まれている。釉色：淡灰白色の透明釉を両面に施す。貫入：なし。中国(福建・広東)の窯か？。15c～16c。	B-14・15 SK02 (北側層序) 第1層f
〃 〃 3	本土産陶器	擂鉢	口縁部	― ― ―	器形：直線的に外傾する備前焼の擂鉢。口縁部は盤口状の肥厚帯に注ぎ口を設けている。内面に摺り目が4条のみ確認できる。両面には回転擦痕がみられる。注ぎ口や周辺にはナデや指圧痕がみられる。素地：淡灰白色の細粒子で、粗細な黒色鉱物と石英を多く含む。粗いチャート片？(淡い肌色でサイズは縦14㎜、横5.5㎜)が混入している。器色：外面は赤茶色で、内面が薄い茶色を呈する。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 4				― ― ―	器形：直線的に外傾する備前焼の擂鉢。口縁部の肥厚は歪な三角形状を呈する。外面に重ね焼きの際の磁器質の目痕が帯状にみられる。器面調整：外面は両面には回転擦痕がみられる。外面は雑な調整で仕上げている。素地：橙灰白色の細粒子で、粗細な黒色鉱物と石英を多く含む。粗い石英や茶褐色の物質がみられる。器色：外面は茶紫色で、内面が茶色を呈する。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 5	沖縄産施釉陶器	火取	胴部	― ― (5.8)	器形：円筒形の火取。内面は露胎し、雑な回転擦痕で仕上げる。復元による高台径は5.8㎝を求めた。文様：外面胴部の下端近くに丸彫りの界線(上位の界線の幅2㎜、下位界線の幅2.5㎜)を二条施している。素地：淡灰白色の細粒子で、微細な石英と黒色鉱物を多く含んでいる。釉色：外面にのみ茶褐色の釉を施す。貫入：微細な貫入がみられる。	B-14・15 SK02 (北側層序) 第1層d (瓦層)

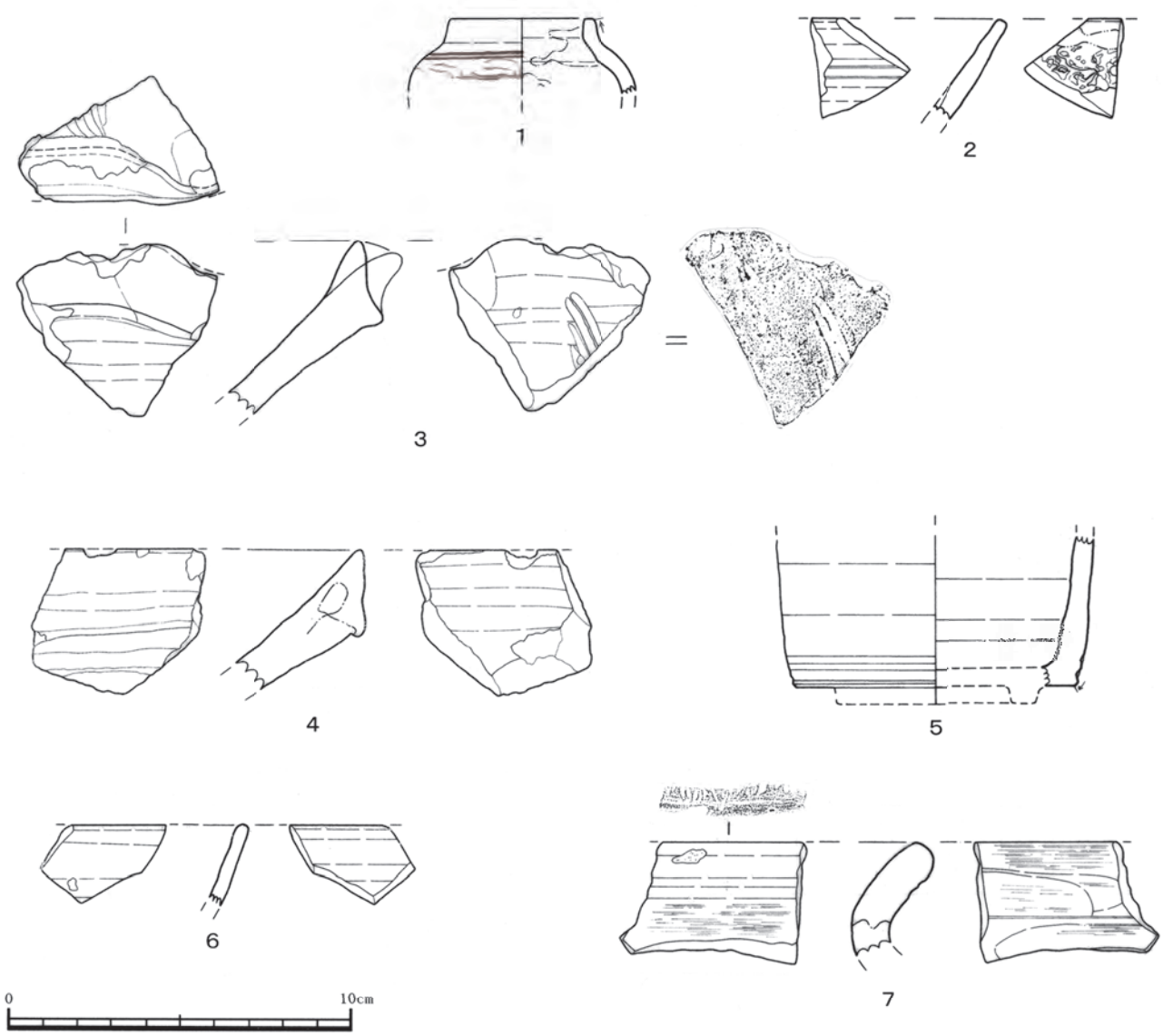
注「―」：計測不可、( )：推定

第98表② 土壙SK02 沖縄産無釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第52図 図版42 6	碗	口 縁 部	ー ー ー	器形:無釉の直口口縁碗。両面とも回転擦痕が顕著にみられる。外面に僅かに目痕とみられる陶土が付着することから重ね焼きの目痕の可能性が窺える。素地:灰褐色の細粒子で、細かい石英が僅かにみられる。劈開面から白色の陶土が縞状に入っている。色調:外面は淡橙色で、内面が淡赤茶色を帯びる。	B-14・15 SK02 (東側層序) 第1層d
〃 〃 7	壷	口 縁 部	ー ー ー	器形:初期沖縄産無釉陶器の壷の口縁破片であるが、口縁形態は瓦質土器の壷形土器の影響を強く残している。器面調整:外面は轆轤痕を回転擦痕でナデ消すが轆轤痕は消えきっていない。内面は左斜め上がりの回転擦痕をナデ消すが消えきっていない。口唇部の内端に丸い棒(幅1mm程度)状の工具で粗密のある刻目を入れている。素地:淡橙白色と灰色の陶土が縞状に入った細粒子で、微細な石英を多く含み、希に細かい鉱物(石英、茶褐色)と粗い石英がみられる。色調:両面とも灰白色を帯びるが口唇部と外面口縁部の一部が暗褐色を呈している。焼成:堅緻。	B-14・15 SK02 (SA15東側 トレンチ層序) 覆土

注 「ー」:計測不可



第 52 図 土壙 SK02 出土品⑧ ベトナム青花:1、産地不明白磁:2、本土産陶器:3・4
沖縄産施釉陶器:5、沖縄産無釉陶器:6・7

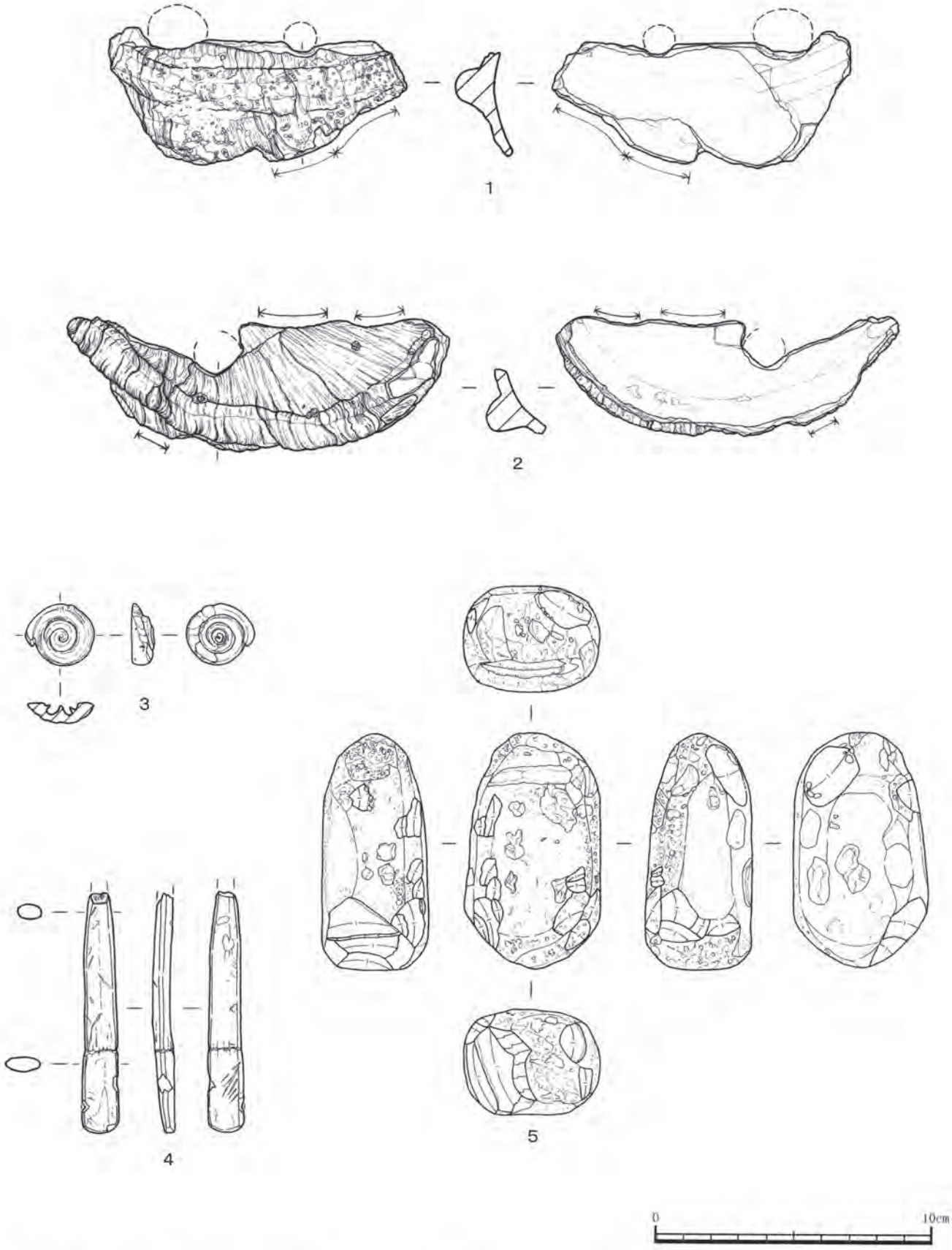
第99表　土壙SK02　貝製品・骨製品・石器・石製品出土状況

種類 ＼ グリット / 層序図面対応の出土層			B-14・15 SK02 北側層序 第1層d(瓦層)	第1層f	SA15東側トレンチ層序 第3層a	覆土	第4層a	合計
貝製品	ヤコウガイ製有孔製品				1		1	2
	イモガイ科製装飾品		1					1
合　計			1	0	1	0	1	3
骨製品	ハブラシ			1				1
合　計			0	1	0	0	0	1
石器・石製品	砥石片	細粒砂岩(ニーピ)				1		1
	叩き石兼砥石	細粒砂岩(ニーピ)				1		1
	石器片	細粒砂岩(ニーピ)			1			1
	石弾片	細粒砂岩(ニーピ)				1		1
合　計			0	0	1	3	0	4

第100表　土壙SK02　貝製品・骨製品・石製品観察一覧

単位：cm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称		残存長(縦) 残存幅(横)	残存厚 重量	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第53図 図版43 1	貝製品	ヤコウガイ製有孔製品	5.0 10.85	最大1.5 64.3	サザエ科ヤコウガイの螺塔部の殻を粗割りした製品で、上位の縁辺部には孔が2孔(左側の推定復元孔径：長径2.0cm、短径1.9cm、右側の推定復元孔径：長径1.13cm、短径1.0cm)外側から穿つ。縁辺部には研磨を加えた箇所が散見される。下位の縁辺部は研磨や磨面が観察できる。螺鈿細工の為に真珠層を獲得後に廃棄された可能性が考えられるところである。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 第4層a
〃 〃 2			4.8 13.8	最大1.85 85.6	サザエ科ヤコウガイの螺塔部の殻を粗割りした製品で、上位の縁辺部には孔が一孔(推定復元孔径：長径1.89cm、短径1.88cm)外側から穿たれていて、その他に上側面には研磨による磨面が2箇所確認できる。下位の縁辺部にも研磨や磨面(正面左側寄り)が観察できる。螺鈿細工の為に真珠層を獲得後に廃棄された可能性が考えられるところである。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 第3層a
〃 〃 3		イモガイ科製装飾品	2.2 2.4	0.8 4.4	イモガイ科の巻貝の螺塔部から殻頂を装飾品として利用した製品。表面(殻内部)の研磨は殻頂と螺塔の一部で観察できる。裏面(殻外部)は研磨による平坦面で研磨は殻頂を磨り潰して殻軸まで達している。遊具、若しくは家具などの製品に嵌め込んで使用されたとみられるが判然としないところである。	B-14・15 SK02 (北側層序) 第1層d (瓦層)
〃 〃 4	骨製品	ハブラシ	8.7 1.3	6.0 7.0	台部(植毛部)と首部(くびれ)の大半が失われたブラシの柄部(柄把部)で牛骨(肋骨？)製とみられる。柄尻(柄の先端)の両角は丸味を付けて成形する。表裏面は丁寧な削り成形後に研磨を施した磨面となるが部分的に削り成形痕がみられる。表裏面の縁辺部と両側面は削りによる面取後に研磨を施すが徹底しない。部分的に削りによる条痕がみられる。表面左側縁辺部は首部(くびれ)に向かって柄部方向から細かい削りが入り、細長い面取りが成されている。なお、裏面の柄尻近くに右斜め上がりの線状痕は使用による傷である。	B-14・15 SK02 (北側層序) 第1層f
〃 〃 5	石製品	叩き石兼砥石	8.5 4.9	3.8 224.8	平面観が長軸の長い歪な隅丸方形状(洗顔石鹸様)を呈する叩き石兼砥石である。横断面も隅丸方形状となる。敲打痕は主に表面に集中し、砥面は両側面と裏面に形成されている。砥面は特に裏面に広がることから当該面の使用頻度が高かったようである。表面の上面と下面にも敲打痕がみられるが、特に下面の使用頻度が高く左隅が剥離している。細粒砂岩製。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土



第 53 図　土壙 SK02 出土品⑨　貝製品：1～3、骨製品：4、石製品：5

第101表　土壙SK02　円盤状製品・金属製品・ガラス玉出土状況

種類・分類 ＼ グリット						B-14・15										合計
						SK02										
層序図面対応の出土層						西側層序	北側層序			SA15東側トレンチ層序						
						第3層b	第1層b	第1層d（瓦層）	第1層f	覆土	撹乱層	第1層b	第2層	第3層a	第4層a	
円盤状製品	陶質土器														1	1
	屋瓦（明朝系）												1			1
	青磁								1			1				2
	中国産褐釉陶器									3				1		4
合　計						0	0	0	1	3	0	1	1	1	1	8
金属製品	工具類・生産用具	丸釘	完形	中	鉄									1		1
			先端部欠損											1		1
			頭部欠損											1		1
		角釘	完形	中	鉄					5		2				7
			先端部欠損			2		1		9		1				13
			頭部欠損							14						14
			先端+頭部欠損	中	鉄			1	2	10	1			2		16
				小	鉄				2							2
	生活用具	鍋？		口縁部	鉄									1		1
				不明								1				1
	武具	茱萸金具		―	青銅				1							1
	武器	切羽		―	青銅	1				1						2
		砲弾片		―	鉄									16		16
		薬莢		―	青銅									1		1
	その他	装飾品（金箔あり）		―	青銅									1		1
	分類不明	用途不明		―	鉄			1	1			1		4		7
					青銅		1			4				1		6
合　計						3	1	3	6	43	1	5	0	29	0	91
ガラス玉	Ⅲ類				藍色								1			1
	Ⅳ類				淡青色		1									1
合　計						0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2

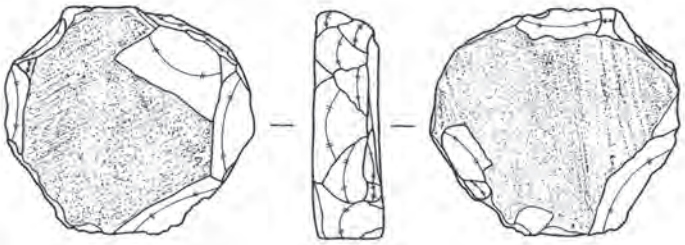
注　釘のサイズは、中：1寸半～5寸まで(3.75㎝～15.75㎝未満)、小：1寸まで(3.75㎝未満)

第102表　土壙SK02　二次的火熱溶解銭貨

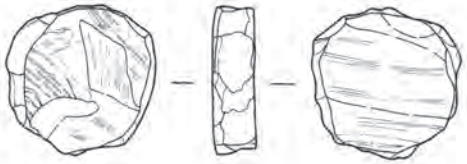
銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
咸平元寳（北宋998年初鋳）	1片	0.90	「咸」の一字が残存	B-14・15　SK02（SA15東側トレンチ層序）　第1層b
景德元寳（北宋1004年初鋳）	1片	1.00	「德」の一字が残存	B-14・15　SK02（SA15東側トレンチ層序）　覆土
祥符元寳（北宋1009年初鋳） or 祥符通寳（北宋1009年初鋳）	1片	0.69	「符」の一字が残存	B-14・15　SK02（SA15東側トレンチ層序）　覆土
天禧通寳（北宋1017年初鋳）	1片	1.42	「天」・「寳」の二字が残存	B-14・15　SK02（SA15東側トレンチ層序）　覆土
皇宋通寳（北宋1038年初鋳）	1片	1.56	「宋」の一字が残存	B-14・15　SK02（SA15東側トレンチ層序）　覆土
熙寧元寳（北宋1068年初鋳）	1片	1.06	「熙」の一字が残存	B-14・15　SK02（SA15東側トレンチ層序）　覆土
元豊通寳（北宋1078年）	1枚	3.48	完形	B-14・15　SK02（SA15東側トレンチ層序）　覆土
永樂通寳（明1408年初鋳）	1片	1.06	「樂」の一字が残存	B-14・15　SK02（SA15東側トレンチ層序）　第1層b
無文銭（初鋳年不明）	1片	1.24	―	B-14・15　SK02（SA15東側トレンチ層序）　第1層b
不明銭貨	1片	1.29	「元」・「寳」の二字が残存	B-14・15　SK02（SA15東側トレンチ層序）　覆土
	1片	0.71	「元」の一字が残存	
	1片	0.87	「元」の一字が残存	
	1片	1.48	「寳」の一字が残存	
	1片	0.52	「寳」の一字が残存	
	1片	0.26	判読不可	
	1片	0.74	「寳」の一字が残存	B-14・15　SK02（SA15東側トレンチ層序）　覆土
	1片	0.88	「寳」の一字が残存	B-14・15　SK02（SA15東側トレンチ層序）　覆土
合　計	17			

第103表　土壙SK02　円盤状製品・金属製品・銭貨・ガラス玉観察一覧

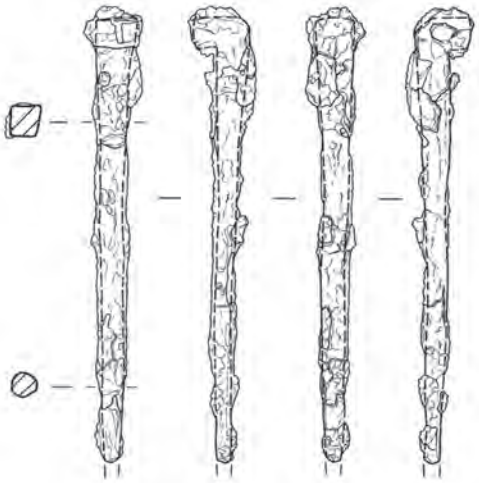
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類・名称			材質・素材	観察事項	出土地点 出土層
第54図 図版44 1	円盤状製品	―	―	屋瓦	明朝系灰色瓦の平瓦の破片を利用した遊具。凸面は粗い刷毛目様の調整痕をナデ消すが徹底しない。凹面は糸切り痕がみられる程度である。加工は両面から打撃を加えて打割する。剥離面から打撃回数を数えると凸面が7回、凹面からの打撃は8回を数える。研磨や摩滅が僅かに確認できることから使用頻度はかなり低い資料とみられる。素地:灰白色の細粒子で、粗細な石英を多く含み、僅かに細かいサンゴ化石や石灰質の砂粒を含んでいる。色調:凸面は灰褐色で、凹面が灰白色を帯びる。残存長:6.0㎝、残存幅:6.5㎝、残存厚:7.0㎝、重量:73.4g。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 第2層
〃 〃 2		―	―	陶質土器	近世・近代の陶質土器の破片を円盤状に加工した遊具。研磨や摩滅などにより打割回数は確認はし難いが、表面は2・3回で、裏面が4・5回程度実施されたようである。外周側面にも研磨や摩滅が部分的にみられる。素地:淡灰白色と橙白色の細粒子で、細かい石英や黒色鉱物を多く含む。外面は橙白色で、内面が灰白色を帯びる。残存長:1.98㎝、残存幅:1.97㎝、残存厚:0.55㎝、重量:2.8g。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 第4層a
〃 〃 3	金属製品	工具類・生産用具	釘	鉄製品	ほぼ完形の皆折釘であるが錆の進行が著しく身の大半が痩せ細っている。頭部の側面観は逆「L」字状で頭部は板材などに打ち込む際の打撃で下方に下がったようである。身の先端部は使用によって潰れている。全体的に錆による剥離や錆瘤、亀裂が観察できる。残存長:120.0㎜、残存幅:9.28㎜、残存最大厚:8.55㎜、残存最小厚:3.38㎜、頭部:縦13.40㎜、横13.40㎜。重量:31.63g。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 4					頭部が欠落した小振りの皆折釘で身部が僅かに屈曲する。頭部と身部の屈曲からすると板材などから釘を抜き取る際に頭部の破損や身部の変形が生じたものとみられる。身の先端部は扁刃の斧刃状で若干、剥離する。全体的に錆による剥離や錆瘤、亀裂が観察できる。残存長:83.0㎜、残存幅:5.68㎜、残存最大厚:5.70㎜、残存最小厚:1.88㎜、頭部:縦6.90㎜、横10.90㎜、重量:10.65g。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 5		武具	茱萸金具	青銅製品	二次的な火熱を受けた鎧の茱萸金具で、縦位方向に割れている事から接続面から破損したものとみられる。側面観は縦に長い酒樽状で上下の端部近くが微弱な三角形状の肥厚帯を造るため、上下端部の外周面は微弱な平坦面(幅1㎜程度)となる。器面には火熱を受けて溶解した痕跡以外に緑青の錆汁で付着した鉄片が付着する。緑青による剥離や浸食も観察できる。残存長:19.0㎜、残存幅:11.5㎜、残存最大厚:1.30㎜、残存最小厚:1.05㎜、重量:3.2g。	B-14・15 SK02 (北側層序) 第1層f
〃 〃 6		武器	切羽	青銅製品	刀の鍔に直接密着させた大切羽の破片。平面形態は木瓜形のタイプで、刀剣の茎が入る茎径は推定で長軸が2.4㎝、長軸上部の幅3㎜、短軸は2㎜を測るようである。文様は表面の抉れた箇所にハート形に透かして中空とする。裏面の縁沿いは微弱な肥厚がみられる。緑青以外に表面には石灰分の付着がみられる。裏面は鋳型の表面となった面で微弱に起伏のみられるアバタ状の面が全体的にみられる。残存長:39.8㎜、残存幅:33.8㎜、残存最大厚:1.55㎜、残存最小厚:1.16㎜、重量6.3g。	B-14・15 SK02 (西側層序) 第3層b
〃 〃 7	銭貨	天禧通寶		銅銭	天禧通寶の「天」と「寶」の二字のみが残存する。「寶」の字款は摩滅が著しく潰れている。背は孔郭のない無輪郭である。孔郭の内側には鋳造時に鋳型からはみ出したバリがみられる。面・背とも緑青の影響を受けて部分的に赤銅色の地金がみられる。鋳造種類:公鋳銭。初鋳年:北宋1017年。読み方:回読。状態:破損。書体:楷書。肉郭外径:ー、肉郭内径:ー、方穿:ー、断面計測部位:①1.25㎜、②0.52㎜、③1.05㎜。重量:1.42g。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 8		元豊通寶		銅銭	元豊通寶の完形品であるが、背の肉郭と孔郭が薄く鋳造されている。面・背ともに緑青の影響を受けているが、背よりも面の方が著しい。面の肉郭の一部は緑青によってケロイド状となる。鋳造種類:公鋳銭。初鋳年:北宋1078年。読み方:回読。状態:破損。書体:行書。肉郭外径:A24.57㎜、B24.77㎜。肉郭内径:C19.16㎜、D19.91㎜。方穿:E7.13㎜、F7.12㎜。断面計測部位:①1.17㎜、②0.80㎜、③1.00㎜。重量:3.48g。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 覆土
〃 〃 9	ガラス玉	―		ガラス	形状分類:Ⅲ類。色調:藍色。製作技法:巻き付け。器面が全体的に銀色を帯び、部分的に藍色を呈している。器面全体で微細なアバタ状の気泡痕がみられる。下面は微弱な平坦面となるが部分的(二箇所)に浅く窪んでいる。上面の孔周辺は丁寧に切り離しと縁辺部の調整がなされた為、段差は微弱である。巻き付けの痕跡が顕著である。長軸:6.15㎜、短軸:6.04㎜、厚さ:5.45㎜。孔径:最大1.83㎜、最小1.71㎜。重量:0.37g。	B-14・15 SK02 (SA15東側トレンチ層序) 第2層



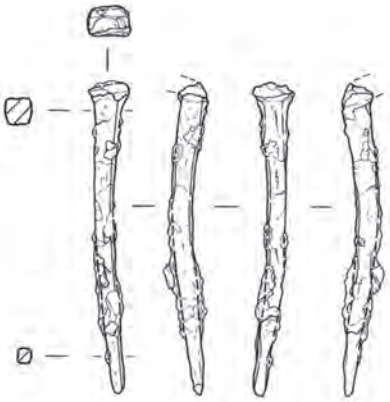
1



2

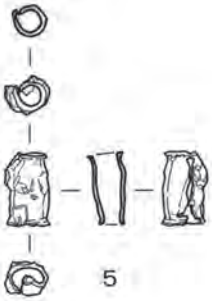


3

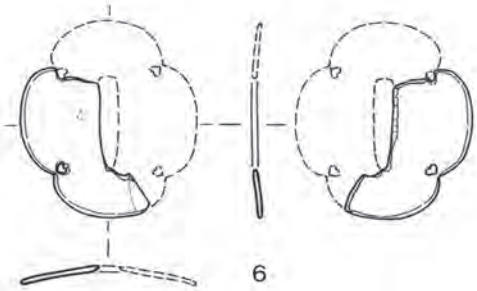


4

0 10cm
(図1・3～6の縮尺)

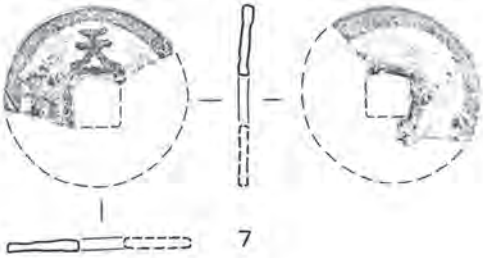


5



6

9



7

8

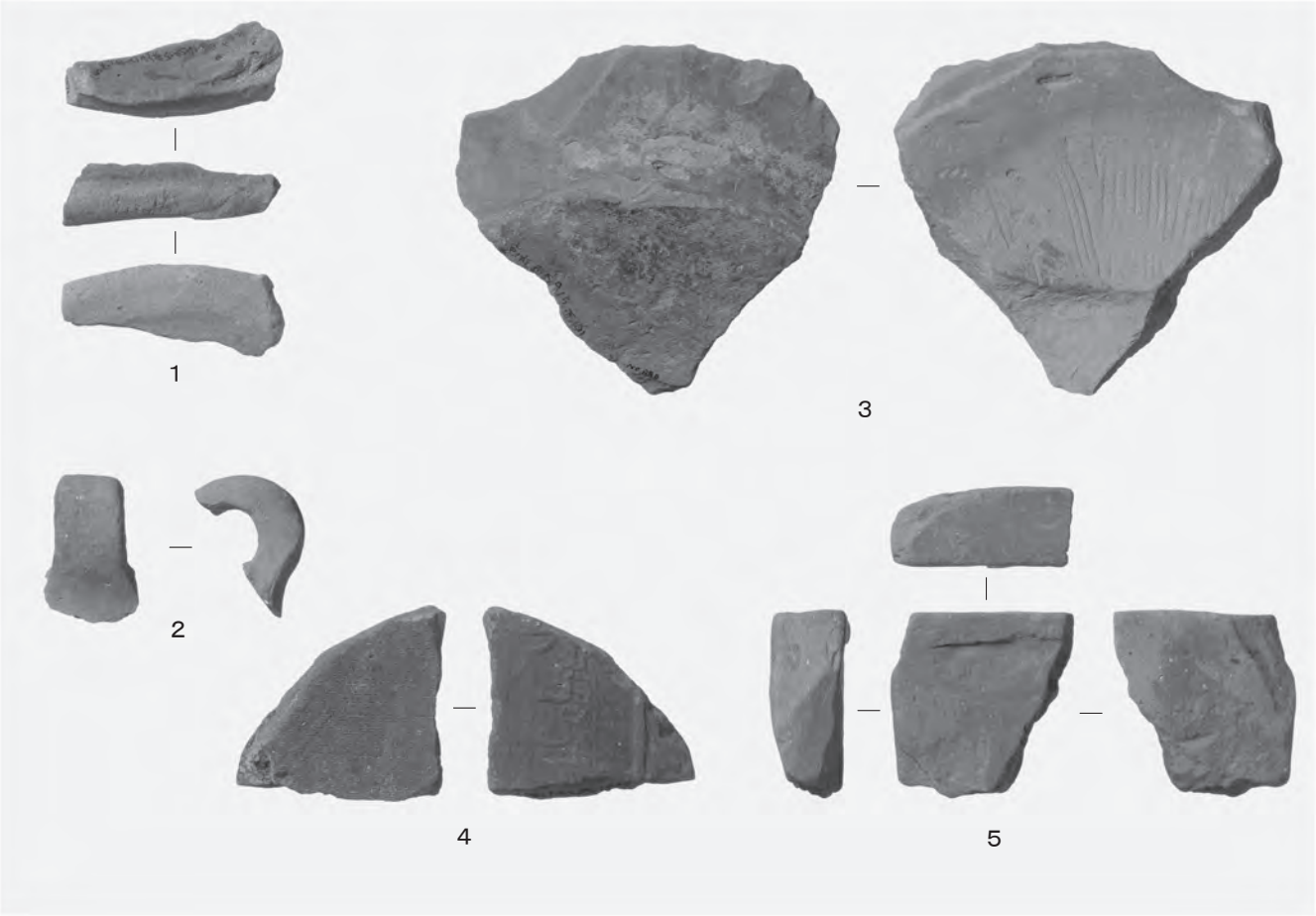
0 3cm
(図2・7～9の縮尺)

第 54 図　土壙 SK02 出土品⑩　円盤状製品：1･2、金属製品：3～6、銭貨：7･8、ガラス玉：9

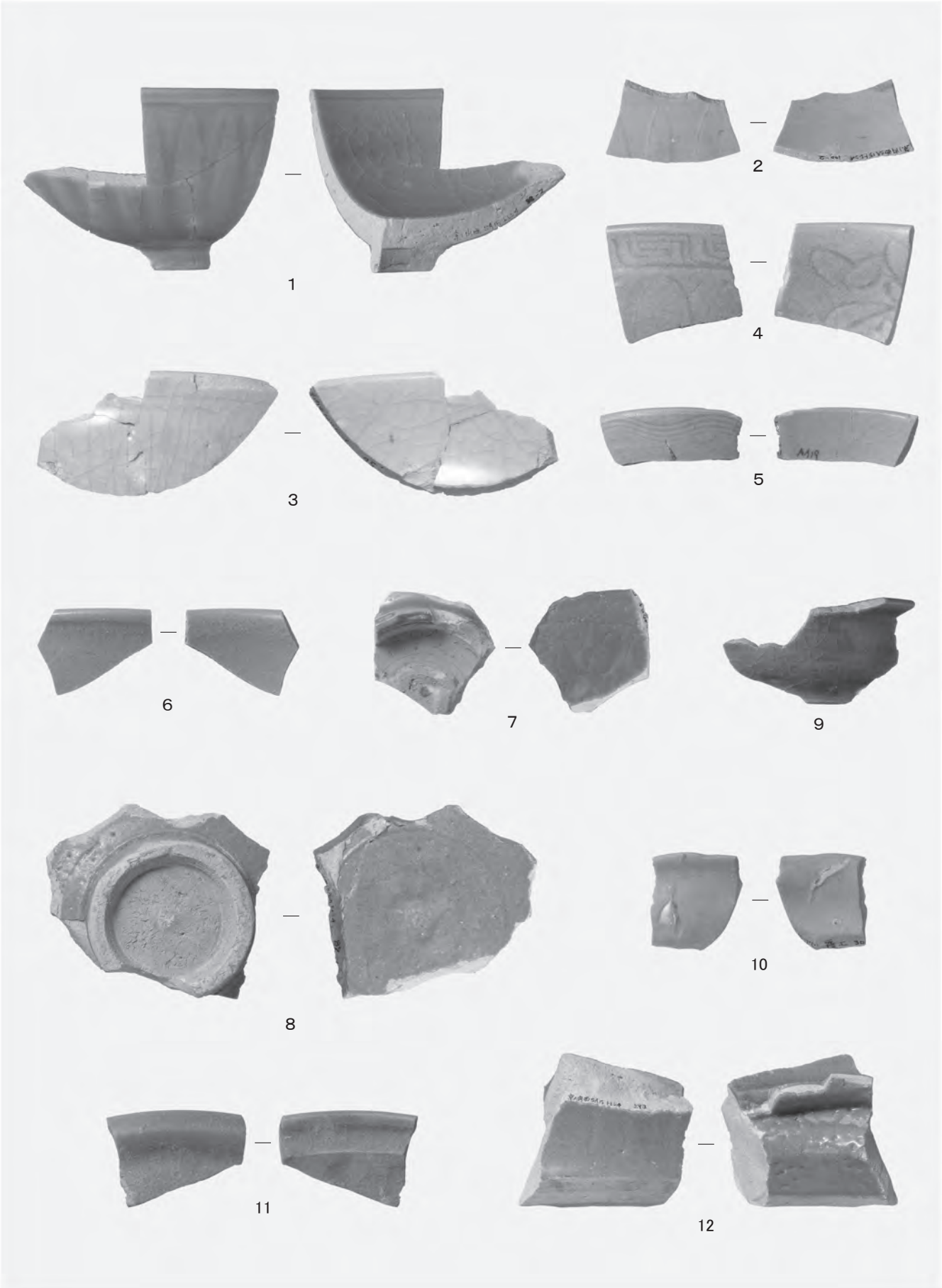
VI期前半

第104表　土壙SK02　出土遺物状況（図版外）

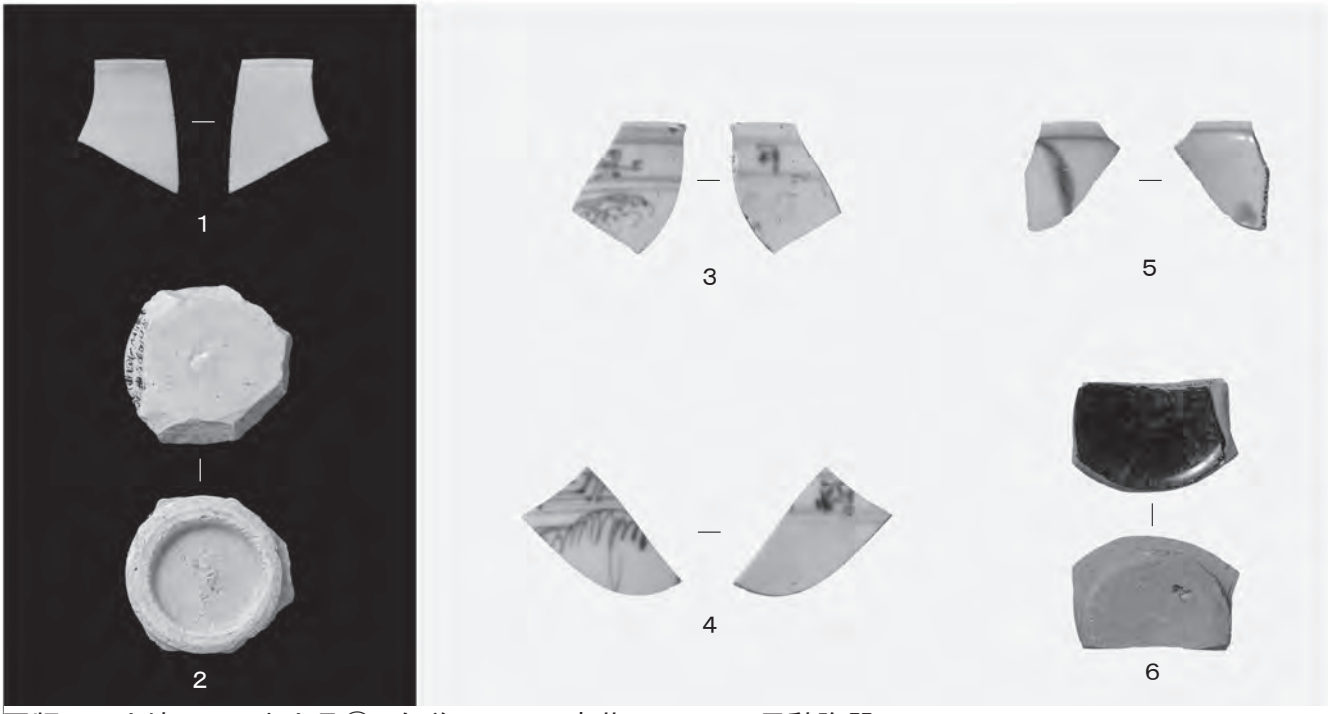
種類・器種・部位 ＼ 層序図面対応の出土層 ＼ グリット				B-14・15										合計
				SK02										
				北側層序				SA15東側トレンチ層序				SA15西側トレンチ層序		
				覆土	第1層b	第1層d（瓦層）	第1層f	覆土	撹乱層	第1層b	第3層a	覆土	第1層	
土器	器種不明	胴部			6	2		1						9
		底部		1										1
合　計				1	6	2	0	1	0	0	0	0	0	10
彩釉陶器	瓶	胴部								1				1
合　計				0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
タイ産陶器	壷	胴部						3			1			4
合　計				0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	4
本土産磁器	近現	皿	胴部									1		1
		杯	胴部					1						1
		器種不明	胴部					1						1
合　計				0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	3
石材	細粒砂岩（ニービ）					7	5	8	2				7	29
	チャート							1						1
	石灰岩							1						1
自然石	河原石					3								3
合　計				0	0	10	5	10	2	0	0	0	7	34
鍛冶関連	湯玉	鉄						1						1
合　計				0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
ガラス製品	瓶	―				1								1
		破片									1			1
	板ガラス	破片					1	1			1			3
合　計				0	0	1	1	1	0	0	2	0	0	5



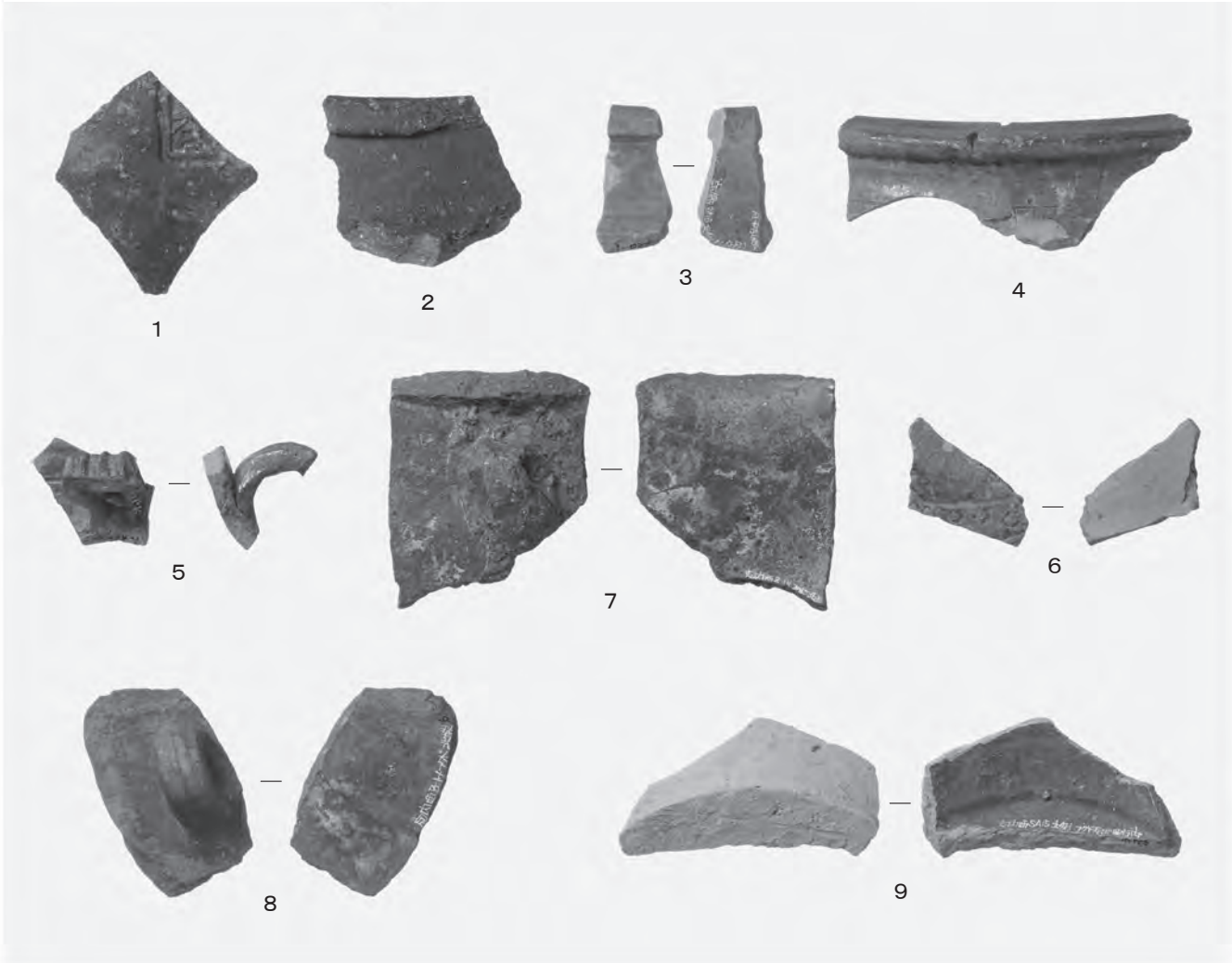
図版 37　土壙 SK02 出土品①　陶質土器：1、瓦質土器：2･3、屋瓦：4、塼瓦？：5



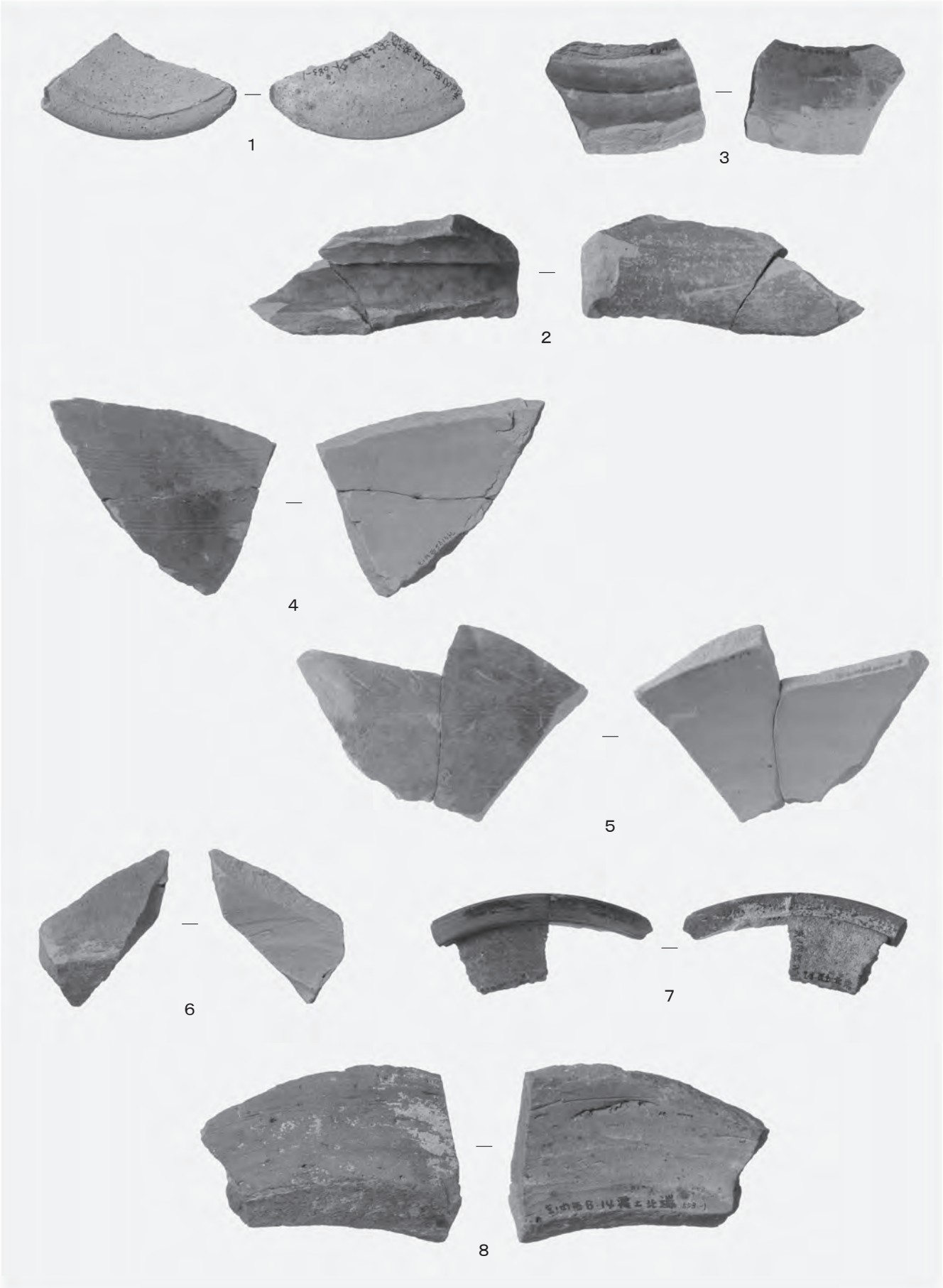
図版 38　土壙 SK02 出土品②③　青磁：1～ 12



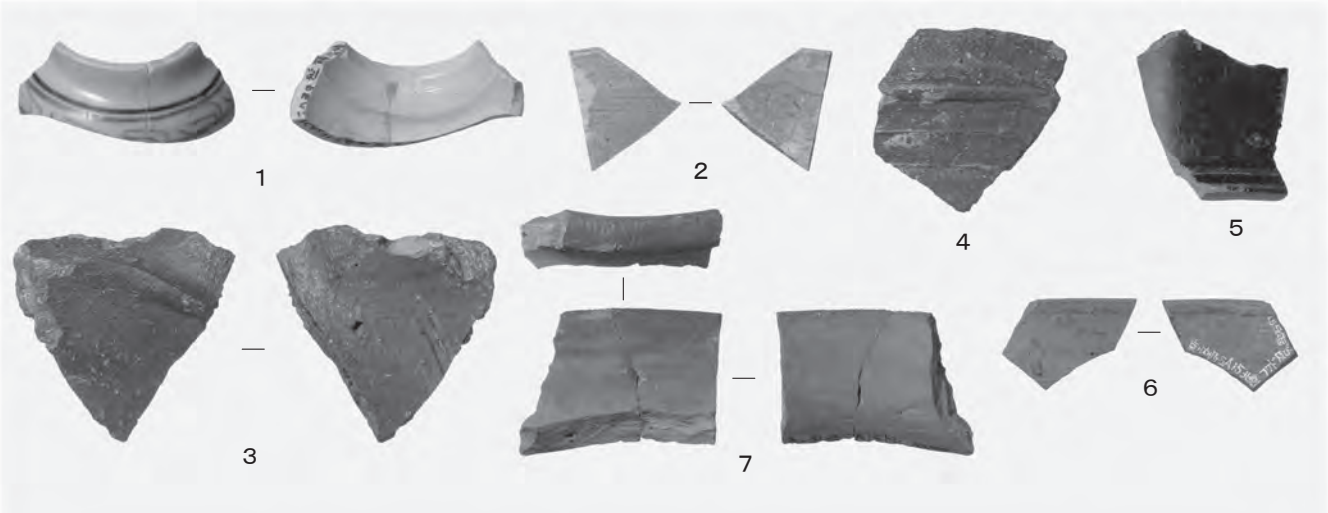
図版 39　土壙 SK02 出土品④　白磁：1･2、青花：3～5、黒釉陶器：6



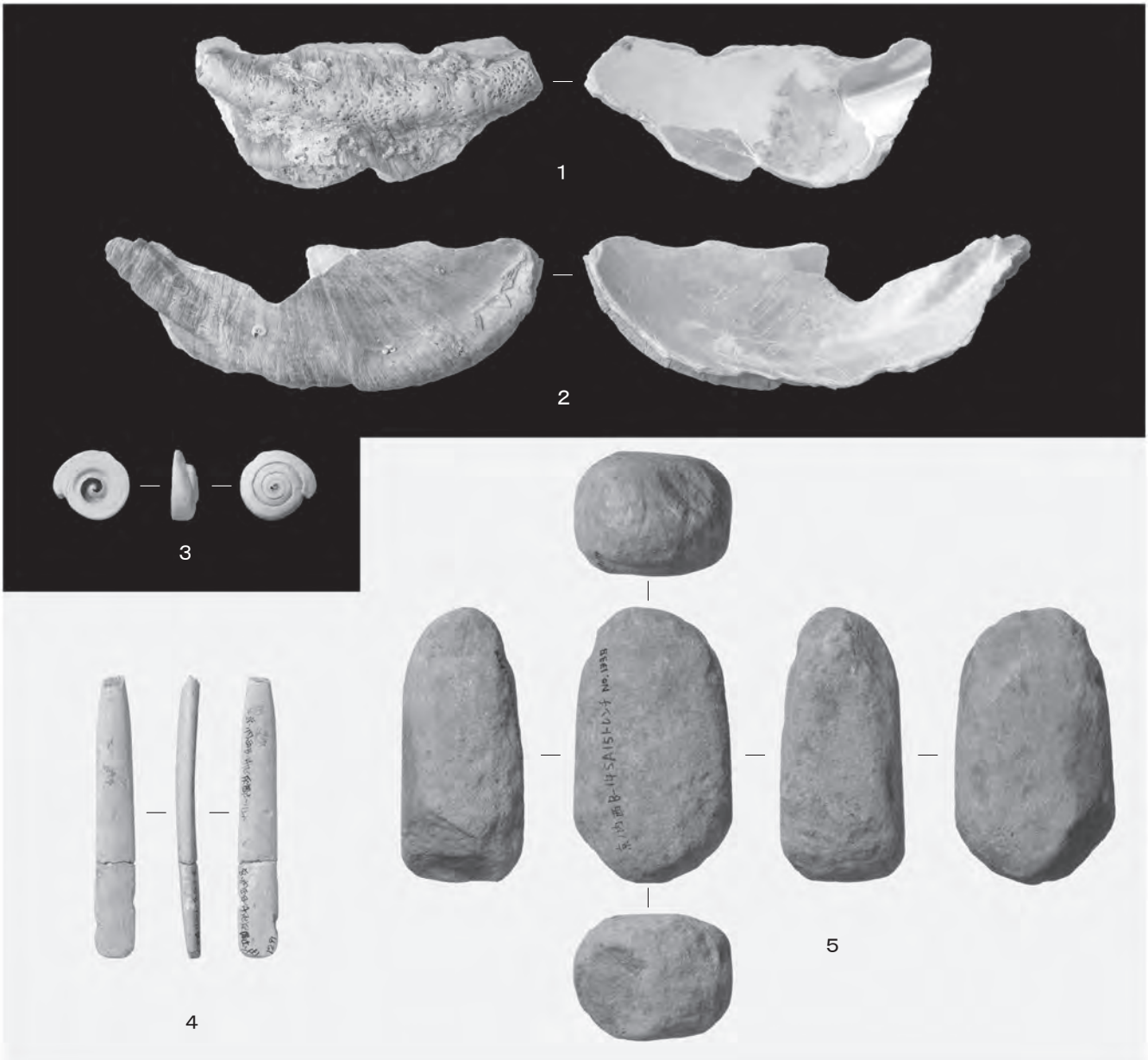
図版 40　土壙 SK02 出土品⑤　中国産褐釉陶器：1～9



図版 41　土壙 SK02 出土品⑥⑦　タイ産土器（半練）：1、タイ産炻器：2～6、タイ産褐釉陶器：7･8

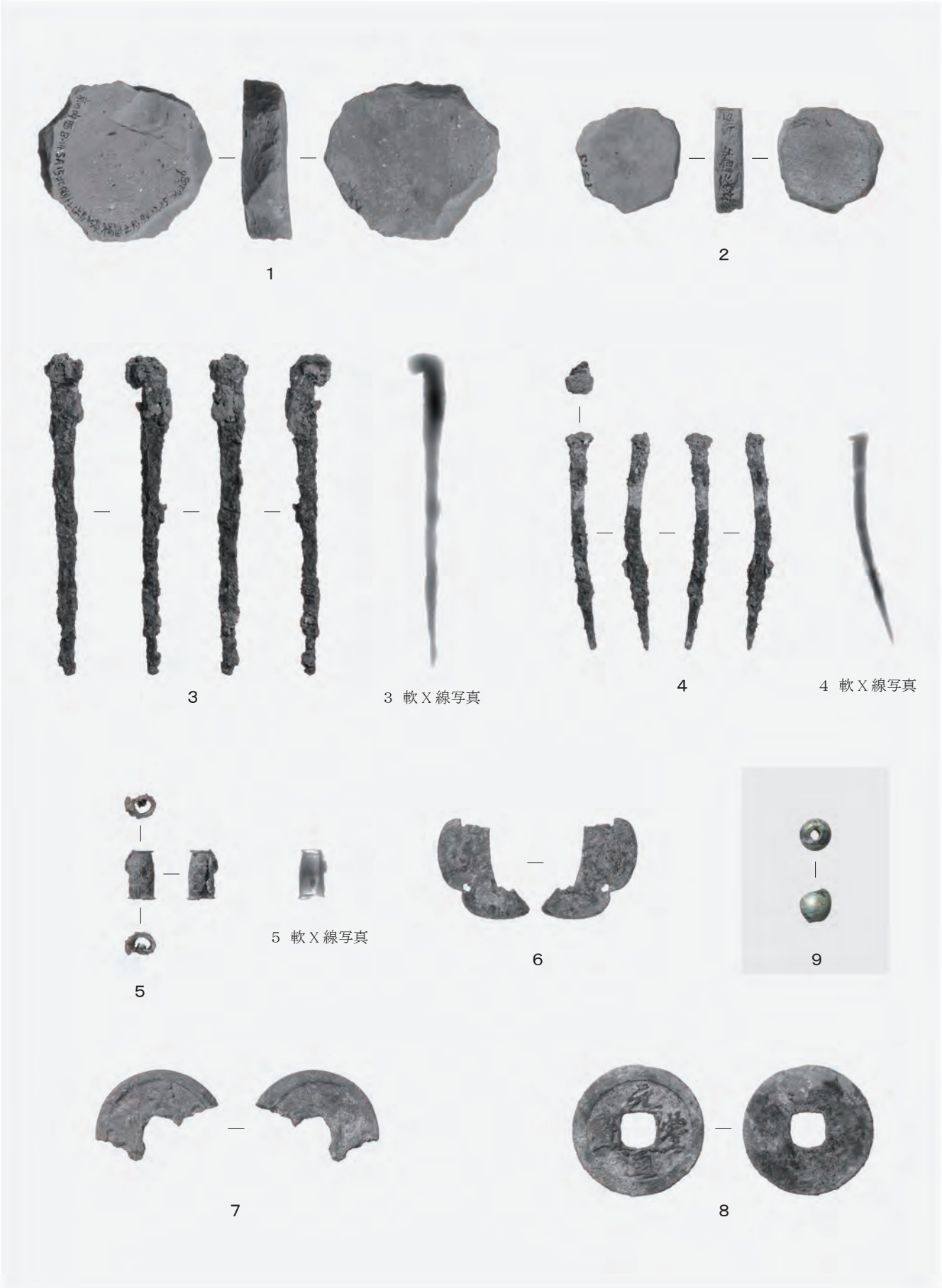


図版 42　土壙 SK02 出土品⑧　ベトナム青花：1、産地不明白磁：2、本土産陶器：3･4
沖縄産施釉陶器：5、沖縄産無釉陶器：6･7



図版 43　土壙 SK02 出土品⑨　貝製品：1～3、骨製品：4、石製品：5

VI 期前半



図版 44 土壙 SK02 出土品⑩ 円盤状製品：1･2、金属製品：3～6、銭貨：7･8、ガラス玉：9

報　告　書　抄　録

ふりがな	しゅりじょうあと
書名	首里城跡
副書名	京の内跡発掘調査報告書（Ⅶ）　平成６年度調査の遺物編（４）
巻次	―
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第96集
編著者名	金城亀信・伊藤恵美利・赤嶺雅子・宮里美也子・大城友理華
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7　TEL 098-835-8751・8752
発行年月日	2018年3月30日

ふりがな 収録遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	発掘面積 ㎡	調査原因
しゅりじょうあと 首里城跡	おきなわけんなはし 沖縄県那覇市 しゅりとうのくらちょう 首里当蔵町3丁目 きんじょうちょう ・金城町1丁目	那覇市 47201	―	26° 12′ 31.32683″ 26° 12′ 32.15599″ 26° 12′ 32.35347″ 26° 12′ 32.97711″	127° 43′ 18.24229″ 127° 43′ 18.93019″ 127° 43′ 20.97267″ 127° 43′ 20.97684″	1994.11.21 ～ 1995.3.28	2,000	国営首里城公園整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
首里城跡	祭祀空間	中世・近世	倉庫跡、建物跡、区画石積み、御嶽、塼敷き、土壙など	屋瓦（高麗系・大和系等）、金属製品（骨製笠鞐・茱萸金具・切羽・釘・銭貨・石火矢の弾等）、ガラス製品（小玉）、中国産（青磁・白磁・青花・褐釉陶器・華南彩釉陶器等）、タイ産土器、備前焼擂鉢、沖縄産（瓦質土器・無釉陶器・施釉陶器）、昭和初期の文字入り紙片、ビー玉など。	京の内跡は、琉球王国に於ける神聖な聖域的な空間として国王即位の儀式をはじめ常用な儀式や祭祀が執りおこなわれた空間として位置づけられている。京の内は区画石積みがなされ区画内には重要な拝所である首里森御嶽、真玉森御嶽、京の内之三御嶽の五つの御嶽があった。京の内跡の発掘調査報告書は、平成10年3月に発掘調査報告書（Ⅰ）を刊行して以来、平成21年3月に発掘調査報告書（Ⅱ）、平成23年3月に発掘調査報告書（Ⅲ）遺構編を報告し、平成24年3月に遺物編（1）、平成26年3月に遺物編（2）、平成29年3月に遺物編（3）を報告した。今回も遺物編として第Ⅵ期前半（19世紀終末～昭和20年）までの遺構及び遺構周辺から出土した遺物を報告した。本報告書で注目された資料として元青花如意頭牡丹唐草文稜花盤や箆描きの文字入り大和系平瓦、中国北宋銭の「元符通寶」（1098年初鋳造）の孔郭内の孔を花弁状とするものなどが確認できた。

要　約

昭和61年度に首里城公園計画区内約18haの内、首里城内郭の約4haが国営公園区域として整備することが閣議決定された。復元整備に伴う遺構確認調査は、昭和63年度から内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所との委託を沖縄県教育委員会が受けて、南殿・北殿・御庭地区などの遺構確認調査を実施し、平成4年度に首里城正殿・南殿・北殿などが復元整備され一部が開園した。未整備地区であった「京の内」地区の復元整備が課題となり、整備に必要な基礎資料を得る目的で平成6年度から平成9年度までの四カ年間に亘って発掘調査を実施した。その内、報告（平成6年度調査の国の重要文化財が出土した土壙SK01及び石積みSA33・34）済みを除く、平成6年度調査の遺構について各時期毎に報告を行った。今回は平成6年度調査で遺構を6時期に分類した中で、第Ⅵ期前半（19世紀終末～昭和20）の遺構及び遺構周辺から出土した遺物（造成層や攪乱層を含む）の報告をおこなった。

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第96集

首　里　城　跡

―京の内跡発掘調査報告書（Ⅶ）―
平成６年度調査の遺物編（４）

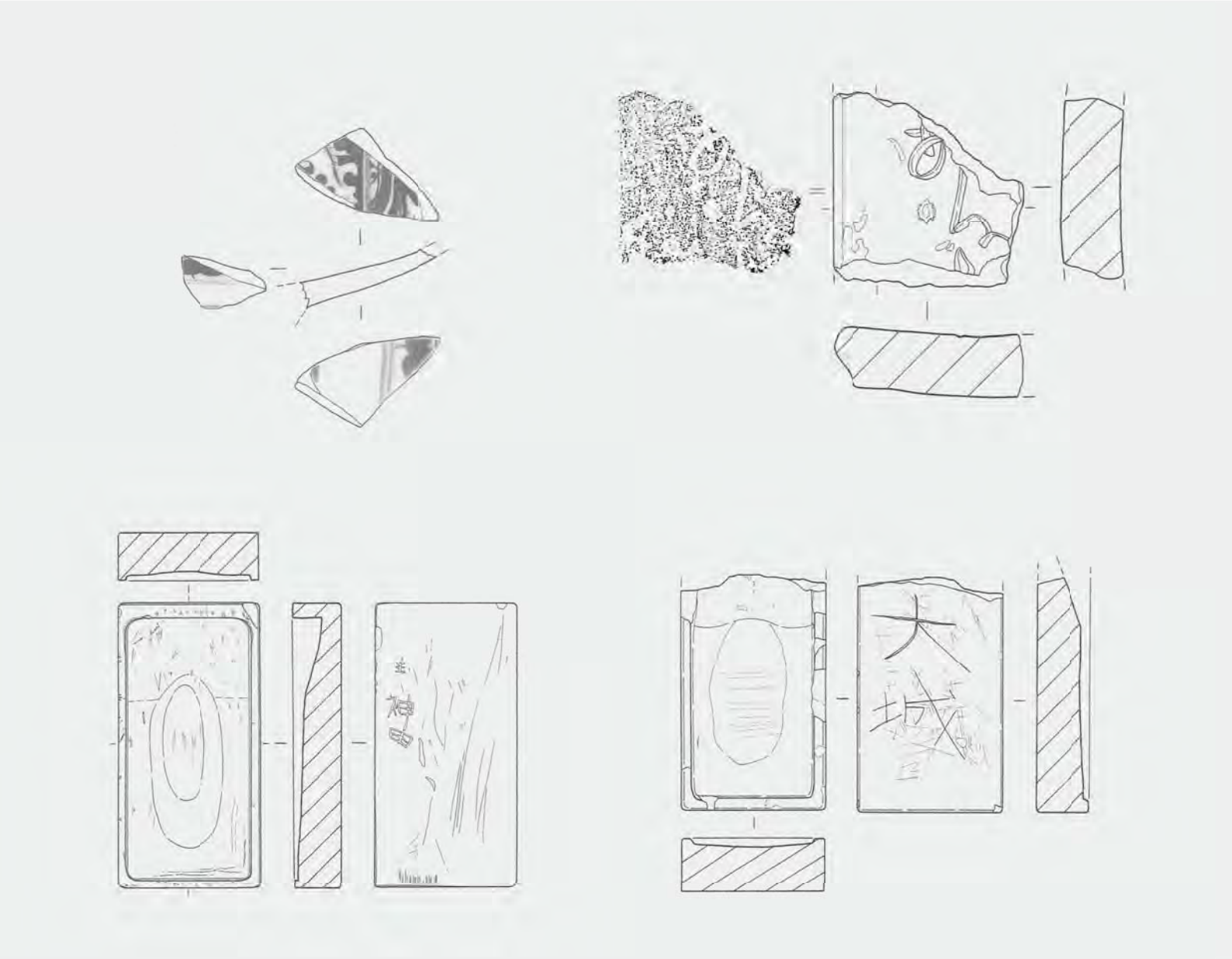
発 行 年　平成30（2018）年３月30日

発　　行　沖縄県立埋蔵文化財センター

編　　集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125
沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
TEL 098（835）8751・8752
印　　刷　合資会社　精印堂印刷
〒902-0072
沖縄県那覇市字真地399の3
TEL 098（832）1311

© 沖縄県立埋蔵文化財センター　2018 Printed in Japan
許可無く本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。

表　（実物大）　　右上：石積みSA16(D・F地点)出土のアルミ製遊具？
（実物大）　　左上：石積みSA09出土の孔郭内が花弁状となる「元符通寶（北宋：1098年初鋳造）」
（実物の2倍）左下：溝SD07-B出土の墨書・鉛筆書きの紙片



裏　左上：溝SD04-B出土の元青花如意頭牡丹唐草文稜花盤（景徳鎮窯。14世紀）
右上：石積みSA26出土の「ミセセル」文字入り大和系瓦（15世紀中頃～16世紀前半頃）
※ミセセル：女神官によって唱えられる呪詞。神の託宣と考えられている。
左下：溝SD07-B出土の「主　神田」銘入り硯
右下：建物SB01出土の「大城」銘入り硯